

茨城県笠間市

宍戸城跡

—道改良工事に伴う発掘調査報告書—



2011

笠間市教育委員会
有限会社勾玉工房 Mogi

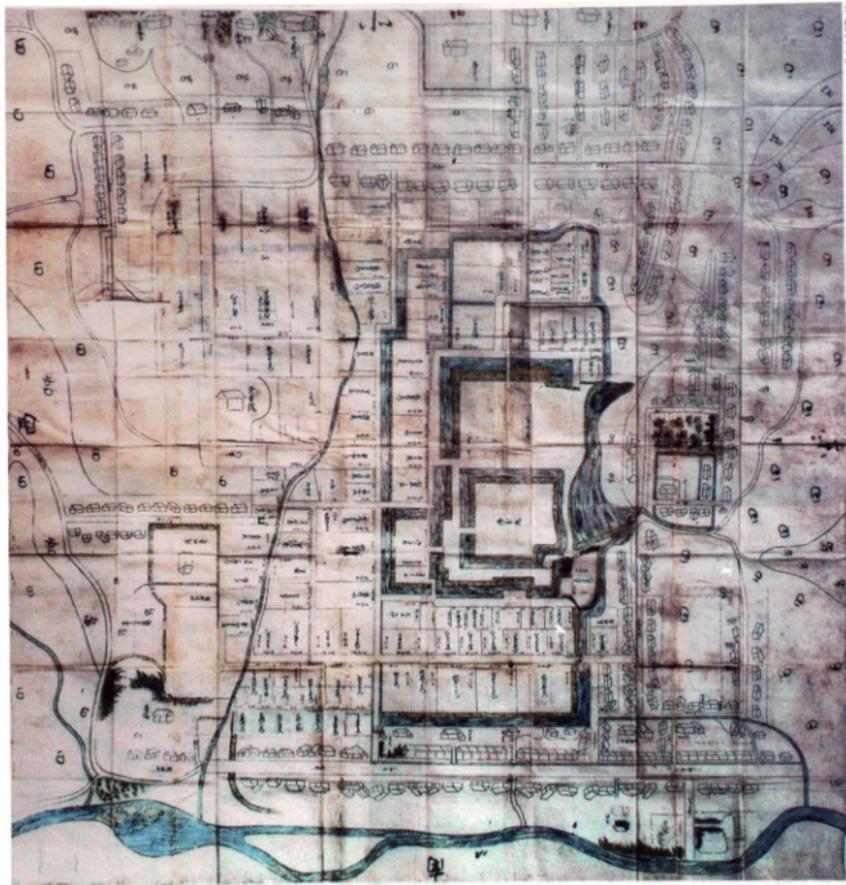
茨城県笠間市

穴戸城跡

—道改良工事に伴う発掘調査報告書—

2011

笠間市教育委員会
有限会社勾玉工房 Mogi



『穴戸城繪圖（穴戸城下繪圖）』 東北大学附属図書館所蔵



『常陸国茨城郡平町村』地籍図（笠間市立女部図書館所蔵）



『常陸国茨城郡楯爪村』地籍図（同上）



調査区全景



2区全景



穴戸城跡出土土器及び陶磁器類 (1)



穴戸城跡出土土器及び陶磁器類 (2) (SD201)

序

笠間市は、茨城県のはぼ中央に位置し、北西部には八溝山系が、南西部には吾国山・難台山・愛宕山が連なり、中央を北西部から東部にかけて潮沼川が大地を潤す自然豊かな地域です。また、河川流域や台地上より数多くの埋蔵文化財が確認されていることから、原始・古代より人々が生活を営むうえで最適の地域であったといえます。

今回の調査は道路改良事業に伴う宍戸城跡の発掘調査です。この調査の結果、外堀を挟んで武家屋敷主体の遺構と町屋に比定される遺構が検出されました。武家屋敷跡には整地面が存在し、角材を用いた掘立柱建物跡が確認され、町屋比定地では整地面が不明瞭で、丸材を用いた掘立柱建物跡が確認されました。また武家屋敷跡の整地面の下より堀を検出したことから築城期の様子がうかがえ、地域の歴史を知る上で重要な資料を得ることができました。この報告書を通して郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化向上の一助として多くの人々に広く活用されますことを強く願っている次第です。

最後に、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多大なるご指導・ご協力を賜りました関係機関並びに関係者に対しまして心より感謝申し上げます。

平成 23 年 6 月

笠間市教育委員会教育長
飯 島 勇

例 言

- 1 本書は茨城県笠間市橋爪 71 番地 2 他に所在する穴戸城跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は笠間市橋爪・平町地内における道改良工事に伴い、茨城県教育委員会・笠間市教育委員会の指導の下、笠間市から委託を受けた有限会社勾玉工房 Mogi が行った。
- 3 発掘調査の面積は 4657 m² で、調査期間は平成 22 年 10 月 18 日から平成 23 年 3 月 12 日まで実施した。
- 4 発掘調査の組織は以下の通りである。

発掘調査指導 茨城県文化財保護指導委員 川崎純徳
笠間市文化財保護審議会委員 能嶋清光

発掘調査事務局 笠間市教育委員会生涯学習課

調査主任 有限会社勾玉工房 Mogi 大越直樹

調査員 有限会社勾玉工房 Mogi 塩澤佑介
同 有限会社勾玉工房 Mogi 谷 旬
- 5 本書の編集は大越・塩澤が行った。執筆分担は、第 1 章を笠間市教育委員会が、第 2 章第 2 節を塩澤、第 5 章第 5 ～ 7 節と第 7 章第 2 節第 2・3 項を谷、同第 1・4 項を鈴木 徹が、その他を大越が行った。また、『穴戸城絵図』の読み下しは高橋歩美が行った。
- 6 整理調査は平成 23 年 3 月 15 日から同年 6 月 15 日まで有限会社勾玉工房 Mogi が実施した。なお、担当は以下の通りである。

主任調査員 全体編集・遺構図面修正・遺構原稿 大越直樹

調査員 遺構写真撮影・編集 塩澤佑介

基礎整理（水洗い・注記・接合・分類等） 須賀澤一憲 篠原美代子 石津弘子 小川美由紀

遺物実測・拓本 大賀さつき 阿天切赤生 鈴木 徹 根本時子

遺物観察表作成 谷 旬 鈴木 徹

デジタルトーンス 塩澤佑介 新屋隼人 岩崎美奈子 響庭紀子 高橋歩美 森 優里絵

報告書制作 大賀 健 鈴木 徹 高橋歩美 森 優里絵
- 7 遺物の写真撮影は（有）カメラのスキハラに、木製品の科学分析（樹種同定）はバリノ・サーヴェイ株式会社依頼した。
- 8 本書に掲載した『穴戸城絵図（穴戸城下絵図）』は笠間市立友部歴史民俗資料館所蔵が真を複製したものである。
- 9 発掘調査で得られた出土遺物及びその他の資料は、笠間市教育委員会が保管している。
- 10 発掘調査から整理調査に至るまで、次の諸氏・諸機関に御協力を賜った。記して感謝の意を表したい。

樺村宣行 土牛朗治（財）茨城県教育財団 笠間市立笠間図書館 笠間市立友部図書館
笠間市立友部歴史民俗資料館（株）栄繕 芦田測量（有）カメラのスキハラ（有）カワヒロ産業
（株）スカイサーベイ バリノ・サーヴェイ株式会社
- 11 調査参加者は下記に示す通りである。

吹野 昇 塩畑勝利 飯田 昭 佐藤利男 中村伊重 川又誠二 小坂部克己
山口敏彦 枝川幸光 大山年明 横田忠利 斉藤幸一 正木信行 仲田 他
八巻省三 鈴木 浩 海老沢 武 田中一徳 野村正子 鈴木とし江 長谷川とめ子
佐久周憲子 小堀静江 本田美津子 鶴井みどり 高柳悦子

凡 例

- 1 本書第1図に用いた地形図は、国土地理院発行2万5千分の1『笠間』を使用した。
- 2 座標値は世界測地系第IX系を使用した。全体図、遺構図の方位は座標北を示し、高さの数値は標高を示している。
- 3 掲載した図面は以下の縮尺を用いた。

全体及び区分図 グリッド図 1/1000 1～5区全体図 1/250

遺構図 溝 1/80、1号堀 1/120、2号堀（全体図）・SD201 1/80、3・4号堀平面 1/200・セクション 1/40、
その他 1/60

遺物図 銭貨 2/3、P779出土土人形 1/2、その他 1/3

- 4 実測図・本文中に用いた略記号は以下を示す。

SB：掘立柱建物跡 SD：溝 SE：井戸跡 SK：土坑 P：ピット SA：柵列

- 5 遺物観察表の法量単位はcm、重量単位はgである。法量に付した（ ）は復元値、<>は現存値を示す。
木製品観察表の法量単位はmm、<>は現存値を示す。
- 6 遺物写真は実測図の縮尺に合わせて掲載した。尚、木製品は概ね1/6で掲載してある。
- 7 本書に用いたスクリーントーンは以下を示す。

遺構  ……木質  ……石平面

 ……石断面  ……整地層

遺物  ……陶器・磁器・焼締陶器  ……須恵器

 ……煤・油煙  ……黒色処理

本文目次

序・例言・凡例・目次	62
第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	
第1節 遺跡の立地	1
第2節 歴史的環境	1
第3章 調査の経過と調査の方法	
第1節 調査の経過	3
第2節 発掘調査の方法	6
第3節 整理調査の方法	6
第4章 遺跡の概要と基本層序	
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第5章 検出された遺構と遺物	
第1節 1区 [第1面]	11
(1) SB(掘立柱建物跡)	(11)
(2) SA(柵列)	(13)
(3) 方形に巡らせた溝	(14)
(4) SE(井戸跡)	(14)
(5) SK(土坑)	(20)
(6) SD(溝)	(21)
(7) ビット	(24)
第2節 1区 [第2面]	27
(1) 堀	(27)
(2) 1区遺構外出土遺物	(34)
第3節 2区 [第1面]	39
(1) SB(掘立柱建物跡)	(39)
(2) SA(柵列)	(47)
(3) SE(井戸跡)	(50)
(4) SX(池)	(54)
(5) SK(土坑)	(55)
(6) 並ぶ石	(57)
(7) SD(溝)	(57)
(8) ビット	(58)
第4節 2区 [第2面]	62
(1) SX(堅穴状遺構)	(62)
(2) 堀	(62)
(3) SD(溝)	(64)
(4) 2区遺構外出土遺物	(65)
第5節 3区	66
(1) SB(掘立柱建物跡)	(66)
(2) SE(井戸跡)	(68)
(3) SA(柵列)	(69)
(4) 堀	(69)
(5) SK(土坑)	(71)
(6) ビット	(72)
(7) 3区遺構外出土遺物	(72)
第6節 4区	74
(1) SB(掘立柱建物跡)	(74)
(2) SE(井戸跡)	(75)
(3) SA(柵列)	(76)
(4) ビット	(77)
第7節 5区	78
(1) SB(掘立柱建物跡)	(78)
(2) SA(柵列)	(78)
(3) SE(井戸跡)	(80)
(4) SD(溝)	(84)
(5) SK(土坑)	(89)
(6) ビット	(90)
第6章 自然科学分析	
第1節 穴戸城跡出土木製品の樹種	91
第7章 総括	
第1節 検出された遺構について	97
第2節 検出された土器・陶磁類について	105
写真図版・抄録	

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	(2)	第37図	1区ビット山上遺物(2)	(26)
第2図	グリッド配置図	(4)	第38図	3・4号堀全体図	(28)
第3図	基本層序(1)	(8)	第39図	3号堀セクション	(29)
第4図	基本層序(2)	(9)	第40図	4号堀セクション	(30)
1区					
第5図	1区全体図	(10)	第41図	3号堀出土遺物(1)	(30)
第6図	調査区全体図	(折図1)	第42図	3号堀出土遺物(2)	(31)
第7図	SB08	(11)	第43図	4号堀出土遺物	(33)
第8図	SB09・SA09	(12)	第44図	1区遺構外山上遺物(1)	(34)
第9図	SB10	(12)	第45図	1区遺構外山上遺物(2)	(35)
第10図	SA07	(13)	第46図	1区遺構外山上遺物(3)	(36)
2区					
第11図	SA08	(14)	第47図	2区全体図	(40)
第12図	SA08出土遺物	(14)	第48図	SB01(1)	(41)
第13図	方形に巡らせた溝	(15)	第49図	SB01(2)	(42)
第14図	SE02	(15)	第50図	SB01出土遺物	(43)
第15図	SE02山上遺物	(16)	第51図	SB02(1)	(44)
第16図	SE07	(16)	第52図	SB02(2)	(45)
第17図	SE07出土遺物	(16)	第53図	SB02出土遺物	(45)
第18図	SD08	(17)	第54図	SB03	(46)
第19図	SE08山上遺物	(17)	第55図	SB03山上遺物	(46)
第20図	SE09・SK654・SK655	(18)	第56図	SB04	(46)
第21図	SE09出土遺物	(18)	第57図	SA10	(47)
第22図	SE10	(19)	第58図	SA12	(47)
第23図	SE10山上遺物	(19)	第59図	SA12出土遺物	(48)
第24図	SE11	(19)	第60図	SA13	(49)
第25図	SE11出土遺物	(20)	第61図	SA13出土遺物	(49)
第26図	SK650・SK653	(21)	第62図	SA14	(49)
第27図	SK650山上遺物	(21)	第63図	SA14山上遺物	(50)
第28図	SD101	(21)	第64図	SE01	(50)
第29図	SD101出土遺物	(22)	第65図	SE01出土遺物	(51)
第30図	SD102	(22)	第66図	SE05	(51)
第31図	SD102山上遺物	(22)	第67図	SE06	(52)
第32図	SD103	(22)	第68図	SE06出土遺物	(52)
第33図	SD250・252	(23)	第69図	SE16	(52)
第34図	SD250出土遺物	(23)	第70図	SE16出土遺物	(52)
第35図	SD252山上遺物	(23)	第71図	SE17	(53)
第36図	1区ビット出土遺物(1)	(25)	第72図	SE18	(53)

第73図	SX1	(54)	4区
第74図	SX1 出土遺物	(55)	第108図
第75図	SK100	(55)	SB11 出土遺物
第76図	SK106	(55)	第109図
第77図	SK115	(56)	SE19・20・21
第78図	SK115 出土遺物	(56)	第110図
第79図	SK116	(56)	SE20 出土遺物
第80図	SK139	(56)	第111図
第81図	SK652	(56)	SE21 出土遺物
第82図	SK652 出土遺物	(57)	第112図
第83図	並ぶ石	(57)	SA03
第84図	SD001	(58)	第113図
第85図	SD001 出土遺物	(58)	4区ピット
第86図	2区ピット出土遺物	(60)	第114図
第87図	SX2	(62)	P817 出土遺物
第88図	2号堀	(63)	5区
第89図	2号堀出土遺物	(63)	第116図
第90図	SD251	(64)	5区全体図
第91図	SD251 出土遺物	(64)	第117図
第92図	2区遺構外出土遺物	(65)	SB07・SA05・SA06
3区			第118図
第93図	SB05・SA16	(66)	SA04
第94図	3区・4区全体図	(折図2)	第119図
第95図	SB06・SA15	(67)	SD07 出土遺物
第96図	SE03	(68)	第120図
第97図	SE03 出土遺物	(68)	SA06 出土遺物
第98図	SA01	(69)	第121図
第99図	SA02	(69)	SE04・SE15
第100図	SA02 出土遺物	(69)	第122図
第101図	1号堀出土遺物	(69)	SE04 出土遺物
第102図	1号堀	(70)	第123図
第103図	SK301・306	(71)	SE15 出土遺物
第104図	SK301 出土遺物	(71)	第124図
第105図	P826	(72)	SD201
第106図	3区遺構外出土遺物 (1)	(72)	第125図
第107図	3区遺構外出土遺物 (2)	(73)	SD201 土橋部分拡大図
			第126図
			SD201 出土遺物 (1)
			第127図
			SD201 出土遺物 (2)
			第128図
			SD201 出土遺物 (3)
			第129図
			SK411・SK412
			第130図
			SK411 出土遺物
			第131図
			SK412 出土遺物
			第132図
			5区遺構外出土遺物
			自然科学分析
			第133図
			木材 (1)
			第134図
			木材 (2)
			総括
			第135図
			穴戸城縄張り図
			第136図
			穴戸城武家屋敷想定図
			第137図
			『穴戸城絵図(穴戸城下絵図)』拡大図 (103)

挿表目次

<p>第1表 穴戸城周辺の中近世遺跡……………(3)</p> <p>1区</p> <p>第2表 SB08 ビット計測表……………(11)</p> <p>第3表 SB09 ビット計測表……………(12)</p> <p>第4表 SA09 ビット計測表……………(12)</p> <p>第5表 SB10 ビット計測表……………(12)</p> <p>第6表 SA07 ビット計測表……………(13)</p> <p>第7表 SA08 ビット計測表……………(14)</p> <p>第8表 SA08 出土遺物観察表……………(14)</p> <p>第9表 SE02 出土遺物観察表……………(16)</p> <p>第10表 SE07 出土遺物観察表……………(16)</p> <p>第11表 SE08 出土遺物観察表……………(17)</p> <p>第12表 SE09 出土遺物観察表……………(19)</p> <p>第13表 SF10 出土遺物観察表……………(19)</p> <p>第14表 SE11 出土遺物観察表……………(20)</p> <p>第15表 SK650 出土遺物観察表……………(21)</p> <p>第16表 SD101 出土遺物観察表……………(22)</p> <p>第17表 SD102 出土遺物観察表……………(22)</p> <p>第18表 SD250 出土遺物観察表……………(23)</p> <p>第19表 SD252 出土遺物観察表……………(23)</p> <p>第20表 1区ビット計測 覧表 (1)……………(24)</p> <p>第21表 1区ビット計測一覧表 (2)……………(25)</p> <p>第22表 1区ビット出土遺物観察表……………(26)</p> <p>第23表 3号堀出土遺物観察表……………(32)</p> <p>第24表 4号堀出土遺物観察表 (1)……………(33)</p> <p>第25表 4号堀出土遺物観察表 (2)……………(34)</p> <p>第26表 1区遺構外出土遺物観察表 (1)……………(36)</p> <p>第27表 1区遺構外出土遺物観察表 (2)……………(37)</p> <p>第28表 1区遺構外出土遺物観察表 (3)……………(38)</p> <p>2区</p> <p>第29表 SB01 ビット計測表……………(39)</p> <p>第30表 SB01 出土遺物観察表 (1)……………(43)</p> <p>第31表 SB01 出土遺物観察表 (2)……………(44)</p> <p>第32表 SB02 ビット計測表……………(45)</p> <p>第33表 SB02 出土遺物観察表……………(45)</p> <p>第34表 SB03 ビット計測表……………(46)</p> <p>第35表 SB03 出土遺物観察表……………(46)</p>	<p>第36表 SB04 ビット計測表……………(46)</p> <p>第37表 SA10 ビット計測表……………(47)</p> <p>第38表 SA12 ビット計測表……………(47)</p> <p>第39表 SA12 出土遺物観察表……………(48)</p> <p>第40表 SA13 ビット計測表……………(49)</p> <p>第41表 SA13 出土遺物観察表……………(49)</p> <p>第42表 SA14 ビット計測表……………(49)</p> <p>第43表 SA14 出土遺物観察表……………(50)</p> <p>第44表 SE01 出土遺物観察表……………(51)</p> <p>第45表 SE06 出土遺物観察表……………(52)</p> <p>第46表 SE16 出土遺物観察表……………(53)</p> <p>第47表 SX1 出土遺物観察表……………(55)</p> <p>第48表 SK115 出土遺物観察表……………(56)</p> <p>第49表 SK652 出土遺物観察表……………(57)</p> <p>第50表 SD001 出土遺物観察表……………(58)</p> <p>第51表 2区ビット計測一覧表 (1)……………(58)</p> <p>第52表 2区ビット計測一覧表 (2)……………(59)</p> <p>第53表 2区ビット計測一覧表 (3)……………(60)</p> <p>第54表 2区ビット出土遺物観察表……………(61)</p> <p>第55表 2号堀出土遺物観察表……………(64)</p> <p>第56表 SD251 出土遺物観察表……………(65)</p> <p>第57表 2区遺構外出土遺物観察表 (1)……………(65)</p> <p>第58表 2区遺構外出土遺物観察表 (2)……………(66)</p> <p>3区</p> <p>第59表 SB05 ビット計測表……………(67)</p> <p>第60表 SA16 ビット計測表……………(67)</p> <p>第61表 SB06 ビット計測表……………(67)</p> <p>第62表 SA15 ビット計測表……………(67)</p> <p>第63表 SE03 出土遺物観察表……………(68)</p> <p>第64表 SA01 ビット計測表……………(69)</p> <p>第65表 SA02 ビット計測表……………(69)</p> <p>第66表 SA02 出土遺物観察表……………(69)</p> <p>第67表 1号堀出土遺物観察表 (1)……………(69)</p> <p>第68表 1号堀出土遺物観察表 (2)……………(70)</p> <p>第69表 SK301 出土遺物観察表……………(72)</p> <p>第70表 3区ビット計測表……………(72)</p> <p>第71表 3区遺構外出土遺物観察表……………(73)</p>
--	--

4区	
第72表	SB11 ピット計測表……………(74)
第73表	SB11 出土遺物観察表……………(74)
第74表	SE20 出土遺物観察表……………(76)
第75表	SE21 出土遺物観察表……………(76)
第76表	SA03 ピット計測表……………(76)
第77表	P817 出土遺物観察表……………(77)
第78表	4区ピット計測表……………(77)
5区	
第79表	SB07 ピット計測表……………(80)
第80表	SA05 ピット計測表……………(80)
第81表	SA06 ピット計測表……………(80)
第82表	SA04 ピット計測表……………(80)
第83表	SB07 出土遺物観察表……………(80)
第84表	SA06 出土遺物観察表……………(80)
第85表	SE04 出土遺物観察表 (1)……………(81)
第86表	SE04 出土遺物観察表 (2)……………(83)
第87表	SE15 出土遺物観察表……………(83)
第88表	SD201 出土遺物観察表 (1)……………(87)
第89表	SD201 出土遺物観察表 (2)……………(88)
第90表	SD201 出土遺物観察表 (3)……………(89)
第91表	SK411 出土遺物観察表……………(89)
第92表	SK412 出土遺物観察表……………(90)
第93表	5区ピット計測表……………(90)
第94表	5区遺構外山出土遺物観察表……………(90)
	自然科学分析
第95表	樹種同定結果……………(92)
第96表	科学分析対象遺物計測表……………(93)
	総括
第97表	地区ごとの土器・陶磁器類組成……………(105)
第98表	武家地・町人地・SD201 ごとの土器・陶磁器類組成……………(106)
第99表	かわらけ分類……………(106)
第100表	胎土組成表……………(107)
第101表	器種別総量表……………(107)
第102表	陶磁器・土器内訳 (掲載分)……………(108)
第103表	出土遺物集計表 (1)……………(110)
第104表	出土遺物集計表 (2)……………(111)
第105表	出土遺物集計表 (3)……………(112)
第106表	出土遺物集計表 (4)……………(113)
第107表	出土遺物集計表 (5)……………(114)
第108表	木製品観察表 (1)……………(114)
第109表	木製品観察表 (2)……………(115)
第110表	木製品観察表 (3)……………(116)

写真図版

第1図版 (全景)

- 1 1区空撮全景

第2図版 (1区)

- 1 1区西側第1面全景 E→
2 方形に巡らせた溝全景 S→

第3図版 (1区)

- 1 SB08 全景 E→
2 (上から) SA09・SB08・SB10 全景 E→

第4図版 (1区)

- 1 SE02 全景 N→
2 SE02 セクション W→
3 SE07 全景 N→
4 SE08 全景 N→
5 SE09・SK654・SK655 検山状況 N→
6 SE09・SK654・SK655 全景 W→

- 7 SE10 全景 E→

- 8 SE11 全景 N→

第5図版 (1区)

- 1 SK653 全景 E→
2 SK650 全景 E→
3 1区西側第2面全景 E→
4 3号堀西端セクション W→
5 3号堀中央セクション E→

第6図版 (1区)

- 1 3号堀全景 W→
2 3・4号堀セクション SW→
3 3号堀東セクション E→
4 4号堀南端セクション N→
5 4号堀中央セクション N→

第7図版 (1区・2区)

- 1 4号堀全景 N→
- 2 2区中央空堀状況

第8図版 (2区)

- 1 SB01 全景 E→
- 2 SB01 掘方全景 E→

第9図版 (2区)

- 1 SB01P02 セクション N→
- 2 SB01P03 セクション W→
- 3 SB01 掘方西側セクション S→
- 4 SB01 掘方東側セクション S→
- 5 SB02 全景 S→

第10図版 (2区)

- 1 SB02P09 セクション S→
- 2 SB02P11 セクション S→
- 3 SB02P04 石検出状況 S→
- 4 SB02P01 角材柱検出状況 S→
- 5 SB03 全景 N→

第11図版 (2区)

- 1 SB03P1 セクション S→
- 2 SB03P5 セクション N→
- 3 SB04 全景 N→
- 4 SB04P1 検出状況 S→
- 5 SB04P2 セクション N→

第12図版 (2区)

- 1 SE01 全景 W→
- 2 SE01 セクション W→
- 3 SE01 掘方セクション W→
- 4 SE06 全景 S→
- 5 SE05 全景 E→

第13図版 (2区)

- 1 SX1 全景 W→
- 2 SX1 セクション E→
- 3 SX1 掘検出状況 W→
- 4 SX1 遺物出土状況 N→
- 5 SX1 完州全景 N→

第14図版 (2区)

- 1 SK100 検出状況 W→
- 2 SK652 全景 N→

3 SD001 全景 N→

4 SD001 セクション S→

5 SX2・SA13 全景 N→

第15図版 (2区)

- 1 SX2 セクション N→
- 2 SD251 全景 S→
- 3 2号堀全景 S→
- 4 2号堀中央セクション S→
- 5 2号堀南端セクション N→

第16図版 (2区)

- 1 SE16 全景 S→
- 2 SE16 セクション S→
- 3 SE17 全景 S→
- 4 SE18 全景 N→
- 5 SE17 セクション SW→

第17図版 (3区)

- 1 3区空堀全景
- 2 同南側全景 E→

第18図版 (3区)

- 1 1号堀北側全景 S→
- 2 1号堀南側全景 S→
- 3 (上から) SB06・05 全景 W→
- 4 SB05 全景 N→
- 5 (上から) SA01・SA02 全景 E→
- 6 SE03 遺物出土状況 N→
- 7 SK301 遺物出土状況 S→
- 8 SK306 全景 S→

第19図版 (4区)

- 1 4区全景 E→
- 2 SA03 全景 W→
- 3 SE19 全景 S→
- 4 SE20 全景 S→
- 5 SE21 全景 S→

第20図版 (5区)

- 1 5区北側全景 E→
- 2 5区南側全景 E→

第21図版 (5区)

- 1 SB07・SA05・SA06 全景 W→
- 2 SA04 全景 E→

第22 図版 (5区)

- 1 SE04 遺物検出状況 W→
- 2 SK412 全景 W→
- 3 SR15 全景 W→
- 4 SK411 全景 W→
- 5 SD201 全景 S→
- 6 SD201 渡場近景 S→
- 7 SD201 全景 N→
- 8 同遺物出土状況 N→

第23 図版 (1～5区)

- 1 調査区現況 (2区) W→
- 2 安全対策
- 3 重機掘削状況
- 4 遺構確認作業
- 5 作業風景
- 6 遺構掘り下げ状況
- 7 水中ポンプ使用状況
- 8 現地説明会

第24 図版 (1～5区)

- 1 実測状況
- 2 空撮状況
- 3 終了確認状況
- 4 埋め戻し完了状況
- 5 発掘調査参加者

第25 図版 (1区)

- SA08 出土遺物
SE02 出土遺物
SE07 出土遺物
SE08 出土遺物
SE10 出土遺物
SE09 出土遺物
SE11 出土遺物
SD101 出土遺物
SD102 出土遺物
SD250 出土遺物
SD252 出土遺物
SK605 出土遺物

第26 図版 (1区)

- P512 出土遺物

P513 出土遺物

P669 出土遺物

P672 出土遺物

P692 出土遺物

P796 出土遺物

3号堀出土遺物

第27 図版 (1区)

3号堀山上遺物

1区遺構外出土遺物

第28 図版 (1区・2区)

1区遺構外出土遺物

2区

SD01 出土遺物

SD02 出土遺物

SA12 出土遺物

SE01 出土遺物

SB03 出土遺物

SA10 出土遺物

SA13 出土遺物

SE16 出土遺物

SA14 出土遺物

SE06 出土遺物

第29 図版 (2区)

SX1 出土遺物

SK632 出土遺物

2号堀出土遺物

SK115 出土遺物

SD001 出土遺物

P018 出土遺物

P022 出土遺物

P027 出土遺物

P046 出土遺物

P072 出土遺物

P082 出土遺物

P085 出土遺物

P109 出土遺物

P127 出土遺物

P141 出土遺物

P142 出土遺物

P155 山上遺物	P817 出土遺物
P212 出土遺物	5 区
P779 出土遺物	SB07 出土遺物
SD251 出土遺物	SA06 山上遺物
P201 出土遺物	SE04 出土遺物
第 30 図版 (2 区・3 区)	第 32 図版 (5 区)
2 区遺構外山上遺物	SE15 出土遺物
3 区	SK412 出土遺物
SA02 山上遺物	SK411 出土遺物
SE03 出土遺物	SD201 出土遺物
SK301 出土遺物	第 33 図版 (5 区)
1 号掘出土遺物	SD201 出土遺物
3 区遺構外山上遺物	第 34 図版 (1 区・2 区)
第 31 図版 (4 区・5 区)	1 区出土木製品
4 区	2 区出土木製品
SB11 出土遺物	第 35 図版 (2 区・5 区)
SE20 出土遺物	2 区出土木製品
SE21 出土遺物	5 区出土木製品

第1章 調査に至る経緯

平成19年5月2日、笠間市都市建設部都市建設課は、笠間市教育委員会教育長に笠間市種瓜・平町地内に計画している合併市町村幹線道路緊急整備支援事業に伴う道路改良工事における埋蔵文化財の所在の有無とその取扱いについて照会した。開発予定地は、周知の遺跡「穴戸城跡」が所在することから、平成19年5月30日付けで試掘調査が必要である旨を回答した。試掘調査は、茨城県埋蔵文化財指導員の川崎純徳氏に依頼し、平成20年10月7日、平成21年10月20日に実施し、遺跡の所在を確認した。

笠間市都市建設部都市建設課は茨城県教育委員会教育長に対して、平成22年3月15日付けで文化財保護法第94条第1項の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要と決定し、平成22年8月27日付けで工事着工前に発掘調査を実施するよう通知した。

これを受けて、笠間市教育委員会は入札により有限会社勾玉工房 Mogi と委託契約を締結して調査を依頼した。笠間市教育委員会・笠間市都市建設部都市建設課・有限会社勾玉工房 Mogi は三者協議を行い、試掘調査の結果に基づき、平成22年9月16日付けで文化財保護法第92条第1項の規定による発掘調査届出を茨城県教育委員会教育長へ提出、茨城県埋蔵文化財指導員の川崎純徳氏、笠間市文化財保護審議会委員の能島清光氏を指導委員として平成22年10月18日から平成23年3月12日まで、発掘調査を実施することとなった。

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 遺跡の立地

穴戸城跡の所在する笠間市は、平成18年3月に笠間市、西茨城郡友部町・岩間町が合併して成立したもので、水戸市に隣接する。茨城県のほぼ中央部に位置し、本遺跡はその東部の旧友部町域にある。

旧友部町周辺には、標高50～90mの友部丘陵があり、洪新世の海成砂礫層である友部層により形成されており、上層には関東ローム層が覆っている。

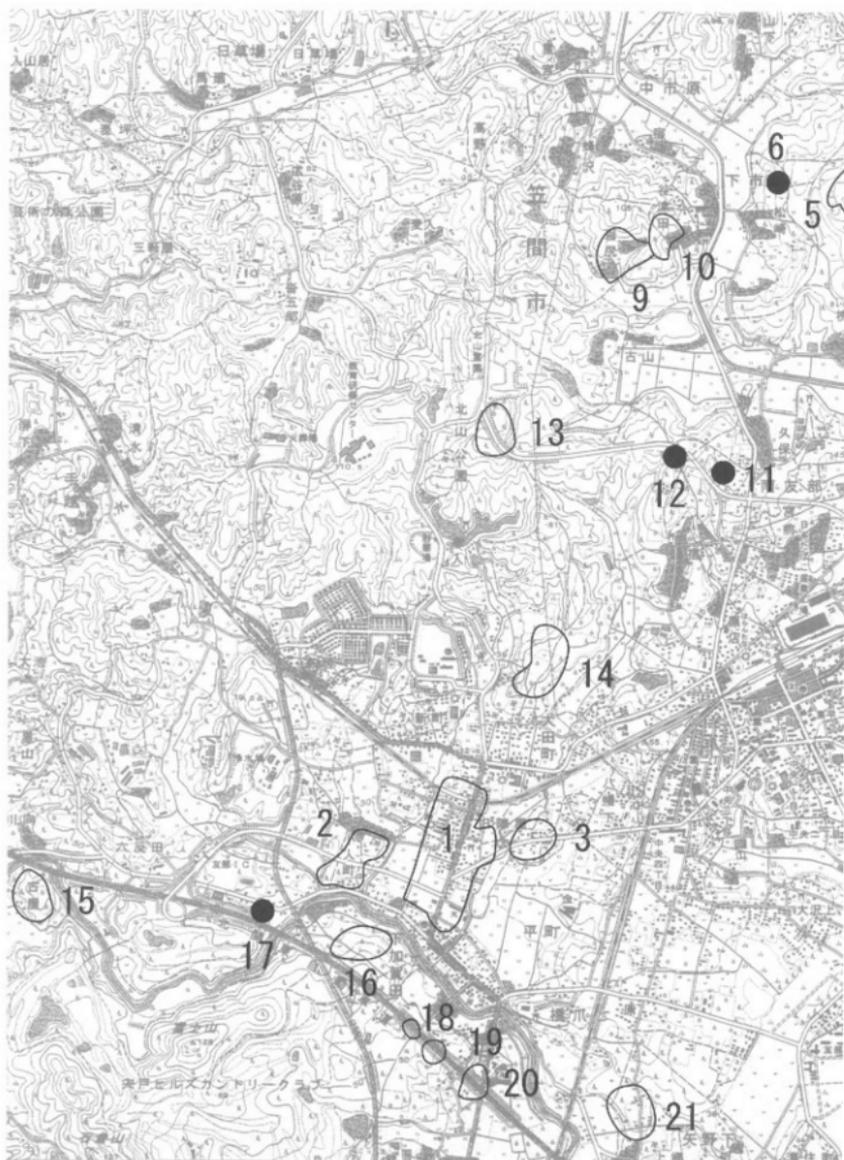
今回の調査対象域は、穴戸小学校の北側に隣接する標高24.00～25.00mの平地上（現況水田）に立地している。

第2節 歴史的環境

1203年（建仁3年）に、常陸国守護職八田知家四男、穴戸四郎左衛門尉家政が新善光寺跡に築城したのが始まりとされ、別名を山尾城という。1595年（文禄4年）、穴戸四郎義長は佐竹氏により真壁郡海老ヶ島（筑西市・旧真壁郡明野町）に移封され、佐竹氏の拠点の一つとなる。

1600年（慶長5年）の関ヶ原の合戦後の仕置きで、中立の立場をとった佐竹氏は、1602年（慶長7年）幕府の命により羽羽秋田へ移封され、代わって羽羽十崎渡城主秋田城之介実季が穴戸5万石に入封し穴戸藩が成立する。こうして秋田氏により、穴戸に新しい城が築かれる。その後1645年、二代日藩主秋田俊季は陸奥三春に移封されて穴戸城は廃城破却、穴戸は幕府天領となる。1682年（天和2年）、水戸の徳川光圀の弟松平頼輝が穴戸領のうち1万石を与えられた。天保後期には陣屋が設置され（友部町1971）、1867年（慶応3年）維新を迎える（『友部町史』他）。

穴戸城周辺に所在する中近世遺跡については次ページにまとめるところである（稲田2006他）。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (国土地理院 2万5千分の1 地形図『笠間』に加筆)

第1表 穴戸城周辺の中近世遺跡

NO	遺跡名	中世			近世	
		城館	経塚	その他	城館	塚
1	穴戸城跡	○				
2	新善光寺跡 (山尾館跡)	○				
3	古館	○				
4	大日山古墳群				○	
5	香取・坂橋遺跡					内耳土器
6	四十八塚					播鉢
7	小原城跡	○				
8	五平古墳群				○	
9	市原城跡	○				
10	御城遺跡	○				
11	丹後塚古墳				○	
12	大塚古墳				○	
13	北山遺跡				○	
14	完全寺後遺跡			陶器表採		
15	上加賀田遺跡			包蔵地		
16	下加賀田遺跡			包蔵地		
17	富上台古墳群				○	
18	坂の上塚群				○2	
19	古峯遺跡			溝・道		
20	古峯A遺跡			溝		溝
21	上郷遺跡	○		溝2		
22	南小泉遺跡	○				
23	佐藤氏館	○				
24	大古山古墳			水上交通		
25	住古城跡	○				
26	万部塚		○			
27	千部塚		○			
28	湯先城跡		○			
29	割塚				○	
30	長兎路城跡	○				
31	久保塚群				○5	土坑1・溝3
32	五万堀古道			道 (東海道・東山道連絡)		
33	前原塚			塚	○	
34	仲丸遺跡			陶磁器片		寛永通宝
35	向原遺跡			墳丘数・塚		
36	東原製鉄跡			製鉄炉3		

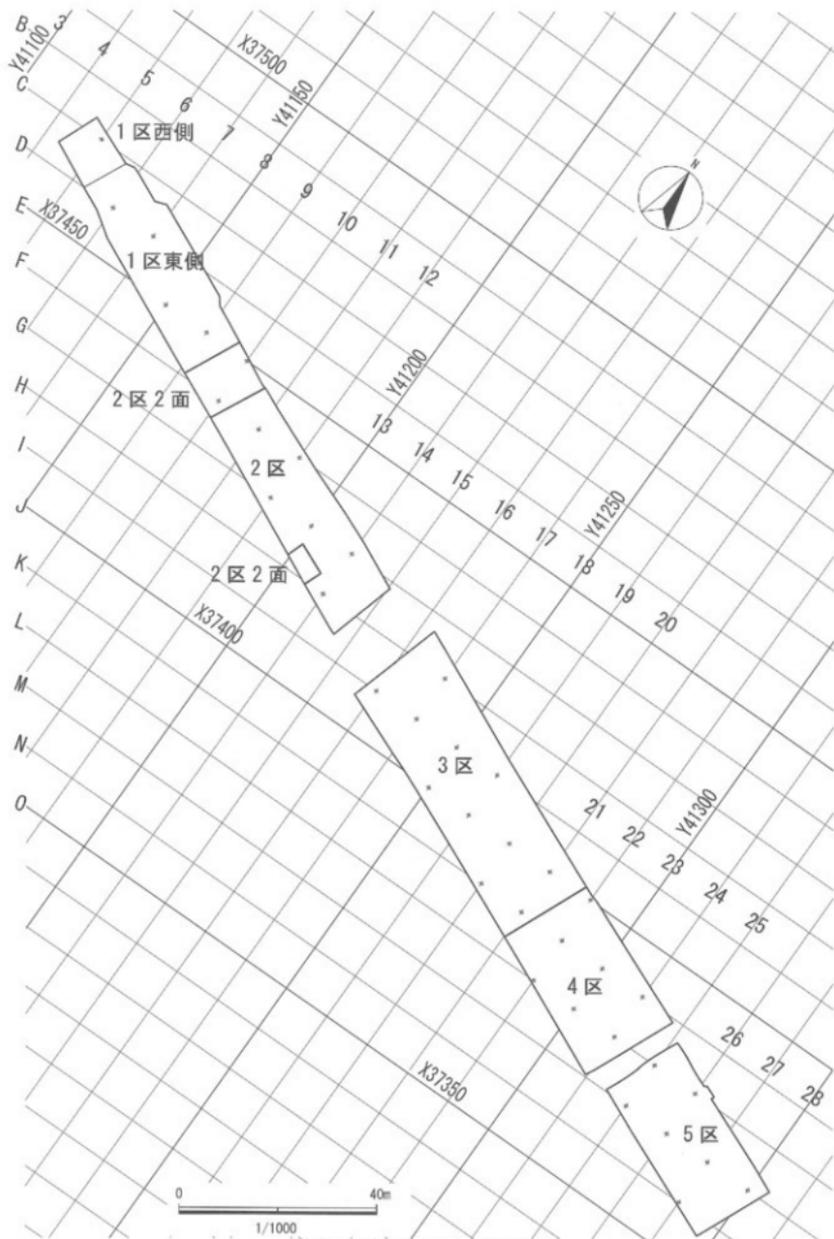
第3章 調査の経過と調査の方法

第1節 調査の経過

2010年10月

18日 調査開始。機材搬入、テント・トイレ設置。2区・3区北側・5区南側を対象に、重機による表土排上を開始する。

29日 2区遺構確認作業。テント・トイレ等の施設を対象に台風対策を行う。



第2図 グリッド配属図 (1/1000)

2010年11月

- 1日 環境整備。台風一過の片付けと排水作業を行う。
- 2日 2区測量杭打設。遺構掘り下げを開始する。
- 11日 3区北側の遺構確認を行う。
- 12日 3区北側の測量杭打設。
- 16日 道路工事の都合上、市土木課の要請により1区西側調査の必要が生じ、同地区を対象とした重機による表上排土作業を追加する。
- 18日 同上表上排土作業を終了する。
- 19日 1区西側の遺構確認・遺構掘り下げ作業を行う。

2010年12月

- 9日 茨城県教育委員会、笠間市教育委員会立会いのもと1区西側・2区東側の終了確認を行う。
- 10日 笠間市教育委員会立会いのもと10・11月期月例報告を行う。2区・3区北側・5区南側を対象に空撮を行う。
- 19日 現地説明会を行う。
- 23日 1区西側を対象に重機による間層除去作業を開始する。
- 25日 間層除去作業を終了する。
- 7日 現地作業を休止する。
- 28日 年末年始休暇現場内安全点検巡回を開始する。

2011年1月

- 4日 年末年始休暇現場内安全点検巡回を開始する。
- 5日 現地作業を再開する。
- 6日 前回の空撮（第1回目）の一部を撮り直す。
- 12日 茨城県教育委員会及び笠間市教育委員会立会いのもと、1区西側第2面、2区、3区北側、5区南側の終了確認を行う。
- 14日 1区西側の埋め戻しを終了する。
- 17日 1区東側・2区第2面・3区南側・4区・5区北側を対象に表上排土を開始する。
- 6日 同上調査区の遺構確認作業及び掘り下げ作業を開始する。

2011年2月

- 5日 同上表上排土作業を終了する。
- 8日 1区東側、2区第2面、3区南側、4区、5区北側を対象に空撮（第2回目）を行う。
- 9日 茨城県教育委員会、笠間市教育委員会立会いのもと、1区東側、2区第2面、3区南側、4区、5区北側を対象とした調査終了確認を行う。
- 14日 同上調査区を対象に埋め戻し作業を開始する。

2011年3月

- 3日 3区南側1号堀の2箇所、橋脚跡の有無確認のためサブトレンチを入れ調査する。
- 4日 作業器材、 TENT・トイレなどの施設及び器材を撤収する。
- 5日 1区東側3号堀の幅を確認するためサブトレンチを入れ調査する。
- 11日 東日本大震災
- 12日 埋め戻しを終了。安全対策防塵ネットを撤去し、現地における全工程を完了する。

第2節 発掘調査の方法

現地での発掘調査は、笠間市教育委員会の試掘調査結果を受け、同市教育委員会指導の下、平成22年10月18日から平成23年3月12日まで行った。

遺構確認面は、築城に伴う整地面とそれ以前の地山面の2面が存在することが想定された。このため表土を重機で掘削、遺構確認及び遺構掘り下げを人力で行った。また、調査対象地の現況は水田であり、湧水対策として表土除去後、調査区壁際沿いに排水路を設け、適宜水中ポンプを使用して場外に排出することにした。なお、遺跡調査終了後、茨城県教育委員会、笠間市教育委員会立会いの下、終了確認を行い、調査区を重機で埋め戻し復元した。

グリッドの設定は、調査対象区域を10m方眼網で覆い、世界測地系第IX系X=37,410、Y=41,080を起点として「A1」と呼称し、南に向かってアルファベットを、東に向かってアラビア数字を付し、また10mグリッド内部を4分割して西から東に、上段をa、b、下段をc、dと小文字アルファベットを付し「A1-a」と呼称することにした。

遺構実測図は1/20縮尺を基本とし、適宜1/10、1/40、光沢測量を併用した。遺構写真は、35mmモノクロ、同カラー・リバーサル、6×7判カラー・リバーサル、及びデジタルカメラを使用した。

第3節 整理調査の方法

(1) 遺物整理

各遺物は出土地点別に全量を手洗いし、乾燥後に注記を実施した。注記は細片および木製品については実施せず、その他については全量に実施した。各遺物は種類別に分類して一覧表を作成し、遺物に新規番号を付した。これに従って実測・拓本を実施し、Illustrator CS2によって図版を作成した。染付・鉄絵遺物については写真と実測図を合成した。

(2) 写真撮影・保存処理

遺物写真撮影は、デジタル写真ニコンD80を用いて撮影し、Photoshop CS2により切り出しを行った。遺物については素地・釉薬、ならびに胎土の色調を重視し、カラーデータとして掲載した。

木製品については漆器・曲物底板・容器蓋について実測を行い、その他の杭・柱・木片等は、写真撮影のみで実測は行っていない。木製品は洗浄後にBAQ-1溶液（吉田生物研究所）に浸し、ビニールでパッキングを行った。

(3) 遺構整理

遺構図は地区別の台帳を作成後に遺構ごとに修正を実施し、修正が完了したものよりIllustrator CS2でデジタルトレースを実施し、AIデータを作成した。また、写真についてはPhotoshop CS2によりトリミングを行い、各地区別に遺跡航空写真・個別遺構・遺構断面・遺物出土状況の順に掲載した。

(4) 編集および原稿作成

遺構原稿はWordを用いて各地区ごとに作成した。また表はExcelで作成している。編集はInDesign CS4を用いて初校原稿までを作成し、校正後に印刷屋に入稿した。

第4章 遺跡の概要と基本層序

第1節 遺跡の概要

今回の調査箇所は、前述の通り城郭の南東端部に位置しており、『穴戸城絵図（穴戸城ト絵図）』にも見えるが、武家屋敷の一部分から町屋ならびに田と配された地区に至るもので、調査対象区域は第6図に示すように東西266mある。

遺跡の様相はほぼ中央部に位置する1号堀を境に東西で様相を著しく変える。1号堀の西側では築城期の整地面が残存し、武家屋敷と考えられる遺構が良好な状態で遺存していた。ところが、東側は現代の耕作により遺構の上面は著しく掘削を受け、整地面は検出されなかった。調査区に当てはめるならば武家屋敷が1～3区、町屋比定地が4・5区、5区の一部が水田となっている。

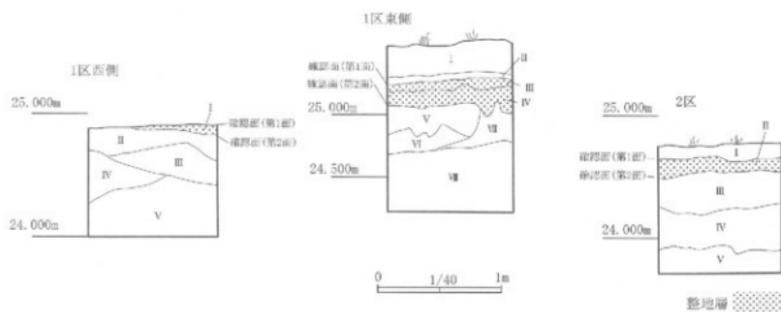
第2節 基本層序

武家屋敷のある1・2区には整地面が存在し、遺構確認面は、その上面と下面の2面で構成される。第1面を構成する整地層上面の標高は、1区西端で24.800m、1区東側で25.200m、2区で24.550mとなっており、1区の東側が最も高く、東西になだらかに低くなる。

城郭構築時の整地層は、まず1区西側のI層（暗褐色土）、次に東側のIII層（にぶい褐色土）～IV層（黒色土）、また2区のII層（褐色土）が該当する。整地層は1区東側の4号堀付近で20cm以上あり最も厚くなっている。第2面を構成する整地層下面は地山直上でもある。1区西側ではII層（黒色土）上面、1区東側ではV層（オリーブ灰色土）上面、2区ではIII層（黒色土）上面が該当する。標高は、1区西端で24.700m、1区東側で25.000m、2区で24.450mを測る。

2区から東に12m進んだところに1号堀があり、そこから3区となる。町屋比定地の4・5区では、整地層は存在せず、地山直上が遺構確認面となっている。3区のIII層（オリーブ灰色土）、4区のII層（極暗褐色土）、5区のII層（黒色土）が該当する。標高は、3区で24.200m、4区で23.850m、5区で24.000mを測り、最も低い4区に向かって東西がわずかに窪みつつ概ね平坦となっている。

なお調査区内には、洲沼川の南東に並走する自然流路跡が存在し、遺跡の地山を形成する。具体的には1・2区の第2面以下の層位、3～5区の遺構確認面以下の層位が該当する。



1区西側層序

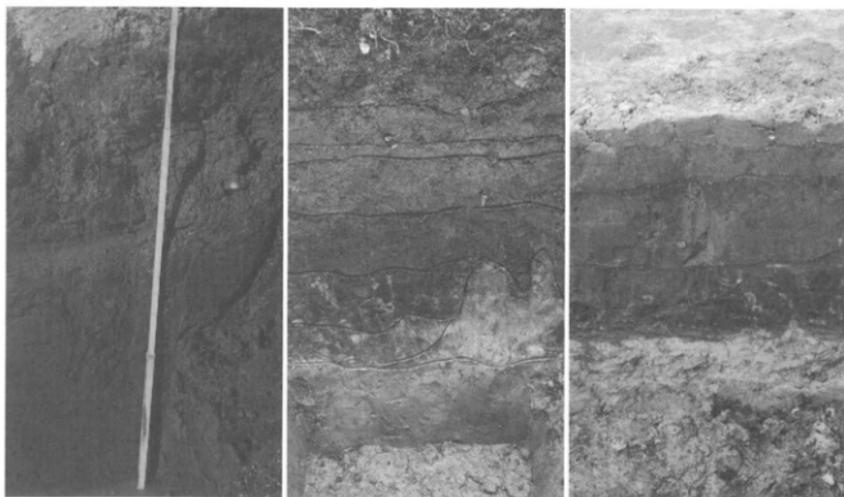
- I層 暗褐色土 7.5VX2/4 粘性強 しまり強 黑色土・褐色土ブロック (φ 2~10mm) 少 (整地層)
- II層 褐色土 7.5VX2/1 粘性強 しまり強 褐色土・褐色土ブロック (φ 2~10mm) 少
- III層 オリーブ灰色土 7.5VX2/2 粘性強 しまり強 褐色土・褐色土ブロック (φ 2~10mm) 少
- IV層 オリーブ灰色土 7.5VX2/2 粘性中 しまり強 褐色土・褐色土ブロック (φ 2~10mm) 少 (砂質)
- V層 オリーブ灰色砂礫 7.5VX2/2 粘性なし しまり強 粘性物 しまり強 褐色土・褐色土ブロック (φ 2~10mm) 少

1区東側層序

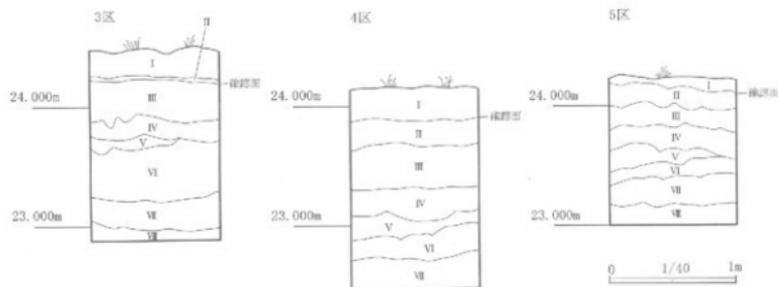
- I層 褐色土 7.5VX2/3 (灰土)
- II層 黒褐色土 7.5VX2/1 粘性強 しまり中 V層 (褐色土) と礫化砂 (φ 2mm) ブロック・砂子少
- III層 比色・褐色土 7.5VX2/3 粘性中 しまり強 黄色砂子中 (整地層)
- IV層 褐色土 7.5VX2/1 粘性中 しまり強 礫化砂粒子少 (整地層)
- V層 オリーブ灰色土 7.5VX2/2 粘性強 しまり中 褐色土ブロック (φ 20~50mm) 多
- VI層 褐色土 7.5VX2/1 粘性強 しまり中 礫化砂粒子多
- VII層 暗赤褐色土 7.5VX2/6 粘性中 しまり強 礫化砂多 (礫化が著しいローム質土)
- VIII層 褐色土 7.5VX2/1 粘性強 しまり中 礫化砂粒子多

2区層序

- I層 暗褐色土 7.5VX2/3 (灰土)
- II層 褐色土 7.5VX1/4 粘性・しまり中 礫化砂多 (整地層)
- III層 褐色土 7.5VX2/1 粘性・しまり強 礫化砂・礫化砂少
- IV層 褐色土 7.5VX1/7/1 粘性・しまり中 礫化砂粒少 礫化砂中
- V層 オリーブ灰色土 7.5VX2/2 粘性・しまり強 礫化砂粒少



第3図 基本層序 (1)



3区層序

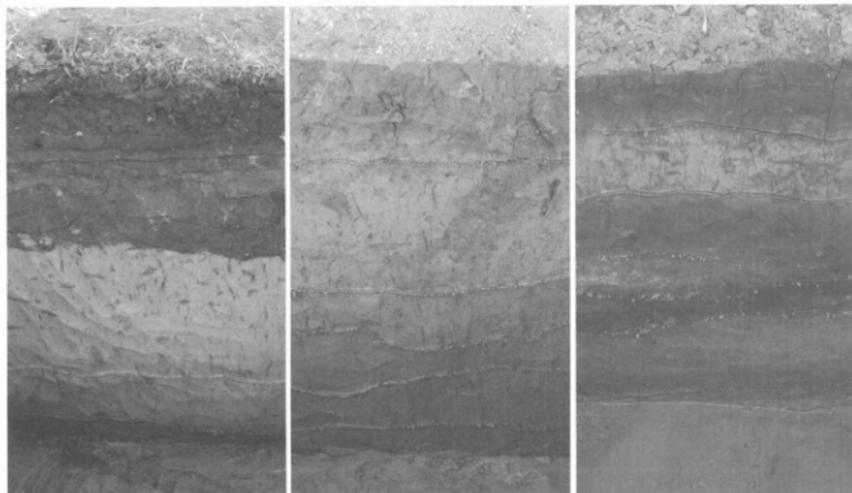
- I層 黒色土7.592/1 (表土)
- II層 褐色土7.593/4 粘粒なし しまり強 酸化鉄少 (砂質)
- III層 オリーブ灰色土7.595/2 粘粒なし しまり強 酸化鉄少 (上面が遺構確認面となる)
- IV層 褐色土7.594/4 粘粒・しまり強 酸化鉄少
- V層 褐色土 粘粒強 しまり弱
- VI層 オリーブ灰色土7.595/2 粘粒・しまり強 酸化鉄少
- VII層 オリーブ灰色土 粘粒強・しまり強 (深灰色)
- VIII層 灰色土 砂質

4区層序

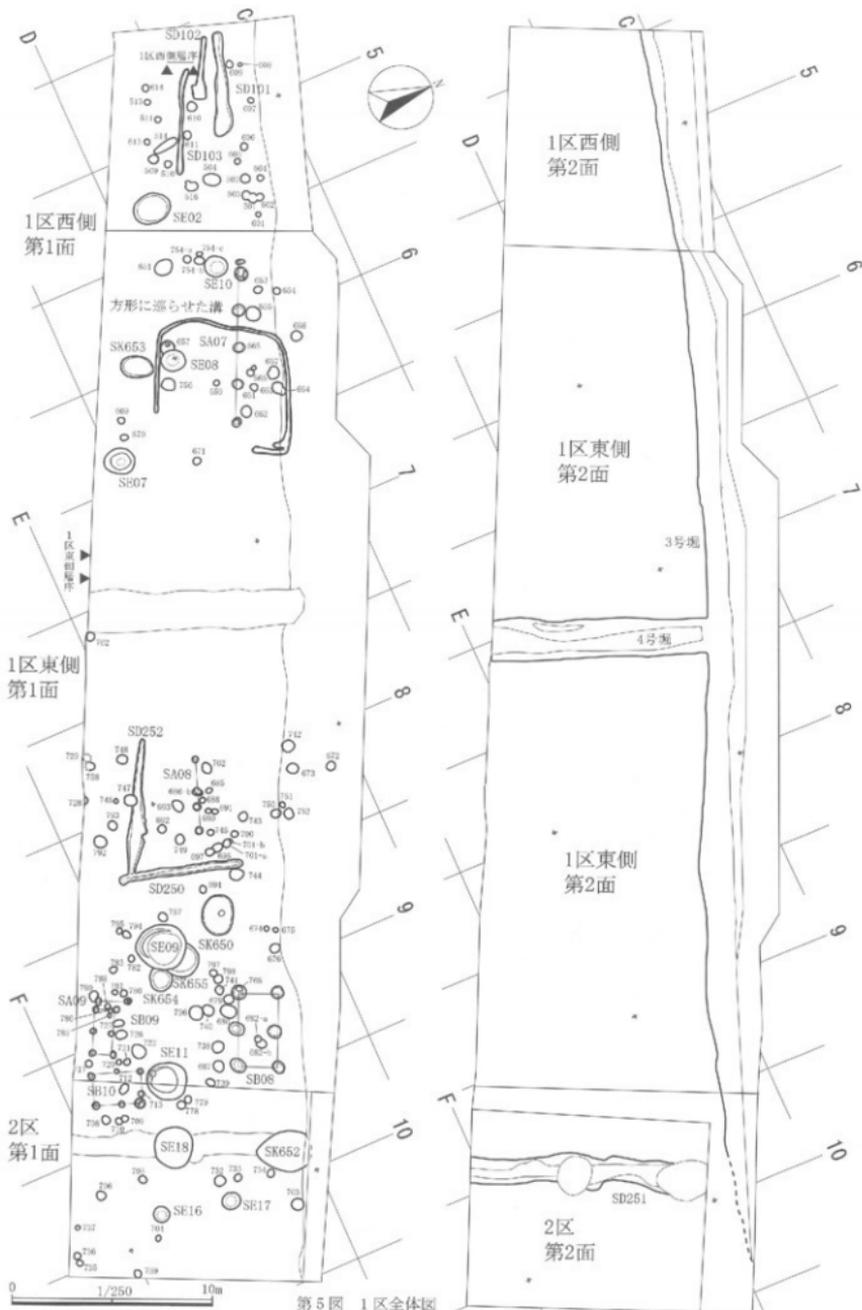
- I層 黒色土7.593/4 (表土)
- II層 暗褐色土7.592/2 粘粒・しまり中 酸化鉄中
- III層 明黄褐色土7.593/8 粘粒中 しまり強 酸化鉄多 (上面が遺構確認面となる)
- IV層 褐色土7.595/8 粘粒・しまり強 酸化鉄多
- V層 オリーブ灰色土7.595/2 粘粒中 しまり強 酸化鉄少
- VI層 オリーブ灰色土7.595/2 粘粒・しまり強 酸化鉄少
- VII層 灰色土7.596/1 粘粒中・しまり強

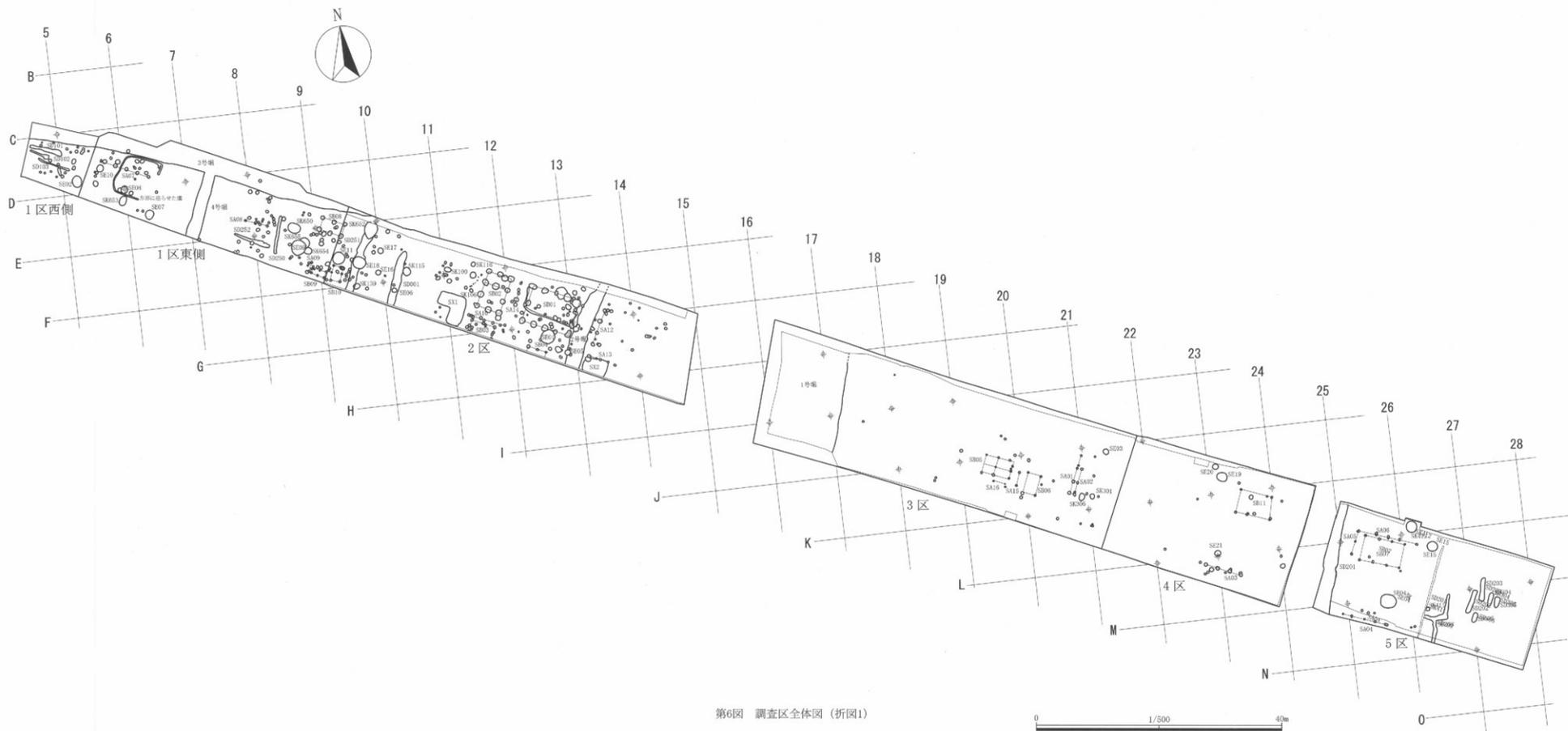
5区層序

- I層 暗褐色土7.593/4 (表土)
- II層 褐色土7.592/1 粘粒・しまり強 酸化鉄少 (上面が遺構確認面となる)
- III層 オリーブ灰色土7.595/2 粘粒・しまり強 褐色土 (IV層) ブロック (φ 3mm) 中
- IV層 褐色土7.592/1 粘粒・しまり強 酸化鉄粘中
- V層 オリーブ灰色土7.595/2 粘粒なし しまり強 灰色土 (VII層) ブロック (φ 3mm) 少 (砂質)
- VI層 褐色 (黒層) 土7.596.2/1 粘粒・しまり強
- VII層 褐色土7.595/1 粘粒なし・しまり強 灰色土 (VII層) ブロック (φ 2~3mm) 少
- VIII層 灰色土7.596/1 粘粒・しまり強 酸化鉄粘少



第4図 基本層序 (2)





第6図 調査区全体図 (折図1)

0 1/500 40m

第5章 検出された遺構と遺物

第1節 1区 [第1面]

1区は2・3区とともに『穴戸城絵図(穴戸城下絵図)』から武家屋敷の存在が想定されていた。遺構構築時期は、整地面を挟んだ上面の1面と下面の2面に大別される。3・4号堀及びSD251が第2面の遺構で、それ以外が第1面の遺構となる。第1面で検出された遺構は、掘立柱建物跡2棟(SB08・09)、柵列3条(SA07～09)、方形に巡らせた溝、井戸跡6基(SE02・07・08・09・10・11)、土坑4基(SK650・653～655)、溝5条(SD250・252・101～103)である。出土遺物については掲載遺物及び巻末の出土遺物集計表(第103～107表)を参照されたい(以下同じ)。

(1) SB(掘立柱建物跡)

SB08 (第7図 第3図版 第2表)

①位置・重複：D9-c、E9-aに位置する。P6はP677に切られる。

②形状・規模：2間1面。妻側の東西は1.95mである。桁行北はP1・2間及びP2・3間で1.88m、全体で、3.76mである。南も同様にP4・5間及びP5・6間で1.88m、全体で3.76mである。

桁行・妻側ともに柱間は1.45mである。

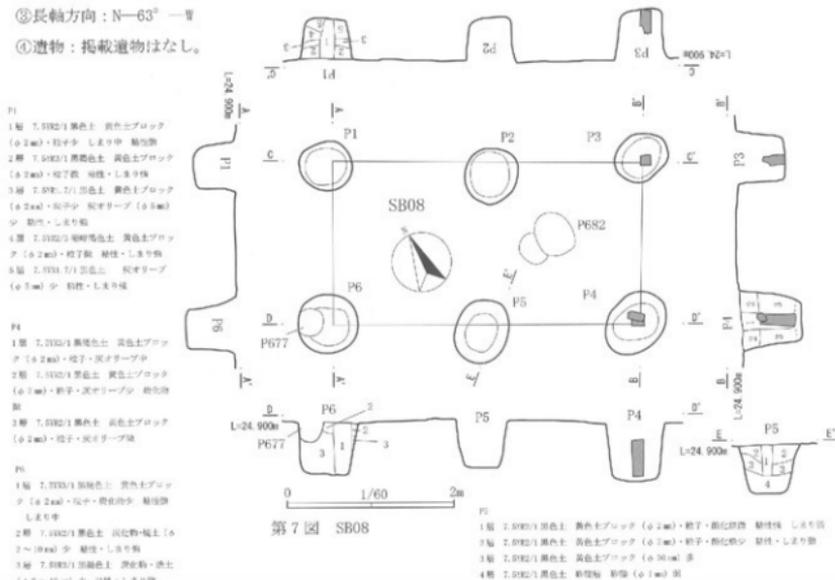
柱の痕跡はP1・3・4・5・6にあり、木質はP3・4で検出されている。裏込めはP1・4・5・6で確認され、P1が2～5層で極暗褐色土～黒色土、P4で2・3層で黒褐色・黒色土、P6で2・3層で黒褐色土～黒色土となっている。P3・4での柱の太さは13cmである。

③長軸方向：N-63°-W

④遺物：掲載遺物はなし。

第2表 SB08 ビット計測表

F番号	前番号	直径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底層深高 (cm)	備考
P1	P730	61	58	48	24.25	
P2	P683	67	66	63	24.21	
P3	P684	65	53	58	24.22	木質残存
P4	P721	83	64	71	24.19	木質残存
P5	P681	78	61	58	24.19	
P6	P678	72	69	64	24.17	



SB09 (第8図 第3図版 第3表)

①位置・重複：E8-d, E9-cに位置する。

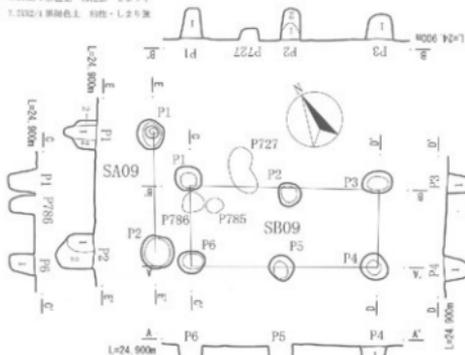
②形状・規模・覆土：2間1面。桁行は1.14m、全体で2.28m。妻側は0.95mである。柱の痕跡は検出されておらず、単層または2層からなる堆積を示し、柱材・木質の痕跡は検出されていない。

③長軸方向：N-62° 一貫

④施設：付帯する遺構としてSA09が存在し、妻側に平行して並ぶ。

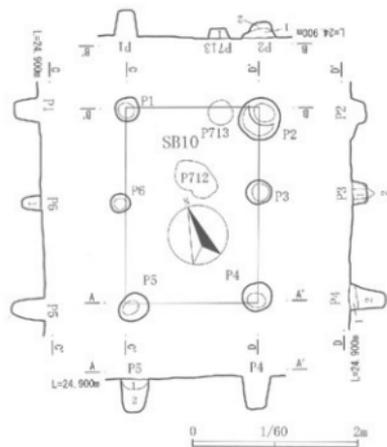
⑤遺物：なし。

- SB09-P1
 1層 7.502(1)黄褐色土 褐色炭少 粘土質 しより中
 2層 7.502(3)黄褐色土 褐色炭少 粘土質 しより重
 SB09-P2
 1層 7.502(1)黄褐色土 褐色炭少 しより中
 2層 7.502(3)黄褐色土 粘土質 しより重



- SB09-P6
 1層 7.502(1)黄褐色土 褐色炭少 粘土質 しより重

第8図 SB09・SA09



第9図 SB10

- P1
 1層 7.501(1)黄褐色土 黄褐色ブロック (φ2~10mm)・粘土・褐色炭少 灰ナリ土質土ブロック (φ2mm) 少 粘土質 しより中
 2層 7.501(3)黄褐色土 黄褐色土ブロック (φ2~10mm)・粘土・褐色炭少 灰ナリ土質土ブロック (φ2mm) 少 粘土質 しより重
 P2
 1層 7.502(1)黄褐色土 黄褐色土ブロック (φ2~10mm)・粘土・褐色炭少 灰ナリ土質土ブロック (φ2mm) 少 粘土質 しより中
 2層 7.502(3)黄褐色土 黄褐色土ブロック (φ2~10mm)・粘土・褐色炭少 灰ナリ土質土ブロック (φ2mm) 少 粘土質 しより重
 P3
 1層 7.501(1)黄褐色土 黄褐色土ブロック (φ2~10mm)・粘土・褐色炭少 灰ナリ土質土ブロック (φ2mm) 少 粘土質 しより中
 2層 7.501(3)黄褐色土 黄褐色土ブロック (φ2~10mm)・粘土・褐色炭少 灰ナリ土質土ブロック (φ2mm) 少 粘土質 しより重
 P4
 1層 7.502(1)黄褐色土 黄褐色土ブロック (φ2~10mm)・粘土・褐色炭少 灰ナリ土質土ブロック (φ2mm) 少 粘土質 しより中
 2層 7.502(3)黄褐色土 黄褐色土ブロック (φ2~10mm)・粘土・褐色炭少 灰ナリ土質土ブロック (φ2mm) 少 粘土質 しより重
 P5
 1層 7.501(1)黄褐色土 黄褐色土ブロック (φ2~10mm)・粘土・褐色炭少 灰ナリ土質土ブロック (φ2mm) 少 粘土質 しより中
 2層 7.501(3)黄褐色土 黄褐色土ブロック (φ2~10mm)・粘土・褐色炭少 灰ナリ土質土ブロック (φ2mm) 少 粘土質 しより重
 P6
 1層 7.501(1)黄褐色土 黄褐色土ブロック (φ2~10mm)・粘土・褐色炭少 灰ナリ土質土ブロック (φ2mm) 少 粘土質 しより中
 2層 7.501(3)黄褐色土 黄褐色土ブロック (φ2~10mm)・粘土・褐色炭少 灰ナリ土質土ブロック (φ2mm) 少 粘土質 しより重

第3表 SB09 ピット計測表

P番号	目番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底部径高 (m)
P1	P797	33	30	36	24.40
P2	P725	20	20	37	24.36
P3	P719	30	30	29	24.44
P4	P716	34	31	28	24.50
P5	P724	31	20	37	24.42
P6	P794	33	29	43	24.36

第4表 SA09 ピット計測表

P番号	目番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底部径高 (m)	備考
P1	P791	36	32	66	24.25	
P2	P789	40	40	62	24.29	

- SB09-P1
 1層 7.501(1)黄褐色土 粘土質 しより重
 SB09-P2
 1層 7.502(1)黄褐色土 黄褐色土ブロック (φ2~10mm)・粘土・褐色炭少 灰ナリ土質土ブロック (φ2mm) 少 粘土質 しより中
 2層 7.502(3)黄褐色土 黄褐色土 黄褐色土ブロック (φ2~10mm)・粘土・褐色炭少 灰ナリ土質土ブロック (φ2mm) 少 粘土質 しより重
 SB09-P3
 1層 7.501(1)黄褐色土 黄褐色土 黄褐色土ブロック (φ2~10mm)・粘土・褐色炭少 灰ナリ土質土ブロック (φ2mm) 少 粘土質 しより中
 2層 7.501(3)黄褐色土 黄褐色土 黄褐色土ブロック (φ2~10mm)・粘土・褐色炭少 灰ナリ土質土ブロック (φ2mm) 少 粘土質 しより重
 SB09-P4
 1層 7.501(1)黄褐色土 黄褐色土 黄褐色土ブロック (φ2~10mm)・粘土・褐色炭少 灰ナリ土質土ブロック (φ2mm) 少 粘土質 しより中
 2層 7.501(3)黄褐色土 黄褐色土 黄褐色土ブロック (φ2~10mm)・粘土・褐色炭少 灰ナリ土質土ブロック (φ2mm) 少 粘土質 しより重

第5表 SB10 ピット計測表

P番号	目番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底部径高 (m)
P1	P721	38	37	30	24.47
P2	P714	53	48	18	24.82
P3	P711	30	28	41	24.82
P4	P707	31	31	30	24.41
P5	P716	37	31	41	24.41
P6	P715	23	22	24	24.47

SB10 (第9図 第3図版 第5表)

①位置・重複：2区にプランがかかる。E9-cに位置する。

②形状・規模・覆土：2間1面。妻側が1.58m。桁行が東西で異なり、東はP2・3間で1.05m、P3・4間で1.35m、全体で2.40m。西はP5・6と6・1の間で1.20m、全体で2.40mとなっている。柱の痕跡のあるピットはP3であるが、木質は検出されていない。P3の裏込めの覆土は第2層が相当し、黒褐色土となっている。

③長軸方向：N-20° —E

④遺物：なし。

(2) SA (罫列)

SA09 (第8図 第3図版 第4表)

①位置・重複：SB09の西、妻側に付帯する。E8-dに位置する。

②形状・規模・覆土：柱穴2基で構成される。柱間は1.44m。杭の痕跡はP1、P2に存在し、P2からは木質が検出されており、丸材である。P1の裏込めは黒褐色土である。P2の裏込めは褐色土である。

③走向方位：N-27° —W

④遺物：なし。

SA07 (第10図 第6表)

①位置・重複：C5-d、C6-cに位置する。方形に巡らせた溝と重複するが新旧関係は不明である。

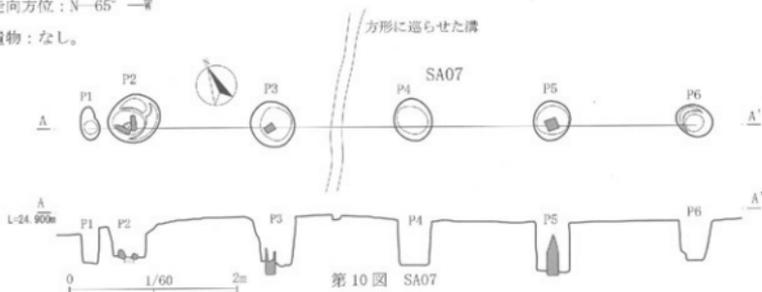
②形状・規模・覆土：P1・2間の距離は、0.48m、P2・3間、3・4間、4・5間の距離は1.86m、P5・6間の距離は1.92mとなっている。P2・3・5からは木質が検出されており、このうちP3・5は角柱である。P3の裏込めは黒褐色土である。

③走向方位：N-65° —W

④遺物：なし。

第6表 SA07 ピット計測表

P番号	目番号	直径 (cm)	縦径 (cm)	深さ (cm)	裏込め深 (cm)	備考
P1	P761	24	16	48	24.43	
P2	P632	64	48	45	24.49	木質、横石残存
P3	P733	60	36	64	24.59	木質残存
P4	P666	32	48	61	24.37	
P5	P666	48	44	68	24.28	木質残存
P6	P758	44	40	56	24.38	



第10図 SA07

SA08 (第11・12図 第25図版 第7・8表)

①位置・重複：D7-d、D8-cに位置する。P686-bと重複し、これを切っている。

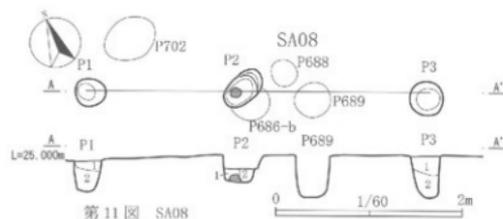
②形状・規模・覆土：P1～3、3基のピットからなり、ほぼ東西に並ぶ。P1・2間が1.62m、P2・3間が1.98mとなっている。規模は径24～40cmの平面円形または楕円形で深さ32～49cmを測る。また、3基のピットのうち、P2底部には木質(丸材)が残存する。P2の裏込めは黄色土ブロック・粒子を少量に含む黒色土である。またP1とP3の覆土は黒褐色土～黒色土の2層からなり、人為堆積を示すものである。

③走向方位：N-70° —W

④遺物：以下に図および観察表を示した。

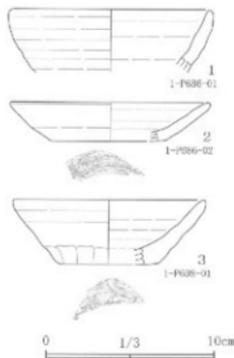
第7表 SA08ピット計測表

P番号	目録号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面積表 (m)	備考
P1	P099	24	24	43	24.41	
P2	P688 a	32	28	32	21.58	本底残存
P3	P098	40	36	49	34.41	



第11図 SA08

- P1
1層 7.0193/1 赤土 黄土土ブロック (φ2~5cm)・砂子多 粘土・しまり中
2層 7.0192/1 黒土 黄土土ブロック (φ2~5cm)・砂子少 粘土・しまり中
- P2
1層 7.0192/1 赤土 木葉多 粘土 しまり中
2層 7.0192/1 黒土 黄土土ブロック (φ2~10cm)・砂子少 粘土 しまり中
- P3
1層 7.0193/1 赤土 黄土土ブロック (φ2~5cm)・砂子多 粘土・しまり中
2層 7.0192/1 黒土 黄土土ブロック (φ2~5cm)・砂子少 粘土・しまり中



第12図 SA08出土遺物

第8表 SA08出土遺物観察表

図号	注記	種類	容積	口径	底径	高さ	底面積	容積の推定	装束の形状	地産	色相	粘土	残存度	備考
1	1E-1660-1	かわらけ	A輪中皿	(11.9)	—	(3.5)	20.4	作部は丸み強い。	ロクロ製形。	良好	赤外壁 7.0197/1明 褐色	粘土質粉砂 子を含む。 断面7.0197/4	口縁部 の1/4	
2	1E-1660-15	かわらけ	B輪中皿	(11.9)	(7.9)	(2.3)	24.9	平らな底部分から30度角で放射的に立ち上がる。	ロクロ製形。左回転成形で厚し。常滑焼。	良好	内外面 7.0192/2黒 褐色	白色露地焼 子を含む。 断面7.0196/4	全体の 1/6	
3	1E-1688-15	かわらけ	B輪中皿	(11.2)	(5.6)	(3.5)	56.3	45度ほどの角度で立ち上がるが、歯みか強い。	ロクロ製形。左回転成形。粘土質粉砂子持ちへろ削り調整。	やや良	全面5/2/2 灰白色	白色・黄褐色 粘土を含む。	全体の 1/2	二次焼成で褐色化

(3) 方形に巡らせた溝 (第13図 第2図版)

①位置・重複：C5-d、C6-c・d、D5-b、D6-aに位置する。SA07、SE08、P667・664・663・661・662・665・666・659・756・657と重複するが新旧は不明である。

②形状・規模・覆土：南北7.80m×東西6.15m、溝幅12~24cm、深さ2~7cmで概ね5cm前後。底部標高は24.90m前後を測り、平面方形に巡りつつ東辺で途切れる。覆土は褐灰色砂礫層をなしている。

③長軸方向：N-35°—E

④遺物：なし。

(4) SE (井戸跡)

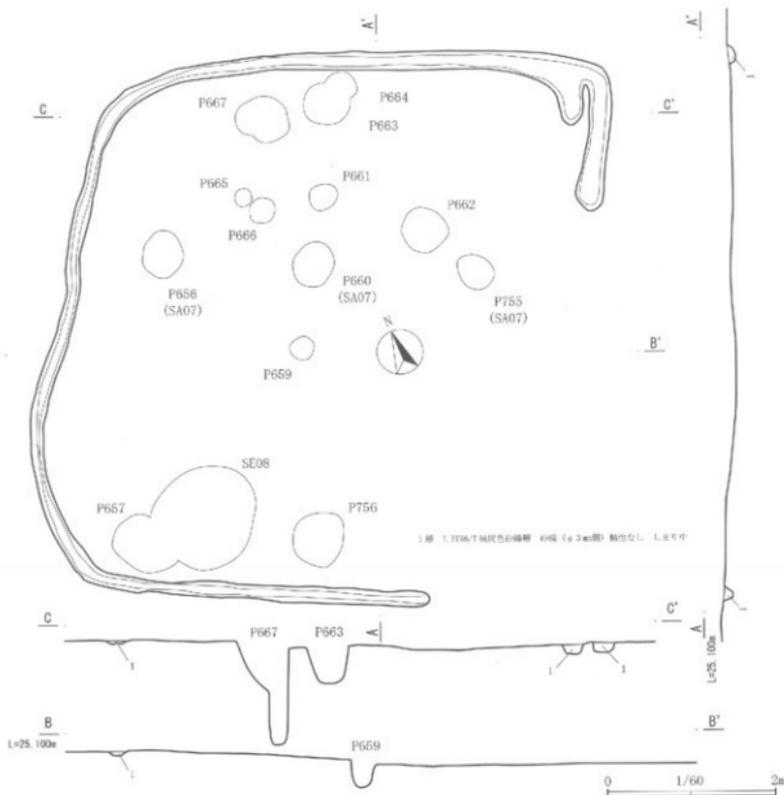
SE02 (第14・15図 第4図版 第9表)

①位置：C5-cに位置する。

②形状・規模・覆土：規模は1.90m×1.51mの平面楕円形で深さ1.90mを測る。また、南側を0.45m下がったところに幅の広いテラスが存在し、地山暗緑灰色土層(1区Ⅷ層)下の地山砂礫層を底部としている。覆土は、オリーブ灰色土から黒色土に至る1~10層を確認している。このうち上層である3層(黒色土)からはφ150~200mmの礫が複数検出されていた。

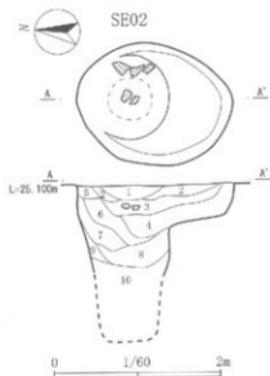
③長軸方向：N-6°—W

④遺物：以下に図および観察表を示した。



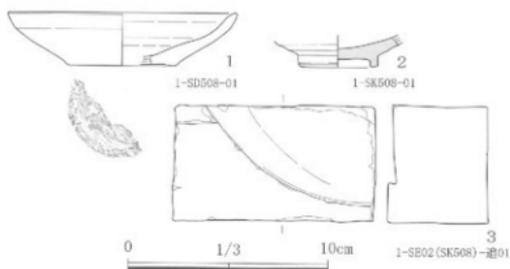
1層 7.53A7 褐色土の埋積 4層 (4.3m層) 粘土質 L. 1.5m 中

第13図 方形に巡らせた溝



- 504)
- 1層 2.032(1) 褐色土 砂質 黄色土ブロック (4.2~10m)・粘土少
量 (4.2~10m) 中 粘土・しまり中
 - 2層 2.032(2) 褐色土 砂質 黄色土ブロック (4.2~10m)・粘土少
量 (4.2~10m) 中 粘土・しまり中
 - 3層 2.032(3) 褐色土 砂質 黄色土ブロック (4.2~10m)・粘土少
量 (4.2~10m) 少 粘土・しまり中
 - 4層 2.032(4) 褐色土 砂質 黄色土ブロック (4.2~10m)・粘土少
量 (4.2~10m) 少 粘土 しまり中
 - 5層 2.032(5) 赤褐色土 オリーブ灰色土ブロック (4.2~10m) 砂
質 粘土に入る 砂質 しまり中
 - 6層 2.032(6) 赤褐色土 砂質 黄色土 粘土 しまり中
 - 7層 2.032(7) 褐色土 オリーブ灰色土ブロック (4.2~10m) 粘土
質 しまり中
 - 8層 2.032(8) 褐色土 オリーブ灰色土ブロック (4.2~10m) 少
粘土 しまり中
 - 9層 2.032(9) 褐色土 オリーブ灰色土ブロック (4.2~10m) 少
粘土 しまり中
 - 10層 2.032(10) 褐色土 オリーブ灰色土ブロック (4.2~10m) 少
粘土 しまり中

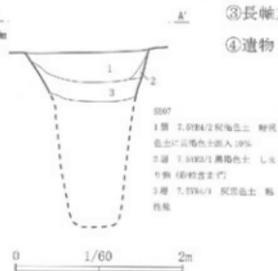
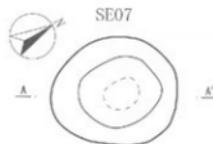
第14図 SE02



第15図 SE02 出土遺物

第9表 SE02 出土遺物観察表

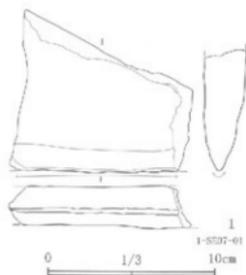
番号	作号	種類	器種	口径	底径	高さ	重量	器形の特色	器形の特徴	検出	色調	胎土	残存度	備考
1	1F-SD508	かわらけ	白磁中皿	(11.2)	(5.3)	3.76	21.1	中央や端は気味の微細から測定角で真直的に立ち上がり、口縁部で分厚くなり、内面が丸みとなる。	口外口縁部、右側部が厚く厚し、底部に動物のナマ付け調整。	破片	全土 2.6798/3段 黄褐色	右側大粒・白色粒子や多い、底縁部下を含む。	全体の1/3	
2	1V-SK508	陶器	漆器新約	—	3.8	(1.6)	30.1	低い字高台。	口外口縁部、雨り出し溝付。	破片	外面10E4/4 褐色の層付。内部は18/2段黄色の陶器に黄入あり。	白色粒子を含む。底	底面 2/3	瀬戸産19世紀前半
3	1K-SK508 (SK52)	土製品	種瓦	径10.1	径5.9	径4.8	547.6	長方形の器面に円形の一部が掘かれ、斜り板瓦の一種。	整形し、円形部分ナマ調整。	良片	全体 2.6794/6面 赤褐色	白色粒子や多い。	存在	19世紀末以降



第16図 SE07

SE07 (第16・17図 第4・25図版 第10表)

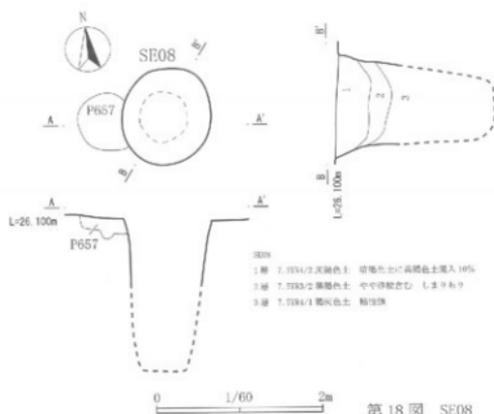
- ①位置：D6-a・c に位置する。
- ②形状・規模・覆土：1.53 m × 1.34 m の平面円形で、漏斗状に深さ 2.12 m 掘り下げた地山砂礫層で底部に至る垂掘りの井戸である。覆土は灰褐色～黒褐色土の 4 層を確認した。上面から約 1 m 下がったところで湧水点がある。
- ③長軸方向：N-29° -E
- ④遺物：以下に石製品 1 点を示した。



第17図 SE07 出土遺物

第10表 SE07 出土遺物観察表

番号	作号	種類	器種	口径	底径	高さ	重量	器形の特色	器形の特徴	検出	色調	胎土	残存度	備考
1	1E-7a-PSS-1 遺	石製品	磨石	径 (9.9)	横 (10.4)	—	—	器形を呈する大型の磨石の破片。	表面部は粗い縦行溝。	—	全面34/6段 色	—	—	下層が使用法、剥離が著しい。



第 18 図 SE08

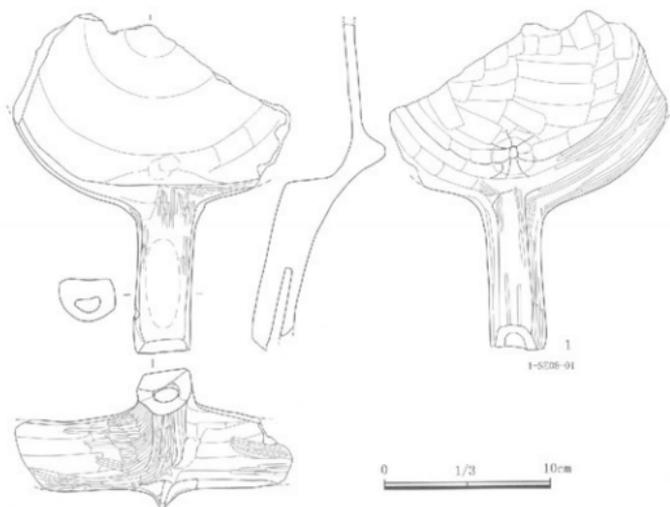
SE08 (第 18・19 図 第 4・25 図版
第 11 表)

①位置・重複：C5-d・C6-c・D5-b・
D6-a に位置する。円形ピット P657 を切っ
ている。

②形状・規模・覆土：1.26 m × 1.05
m の平面楕円形で、深さ 1.90 m。覆土
は灰褐色土へ黒褐色土の 3 層の堆積を確
認している。

③長軸方向：N-35° -E

④出土遺物：以下に図および観察表を
示した。



第 19 図 SE08 出土遺物

第 11 表 SE08 出土遺物観察表

番号	位置	種類	形状	口径	直径	高さ	重量	器形の特徴	装飾の特徴	産地	色調	粘土	残存数	備考
1	H- SE08-01	土師質土 器	十線	短 (20.0)	楕 (16.5)	8.2	263.1	平らな底面に乳糜 状足付、胎化不 明。高さ 8cm、幅 3.0cm の把手が付 く。	ロクロ製。内面 にロクロ目あり。 外底面へツナグ。 体部はくさや。足 と把手は半段柱型 形。体下部にくさ や製跡。	良好	内外面 2.5Y2/1系 褐色	白色粘土・ 雲母鉄粒子 多く含む。	全体の 1/6	把手中央部に突 出中のへこみあ り。

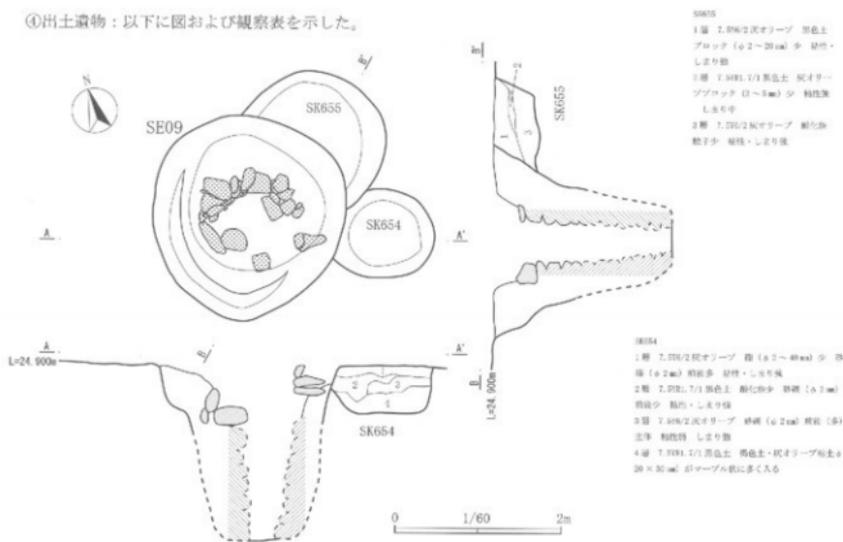
SE09 (第20・21図 第4・25図版 第12表)

①位置・重複：E8-bに位置する。SK654・655を切る。

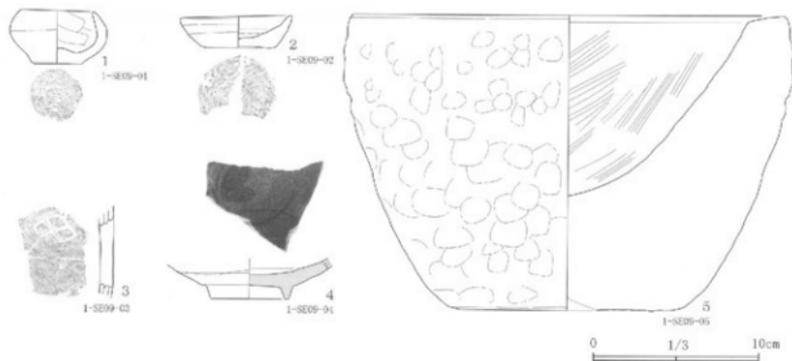
②形状・規模・覆土：2.30 m × 2.20 mの平面楕円形で深さ2.00 mのところは底部となり砂礫層であった。西側を50 cm下がったところに狭いテラスが存在する。最上層には積石を崩したと考えられるφ200～500mmの礫が、テラスあたりの深さまで密に埋まっており、これを取り除くと積石が遺存していた。積石には花崗岩、形質頁岩、安山岩があり、自然石と割石を併用している。

③長軸方向：N-45°-E

④出土遺物：以下に図および観察表を示した。



第20図 SE09・SK654・SK655



第21図 SE09 出土遺物

第12表 SE09 出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	口徑	底径	胴径	高さ	器形の特徴	器底の特徴	焼成	色調	胎土	残存状況	備考
1	1E-9a ⁺ 7SE-1 一括	かわらけ	小皿	4.4	2.9	3.1	41.8	突出気味の底面に 葉巻状の各部が付く。 無漆塗。	ロクロ彫形。左面 筋面切り直し後、 無刷塗。	焼良	全面5 YB7/6暗緑 色	白色粘土若干 含む。骨 針含む。	全体の 1/4	
2	1E-9a ⁺ 6SE-1 一括	かわらけ	C形小 皿	6.5	1.1	1.9	24.4	ややくぼんだ底面 から60度以上の角 度で直線的に立ち 上がる。	ロクロ成形成 形。芯部転削り 施した後、体下部へ ツケズリ。	焼良	全面 7.0YB7/6緑 色	白色・黄色 粘土やや多 く含む。	全体の 2/3	
3	1E-9a ⁺ 7SE-1 一括	土師質土 器	印文火 鉢	—	—	(6.8)	23.8	角型の一部か。	—	全面 良好	2.0YB5/6青 沖黄色	白色粘土多 く含む。	破片	張り差印印文
4	1E-9a ⁺ 7SE-1 一括	陶器	皿	—	(4.5)	(2.2)	35.2	内反り気味の高台 から緩やかに開く。 上部の大形。	削り出し高台。体 下部四角へラ削 り。	焼良	内面 10YR1/1暗 其他色	白色粘土含 む。器内 5YR4/8赤黄 色	底面 1/2	見込み植物文 鉄胎 宮内省17世紀前 半
5	1E-9a ⁺ 7SE-1 7F粉	石製品	短針	(26.0)	(11.2)	16.5	2600	平らな底面から70度角で直線的に立ち上 がり。口縁部は直線となる。	—	—	全面5Y/6灰 色	—	全体の 1/4	安山岩質か

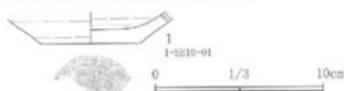
SE10 (第22・23図 第4・25図版 第13表)

①位置：C5-dに位置する。

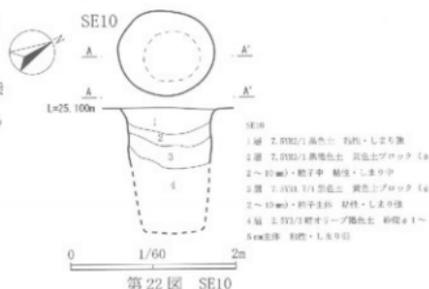
②形状・規模：1.16m×1.08mの平面円形で、深
さ1.58mのところ、地山砂礫層をなした底部に至っ
ている素掘りの井戸である。

③長軸方向：N-28°-E

④出土遺物：以下に図および観察表を示した。



第23図 SE10 出土遺物



第22図 SE10

第13表 SE10 出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	口徑	底径	高さ	器形の特徴	器底の特徴	焼成	色調	胎土	残存状況	備考	
1	1E-10 a ⁺ 7SE	かわらけ	B形中 皿	—	(8.6)	(4.9)	21.8	ほぼ垂直面から40 度角で直線的に立 ち上がる。	コック形跡。裏面 は磨耗のため不明。	やや 灰黄	全面 7.0YB6/6緑 色	白色大粒含 り。器母器 下含む。	底面 1/3	二次発熱のため 一部10YR6/2R 黄色

SE11 (第24・25図 第4・25図版 第14表)

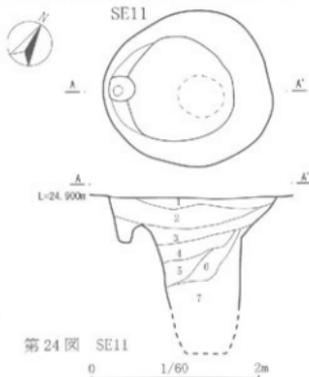
①位置：プラン東側は2区になる。E9-a・cに位置する。

②形状・規模：2.04m×1.92mの平面円形をした素掘り井戸で、
確認面から底部までの深さは1.86mを測る。湧水は深さ0.70m。

③長軸方向：N-58°-E

④出土遺物：以下に図および観察表を示した。

層	説明
1層	1.0YR4/7黄色土 黒褐色土 (φ2~10cm) オリーブ灰色土 (φ2~20cm) ガーベール状に入る 砂性・しより粉
2層	2.0YR1/1黒褐色土 黄色土ブロック (φ2~10cm) 粘土少 オリーブ灰色土ブロック (φ2~20cm) 少 粘性・しより粉
3層	2.0YR1/1黒褐色土 黄色土ブロック (φ2~10cm) 粘土少 オリーブ灰色土ブロック (φ2~20cm) 中 粘性・しより粉
4層	2.0YR1/1黒褐色土 砂礫 (φ2~10cm) 中 オリーブ灰色土ブロック (φ2~20cm) 黒褐色土 (φ2~40cm) ガーベール状に入る
5層	1.0YR2/1黒褐色土 粘礫 (φ2~10cm) 多 オリーブ灰色土ブロック (φ2~20cm) 少
6層	5.0YR2/1黒褐色土 粘礫 (φ2~10cm) 中 オリーブ灰色土ブロック (φ2~20cm) 中
7層	5.0YR2/1黒褐色土 粘礫 (φ2~10cm) 多 オリーブ灰色土ブロック (φ2~20cm) 多



第24図 SE11



第25図 SE11出土遺物

第14表 SE11出土遺物観察表

番号	位置	形態	種類	口径	底径	壁厚	重量	断面の形状	断面の物質	用途	色調	胎土	焼成度	備考
1	10-11 79E 溝	かわらけ	A類 甕	6.0	3.4	1.6	25.3	丸みのある底部から傾度急で立ち上がり、底面中央で丸みを帯びる。	ロクロ水挽き成形。右距離帯より削した後、整調盤、足込みにてナゲ裏削削。	良好	内外面 10198/2灰 白色	雲母屑を含む。胎肉10196/4に濃い黄褐色	口縁一部欠損	
2	10-11 79E 溝	土師製土師	钵	(28.5)	—	(6.1)	83.1	やや丸みのある大型の鉢。	回転台使用上。	良好	内外面 7, 9382/2黒 褐色	白色大粒多く含む。雲母屑を含む。胎肉7, 9384/9灰色	口縁部破片	表面装飾彫着

(5) SK (上坑)

SK650 (第26・27図 第5・25図版 第15表)

- ①位置・重複：D8-d、E8-bに位置する。遺構中央で円形ピットP799に切られている。
- ②形状・規模・覆土：200 cm × 156 cmの楕円形で、深さ15 cmを測る。覆土は単層の黒色土である。
- ③長軸方向：N-60° 一葎
- ④出土遺物：覆土中から底部にかけて遺物がややまとまって出土している。以下に図および観察表を示した。

SK653 (第26図 第5図版)

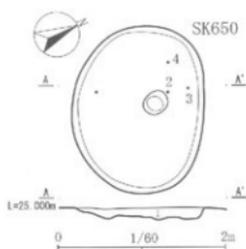
- ①位置：D5-b、D6-aに位置する。
- ②形状・規模・覆土：222 cm × 109 cm、深さ36 cm。覆土は黒色土が3層あり、中央に向かって緩やかにたむむレンズ状堆積を示しており、人為か自然によるものか判断がつかない。覆土は1・2層で多量に混入している。
- ③長軸方向：N-35° 一葎
- ④出土遺物：掲載遺物はなし。

SK654 (第20図 第4図版)

- ①位置・重複：E8-bに位置する。SE09・SK656に切られる。
- ②形状・規模・覆土：120 cm × 105 cmの平面円形で、深さ155 cm。覆土は、オリーブ灰色土・黒色土が互層をなした平行堆積である。
- ③長軸方向：N-74° 一葎
- ④出土遺物：なし。

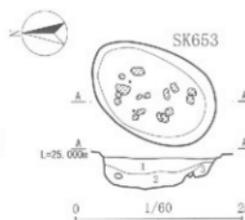
SK655 (第20図 第4図版)

- ①位置・重複：E8-bに位置し、SK654を切り、SE09に切られる。
- ②形状・規模・覆土：165 cm × 現状で93 cm、深さ52 cm。覆土は、上・下の灰オリーブ色土が黒色土を挟んだ層からなっている。
- ③長軸方向：不明
- ④出土遺物：掲載遺物はなし。



SK650

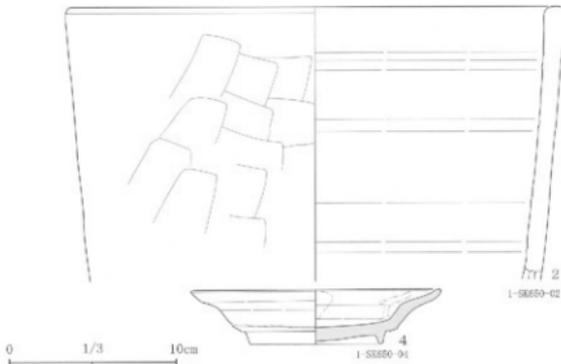
1層 土砂混じり黄色土 黄色土
ブロック (φ2m) 出現・砂子
少 砂層 (φ2m) 出現多



SK653

1層 土砂混じり黄色土 粘土・しまり砂 砂層
(φ2m) 出現多
2層 土砂混じり黄色土 粘土層 しまり砂 黄
色土ブロック (φ2~3m) 多
3層 土砂混じり黄色土 粘土層 しまり砂 灰
サヤ形粘土ブロック (φ2~3m) 少

第26図 SK650・SK653



第27図 SK650 出土遺物

第15表 SK650 出土遺物観察表

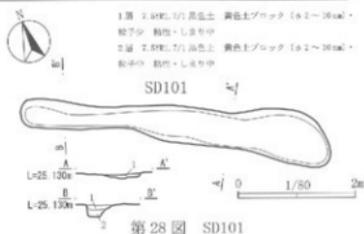
番号	注記	種類	断面	口径	底径	高さ	重量	発掘の位置	発掘の状況	土質	色調	存在度	備考	
1	IE-SK650-1	かわらけ	丸腰中皿	(11.8)	6.9	2.4	49.3	わずかに突出した縁部から丸みを持って縁やかに立ち上がる。	ロクロ製形。右肩斜め削り落し後、煎製型。	硬土	全面30YR/6 棕色	白色粘土・黒砂を若干含む。骨針含む。	全体の1/3	
2	IE-SK650 No3	瓦質土器	大鉢・高鉢	(29.6)	—	(16.4)	606.5	径30cmを超える土器状を呈す。器は確認できない。	内面に布目が残り、縁取りの可能性あり。	べや土	外面 7.5YR5/3に 近い黄褐色 内面黒色	口縁部 の1/4		
3	IE-SK650 No2	陶器	陶片	—	4.8	(2.4)	61.8	小形の碗状の付き。10度角で大きく開く。	ロクロ製形。削り出し高弁。鬼轆が残り、その上に糊をツググケする。	硬土	外面 7.5YR/3場 色内面 2.6Y5/1オ リーブ灰色 の透明釉	白色粘土 若干含む。	地盤 のみ	飯沼文雄 (1993) 黒 色土 層
4	IE-SK650 No1-1	陶器	黄褐色の磁器	15.9	8.0	3.2	243.4	内縁架取の高台から水平に突き出す下唇→40度角で立ち上がり。さらに幅広いの唇部へと開く。	ロクロ製形。削り出し高弁。断面に樟炭灰色(10YR4/1)の塊状積層。	硬土	内外面 5YR/3黄 色の黄褐色 断面 5YR/1灰白 色	白色粘土 若干含む。	ほぼ 存在	梁行磨 陶器(7世定)

(6) SD (溝)

SD101 (第28・29図 第25図版 第16表)

①位置: C4-b, C5-2aに位置する。西に向かって走行する。

②形状・規模・覆土: 幅0.48~0.88m、深さ0.15~0.20mを測る。底部の標高は東側で24.83m、西側で24.78mをなしているが水流の痕跡はない。断面形状は鍋底状をなし、覆土は黒色土2層である。③走向方向: N-65°-W ④遺物: 覆土中からかわらけ・瓦質土器の破片が出土している。

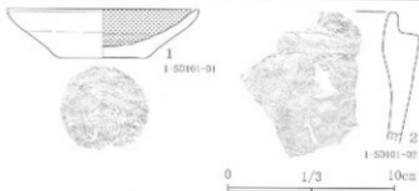


第28図 SD101

1層 土砂混じり黄色土 黄色土ブロック (φ2~30cm) 砂子 砂層 しまり砂
2層 土砂混じり黄色土 黄色土ブロック (φ2~30cm) 砂子 砂層 しまり砂

第16表 SD101 出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	装束の特徴	装束	色調	胎土	残存度	備考
1	IV-10150-3a2	かわらけ	日輪甲皿	(11.3)	(5.2)	3.0	84.2	平らな底部から30度角で直線的に隆き、口縁でやや丸みを帯び、分厚くなる。	ロクロ製。胎土は赤褐色で粗く、底面に黒い点状の斑を有する。	やや不目	外面 7.5302/2に黒い褐色内面黄褐色	白色胎土ややや赤褐色の斑を有する。	全体の1/3	不明胎土に転用、内面褐色斑、口縁部に付く油痕。
2	IV-10150-1	瓦葺土器	大鉢蓋	—	—	(7.7)	88.2	厚さは75度角で立ち上がり、口縁は高さ15mmの受け帯をつくる。平蓋丸形。	輪削み成形。最終調整と外面乾、内面焼く。	良好	内外面とも7.5302/2褐色	白色胎土ややや赤褐色の斑を有する。器内面5002/1オリーブ褐色	口縁部破片	平蓋丸形、漆喰彫り。青森県茨城県出土遺物に類似あり。



第29図 SD101 出土遺物

SD102 (第30・31図 第25図版 第17表)

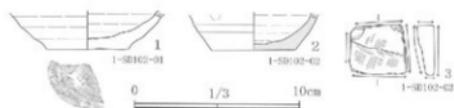
①位置：C4-bに位置する。遺構東端を浅い方形の擾乱に切られている。西に向かって走行する。

②形状・規模・覆土：幅は0.22～0.38 m、深さは18 cm前後である。底部標高は東側で25.00 m、西側で24.95 mであるが、水流の痕跡はない。覆土は黒色土の単層である。③走向方向：N-65° 一貫

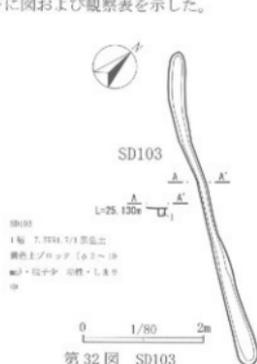
④遺物：以下に図および観察表を示した。



第30図 SD102



第31図 SD102 出土遺物



第32図 SD103

第17表 SD102 出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	口径	底径	器高	重量	器形の特徴	装束の特徴	装束	色調	胎土	残存度	備考
1	IV-SD102	かわらけ	A類中皿	—	(4.0)	(2.3)	24.6	やや突出した底部から35度角で緩やかに立ち上がる。	ロクロ製。胎土不明。体露上半にロクロ目肌露。	良好	内外面とも7.5302/2褐色内面褐色	黄褐色胎土ややや赤褐色の斑を有する。	底面1/3	遺構より出土。瀬戸・美濃系17世紀
2	IV-SD102	陶器	茶入	—	(6.1)	(2.3)	18.5	平らな底部から60度角ほどで緩やかに立ち上がる。	ロクロ製。滑り難い。胎土不明。口縁部へ斜めに割れを有する。	良好	内外面とも7.5302/2褐色内面褐色の斑を有する。器内面5002/1オリーブ褐色の斑を有する。	長石大粒を有する。厚肉。7.5302/2褐色	底面1/3	遺構より出土。瀬戸・美濃系17世紀
3	IV-SD102	石製品	硯石	縦3.05	横4.45	厚1.0	14.9	使用面は両面で、厚さと解からみて、磨き面と思われる。	—	—	両面とも10YR7/2黄褐色	—	約半分	硯石製

SD103 (第32図)

①位置：C4-b・d、C5-cに位置する。西に向かって走行する。

②形状・規模・覆土：幅は0.16～0.32 m、深さ0.12 m。底部標高は東側で24.92 m、西側で24.99 mであるが、水の流れた痕跡はない。覆土は黒色土の単層である。

③走向方向：N-65° 一貫

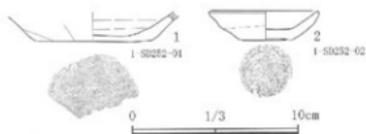
④遺物：なし。

SD250 (第33・34図 第25図版 第18表)

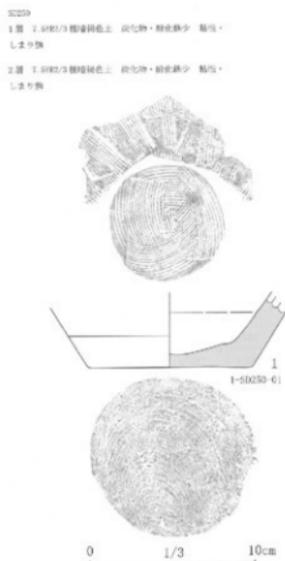
- ①位置・重複：D8-c、E8-aに位置する。SD252と重複するが土層色調に差異はなく時期差は認められなかった。
- ②形状・規模・覆土：幅は3.35～4.62mで南北方向に走向する。深さは0.27～0.37mを測り、底部の標高は北が24.31m、南が24.29mとなりほぼ平坦である。断面形状は皿形に立ち上がる。覆土は極暗褐色土の単層からなる。
- ③走行方向：N-17° 一冊
- ④出土遺物：以下に図および観察表を示した。
- ⑤備考：隣接するSD252は、本遺構の南端からL字に屈曲して西に走向するため、形状から、同じ調査区に存在する「方形に巡らせた溝」のような施設であった可能性も考えられる。



第33図 SD250・252



第35図 SD252 出土遺物



第34図 SD250 出土遺物

第18表 SD250 出土遺物観察表

番号	日記	発物	種類	口径	直径	高さ	重量	断面の特徴	整形の特徴	構成	色調	出土	保存度	備考
1	正 SD250 -N01	陶器	楕円	—	10.0	4.5	296.2	平らな底面から60度ほどの角度で直線的に立ち上がる。内面は凹状にくぼむ。	口は口型。左面軸を切り離し加蓋蓋。体部は深部からへつ削り。内面は凹状の軸がわずかに見られる。	良好	内外面とも7.5B/2暗褐色の鉄錆	底切のみ	褐色黒砂子若干含む。遺物のみ	楽平・楽義大 楽器4区採集

第19表 SD252 出土遺物観察表

番号	日記	発物	種類	口径	直径	高さ	重量	断面の特徴	整形の特徴	構成	色調	出土	保存度	備考
1	正 SD252 -P07	かわらけ	白磁中皿	—	(7.1)	(4.8)	23.3	平らな底面から30度角で直線的に開く。	口は口型。手厚いため調整不明。	良好	全面7.5B/7黄褐色	白色・白濁黒砂子やや多い。	底切1/2	
2	正 SD252 N01	かわらけ	白磁中皿	6.5	3.1	1.7	38.4	突出した底面から20度角で開き、平直で丸みを帯び、口端にいたる。	口は口型。手厚い。右面軸を切り離し。内面は凹状の軸がわずかに見られる。内面のみ調整不明。	良好	全面7.5B/7黄褐色	白色黒砂子・黒白黒砂子若干含む。骨粉を含む。	底切	

①位置・重複：D7-d、E7-b、E8-aに位置する。円形ピットP747と重複しこれに切られる。

②形状・規模・覆土：断面形状は皿状。幅は0.22～0.87 m、深さは0.05～0.21 m、底部の標高は西が24.75 m、東が24.75 mとなり、ほぼ平坦となっている。断面形状は皿形に立ち上がる。覆土は黒褐色土＋黒色土の2層からなる。

③走行方向：N-62° 西 ④出土遺物：前頁に図および観察表を示した。

(7) ピット (第 36・37 図 第 26 図版 第 20～22 表)

検出されたピット群は掘立柱建物として組めたもの、欄列と判断されるものなどは同一遺構として捉えた。その他のピットの平面図は全体図に掲載した。尚、断面図は割愛した。各ピットの計測値は以下に示した。

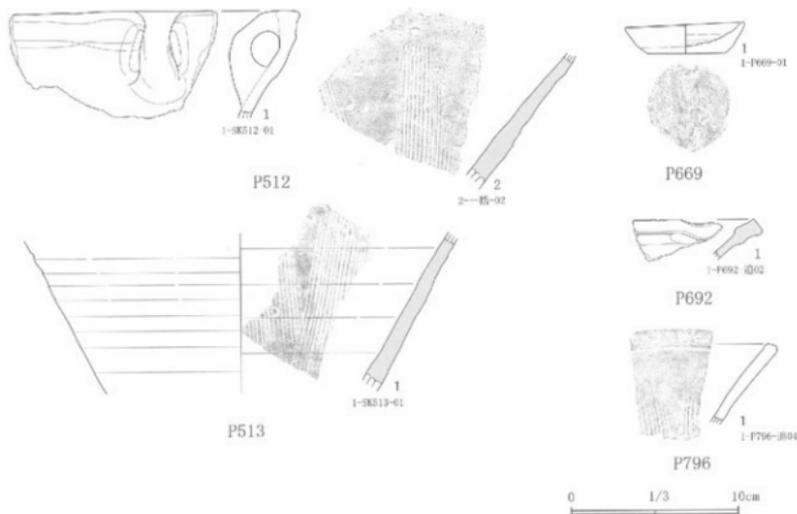
第 20 表 1 区ピット計測一覧表(1)

地区	遺跡名	検出グリップ	遺跡・断面			備考
			直径 (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	
1区(南側第1区)	P501	C3-a	39	36	24	円形 粘土残存
	P502	C3-a	51	44	12	円形
	P504	C3-a	54	61	78	楕円形
	P509	C4-d	48	36	24	楕円形
	P510	C3-c	38	28	30	楕円形
	P511	C4-d	28	28	48	円形
	P512	C4-b	48	48	17	円形 遺物検出 粘土残存
	P513	C4-d	25	24	47	円形
	P514	C4-d	114	44	6	楕円形
	P516	C3-c	69	40	18	楕円形 粘土残存
	P601	C3-b	21	20	16	楕円形
	P602	C3-a	40	32	25	円形 粘土残存
	P603	C3-a	44	36	27	楕円形 粘土残存
	P604	C3-a	36	32	30	円形 六翼、粘土残存
	P605	C3-a	28	24	34	円形
	P606	C3-a	36	32	39	楕円形
	P607	C4-b	24	22	24	円形
	P608	C4-b	24	14	14	楕円形
	P609	C4-b	49	36	33	円形
P610	C3-c	40	32	26	楕円形	
P611	C3-c	36	28	33	楕円形 粘土残存	
P613	C4-d	28	20	26	楕円形	
P614	C4-d	32	28	29	楕円形	
1区(南側第1区)	P661	C3-d	96	80	78	楕円形
	P663	C3-b	44	44	41	円形
	P664	C3-b	32	32	32	円形 粘土残存
	P665	C3-a	40	45	51	楕円形
	P667	D3-b	64	68	37	円形
	P669	C3-c	36	28	28	楕円形 粘土残存
	P661	C3-c	28	24	13	円形 粘土残存
	P662	C3-c	64	54	54	楕円形
	P663	C3-c	44	49	56	円形 木炭残存 P664に含まれる
	P664	C3-c	40	24	33	楕円形 P663に含まれる
	P666	C3-c	22	22	28	円形 粘土残存
	P666	C3-c	22	22	50	円形 木炭残存
	P667-a	C3-c	48	32	38	楕円形
	P667-b	C3-c	42	36	10	楕円形

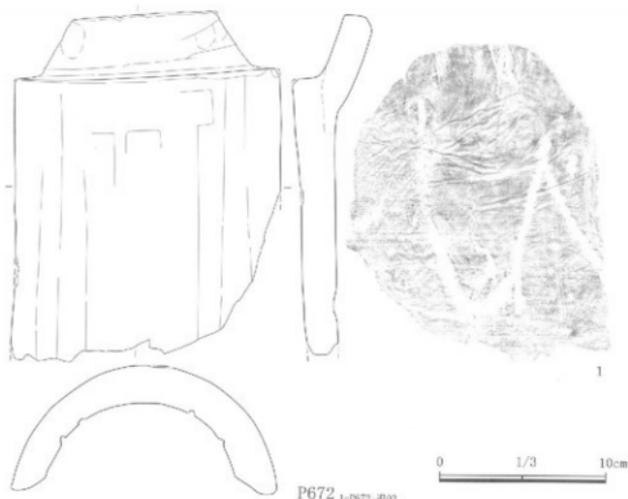
地区	遺跡名	検出グリップ	埋没・形跡			備考
			径長 (cm)	円径 (cm)	深さ (cm)	
1区(南側第1区)	P668	C3-a	52	41	62	楕円形
	P669	D3-a	28	28	31	円形
	P670	D3-a	21	16	63	楕円形
	P671	D3-b	36	28	38	楕円形
	P672	D3-a	40	36	29	円形 粘土残存
	P673	D3-a	56	48	28	楕円形 粘土残存
	P674	D3-d	32	28	16	円形
	P675	D3-d	28	24	28	円形
	P676	D3-d	32	40	18	楕円形
	P679	E3-a	44	44	16	円形
	P680	E3-a	80	72	14	楕円形
	P682-a	E3-a	32	44	38	楕円形 P682-bを切る
	P682-b	E3-a	36	28	38	楕円形 P682-aに切られる
	P685	D3-c	28	24	58	円形
	P686-b	D3-c	36	24	32	楕円形 P686-aに切られる
	P687	E3-a	32	48	48	円形
	P688	D3-c	39	24	41	円形
	P696	D3-c	24	12	24	楕円形
	P691	D3-c	28	16	25	楕円形
P692	D3-c	32	28	46	円形	
P693	D3-c	60	44	17	楕円形	
P694	D3-c	32	29	36	楕円形	
P695	D3-c	48	40	29	楕円形 P695に切られる	
P697	D3-c	48	48	32	円形 粘土残存 P695に含まれる	
P709	D3-a	32	24	50	楕円形	
P701-a	D3-c	42	36	63	円形 P701-bを切る	
P701-b	D3-c	30	24	62	円形 P701-aに切られる	
P717	E3-c	36	32	37	円形	
P720	E3-c	28	28	26	円形	
P722	E3-c	62	62	30	楕円形 粘土残存	
P726	E3-d	52	54	43	楕円形	
P727	E3-d	36	40	40	楕円形	
P728	E7-b	36	36	25	円形	
P729	E7-b	46	42	71	円形 木炭残存	
P739	E3-a	36	34	34	円形	
P739	E3-a	48	30	19	楕円形	
P746	E3-a	64	52	33	楕円形	

第21表 1区ピット計測一覧表(2)

期区	遺構名	検出グリッド	規模・形態				備考	期区	遺構名	検出グリッド	規模・形態				備考
			長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	平面形					長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	平面形	
1区東側 第1層	P741	E9-b	49	32	64	楕円形		1区東側 第1層	P776	E9-a + c	40	36	28	円形	
	P742	E8-a	32	28	31	円形			P777	E9-a	32	28	28	円形	
	P743	E8-c	32	32	49	円形			P780	E8-d	22	28	55	楕円形	
	P744	E8-c	32	32	30	円形			P781	E8-d	28	20	32	楕円形	
	P745	E8-c	28	28	29	円形			P782	E8-b	32	24	46	楕円形	
	P746	E7-b	24	46	41	楕円形			P783	E8-d	40	32	42	楕円形	
	P747	E7-b	64	60	53	円形	SO22を切る		P784	E9-d	32	24	43	楕円形	
	P748	E7-b	32	40	45	楕円形			P785	E8-d	20	16	33	円形	
	P749	E8-c	11	49	9	楕円形	遺石残存		P786	E8-d	24	20	36	円形	
	P750	E8-a	32	49	7	楕円形	遺石残存		P788	E8-d	24	24	26	円形	木炭残存
	P751	E9-a	28	20	34	楕円形			P789	E8-d	40	40	52	円形	
	P752	E9-a	48	44	41	円形	木炭残存		P790	E8-d	26	36	20	楕円形	
	P754-a	E5-d	26	28	9	楕円形			P792	E8-a	56	52	27	円形	
	P754-b	E5-d	48	26	20	楕円形			P793	E8-a	44	48	70	円形	
	P754-c	E5-d	30	18	11	楕円形			P794	E8-b	35	28	56	楕円形	
P756-a	E6-a	66	64	15	円形		P795	E8-b	32	24	45	楕円形	木炭残存		
P756-b	E6-a	28	28	10	円形		P796	E9-c	98	50	37	楕円形			
P757	E8-b	40	32	32	楕円形		P797	E8-b	32	24	23	楕円形			
P758	E7-b	80	48	75	楕円形	木炭残存	P798	E8-b	44	40	56	円形			
P762	D7-c	60	48	55	楕円形										



第36図 1区ピット出土遺物(1)



第37図 1区ピット出土遺物(2)

第22表 1区ピット出土遺物観察表

番号	住記	層位	種類	口径	直径	高さ	重量	器形の特徴	装束の特徴	組成	色調	粘土	保存度	備考
P512 1	1F- 06512 No.1	土師質土 器	内河竈	—	—	96.4	160.5	11層に向かって90度 角で立ち上がる。窪 みの縁で、器中に 数1層部分がある。	陶器台使用。9。	良好	内面: 5/4/ 緑黄色外 面: 黒色	白色粘土多 く含む。緑 黄色の黒色	口縁部 破片	
P512 2	1B- 96512	陶器	磁鉢	—	—	93.1	119.6	12区65度角で直線的 に開く。	陶器台使用。体部平 面回転へつ削り調 整。16枚1單位の部 品。	良好	内外面 7.5/8/11区 灰色の軟性	白色土砂や や多い。器 内0.5/8/1区 白色	体部破 片	内面半月型感。 底戸・裏面
P513 1	1F- 51313 一法	陶器	濃鉢	—	—	95.0	75.8	12区45度角で直線的 に立ち上がる。	陶器台使用。15枚以 上1單位の部品。	良好	内外面 2.5/3/2/2 濃褐色の軟 性	白色粘土含 む。器内 5/8/1区白 色	体部破 片	底戸・内面
P669 1	1E- 9669一 法	かわらけ	C型小 皿	φ7.15	6.8	1.7	47.1	やや強んだ直線から 60度角で直線的に立 ち上がる。	ラクロ製。左回転 糸切り施し後、調整 製。	良好	内外面 7.0/97/42 赤い灰褐色	白色粘土・ 雲母質子含 む。器内 10/9/1区白 色	全体の 3/4	
P672 1	1EC- 797280 1	瓦	文瓦	幅 (21.2)	厚16.9	厚7.5	1270.6	半圆形。才候等で種 別部分に4mmの瓦縁 が付く。	種々技法。内面に 赤目と抜き取り溝 (赤目線) 状。	良好	金灰5/6/灰 色	やや強い。	半分	瓦縁式
P692 1	1E- P692	陶器	磁鉢	—	—	92.0	17.3	12区55度角で開く。 口唇に指痕による片 口あり。	陶器台使用。	良好	内外面 7.5/8/11区 灰色の軟性	褐色雲母 質粘土含む。 器内 7.5/8/11区 灰白色	1.5部 破片	
P706 1	1E- 7796	瓦質土器	磁鉢	—	—	94.8	38.7	90度角で反り起るよ うに開く。	陶器台使用。7枚以 上1單位の部品。	良好	内外面2/0 黒色	白色粘土含 むや多い。 黄鉄質。	口縁部 破片	

第2節 1区 [第2面]

(1) 堀

3号堀 (第38・39・41・42図 第5・6・26図版 第23表)

①位置・重複：調査区北壁に寄ったB4-d、C4-b、B5 c、(C5-a・b、C6-a・b・c・d、C7-a・c・d、D7-a・b、D8-c、D8-a・b・c・d、D9-a・c・d、D9-b、E10-b、E10-a)に位置する。4号堀と重複するが、Cセクションに示されるように層位には明確な切り合い関係は認められず、4層の層位がなだらかに3層へ向かって落ちていく形状から、同一時期の遺構と判断される。堀は東西に走行するのが判るが、調査区内において、底部及び北側の立ち上がりを検出することができなかった。また遺構上面を整地層が覆っていたところが特筆されることである。

②形状・規模・覆土：断面はステップをもつ。断面形は現形状から築築研であると推定される。最大幅は現状で5.76 m、確認面からの深さは現状で1.69 m、標高23.09 mである。

覆土は地点によって若干の違いはあるが、C・Fセクションのように、人為堆積の様相が強い形状を示す地点がある。

③走行方向：N-62° —E

④出土遺物：纏まった資料の出土がある。以下に図および観察表を掲載した。

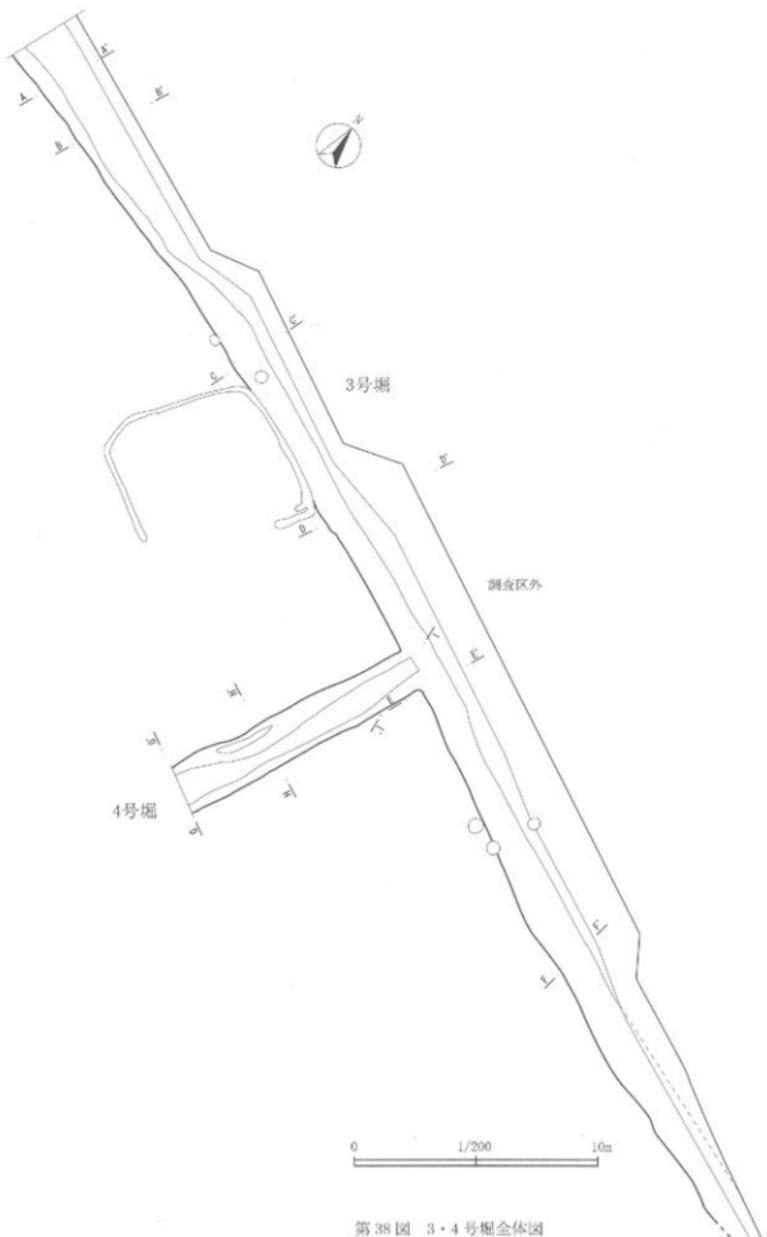
4号堀 (第38・40・43図 第6・27図版 第24・25表)

①位置・重複：1区の西に寄ったC7-c、D6-d、D7-a・cに位置し、3号堀から直行し分岐する形状で、調査区外である南端へ向かい3号堀に合流する。調査区南端の壁で、II・III層の2層からなる整地層が遺構上面を覆っていたことが確認できた。

②形状・規模・覆土：幅1.76 m～2.16 m、深さ0.29～0.50 mを測る。底部の標高は南端で24.33 m、北端で24.44 mを測り、南に向かって緩やかに傾斜している。覆土は自然堆積の様相を呈しており、南壁であるGセクションでは一度4～5層が埋まったところを再度掘り込んだ形跡がみられる。

③走行方向：N-31° —E

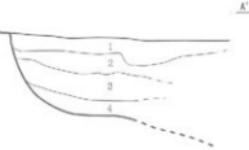
④出土遺物：纏まった資料の出土がある。以下に図および観察表を掲載した。



第38图 3・4号堀全体图

Aセクション

L=25.100m

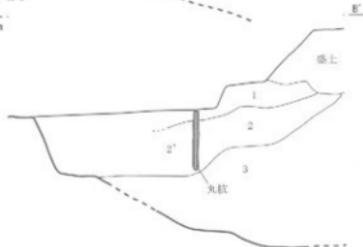


Aセクション

- 1層 7.0181.7/1 黒色土・黒色土・赤褐色土・褐色土ブロック (φ2~10cm)・砂子少 粘性・しまり弱
- 2層 7.0182.1/1 暗褐色土・黒色土・赤褐色土・褐色土ブロック (φ2~10cm)・砂子多
- 3層 7.0182.1/1 黒色土・黒色土・赤褐色土・褐色土ブロック (φ2~10cm)・砂子少 粘性土・オリブ状土質土ブロック (φ2~10cm) 多
- 4層 7.0182.1/1 褐色土・褐色土・オリブ状土質土ブロック (φ2~10cm) 少

Bセクション

L=27.000m

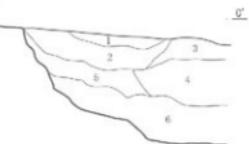


Bセクション

- 1層 7.0184.1/1 灰土 暗褐色砂質土
- 2層 7.0182.1/1 暗褐色土・褐色土・暗褐色砂質土
- 3層 7.0182.1/1 褐色土・暗褐色土・暗褐色砂質土

Cセクション

L=25.100m



Cセクション

- 1層 7.0182.1/1 暗褐色砂質土 粘性・しまり弱 褐色土・褐色土ブロック (φ2~10cm) 少
- 2層 7.0181.7/1 オリブ状土 粘性 しまり中 褐色土ブロック (φ2~10cm) 多
- 3層 7.0182.1/1 暗褐色砂質土 粘性 しまり中 褐色土・オリブ状土質土・褐色土ブロック (φ2~10cm)
- 4層 7.0182.1/1 黒色土 粘性 しまり中 褐色土 (φ2~10cm) 少
- 5層 7.0182.1/1 黒色土 粘性 しまり中 褐色土 (φ2~10cm) 少
- 6層 7.0181.7/1 黒色土 粘性 しまり中 褐色土 (φ2~10cm) 少

Dセクション

L=25.300m

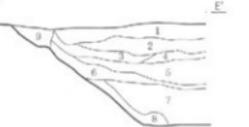


Dセクション

- 1層 7.0182.1/1 褐色土 粘性 しまり弱
- 2層 7.0182.1/1 褐色土 褐色土ブロック (φ2~5cm)・砂子多 粘性・しまり中
- 3層 7.0181.7/1 暗褐色土 褐色土ブロック (φ2~10cm)・砂子多 粘性・しまり中
- 4層 7.0181.7/1 黒色土・オリブ状土質土ブロック (φ2~10cm) 少 粘性 しまり中
- 5層 7.0181.7/1 黒色土・オリブ状土質土ブロック (φ2~10cm) 多 粘性 しまり中
- 6層 7.0182.1/1 黒色土・オリブ状土質土ブロック (φ2~10cm) 少 粘性 しまり中
- 7層 7.0181.7/1 黒色土・オリブ状土質土ブロック (φ2~10cm) 少 粘性 しまり中

Eセクション

L=24.900m

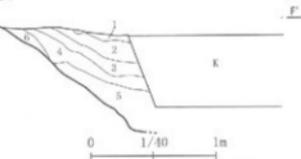


Eセクション

- 1層 7.0182.1/1 暗褐色土 褐色土ブロック (φ2~10cm)・砂子少 粘性 しまり弱
- 2層 7.0182.1/1 暗褐色土 褐色土ブロック (φ2~10cm)・砂子中 粘性 しまり弱
- 3層 7.0182.1/1 褐色土 粘性・しまり弱
- 4層 7.0182.1/1 暗褐色土 褐色土ブロック (φ2~10cm)・砂子多 粘性 しまり弱
- 5層 7.0182.1/1 暗褐色土 粘性 しまり弱
- 6層 7.0181.7/1 黒色土・オリブ状土質土ブロック (φ2~10cm)・砂子多 粘性 しまり弱
- 7層 7.0182.1/1 黒色土・オリブ状土質土ブロック (φ2~10cm)・砂子多 粘性 しまり弱
- 8層 7.0182.1/1 黒色土・オリブ状土質土ブロック (φ2~10cm)・砂子多 粘性 しまり弱
- 9層 7.0182.1/1 黒色土 褐色土ブロック (φ2~10cm)・砂子少 粘性 (φ2cm) 少 粘性・しまり弱

Fセクション

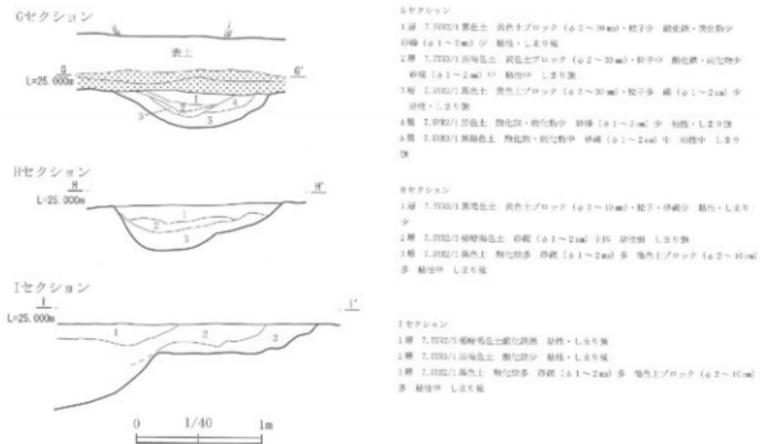
L=25.000m



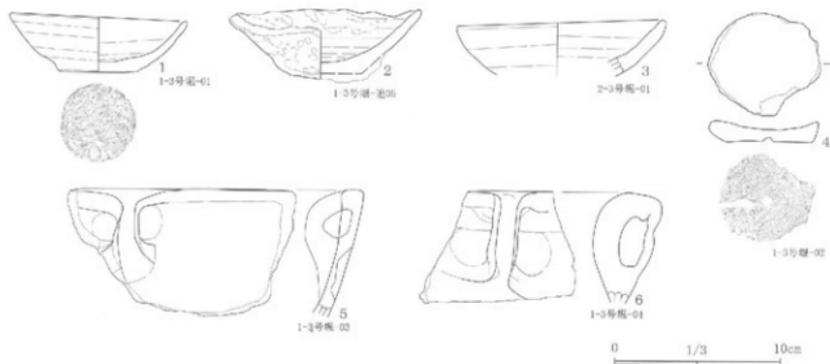
Fセクション

- 1層 7.0181.7/1 黒色土 粘性・砂からなる厚さ30cmのブロックが層状に入る 褐色土ブロック (φ2cm) 少 粘性・しまり弱
- 2層 7.0182.1/1 黒色土 褐色土・褐色土 (φ2~10cm) 少 粘性 しまり弱
- 3層 7.0182.1/1 黒色土 褐色土・褐色土 (φ2~10cm) 多 粘性・しまり弱
- 4層 7.0182.1/1 オリブ 粘性 しまり弱
- 5層 7.0182.1/1 オリブ 粘性 しまり弱
- 6層 7.0182.1/1 オリブ 粘性 しまり弱
- 7層 7.0182.1/1 オリブ 粘性 しまり弱
- 8層 7.0182.1/1 オリブ 粘性 しまり弱
- 9層 7.0182.1/1 オリブ 粘性 しまり弱

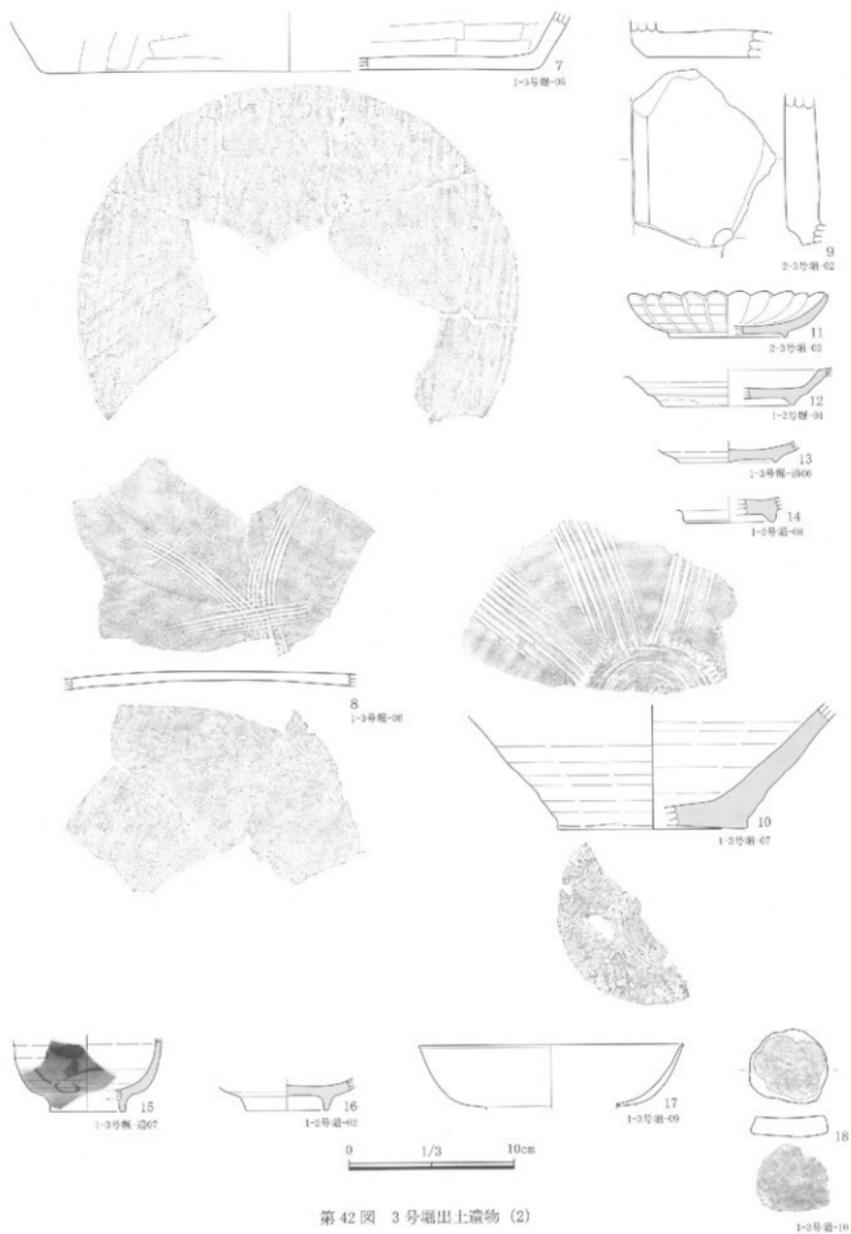
第39図 3号掘セクション



第40図 4号掘セクション



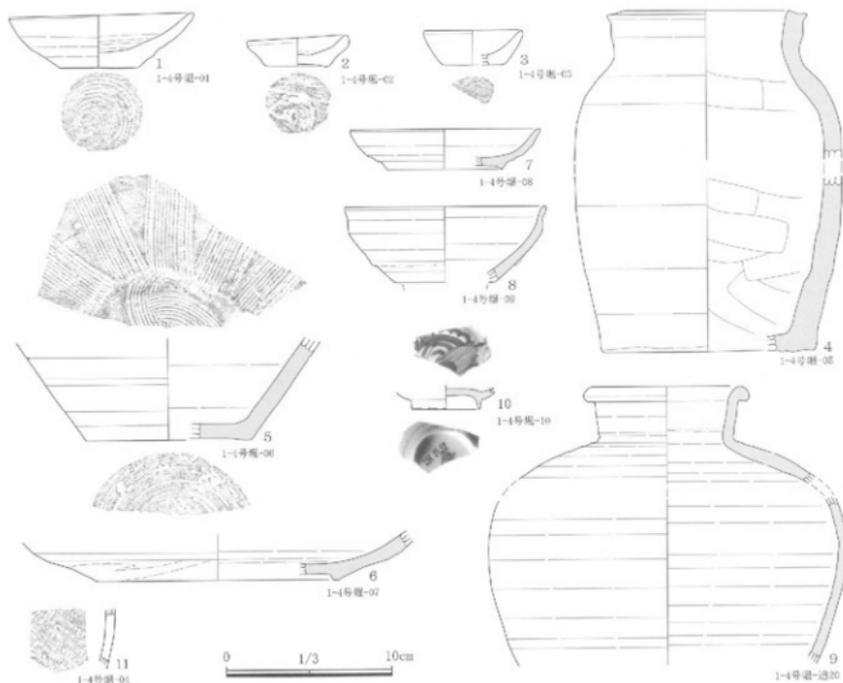
第41図 3号掘出土遺物 (I)



第42图 3号福出土遺物(2)

第23表 3号編出土遺物観察表

番号	発見地	種類	器名	口径	高さ	口径/高さ	重量	器部の特徴	器形の特色	状況	色調	出土	保存状態	備考
1	15-37 A1567	かわらけ	A型平皿	10.6	4.8	3.4	113.1	突出した縁部から鏡面に立ち上がり、口縁でやや厚い。全体に凹凸あり。	コクロ型形。定形輪切りにし、縁部のみ、方向手持ちへク切り。	良好	全面黄褐色	特に裏面は、壁を多く含む。裏面が平直。	完存	
2	15-37 B1568	かわらけ	B型平皿	(12.0)	3.1	3.8	133.4	平らな縁部から40度角で傾斜的に立ち上がる。	コクロ型形。同型不詳。	やや不良	内外面 1)100%灰青色 2)内面 3)内面 4)内面	白灰土質で若干平直。	ほぼ完存	内外面に線付書
3	15-37 C1569	かわらけ	A型平皿	12.3	—	(3.1)	113.3	縁部は下平で45度角で縁部に傾き、上縁は丸みを持って立ち上がる。	コクロ型形。	良好	内外面 1)100%褐色 2)内面 3)内面 4)内面	若干平直。	ほぼ完存	
4	15-38 第一層	かわらけ	皿	10.4	4.8	3.3	46.7	突出した縁部、底面周りに凹凸あり。	コクロ型形。底面に凹凸あり。厚い縁部あり。	やや良	全面黄褐色	長石大粒多量。裏面が若干平直。	底面のみ	加工可能
6	15-32 B1561	土師質土器	内耳瓶	—	—	(7.8)	107.6	胴部は70度の角度のまま口縁部にいたる。口縁は平直である。小さな凹凸あり。	凹部は使用して整形。耳の取り付く箇所に凹部あり。	良好	内外面 1)50%褐色 2)内面 3)内面	唇に紅白点を多く含む。唇部は若干平直。	口縁部1/8	外面全体に線付書
6	15-33 A1570	土師質土器	内耳瓶	—	—	(6.7)	93.3	胴部は75度の角度のまま口縁部にいたる。口縁は平直である。小さな凹凸あり。	凹部は使用して整形。耳の取り付く箇所に凹部あり。	良好	全面黄褐色	唇に長石粒を多く含む。	口縁部	外面全体に線付書
7	15-32 B1562	瓦質土器	短瓶	—	30.0	(3.5)	225.7	平直な底面より60度の角度で立ち上がる。	口縁部は使用して整形。耳の取り付く箇所に凹部あり。	良好	全面黄褐色	長石大粒多量。唇部は若干平直。	底面1/2	
7	15-32 B1563	瓦質土器	短瓶	—	—	(0.75)	283.5	やや上げ底あり。	縁上縁部は平直の型形。内面に5本1半位の筋目があり中央で交差する。	優良	内外面 1)50%褐色 2)内面	長石大粒多量。唇部は若干平直。	底面1/4	
9	15-32 C1564	瓦質土器	短瓶	—	—	(10.9)	218.8	底面の縁部の部分のみ。	平直の底面より60度の角度で立ち上がる。	良好	内外面 1)50%褐色 2)内面	唇部は若干平直。	底面1/4	
10	15-32 B1565	陶質	短瓶	(11.3)	(7.4)	493.9	—	おずらに突出する底面から口縁部にいたる。口縁は平直である。小さな凹凸あり。	凹部は使用して整形。耳の取り付く箇所に凹部あり。	優良	内外面 1)50%褐色 2)内面	唇部は若干平直。	底面1/2	二次裝飾 線付書・黄褐色大文字
11	15-32 C1566	陶質	志野瓶	(12.0)	(7.1)	2.78	29.4	低い高台から25度角で立ち上がり、口縁部は平直である。	コクロ型形。厚い縁部あり。口縁部は平直である。	優良	内外面 1)50%褐色 2)内面	唇部は若干平直。	全体の6/7	断面全体に輪付書
12	15-32 B1567	陶質	志野瓶	(7.9)	(2.2)	26.7	—	低い高台から縁部まで傾斜的に立ち上がり、口縁部は平直である。	コクロ型形。厚い縁部あり。口縁部は平直である。	優良	内外面 1)50%褐色 2)内面	唇部は若干平直。	底面1/4	黄褐色大文字4行。16段の文字あり。
13	15-38	陶質	丸皿	—	3.9	(1.2)	84.7	平直の高台から縁部まで傾斜的に立ち上がり、口縁部は平直である。	コクロ型形。厚い縁部あり。口縁部は平直である。	優良	内外面 1)50%褐色 2)内面	唇部は若干平直。	底面のみ	二次裝飾 線付書・黄褐色大文字4行。16段の文字あり。
14	15-37 B1568	陶質	反り皿	—	(5.2)	(1.4)	22.1	高台は内径より厚みをもち、口縁部は平直である。	コクロ型形。厚い縁部あり。口縁部は平直である。	優良	内外面 1)50%褐色 2)内面	唇部は若干平直。	高台	二次裝飾 線付書
15	15-33	陶質	志野瓶	—	(1.5)	(4.4)	26.9	高台の高台から平直に立ち上がる。	コクロ型形。厚い縁部あり。口縁部は平直である。	優良	内外面 1)50%褐色 2)内面	唇部は若干平直。	唇部・高台部	外面に黄褐色大文字4行。16段の文字あり。
16	15-42 B1569	陶質	茶碗	—	(4.9)	(1.9)	36.2	内径より高台の縁部から、縁部まで傾斜的に立ち上がり、口縁部は平直である。	コクロ型形。厚い縁部あり。口縁部は平直である。	優良	内外面 1)50%褐色 2)内面	唇部は若干平直。	底面1/2	外面に黄褐色大文字4行。16段の文字あり。
17	15-37 B1570	人製品	法鏡	(16.0)	—	(3.73)	—	丸の縁部から縁部まで傾斜的に立ち上がり、口縁部は平直である。	コクロ型形。厚い縁部あり。口縁部は平直である。	—	内外面 1)50%褐色 2)内面	唇部は若干平直。	口縁部1/8	
18	15-37 B1571	瓦	平瓦	縦4.5	横4.9	厚1.15	28.5	厚さ1.1cmと薄く、ほとんど平ら。	コクロ型形。厚い縁部あり。口縁部は平直である。	良好	内外面 1)50%褐色 2)内面	唇部は若干平直。	破片	加工可能な状態あり。



第43図 4号発出土遺物

第24表 4号発出土遺物観察表(1)

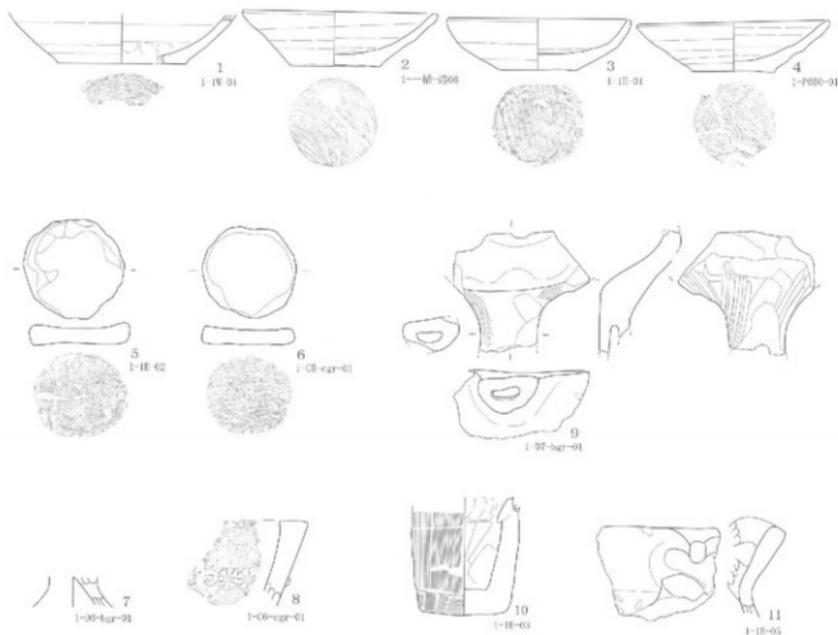
番号	形状	種類	製法	口径	高さ	深さ	重量	断面の寸法	断面の特徴	構成	胎土	胎土	保存度	備考
1	1E-4 ^a 1E13a3	かわらけ	B型中皿	11.0	4.7	3.1	181.6	底面は約20度で立ち上がり、側面は20度の角度で直線的に立ち上がる。	ロクロ製形、右側縁を切り離し後、体下部解離型。内面に指張ツデがみられる。	良好	全面 7.0/100/4に ぶい褐色	黒赤・石黄 粒、雲母微 粒を若干含む。	ほぼ完 存	
2	1E-4 ^a 1E13-1 一破	かわらけ	A型豆皿	5.9	3.8	1.7	43.7	皿下部で45度で立ち上がり、上半で丸くなる。	ロクロ製形、右側縁を切り離し後、体下部まで指張ツデ。	良好	全面 5.0/100/4 褐色	黒赤大粒や 中赤い、雲 母を若干含む。	残存	
3	1E-4 ^a 1E13-1 一破	かわらけ	C型豆皿	(5.8)	3.6	2.6	10.8	平らな底面から60度の角度で一気立ち上がる。	ロクロ水挽き成形、断面不明。	良好	全面 3.0/100/4 ぶい褐色	含有物なく、滑沢。	全体の 1/4	
4	1E-4 ^a 1E13-1 一破	漆黒陶器	壺	12.0	(12.7)	(20.2)	548.4	底面は口縁部の1/3に窪みあり、段々4か所に突起、大きな突起が1つある。	回転台使用、粘土を巻き上げ、金洋にツデ調整。	良好	内外面 黒色の 7.0/100/4 にぶい褐色 (注: 5.0/100)	黒赤が若干 含む。器内 5.0/100/4	全体の 1/2	背骨部は凹型18世紀後半以降
5	1E-5 ^a 1E14 1E14	陶器	磁鉢	—	(9.9)	(5.65)	228.3	平らな底面から、ほぼ直線的に立ち上がる。	回転台使用、回転台を切り離し後、底面へ体半は凹型へツデ削り、内面に13か所、底面に10か所の指張ツデ。	良好	内外面とも 7.0/100/4 の褐色	褐色微粒子 若干含む。 黒赤、器内 5.0/100/4 褐色	F40部 1/2	瀬戸・美濃系17世紀
6	1E-4 ^a 1E13-1 一破	陶器	大鉢	—	(16.8)	(2.9)	53.4	底面は縁部に削り、30度前後の角度で立ち上がり、中央付近から縁近くへ丸みを持つ。	ロクロ製形、削り立てのみ成形。	やや不良	内外面とも 7.0/100/4 の褐色	黒色微粒子 若干含む。 黒赤、器内 5.0/100/4 褐色	底面削 片	瀬戸・美濃系17世紀初期
7	1E-4 ^a 1E13-1 一破	陶器	志野式皿	(11.4)	(6.9)	(2.4)	26.3	唇台との間に平面を設け、縁部分に隅がある。直線。	ロクロ製形、削り立てのみ成形。	良好	内外面とも 10.0/100/4 の褐色 黒、黄入り	黒色微粒子 若干含む。 黒赤、器内 5.0/100/4 褐色	全体の 1/4	瀬戸・美濃系17世紀初期

第25表 4号堀出土遺物観察表(2)

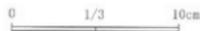
番号	形状	種類	時期	1区	直径	高さ	重量	特徴の描写	裝飾の形状	施文	色調	断面	調査度	備考
8	1E-4 ⁺ 52 M07- 柄	陶器	天日笠 前期	(11.8)	—	(4.3)	51.1	縁や口の幅(口までは40度ほどの角度で直線的に立ち上がり、口縁は直線的に、口管で外反する。深い器形。	口に器筋、たぶぶりとした縁は、外面下部のみ残存。	縦長	内外面とも5YR3/2暗赤褐色の器胎	断面縁部も褐色	1/3	内面一部に灰泥の青塗。 瀬戸・美濃産17世紀
9	1E-4 ⁺ 74 ⁺ 柄	陶器	天日笠 前期	(9.9)	—	<(16.6)	152.6	縁部に深い器筋から器胎が垂直に立ち上がる。口管は直線的に外反する。器筋は器胎に接し、耳部は確認できない。	コックロ器形。	縦長	外面2.5YR6/3にぶい黄色の灰泥が施に滑る。	口縁部断面も褐色	1/3	断面縁部も褐色 断面縁部も褐色
10	1E-4 ⁺ 74 ⁺ 柄	陶器	青瓦瓶	—	(4.0)	(1.3)	12.1	器胎は深く薄く、器筋は平坦である。体下部に丸みのみみられる。	口コックロ器形、割り出し輪向内外全面隆起。高台下部のみ面残存する。	縦長	内外面とも5YR7/1白色の器胎。	断面縁部も褐色	1/2	内面(明赤褐色)の輪向。見込み空尽くし文。底面外縁に角趾(鎌倉法)中置直線縁系
11	1E-7 ⁺ 74 ⁺ 柄	弥生土器	甕	—	—	(3.0)	13.4	胴部中位。	全面縦線文。	縦長	内面7.5YR5/1褐色。外面黄褐色のたぬ器胎。	断面縁部も褐色	1/2	断面縁部も褐色 断面縁部も褐色

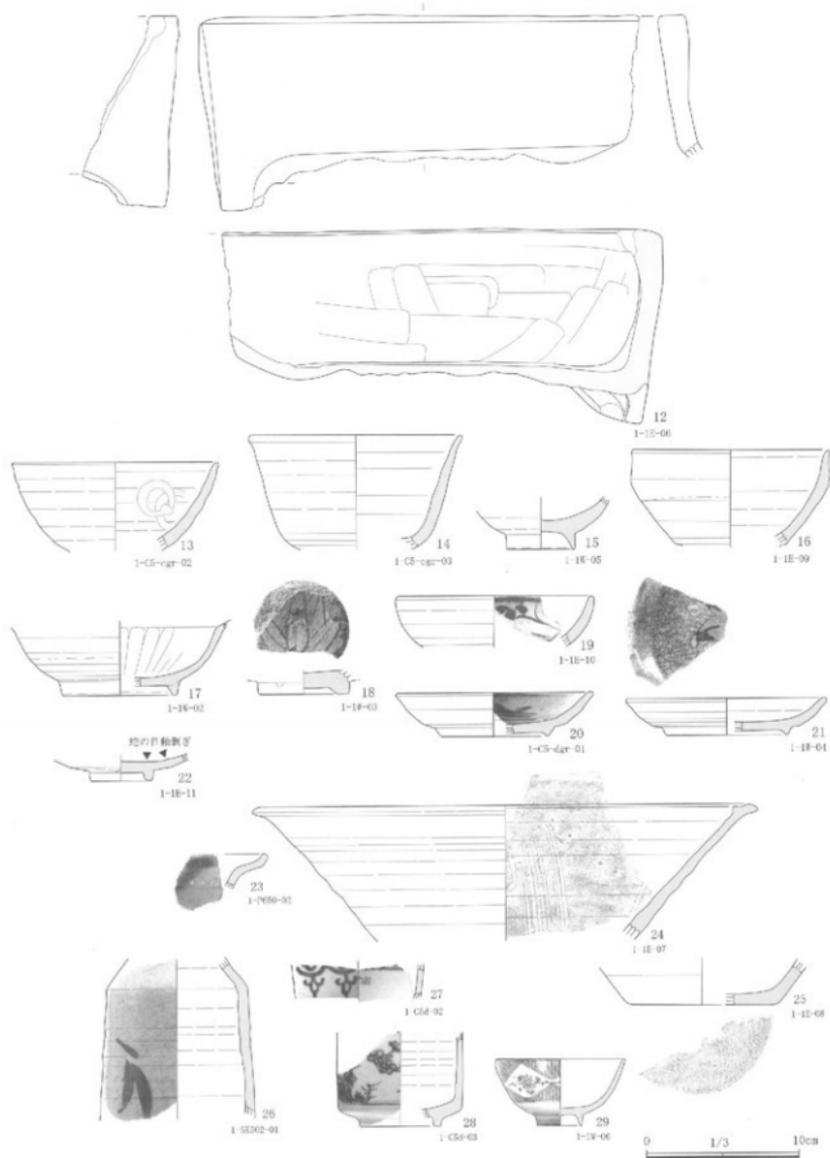
(2) 1区遺構外出土遺物(第44～46図 第27・28図版 第26～28表)

本地区において検出された遺物のうち、遺構に伴わなかった遺物について以下に掲載する。

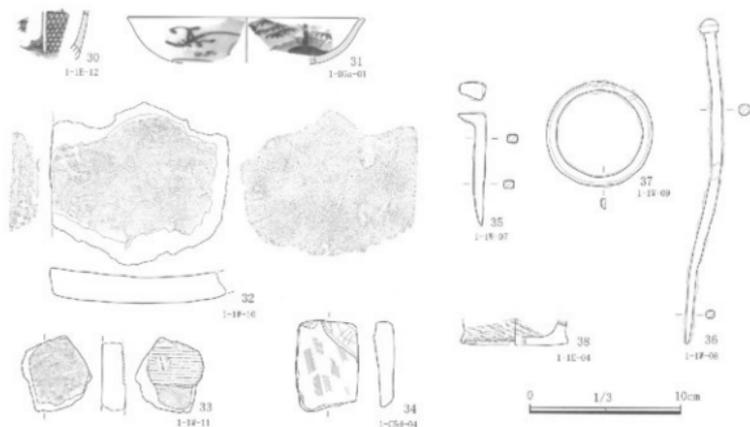


第44図 1区遺構外出土遺物(1)





第45図 1区遺構外出土遺物(2)



第46図 1区遺構外出土遺物(3)

第26表 1区遺構外出土遺物観察表(1)

番号	品名	種類	形状	口径	底径	高さ	重量	底面の特徴	底面の物質	構成	色調	出土	所在	備考
1	IF005	土製瓦土器	大坪	口径	(7.8)	(2.9)	27.3	突出した底面から浅く突起し床下層から輻状に立ち上がる。内面底面に指環痕が残り、滑くなる。	ロクロ製形。切り離し後、手持ちへつ削り。床下下層無調整。	やや不良	内外面 5YR5/2赤褐色	長石・雲母 若干含む。	底面 1/3	
2	IF-564	かわらけ	日置中皿	11.4	5.4	3.4	126.1	平らな底面から40度角で放射的に立ち上がる。	ロクロ製形。非土器削り後、無調整。	良好	全体 7.5YR7/2明灰褐色で、一部茶変	雲母鉄粒子 若干含む。	劣存	
3	IE	かわらけ	A型中皿	10.8	4.7	3.1	97.5	わずかに突出する底面から全体として45度に向みを持った立ち上がる。	ロクロ製形。非切り離し後、一方の手持ちへつ削り。内底面にロクロ目調整痕。	良好	全面5Y6/5褐色	長石・雲母 若干含む。	全体の 1/2	
4	IF- P0309 4	かわらけ	日置中皿	11.6	5.0	2.9	142.5	突出した底面から20度角で放射的に立ち上がる。	ロクロ製形。非土器削り後、無調整。	優良	全面 7.5YR5/0褐色	雲母鉄粒子 若干含む。	ほぼ劣 存	
5	IE	かわらけ	中皿	縦6.9	横7.05	厚さ 1.2	35.9	平らな底面。底面周辺打ち欠き。	ロクロ製形。切り離し後、一方の手持ちへつ削り。内底面にヘラツクリ。	やや不良	全面5Y5/2灰褐色	長石・雲母 鉄粒子若干含む。	底面の み	加工目撃
6	IF-C5- C	かわらけ	中皿	縦5.4	横5.6	厚さ 1.1	26.3	中央でやや窪んだ底面。高縁周辺打ち欠き。	ロクロ製形。非切り離し後、無調整。蛇咬痕あり。	優良	内外面 10YR5/2灰白色	長石・黒色 鉄粒子若干含む。	底面の み	加工目撃
7	IF-06- b-15	かわらけ	小皿	—	—	(1.8)	18.8	縁合部へ脚部の資料。脚はフツボ状に開くもの。	ロクロ製形。底面の調整できず。	良好	全面 7.5YR5/8褐色	長石大粒多 く。吸耳。	脚部 1/2	
8	IE-C6- c-15	土製瓦土器	箱火鉢	—	—	(5.2)	34.1	70度で、放射的に立ち上がり、口唇部分は平直と成る。	直削り。口唇から3.8cmに直径3.2cmの8か所の梅花文と母杖文の組み合わせ。	やや不良	内外面 7.5YR5/4褐色	長石粒多 く。雲母 若干含む。	口唇部 破片	
9	IF-07- b-15	土製瓦土器	十筋	縦 (7.4)	横 (8.2)	(4.3)	106.1	底部に丸みあるのびか6cm径の高さで、3.6cm径の手持ち付。	非土器製形。内面に指環痕が連続的に残る。	良好	内外面とも 10YR2/1赤褐色	長石・石 炭・雲母粒 子を含む。 陶質 7.5YR5/0明 褐色	非手付 近縁片	
10	IE-08	土製瓦土器	徳輪蓋	—	5.2	(7.0)	154.9	底はわずかに突起。円筒状を呈す。	手製お籠形。外口縁部調整ナズ。	良好	全面5Y6/5褐色	砂質・長石 粒多く含む。	全体の 2/3	

第27表 1区遺構外山土遺物観察表(2)

番号	位置	種別	形状	口径	口径	高さ	重量	断面の形状	断面の特殊	断面の色	断面の注	存在層	備考	
11	1B-15	瓦質土器	内耳筒	—	(5.7)	71.7		直立する胴部から約 4cmほど直線的に外張 する。内口縁部に把 手がつく。	頸部平直。とこど ころに指痕が認め る。	黒	内外面 5.94/10焼 灰色	黒褐色。口 縁部は赤 褐色で、口 縁部は黒 褐色。	1層部 破片	
12	1E	瓦質土器	帯火鉢	—	(11.6)	154.1		底平の付く、深さ 7.5cmほどの大鉢の 一断面。表面には磨 光なし。	胴縁方から、胴縁と 底面が合わさって いるようだが、足は 明瞭に付け足してい る。	黒	内外面5.94/2 オリーブ 色	赤褐色。黒 褐色。口 縁部は赤 褐色。底 面は黒色。	1層部 のみ	
13	1B-C5-C	陶器	志野鉄 絵丸瓶	(12.3)	—	(3.3)	61.2	口筒でわずかに外張 する井戸状形状	口口口形状。	黒	内外面 2.318/3灰 白色の長石 斑。新肉 たっぶり。	褐色。赤 褐色。口 縁部は赤 褐色。新肉 たっぶり。	1層部 1/4	内面に施す鉄 絵(絵は5.94/3)の 赤褐色の 長石斑(17世紀)
14	1B-C5-C	陶器	磁瓦	(12.4)	—	(6.3)	99.1	口筒でわずかに外張 する井戸状形状	口口口形状。	黒	内外面 10.97/7新肉 状の灰白	黒色。赤 褐色。口 縁部は赤 褐色。	1層部 1/1	江戸・美濃院
15	1F	磁器	文鉢	—	4.0	(3.15)	81.7	高さのある成筒の 底面に魚鱗状の文 様が施す。	口口口形状。舟みの ある作り出し高さ。 底面直線。底付鉄 文。裏面に魚鱗状の 文が施す。	黒	内外面 2.317/2灰 白色の長 石斑	赤褐色。口 縁部は赤 褐色。	1層部	盤付焼物と取り 合わせ(17世紀)
16	1E	陶器	瓦質土 器	(11.8)	—	(3.8)	34.6	直立に近い口縁部 から1.8cm下に向か い窪みがある。	口口口形状。底平で は丁寧な作り出し。 高さは約10cm。	黒	内面・外上 面5.94/2 赤褐色の 新肉	赤褐色。口 縁部は赤 褐色。底 面は黒色。	1層部 破片	江戸・美濃院17 世紀前半
17	1B+ 1B.002	陶器	志野鉄 絵鉢	(6.7)	—	(4.4)	21.7	直立からすこ と傾きに広がる。口 縁部は直線的に外張 する。内面に魚鱗状 の文が施す。	口口口形状。舟みの ある作り出し高さ。 底面直線。底付鉄 文。裏面に魚鱗状 の文が施す。	黒	内外面及び 口縁部 2.594/1底 面は赤褐色 の長石斑 たっぶり 5.94/2灰 白色の長 石斑	褐色。黒 褐色。口 縁部は赤 褐色。底 面は黒色。	1層部 破片 1/3	多分使用期間 短い。二次焼 物(17世紀)
18	1F	陶器	志野鉄 絵鉢	(5.4)	—	(1.9)	36.1	底面の削り出し高 さの約1.5cm。	口口口形状。	黒	内面 2.318/3灰 白色。外 面5.94/1 灰白色の長 石斑	赤褐色。口 縁部は赤 褐色。底 面は黒色。	1層部	内面に施す鉄 絵(7.594/1) 赤褐色
19	1E	陶器	志野鉄 絵鉢	(12.7)	—	(3.05)	10.6	比較的浅く、口 縁部は直線的に外張 する。	口口口形状。	黒	内外面 2.318/1灰 白色の長 石斑	赤褐色。口 縁部は赤 褐色。底 面は黒色。	1層部 破片	内面直線。口 縁部(10.97/3) 美濃院17世紀 前半
20	1B-C5- 4	陶器	志野鉄 絵皿	(11.2)	(6.3)	(3.6)	36.4	小形の裏面がつき、 縁部に魚鱗状の文 様が施す。	口口口形状。高い削 り出し高さ。半筒 状へのり出しあり。 内面に魚鱗状の文 が施す。	黒	内外面 2.318/1灰 白色の長 石斑。新 肉たっぶり。	赤褐色。口 縁部は赤 褐色。底 面は黒色。	1層部 破片 1/6	内面に魚鱗状 の文(5.94/1) 赤褐色。底 面は黒色。新 肉たっぶり。
21	1F	陶器	志野鉄 絵皿	(11.9)	(7.2)	2.2	31.3	浅い高内に底平は 平らとなり、口縁部 は直線的に外張す る。口縁部は直線的 に外張する。口縁部 は直線的に外張す る。口縁部は直線的 に外張する。	口口口形状。口の 縁部は直線的に外 張する。口縁部は直 線的に外張する。 口縁部は直線的に 外張する。	黒	内外面 2.318/1 5.94/2灰 白色の長 石斑。新 肉たっぶり。 (7.594/2)	赤褐色。口 縁部は赤 褐色。底 面は黒色。	1層部 破片 1/4	底面に魚鱗状 の文(5.94/1) 赤褐色。底 面は黒色。新 肉たっぶり。
22	1E	陶器	志野鉄 絵鉢	(3.7)	—	(1.6)	22.2	削り出し高さ。底 面は直線的に外張 する。	口口口形状。底平は 直線的に外張す る。口縁部は直 線的に外張する。	黒	内外面 10.97/1 2.318/2灰 白色の長 石斑	赤褐色。口 縁部は赤 褐色。底 面は黒色。	1層部 破片	二次焼 物(17世紀 前半)
23	1B- P60	陶器	志野鉄 絵鉢	(12.2)	—	(2.2)	9.1	口筒を狭くする。	口口口形状。内面は 直線的に外張す る(10.97/1)成し。	黒	内外面 2.318/2灰 白色の長 石斑	赤褐色。口 縁部は赤 褐色。底 面は黒色。	1層部 破片	江戸・美濃院17 世紀前半
24	1E	陶器	志野鉄 絵鉢	(31.7)	—	(3.7)	126.9	底面は直線的に 外張する。口縁部 は直線的に外張す る。口縁部は直線的 に外張する。	口口口形状。胴中央 に約4cmの口縁部 あり。10cm単位 の削り出し高さ。 口縁部は直線的に 外張する。	黒	内外面 7.594/2赤 褐色の長 石斑	赤褐色。口 縁部は赤 褐色。底 面は黒色。	1層部 破片	江戸・美濃院大 正時代(17世紀 後半)
25	1E-1	陶器	志野鉄 絵鉢	(9.7)	—	(3.0)	77.3	底面は直線的に 外張する。口縁部 は直線的に外張す る。口縁部は直線的 に外張する。	口口口形状。底平は 直線的に外張す る。口縁部は直 線的に外張する。	黒	内外面 7.594/2赤 褐色の長 石斑。口 縁部は直 線的に外 張する。	赤褐色。口 縁部は赤 褐色。底 面は黒色。	1層部 破片 1/6	内面に魚鱗 状の文(5.94/1) 赤褐色。底 面は黒色。新 肉たっぶり。

第28表 1区遺構外山土遺物観察表(3)

層位	位置	種類	図説	寸法	重量	重量	形状の特徴	製造の状況	材質	産地	出土	保存状態	解説	
26	1F-SE02	磁器	近野橋 総徳利	—	10.4	156.3	下部の頸部に、縦 やぐらによる肩帯 がある。	口クロ瓶形。	磁石	外土518/3 赤褐色の土質 焼く。胎内 318/2灰白 色。	彩色磁器 片	複製 片	厚部に黒物文 除目(1812/3) 施す。東山17 世紀前半	
27	1-1C3- 4-1E	磁器	染付焼 茶碗	—	—	—	体部が腰直に近く平 筒形となる。	口クロ瓶形。	磁石	内外面83/0 灰白色の滑 潤釉。	青白 白色	体部破 片	仕形(青白色) で毎文(腰直)の 内面区が緑文 施す。東山17 世紀後半～19 世紀初頭	
28	1-1C5- 4-1E	磁器	染付焼 茶碗	—	6.3	66.2	高背から平らに伸び て後半急がむすかに 丸みを帯びた筒形。	口クロ瓶形。割り出 し高背部に彩瓦おす が施す。全面滑 潤。裏付脱け取り。	磁石	内外面 619/18灰 白色の滑潤 釉。	青白。彩色 料子若干帯 む。	体部 1/8	呉色(青白色) で毎文(腰直)の 内面区が緑文 施す(1610～1630 年頃)	
29	1F-1E	磁器	染付小 瓶	8.4	2.9	4.4	瓶口に立ち上がる赤 やぐらに典型的な平 筒形の体部。	瓶口に立ち上がる赤 やぐらに典型的な平 筒形の体部。	磁石	内外面83/1 灰白色。	おすかた灰 白(83/0)	全体 3/4	外面83単位 の埋り込み。 胎内。東山19 世紀末製造	
30	1E	磁器	染付八 角形平 形鉢	—	—	3.3	八角の 隅のみ。80 度の角で急激的に 立ち上がる。	口クロ瓶形。内面に 口クロ目施す。	磁石	内外面とも 519/18灰 白色	緑色。彩色 料子若干帯 む。	体部破 片	外面急ぎ抜き。 胎内文。割り出 し高背部は緑文 施す(1780～1800年 頃)	
31	1F-05- a	磁器	染付小 瓶	(15.4)	—	—	外縁全面に丸みが強 く、口唇のみ反り返 る。	口クロ瓶形。	磁石	内外面 519/18灰 白色の滑潤 釉。	彩色磁器 片赤白。胎 内白色。	複製 片	呉色(青白色)で 内面区が文。外面 区が文。胎内区 が赤文。東山17 世紀後半～18 世紀末(1630～1780年 頃)	
32	1F	瓦	平瓦	長 (10.0)	幅 (11.8)	厚さ 1.7	272.7	比較的に大きな平瓦。 水置1個周りの可動 性あり。	良好	表面513/1 アープ赤色	表で・底面 は平白色。 胎内517/1 灰白色。	複製 片		
33	1F	瓦	焼瓦	縦1.3	横4.6	厚さ 1.2	32.2	平瓦の一端。 造り方不明。胎内に 溝り止めのスリット あり。	良好	表面513/1 赤褐色。胎 内516/1灰 白色。	表赤・底面 若干帯む。 胎内517/1 灰白色。	複製 片	丸に一端の押し 込み。19世紀以降	
34	1-1C3 4-1E	石製品	磁石	縦 (6.0)	横4.15	厚さ 1.3	39.7	体部は一面のみ、 打割と思われ。	良好	全面1018/3 灰白色。	約半 分	複製 片		
35	1F	鉄製品	角釘	長さ 7.5	最大 1.0 (頭頂部)	先端 0.1	20.6	2寸強の基本的には 3mmの釘で、頭は 五角に打割られている。	鉄製品	—	全体、 518/1赤褐色	—	完存	
36	1F	鉄製品	火箸	長さ 21.3	最大 0.7	先端 0.3	16.6	頭端1.0cmの螺線多 なし。あまり太さを 変えることなく、先 端のみ太る。	鉄製品	—	全体、 518/1赤褐色	—	完存	
37	1F	鉄製品	輪	外径 7.0	内径 5.0	高さ 0.7 厚さ 0.3	20.1	輪に急角し、切れ目 はない。内縁が厚 く、外縁は丸る。	鉄製品	—	全体、 519/1赤白 い赤褐色。	—	ほぼ完 全	
38	1E-1E	養生土器	壺	—	6.7	—	19.3	中心部から胎内 に立ち上がる。	良好	内面519/4/ 赤褐色。外 面518/1赤 褐色。	—	複製 片	後期北関東系 胎子伝ひ。	

第3節 2区 [第1面]

1区とともに、古絵図から武家屋敷の存在が想定されていた2区の遺構構築時期は、整地面を挟んで上面である1面と下面である2面に大別される。第2面の遺構は2号堀、SD251、竪穴状遺構1基(SX2)で、それ以外は第1面の遺構である。

第1面の遺構には、掘立柱建物跡4種(SB01～04)、柵列4条(SA10・12～14)、井戸6基(SE01・05・06・16・17・18)、池(SX1)、土坑6基(SK100・106・115・116・139・652)、溝1条(SD001)、ピット多数が検出されている。

(1) SB(掘立柱建物跡)

SB01 (第18～50図 第8・9・28図版 第29～31表)

①位置・重複：F12-a～d、F13-c、G12-a・b、G13-aに位置する。

SB01に切られる。

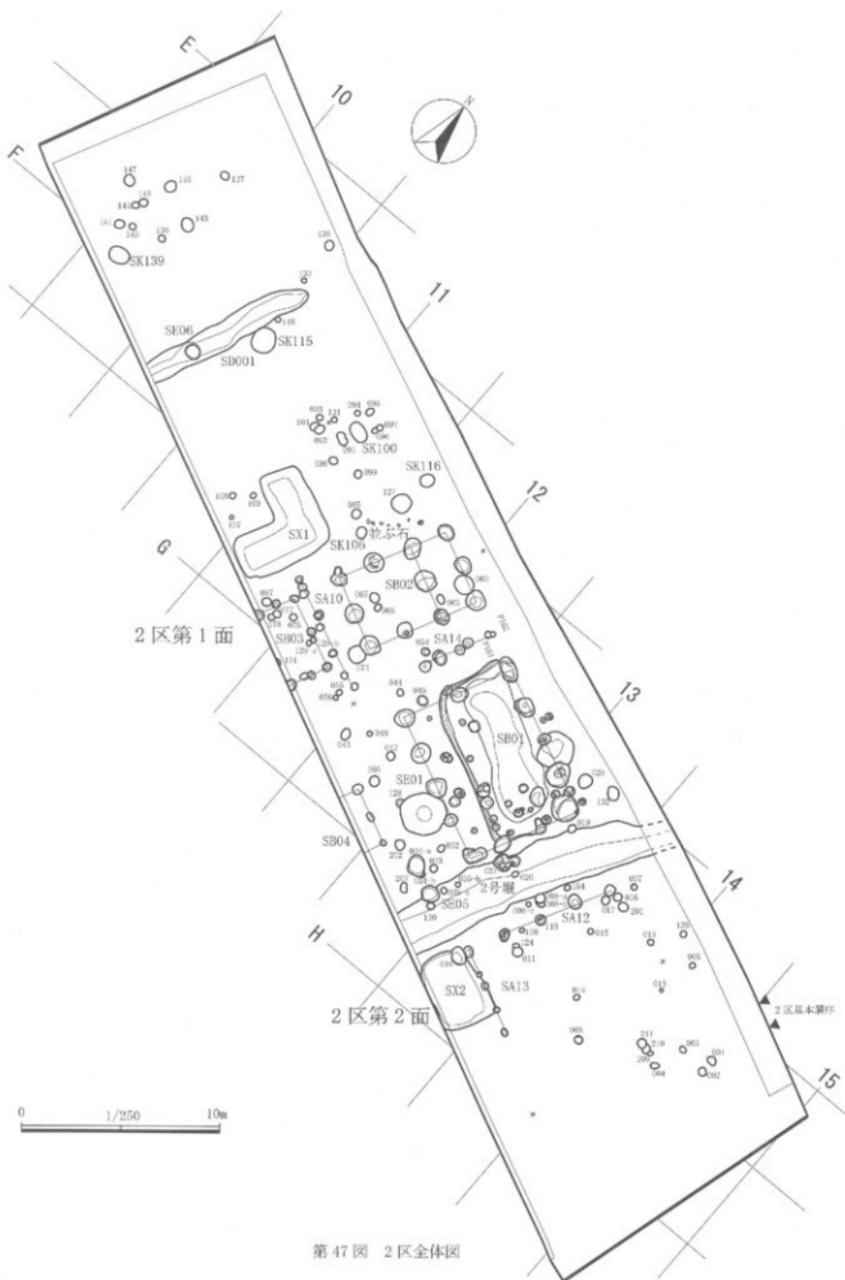
②形状・規模・覆土：掘方を伴う掘立柱建物跡である。桁行は北と南で4間のP14・P10の存在より総柱と判断した。桁行の柱間は、北がP03～06までの各柱間は1.97m、P06・07は2.18mを測り、合計8.09mとなっている。北と同様に、南のP11～13およびP13・01の柱間も1.97m、P10・11間は2.18mを測り、合計8.09mとなっている。妻側の柱間は西と東で異なり、西が2間で東が3間の側柱である。妻側は、西でP01・02間およびP02・03間で各2.80mの合計5.60m、東はP07～10までの各柱間で各1.87mを測り、合計5.61mとなっている。柱穴の規模は第29表に示す通りである。柱穴は46～130cmのものがあり径は60～90cmが多い。深さは50～72cmのものがあり50～60cmのものが主体となる。柱の痕跡を示すピットはP02・03・05・06・11・12があり、木質が残存するのはP02・03である。裏込めは、P03の2～4層、P07の2～5層、P05の3・4層、P06の2・3層、P11・12があり、黒色上となっている。

③長軸方向：N-22°-W

④施設(掘方)：東壁際から南壁際を通り西壁際に抜ける壁周溝は、幅10～35cm、深さ最大12cmを測る。次に掘立柱建物跡の桁行に沿う形状で7.75m×2.65mの東西に長い不整形円形の掘方が存在する。また185cm×165cm、130cm×115cmといった土坑状の掘方も存在し、P05・P06といった掘立柱に切られている。また側柱のすぐ内側に、1.90～2.10mの間隔で並ぶピットP17～22の7基がある。それはP17に始まって、掘立柱建物跡の桁行南側の内に沿って東に向かい、P20でL字に折れ曲がり、妻側西の内を北に向かってP22に至る。これらピットは長径18～54cmの円～楕円形で、深さは17～47cmである。底部標高は23.98～24.24mである。その他のピットはP23～41があり、大半が周溝の内側に存在し、周溝に沿って並んでいるものもある。長径は18～96cmで概ね30cm前後の円形～楕円形ピットで、深さは7～64cmで概ね30cm前後を測る。

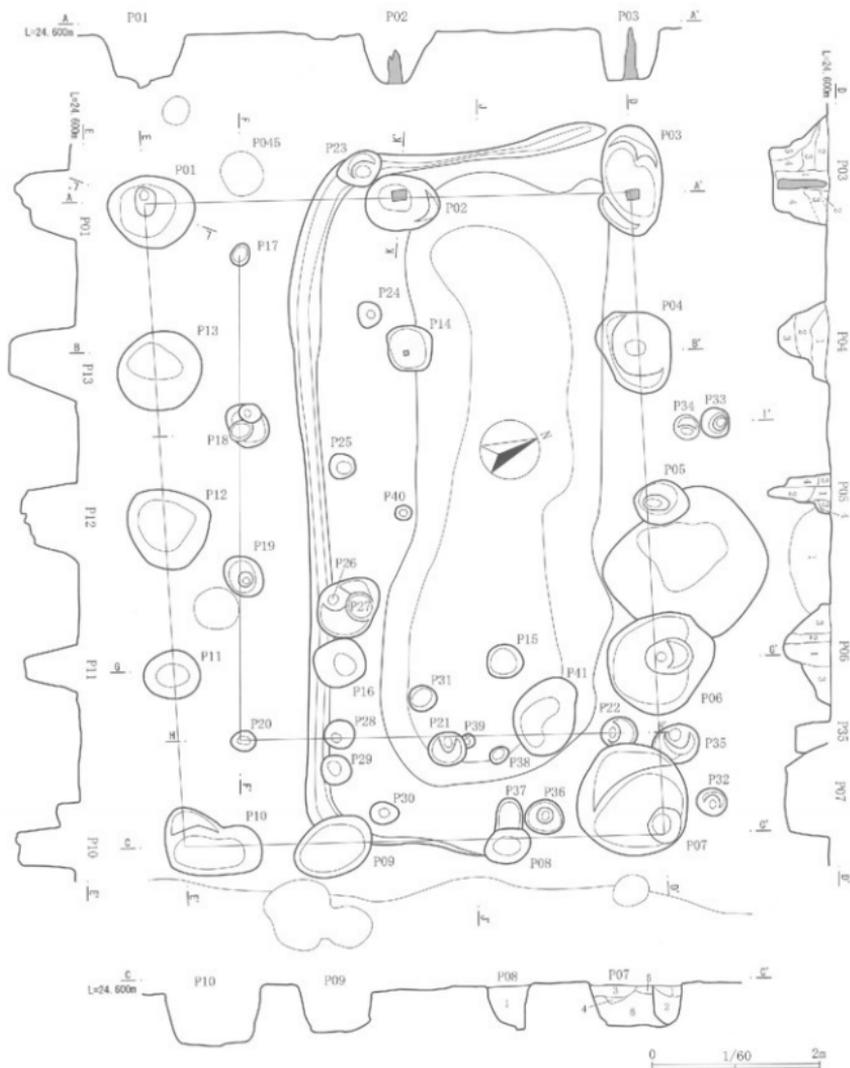
第29表 SB01ピット計測表

P番号	円周径 (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	底部標高 (m)	備考
P01	SB01-P01	98	86	38	23.87
P02	SB01-P02	80	62	60	24.05 木質残存
P03	SB01-P03	127	68	62	23.98 木質残存
P04	SB01-P04	102	90	58	24.05
P05	SB01-P05	65	30	66	24.00
P06	SB01-P06	118	110	32	24.08
P07	SB01-P07	130	130	52	24.10 P22、P25を切る
P08	SB01-P08	54	42	53	24.05 P27を切る
P09	SB01-P09	96	66	50	24.01
P10	SB01-P10	106	80	63	23.88
P11	SB01-P11	62	56	53	23.92
P12	SB01-P12	94	83	62	23.83
P13	SB01-P13	98	88	76	23.76
P14	SB01-P14	53	46	44	24.06 木質残存
P15		42	42	32	24.03
P16		66	60	31	24.12
P17	P047	20	21	21	24.24
P18	P041	54	42	49	23.88
P19	P005	51	42	45	24.07
P20	P031	30	24	37	24.14
P21	P024	42	42	33	24.16 P29を切る
P22	P025	42	36	47	24.05 P27に切られる
P23	P049	48	30	40	24.08
P24	P168	30	24	17	24.00
P25		30	30	58	23.85
P26		18	12	36	23.88
P27		30	24	24	24.20
P28		36	36	31	24.11
P29	P167	42	36	58	23.96
P30	P071	40	40	22	24.16
P31	P081	30	30	29	24.20
P32	P027	36	30	29	24.22
P33	P039	36	30	42	23.89
P34	P080	30	30	42	24.07
P35	P026	54	48	64	23.87 P27に切られる
P36	P112	18	12	47	24.04
P37	P113	42	36	19	24.33 P28に切られる
P38	P030	24	18	7	24.41
P39		18	18	40	23.93 P25に切られる
P40		18	18	7	24.32
P41		96	72	21	24.10

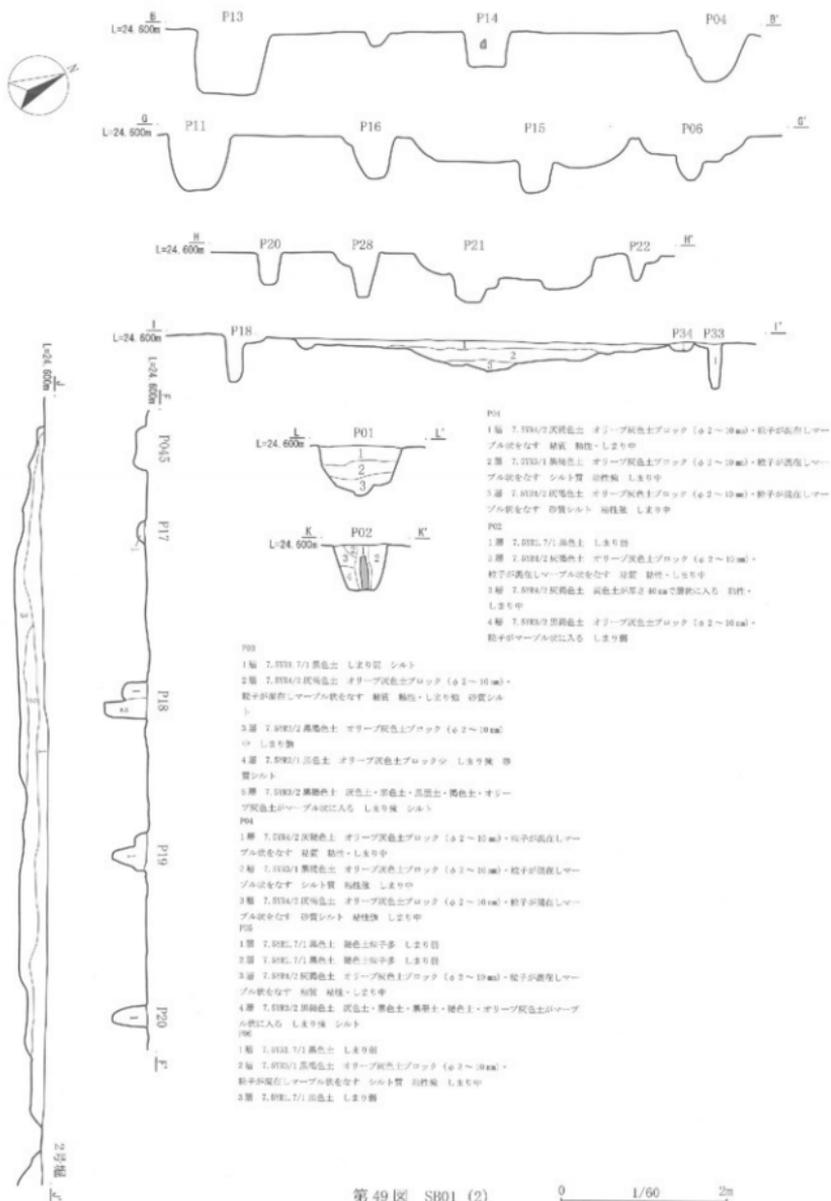


第47图 2区全体图

⑥出土遺物：以下に12点の図および観察表を示した。



第48図 SB01 (1)



第49図 SB01 (2)

P07

1層 7.0784/2 灰褐色土 ナリブ灰土ブロック (φ2～10㎝)・灰子が混在しワープ状をなす。粘質・粘り少

2層 7.0783/1 灰褐色土 ナリブ灰土ブロック (φ2～10㎝)・灰子が混在しワープ状をなす。シルト質・粘性・粘り多

3層 7.0784/2 灰褐色土 ナリブ灰土ブロック (φ2～10㎝) 少 粘質・粘性・粘り多

4層 7.0781/1 灰褐色土 粘性・粘り多

5層 7.0784/1 灰褐色土 ナリブ灰土ブロック (φ2～10㎝) 多 粘質・粘性・粘り多

6層 7.0784/3 褐色土 粘性・粘り多

P08

1層 7.0783/1 灰褐色土 (砂質) 黄色土ブロック (φ2～10㎝)・灰子少 粘性・粘り多

P17

1層 7.0781/1/1 灰褐色土 黄色土ブロック (φ2～10㎝)・灰子少 粘性・粘り多

P18

1層 7.0782/1 灰褐色土 黄色土ブロック (φ2～10㎝)・灰子少 粘性・粘り多

2層 7.0782/1 灰褐色土 黄色土ブロック (φ2～10㎝)・灰子多 粘性・粘り多

P19・P20

1層 7.0782/1 灰褐色土 黄色土ブロック (φ2～10㎝)・灰子多 粘性・粘り多

P09

1層 7.0782/1 灰褐色土 黄色土ブロック (φ2～10㎝)・灰子多 粘性・粘り多

P034

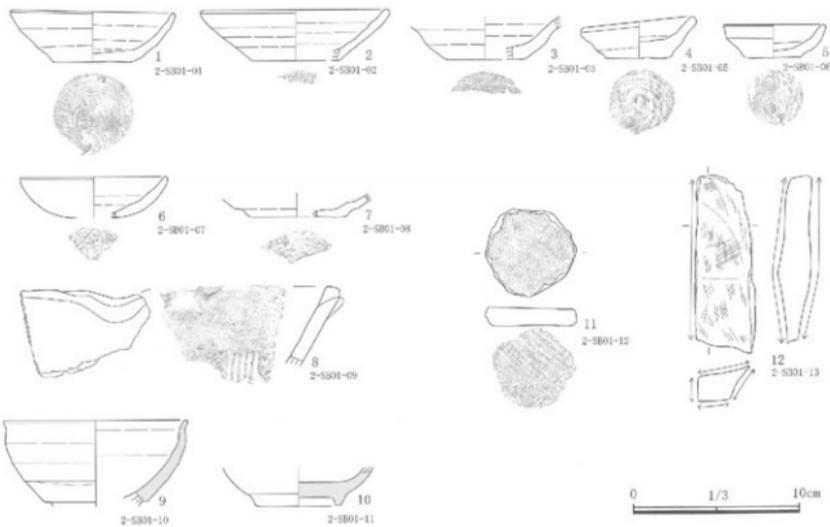
1層 7.0782/1 灰褐色土 黄色土ブロック (φ2～10㎝)・灰子少 粘性・粘り多

層り方

1層 7.0783/1 灰褐色土 黄色土ブロック (φ2～10㎝)・灰子少 粘性・粘り多

2層 7.0782/1 灰褐色土 黄色土ブロック (φ2～10㎝)・灰子中 粘性・粘り多

3層 7.0783/4 灰褐色土 黄色土ブロック (φ2～10㎝)・灰子多 (ワープ状)



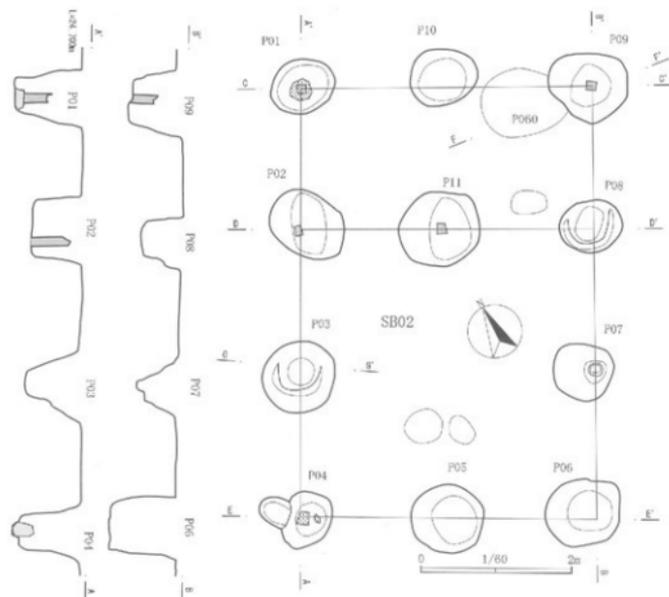
第50図 SB01 出土遺物

第30表 SB01 出土遺物観察表 (1)

番号	品名	種類	形状	口径	底径	高さ	重量	割付の前後	割付の特徴	構成	色相	粘土	残存度	備考
1	2-SB01b/3	かわらけ	A型中皿	9.7	4.7	3.1	85.9	山手する底面に30度角で縁やかに立ち上がる。	コクロ型。右面粘み塗り跡した後、無調整。	硬良	全体2.5186/9%褐色	雲母微粒子若干含む。	完存	
2	2-SB-P19	かわらけ	B型小皿	10.0	(5.1)	3.1	19.6	コシンの角で大きく開く。	コクロ型。	良好	全体5386/5%褐色	雲母微粒子若干含む。	口縁部の1/4	
3	2-SB01-5/33	かわらけ	A型中皿	—	(4.8)	(2.6)	21.1	平らな底面から約45度角で縁やかに立ち上がる。	コクロ型。	やや良	全体7.5727/9%白色	白色粘土・雲母微粒子若干含む。	底面の1/4	
4	2-SB-96-1	かわらけ	A型小皿	6.6	3.9	2.2	48.5	やや突出した底面から60度角で縁やかに立ち上がり、口縁部でさらに開く。	コクロ型。左面粘み塗り跡し、底面手持ちへう張り調整。	硬良	全体10789/2%白色	雲母若干含む。	全体の2/4	

第31表 SB01出土遺物観察表(2)

序号	注記	種名	形状	口径	底径	高さ	重量	器形の特徴	器形の修復	構成	色調	胎土	保存度	備考
5	2-SB01No.1	かわらけ	A型小皿	5.1	3.2	2	40.4	やや突出する底面からの底面で立ち上がる。口縁部で薄化する。	口枠修整。	良好	全体 7.5YR7/2消 褐色	白色粘土・ 雲母細粒子 若干含む。	良好	付明歯直に転用。底面直裏1cm所破損。
6	2-SB01No.2	かわらけ	A型小皿	5.99	3.43	2.4	12.4	ほらな底面から35度角で底面から立ち上がる。	口枠修整。	良好	全体5Y6/1 灰色外面一 面約37/2消 黄白色	白色粘土の 胎土	口縁部 1/6	埋填に転用
7	2-SB01No.3	かわらけ	A型小皿	—	5.89	1.43	12.4	突出する底面から35度角で立ち上がる。	口枠修整。	良好	全体5Y6/1 灰色	白色微粒子 若干含む。	底面の 1/4	埋填に転用
8	2-SB01No.4	土師製土器	片口酒杯	—	—	4.7	53.5	45度角で立体的に立ち上がる。	口縁修整。片口は修理痕。5本1単位のもの。	良好	内外面 10YR5/3に 赤・黄褐色	赤褐色微粒子 若干含む。 器内100R/6 灰白色	口縁部 破片	瀬戸・美濃産
9	2-SB01No.5	陶器	天目茶碗	10.0	—	5.5	35.5	高台から70度角で丸みを帯びて立ち上がり。器口から器底となり、口縁は外反する。	口枠修整。側り出し高台。母蓋下地付付へラ面り裏面。	優良	7.5YR7/1黒 7.5YR4/4暗 色の鉄粒	黒色微粒子 若干含む。 凝結・若干 2.5YR/1灰 白色の鉄粒	口縁部 1/3	瀬戸・美濃産 17世紀前半
10	2-SB01No.6	陶器	丸瓶	—	5.1	2.3	89.3	内反り高台から平床状に広がる。	口枠修整。高台内に輪下字あり。	優良	内外面淡 色の灰褐色	薄白色	底面の み	瀬戸・美濃産 大雲南
11	2-SB01No.7	土製品	加工円盤	縦5.4	横6.4	厚1.18	36.4	両面に打ち欠き整形。表面スグレ状浮現。	内面へけ目あり。	良好	内外面 2.5YR2/0暗 褐色	白色粘土や やや多い。器 内2.5YR7/9 褐色	新	土師製土器 (製器長・短 形具類)の底 部転用。
12	2-SB01No.8	石製品	陶石	縦10.6	横3.7	厚1.9	100.4	両軸断面正円。表面全面に転用。	右面に線目残る。	—	5G7S/1オ リーブ灰白 色	—	不明	越後製。緑硬石。



第51図 SB02 (1)

SB02 (第51～53図 第9・10・28図版 第32・33表)

①位置・重複：F11-b・d、F12-aに位置する。ピットP06を切る。

②形状・規模・覆土：妻側2間、桁行3間の総柱である。妻側は北のP01・09・10の各柱穴間で1.95m、合計3.90m。南側P04・05・06の柱穴間も同様の距離を測る。桁行の柱間距離は、西がP01・02間およびP02・03間で1.93m、P03・04間で2.06m、合計5.92m。東側P06～09も同様の距離を測る。柱穴の平面形状と規模は、80～102cmの平面円形～楕円形で、深さは41～99cmを測り50～80cmが多い。

柱穴P01・02・09からは角柱が底部に、P11からは柱材の痕跡を示す木質が覆土中に、P01・04からは根石が底部で検出されている。角柱の幅はP01が12.5cmを測る。柱穴の裏込めは、P09でオリーブ灰色土と暗褐色土の互層第2～7層で構成される。

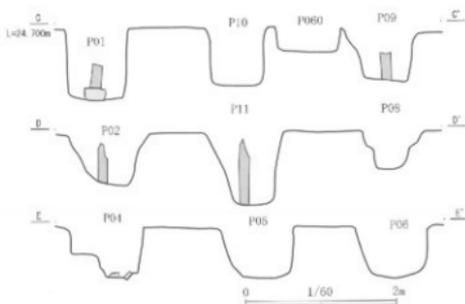
③長軸方向：N-65°—E

④出土遺物：以下に図・観察表を示した。

⑤備考：プラン西側に並ぶ石が存在する。

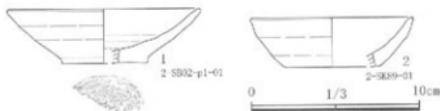
7909

- 1層 7.500A/4 暗褐色土 粘質・しまり強
- 2層 7.500B/2 オリーブ灰色土 3層以上コブが平らに入らぬ 粘質・しまり強
- 3層 7.500E/1 灰色土 粘質・しまり強
- 4層 7.500E/2 黒色土 粘質・しまり強



第32表 SB02 ピット計測表

F番号	印番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底層厚さ (cm)	備考
P01	P02-P01	89	72	86	23.53	木質残存
P02	P02	102	83	70	23.94	木質残存
P03	P03	98	98	53	23.89	
P04	P04	80	68	35	23.95	根石残存
P05	P05	98	88	70	23.33	
P06	P06	100	84	68	23.33	
P07	P07	82	109	42	24.60	
P08	P08	82	80	41	21.68	
P09	P09	109	95	59	23.84	木質残存
P10	P10	92	85	95	23.95	
P11	P11	101	100	99	23.98	木質残存



第53図 SB02 出土遺物

第33表 SB02 出土遺物観察表

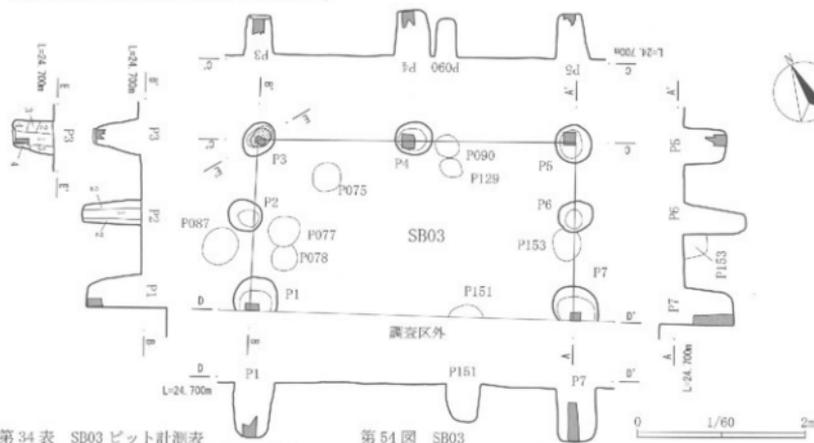
番号	図記	種類	直径	口径	底径	高さ	重量	器形の特徴	器底の特徴	素材	色調	覆土	残存度	備考
1	2-SB02-P1	かわらけ	A輪中皿	(11.6)	(5.1)	3.35	25.6	突出した底面からゆがみで緩やかに立ち上がる。	口縁が粗形。面割れが粗し、無断片。	薬良	全体 7.500B/2洗 黄褐色	白色雲母質 粘土層中含む。	全体の 1/6	
2	2-SB09	かわらけ	A輪小皿	(9.6)	(6.9)	(3.0)	8.1	全体に丸みのある器底。	口縁断片。	良野	全体7.500E/2洗 灰色	黒褐色粘土 層中含む。	口縁断片	埋込に転用

SB03 (第54・55図 第10・11・28図版 第34・35表)

①位置：F11-c・d、G11-bに位置する。プランの南側は調査区外である。

②形状・規模・覆土：現形状から桁行2間、妻側2間で、柱7基のうちP1・3・4・5・7が主柱、P2・6が支柱と推定される。桁行と判断される西のP1・2間で1.00m、P2・3間で1.00mとなり、東のP5・6間で0.98m、P6・7間で1.20mとなる。他方、妻側と判断される北は、P3・4間が1.80m、P4・5間が1.98mとなる。太さ12～18cmの角柱がP1・3・4・5・7から検出されている。現形状から南北に長い長方形プランと推定される。裏込めはP2の暗褐色土である2層、P4の暗褐色土～黒色土である2・3層、P7の黒色土である2層からなっている。

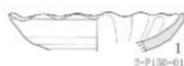
- ③長軸方向：N—27°—W
 ④施設：東西にピットが並んだ横列SA10が北側に位置している。
 ⑤出土遺物：以下に図・観察表を掲載した。



第34表 SB03 ピット計測表

F番号	甲番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面積 (m ²)	備考
P1	SB03-P1	52	34	66	21.92	木炭残存
P2	PC86	43	36	71	24.92	
P3	PC76	45	26	53	24.07	木炭残存
P4	PO68	46	40	36	26.17	木炭残存
P5	P5	46	43	54	24.63	木炭残存
P6	P7	43	33	52	24.16	
P7	SA190	82	52	58	23.99	木炭残存

第54図 SB03



0 1/3 10cm

第55図 SB03 出土遺物

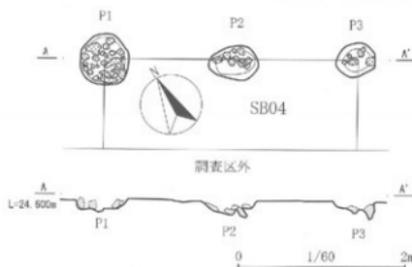
第35表 SB03 出土遺物観察表

番号	品記	種別	経緯	位置	数量	取柄の形態	製作の形態	材質	用途	出土	保存状況	備考
1	2-P156	箭頭	北緯 東経 (6.8)	—	<2.1>	14.7	口唇に輪脊を細く作り込む。	口唇に輪脊。内面瓦ノミで花弁を表現。	良好	全体5/8/1 灰白色の黄石筈	黒色燧石 若干含む。	口縁部破片 調査・整理中大体部(段部)16 被災未集。

SB04 (第56図 第11図版 第36表)

- ①位置：G12-a・bに位置する。桁行は調査区外にあるため詳細不明である。
 ②形状・規模・覆土：妻側2間である。P1・2及びP2・3間は1.50mで合計3mを測る。各ピット内には、地上に直接礎を置いた状態の根石が多量に検出されている。根石のみの検出だが現形状から礎石建物の可能性が考えられる。P2から形状不明の柱材が検出されている。

- ③長軸方向：N—62°—W
 ④出土遺物：礎のみであった。



第36表 SB04 ピット計測表

F番号	甲番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面積 (m ²)
P1	P205	66	56	16	26.41
P2	P264	60	46	11	24.28
P3	P303	48	42	12	24.48

第56図 SB04

(2) SA (柵列)

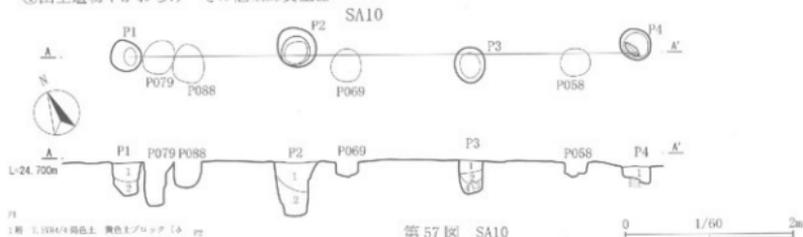
SA10 (第57図 第37表)

①位置・重複：F11-c・dに位置する。

②形状・規模・覆土：長径32cm～40cmの平面円形～楕円形ピットP1～4の4基で構成され、深さ20cm～57cm、底部の標高は24.05m～24.36mを測る。杭の間隔はP1・2間が1.98m、P2・3間及びP3・4間が2.04mを測る。P4では底部に根石が設置され、丸杭が残存する。覆土は黒色土の単層によりなる。

③走向方位：N-68°-W

④出土遺物：かわらけ その他土師質土器



第57図 SA10

- P1
 1層 7.0784(1)黒色土 黄土土ブロック (φ2～19㎝) 砂・
 2～19㎝) 粘土層 (φ2～17㎝) 1層 7.0782(1)黒色土 黄土土ブロック (φ2～
 少 砂層・しまり層 40㎝) 砂土層 粘土層 粘土層 しまり層
 2層 7.0781(1)黒色土 黄土土ブロック 2～19㎝) 粘土層 砂土層 黄土土ブロック 1層
 (φ2～19㎝) 粘土層 砂土層 砂土層 しまり層 2～19㎝) 粘土層 砂土層 砂土層 しまり層
 P2
 1層 7.0781(1)黒色土 黄土土ブロック (φ2～19㎝) 粘土層 粘土層 砂土層 砂土層 しまり層
 2層 7.0783(1)黒色土 黄土土ブロック (φ2～19㎝) 粘土層 粘土層 砂土層 砂土層 しまり層
 3層 7.0781(1)黒色土 黄土土ブロック (φ2～19㎝) 粘土層 粘土層 砂土層 砂土層 しまり層
 4層 7.0784(1)砂土層 黄土土層 砂土層 しまり層
 P4
 1層 7.0782(1)黒色土 黄土土ブロック (φ2～19㎝) 粘土層 砂土層 しまり層

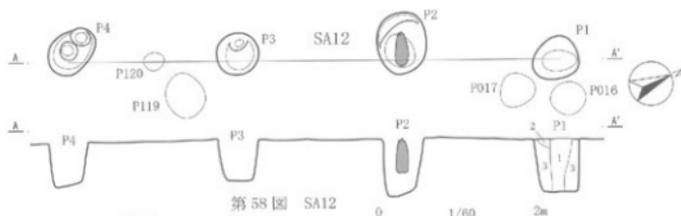
第37表 SA10 ピット計測表

P番号	回番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底部標高 (m)	備考
P1	P080	36	28	55	24.09	
P2	P071	40	26	57	24.05	
P3	P069	32	28	37	24.27	
P4	P057	32	28	20	24.26	根石残存

SA12 (第58・59図 第28図版 第38・39表)

①位置・重複：F13-b、G13-aに位置する。整地面で埋められた2号場に沿って南北に並んでいる。P122を切る。

②形状・規模：長径48～60cmの平面円形ピットP1～4の4基で構成され、深さは54～68cm、底部の標高は23.82～23.95mを測る。杭の間隔はP1・2間1.92m、P2・3間が1.92m、P3・4間が1.90mを測る。P2には径15cm、杭基部が出土している。



第38表 SA12 ピット計測表

P番号	回番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底部標高 (m)	備考
P1	P018	60	51	63	23.82	木質残存
P2	P117	60	32	69	23.82	木質残存
P3	P118	48	51	54	23.95	
P4	P121	48	38	62	23.92	

- P1
 1層 7.0782(1)黒色土 黄土土ブロック (φ2～19㎝) 粘土層
 砂土層 しまり層
 2層 7.0781(1)黒色土 黄土土ブロック (φ2～19㎝) 粘土層
 砂土層 しまり層
 3層 7.0783(1)黒色土 黄土土層 粘土層 しまり層

③走向方位：N-31° —E

④出土遺物：以下に図および観察表を示した。



第59図 SA12出土遺物

第39表 SA12出土遺物観察表

番号	名称	種類	寸法	重量	出土の状況	観察の所見	状況	色調	胎土	保存度	備考			
1	2-F117	かわらけ	A型小皿	7.8	4.5	2.15	60.9	甲らな面から40度角で横やから立ち上がる。	ロクロ製形。左回転の成り跡し後、無調整。	良好	全体10188/2表黄褐色	局部脱粒・若干劣化。	完全	
2	2-SK117	かわらけ	C型小皿	8.2	4.5	1.85	37.1	おずみから突出突縁の成り跡から80度角で直線的に立ち上がる。歪みあり。	ロクロ製形。右回転の成り跡し後、手持りへつ張り調整。	良好	全体10187/3にぶい・黄褐色	局部脱粒・若干劣化。	完全	
3	2-SK121	甕	花生	—	—	(12.0)	119.6	下半部でおずみから半ばまる頸部に大きな窪みがつく。頸部に穿孔あり。	回転台造形。内面にロクロ製の明白顔着。胴部外面に丸ノミ削ぎ、長手軸流し削ぎ。	良好	内面・外面一部5018/1にぶい・白色の灰釉	黒色粒状・若干劣化。器底38/6白色	胴部の1/4	胴部穿孔に鉄付着。腰磨け器具痕跡あり。赤褐色花生高麗葉17世紀初期
4	2-SK18	土製瓦土器	板物	(21.2)	(17.99)	4	64.4	4×4に造り、腰部に丸みある。	手作りの成り。腰部にグロ調整。	良好	内外面7.5127/2にぶい・黄褐色	白色粒状・若干劣化。器底7.5128/3にぶい・黄褐色	底面破片	片破断
5	2-SK18	石製道具	柄杓	—	—	(6.33)	43.3	各部245度角に開く。	回転機ナゲ。6本1単位の様目。	良好	内外面7.5130/4にぶい・白色	白色大粒・多量。器底7.5131/1にぶい・白色	体面破片	

SA13 (第60・61図 第28図版 第40・41表)

①位置・重複：整地面に埋め込まれたSK2(竪穴状遺構)に沿って東西に並んだ形状で検出されている。G13-c・dに位置する。

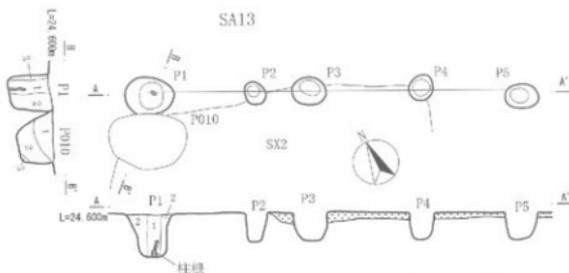
②形状・規模・覆土：長径28～48cmの平面円形～楕円形ピットP1～5の5基で構成され、深さは26～56cm、底部の標高は23.89～24.13m。杭の間隔は、P1・2で1.18m、P2・3で0.71m、P3・4間で1.34m、P4・5間で1.20mを測る。このうちP1・4・5では杭の木質が残存する。裏込めはP1で黒色土である。

③走向方位：N-65° —W

④出土遺物：石製品

- P1
 1層 7.002/1/黒色土 白色砂子φ3mm 粘り強
 し
 2層 7.001/1/黒色土 白色砂子φ2mm 粘り強
 し
 3層 7.001/1/黒色土 白色砂子φ2mm 粘り強
 し
 4層 7.002/1/黒色土 白色砂子φ3mm 粘り強
 し

- P10
 1層 7.003/1/緑褐色土 黄色土灰中・白色砂子φ2mm
 粘り強
 2層 7.001/1/黒色土 白色砂子φ3mm 粘り強
 し
 3層 7.002/1/黒色土 白色砂子φ3mm 粘り強
 し



第60図 SA13

0 1/60 2m

第40表 SA13 ビット計測表

P番号	新番号	長さ (cm)	刃径 (cm)	深さ (cm)	底深標高 (m)	備考
P1	P009	48	43	56	23.89	木質残存 P010に認められる
P2	P156	26	20	23	24.11	
P3	P157	36	36	28	24.13	
P4	P158	32	28	30	24.11	木質残存
P5	P159	43	27	35	24.08	木質残存



第61図 SA13 出土遺物

第41表 SA13 出土遺物観察表

層号	位置	種類	形状	径径	厚さ	重さ	発見の特長	発見の特徴	成分	色相	層土	残存度	備考
1	2-SB00	石製品	火打石	縦6.3	横4.9	厚1.3	30.1	感4mm、厚さ1.2cmの長方形のれ、側面に打ちかかれた遺跡あり。		7.3016/1納 灰色	-	-	チャート質

SA14 (第62・63図 第28図版 第42・43表)

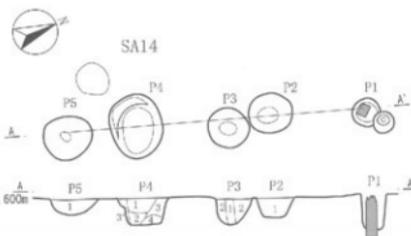
①位置：F12-a・cに位置する。

②形状・規模・覆土：SB01と02との中間に存在し南北に並んでおり、長径は40～72cmの平面円形～楕円形ピット5基で構成され、深さ20～53cm、底部の標高24.08～24.25m。柱間は、P1・2間が1.20m、P2・3間が0.60m、P3・4間が1.09m、P4・5間が0.90mを測る。裏込めはP3・4で認められる。覆土はP3は黒色土・オリーブ灰色土の2層、P4は黒色土・褐色土の4層からなる。

③走向方位：N-21°-E

④出土遺物：かわらけ

⑤備考：形状から2棟の仕切りである可能性が考えられる。



第62図 SA14

0 1/60 2m

- P2
 1層 7.001/1/黒色土 粘り強
 し
 2層 7.001/1/黒色土 粘り強
 し

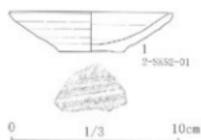
- P4
 1層 7.001/1/黒色土 黄色土グ
 ロック(φ2～10mm)・砂子多
 粘り強
 2層 7.001/1/黒色土 黄色土グ
 ロック(φ2～10mm)・砂子多
 粘り強
 3層 7.001/1/黒色土 黄色土グ
 ロック(φ2～10mm)・砂子多
 粘り強
 4層 7.001/1/黒色土 黄色土グ
 ロック(φ2～10mm)・砂子多
 粘り強

- P5
 1層 7.001/1/黒色土 粘り強
 し
 2層 195/2/オリーブ灰色土
 粘り強
 し
 3層 195/2/オリーブ灰色土
 粘り強
 し

- P5
 1層 195/2/オリーブ灰色土(φ2～
 10mm程度) 黄色土ブロック(φ2～10
 mm)・砂子多 粘り強
 し
 2層 195/2/オリーブ灰色土
 粘り強
 し

第40表 SA14 ビット計測表

遺物番号	P番号	層番号	長さ (cm)	刃径 (cm)	深さ (cm)	底深標高 (m)	備考
SA14	P1	P161	66	60	50	24.16	木質残存 P162に認められる
	P2	P050	65	48	53	24.09	
	P3	P051	44	40	32	24.25	
	P4	P052	72	60	38	24.19	
	P5	P053	82	52	70	24.32	



第63図 SA14 出土遺物

第43表 SA14 出土遺物観察表

番号	圧印	種類	器種	口径	口径	高さ	重量	器形の特色	取柄の特色	表面	色澤	胎土	焼成度	備考
1	2-S852	かわらけ	日置中皿	(9.2)	(3.8)	2.1	25.9	突出尖角の底面から30度角で丸みを帯びて立ち上がる。	コクロ歪形、切り摩し不明、一方のヘリ角が調整。	自然	元々の色 7.5Y5/2R 緑赤	器母数粒のやちが多い。	全体の1/3	一次焼成

(3)SE (井戸)

SE01 (第64・65図 第12図版 第44表)

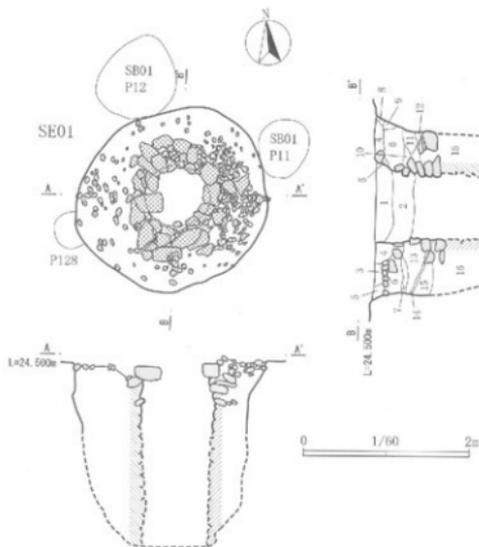
①位置・重複：G12グリッド中央において検出された。

②形状・規模・覆土：SB01と重複関係にあるものの、直接時期を判断する切り合い部分が無く、新旧関係は判断がつかない。また、小規模なP128などが近接して穿たれており、覆い屋があった可能性もある。

井戸は円形の石積み井戸である。掘り方の平面形状は直軸2.35m、短軸1.5mのほぼ円形で、確認面より2.30m掘り下げ、U字形を呈する。この穴の底のほぼ中心部分に、直径80cmの空間を残すように、円形に人頭前後の扁平な硯を積み上げている。裏込めは上層部で確認できたところによれば、石積みに合わせて徐々に充填されたものと想定されるが、下位は湧水と崩落により固化には至っていない。井戸の内部には粘土質の覆土が充填されていたが、2層下には礫が大量に投げ込まれており、井戸跡を封鎖するために意図的に行われた可能性が高い。

③長軸方位：N-20°-E

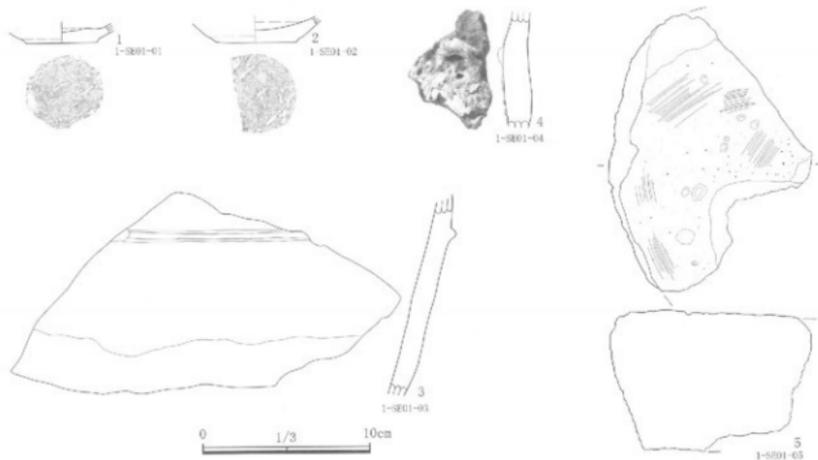
④出土遺物：以下に図及び観察表を示した。



第64図 SE01

SE05

- 1層 7.0Y2/4(緑褐色) 礫 (φ20~100cm) 多 砂礫 (φ2cm) 多 粘埃土 しまり少
- 2層 7.0Y2/1(灰土) 礫 (φ10~100cm) 中 粘埃土 (φ2cm) 少 粘埃土 しまり少
- 3層 7.0Y2/1(黄褐色) 礫 (φ2~10cm) 中 砂礫 (φ2cm) 中 粘埃土 しまり少
- 4層 7.0Y2/1(褐色) 礫 (φ2~10cm) 少 粘埃土 (φ2cm) 少 粘埃土 しまり少
- 5層 7.0Y5/6(暗褐色) 黄土ブロック (φ20~10cm) 多 粘埃土 しまり少
- 6層 7.0Y5/6(暗褐色) 黄土ブロック (φ20~10cm) 粘埃土・粘埃土 しまり少
- 7層 7.0Y5/1(黒土) 礫 (φ2~10cm) 少 粘埃土 (φ2cm) 少 粘埃土 しまり少
- 8層 7.0Y5/6(暗褐色) 黄土ブロック (φ20~10cm) 粘埃土・粘埃土 しまり少
- 9層 7.0Y3/1(黒土) 砂礫 (φ2cm) 少 粘埃土 しまり少
- 10層 7.0Y5/6(暗褐色) 黄土ブロック (φ20~10cm) 多 粘埃土 しまり少
- 11層 7.0Y5/1(暗褐色) 粘埃土 しまり少
- 12層 7.0Y5/2(暗褐色) 粘埃土 しまり少
- 13層 7.0Y5/1(褐色) 礫・砂礫の層 粘埃土 しまり少
- 14層 7.0Y5/2(中) 粘埃土・粘埃土 粘埃土 しまり少
- 15層 7.0Y5/1(オリーブ) 灰土 粘埃土 粘埃土 しまり少
- 16層 7.0Y5/1(オリーブ) 灰土 粘埃土 粘埃土 粘埃土 しまり少



第65図 SE01出土遺物

第44表 SE01出土遺物観察表

番号	位置	種類	形状	材質	高さ	直径	長さ	重量	断面の特徴	壁の特徴	底皮	色澤	粘土	残存度	備考	
1	12' SSE 一級	かわらけ	A物心 蓋	—	4.2	(1.3)	34.1		東出した底面から 20度角で開き、中 間で丸みを帯び、	口口の断面、回転 軸が取り出し後、一 方角へなすり。体 前は斜裏壁。	全面 7.5006/8度 色	黒褐色で 若干含む。	底面のみ			
2	14' SSE 一級	瓦質土器	碗	—	4.6	(2.1)	43.3		やや盛り出た平ら な底面から、すく に両面はじこめる。	口口の断面、環状 のため観察不明。	全面 7.5192/1度 色	白色粒・雲 長石粒子多 い。若干含む。	底面のみ			
3	1'- SE01	瓦質土器	火鉢か	—	—	(12.4)	376.2		垂直に立ち上がる 胴部に、1本の突 帯が通る。	断面が不明。内 面に割れ痕ナグ痕 あり。	良好	内外面 10196/1度 灰色。若 10193/1度 紫色	白色大粒子 が目立つ。 骨針含む。	輪郭破 片		
4	1'- SE01	石製品	神倉門 滑車具	珉7.2	横1.9	厚1.8	54.8		内面にガラス状（白色風化）の層状物付 着。外面は龜甲を呈する。		良好	外面 10195/4度 紫褐色。内 面10193/1 度白色物質 が附着	内面は1層 状剥離。	断面破 片	ガラス製品輪 郭の可能性あり。 琥珀赤色 化。25.5と 同一個体より。	
5	1'- SE01	石製品	石臼	(15.3)	—	(8.2)	1092.5		断面台形を呈す下口。		—	7.517/1度 灰白色	—	全体の 1/4	安山石質	

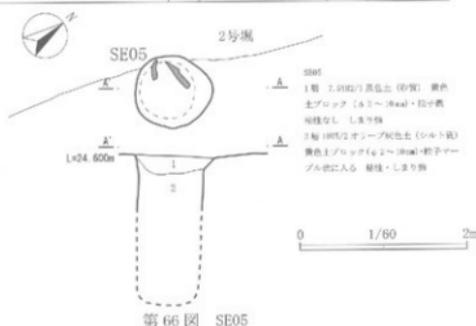
SE05 (第66図 第12図版)

①位置: G12-b・dに位置した裏掘り井戸である。

②形状・規模・覆土: 0.93 m × 0.89 mの平面円
形で、深さは1.90 m。地山砂礫層となる底部の標
高は22.65 mを測る。覆土は黒色土へオリープ灰色
土に至る2層を確認した。

③長軸方位: N-35° - W

④出土遺物: 掲載遺物なし



第66図 SE05

SE06 (第67・68図 第12図版 第45表)

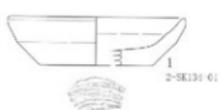
①位置・重複：F10-aに位置した素掘り井戸である。

SD001を切る。

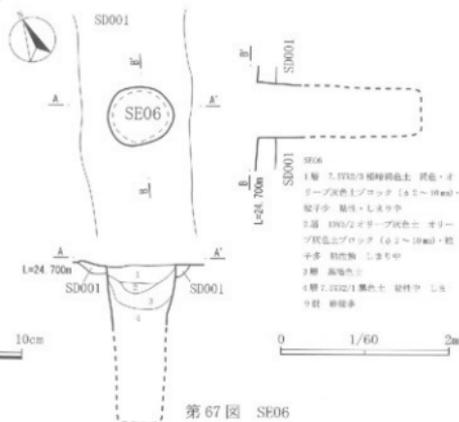
②形状・規模・覆土：0.78 m × 0.68 mの平面円形で深さは1.93 m。地山砂礫層となる底部の標高は22.70 mを測る。覆土はオリブ灰色土～黒色土の4層を確認した。

③長軸方位：N-25° 一筆

④出土遺物：かわらけ



第68図 SE06 出土遺物



第67図 SE06

第45表 SE06 出土遺物観察表

番号	注記	種別	形状	口径	底径	器高	高さ	器形の特徴	胎形の特徴	造法	色調	胎土	存在数	備考
1	2-SK134	かわらけ	八雲小皿	(19.4)	(6.7)	2.9	24.5	平らな底部から45度角で縁でゆるやかに立ち上がる。	口縁の縁部、口縁未切り継ぎ後、無縫繋ぎ。	板瓦	全体 7.5SK2/4に 近い褐色	白色粘土・黄砂質土を含む。	全体の1/5	

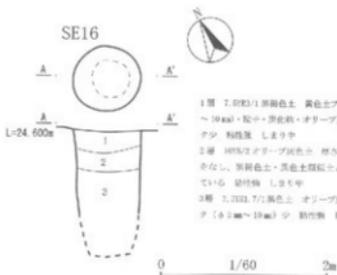
SE16 (第69・70図 第16・28図版 第46表)

①位置：E9-dに位置する素掘り井戸である。

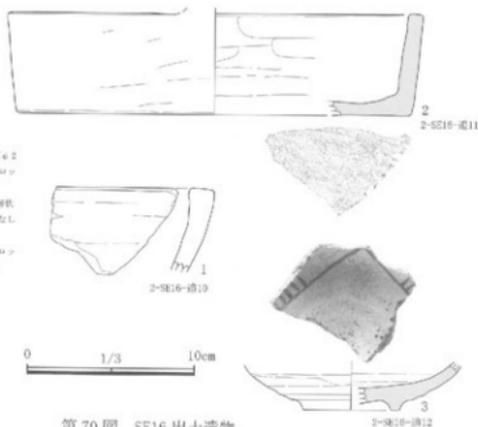
②形状・規模・覆土：0.78 m × 0.75 m、深さは1.48 mとなり、砂礫層である底部の標高は23.12 mを測る。覆土は3層を確認した。

③長軸方位：N-88° 一E

④出土遺物：土師質土器・陶器



第69図 SE16



第70図 SE16 出土遺物

第46表 SE16 出土遺物観察表

番号	注記	種名	素材	口径	底径	高さ	質量	器形の特徴	装彩の特徴	地味	色調	胎土	残存状況	備考
1	2-2-19 ・45E 一括	土師質土器	滑	—	—	(5.1)	66.2	平らな口唇で、ほぼ軸成に立ち上がる。	同軸台使用。	良好	内外面 7.5YR2/2濃褐色	白色微粒子 やや多い。	口縁部 剥片	外面厚残
2	2-2-16 ・35E 一括	土師質土器	埴埴	(24.9)	(23.6)	(5.2)	98.9	平らな底面から垂直に立ち上がる。口唇は平縁となる。	同軸台使用。	良好	内外面 7.5YR5/4に 近い褐色	白色微粒子・ 炭屑微粒子 やや多い。 骨片含む。	全体の 1/8	外面磨蝕のため 高さ
3	2-2-15 ・45E 一括	陶器	志野焼 露肌	—	(5.7)	(2.9)	55.8	内反り裏台から30度ほどの角度で縁外側に突く。	ロクハ型形。削り出し器台。器下平縁台へテ張り調整。	優良	内外面 10YR3/2灰 白色の志野 利益胎 10YR2/3に 近い黄褐色	灰色・赤色 微粒子若干含 む。	底部の 1/3	足込みに方形区 画はか跡状 (5YR4/2灰褐色) 焼痕(17世紀前 後)

SE17 (第71図 第16・28図版)

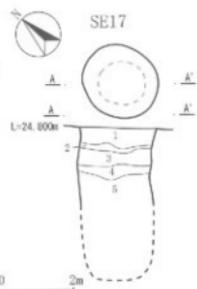
①位置：E9-c、E10-aに位置する素掘り井戸である。

②形状・規模・覆土：0.93 m × 0.90 mの平面円形をした素掘り井戸で、確認面から底部までの深さは2.00 mとなり、砂礫層である底部の標高は22.80 mを測る。覆土は極暗褐色土～黒色土に至る5層を確認している。

③長軸方向：N-0° ④出土遺物：掲載遺物はなし。

注記

- 1層 7.5YR2/3濃褐色土 黄色土ブロック (φ 2～10 cm)・灰・灰オレンジ色土ブロック (φ 2～10 cm) シ
- 2層 7.5YR2/3濃褐色土 黄色土ブロック (φ 2～10 cm)・灰・灰オレンジ色土ブロック (φ 2～10 cm) シ
- 3層 7.5YR2/3濃褐色土 黄色土ブロック (φ 2～10 cm)・灰・灰オレンジ色土ブロック (φ 2～10 cm) 中
- 4層 7.5YR2/3濃褐色土 灰チタン色土ブロックシ 厚2.50 cmの鉄釘に覆状をなして入る
- 5層 7.5YR2/2濃褐色土 灰オレンジ色土ブロック (φ 10～30 cm) シ



第71図 SE17

SE18 (第72図 第16図版)

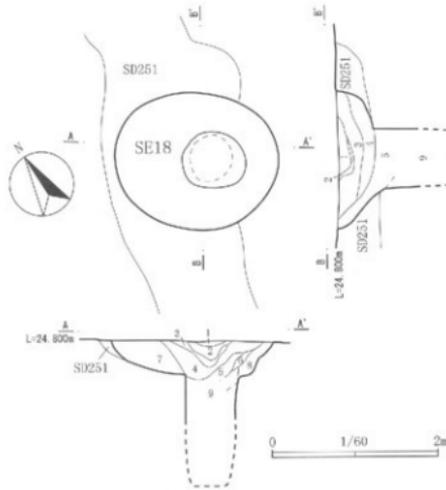
①位置・重複：E9-dに位置し、SD251を切る。

②形状・規模・覆土：1.92 m × 1.64 mの平面円形で深さは1.73 mで砂礫層に至る。底部に至る途中、40 cm掘り下げたところにステップがあり掘方をなし、生活で使用したプランは0.78 m × 0.70 mの平面円形をなして、その断面は漏斗状となっている。底部の標高は22.82 mである。

覆土は9層まで確認し、1～6・9層が埋没土、7・8層が掘方である。1～6層はレンズ状堆積に近いが、極暗褐色土～黒褐色土に至り、焼土・黄色・灰色ブロックを混入しており人為堆積の様相がある。

③長軸方向：N-55° 一層

④遺物：なし。



第72図 SE18

- 1層 7.5YR2/3濃褐色土 黄色土ブロック (φ 2 cm)・微粒子多 オリーブブロック (φ 2～10 cm) 多 粘性强 しより中
- 2層 7.5YR2/3濃褐色土 炭化物少 粘性强 しより中
- 3層 7.5YR4/6赤褐色 (焼跡) 炭化物無 粘性强 しより中
- 4層 7.5YR2/3濃褐色土 黄色土ブロック (φ 2～10 cm)・灰・炭化物少 粘性强 しより中
- 5層 7.5YR2/3濃褐色土 灰チタン色土ブロック (φ 2～10 cm) 中 粘性强 しより中
- 6層 7.5YR2/3濃褐色土 黄色土ブロック (φ 2～10 cm)・微粒子多 灰チタン色土ブロック (φ 2～10 cm) 中 粘性强 しより中
- 7層 5YR4/2灰白色土 濃赤・炭化物少 粘性强 しより中
- 8層 7.5YR2/3濃褐色土 濃赤・炭化物少 粘性强 しより中
- 9層 7.5YR2/3濃褐色土 炭化物少・灰チタン色土ブロック (φ 2 cm) 少 粘性强 しより中

(4)SX(池)

SX1 (第73・74図 第13・29・35図版 第47表)

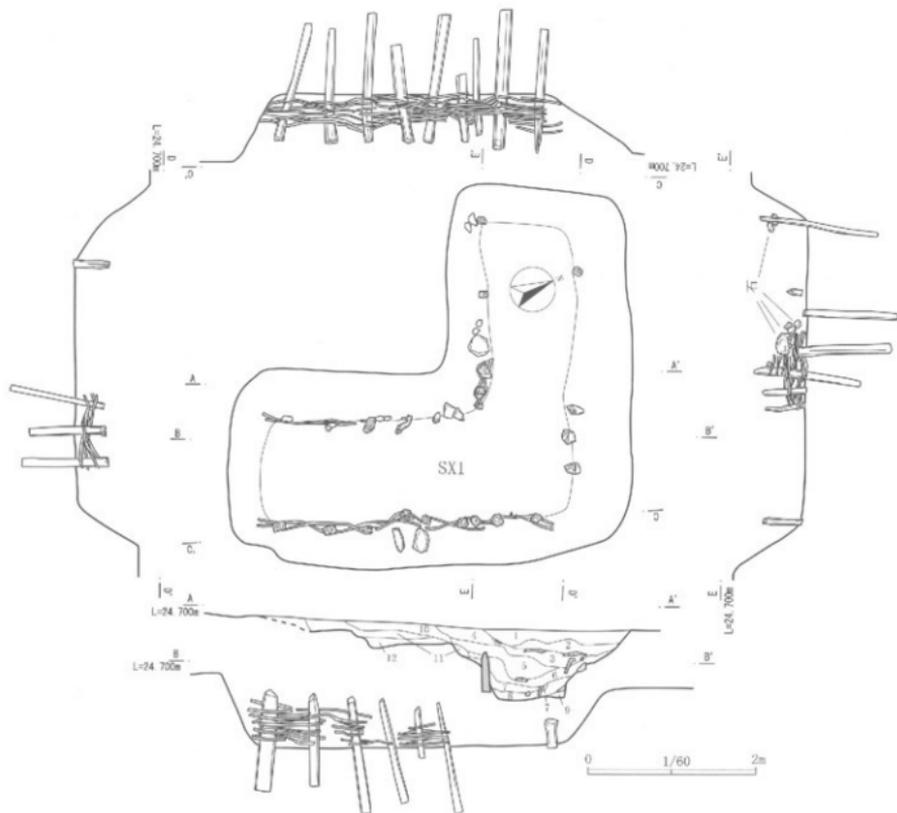
①位置：F10-b、F11-a・cに位置する。

②形状・規模・覆土：南北4.78m×東西4.60mの平面L字形で、深さ0.86mを測る。

③長軸方向：N-23°-E

④施設：竹材で「柵」(しがらみ)された杭25本で側面を土止めし、東西の側面は11・12層のように裏込めをし、礎や木端を混入させていた。黒褐色土～オリーブ灰色土に至る12層の堆積がみられる。

⑤出土遺物：覆土中から、かわらけ及び木製の蓋が出土している。

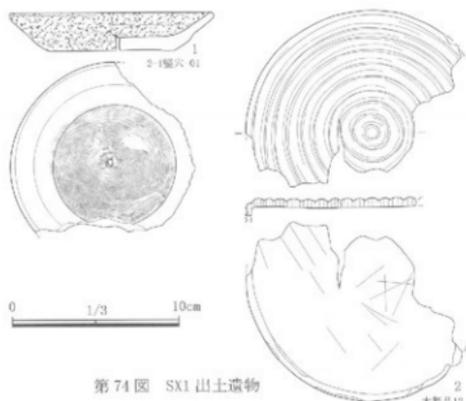


第73図 SX1

533

- 1層 7.0322/1 黒褐色土 焼土塊多 オリーブ灰色土粒子 粘性强 しまり中
- 2層 7.0322/1 黒色土 炭化ブロック・オリーブ灰色土粒子少 砂質 粘性强 しまり中
- 3層 7.0322/1 黒色土 炭化ブロック・オリーブ灰色土粒子少 砂質 粘性强 しまり中
- 4層 7.0322/1 黒色土 炭化ブロック多 2~10mm 多 オリーブ灰色土ブロック多 砂質シロト 粘性・しまり中
- 5層 7.0322/1 黒色土 炭化ブロック多 2~10mm 多 オリーブ灰色土ブロック多 粘性强 しまり中
- 6層 7.0322/1 黒色土 炭化ブロック多 2~10mm 多 オリーブ灰色土粒子多 粘性强 しまり中

- 7層 7.0322/1 黒色土 炭化ブロック多 2~10mm 多 オリーブ灰色土粒子中 粘性强 しまり中
- 8層 7.0322/1 黒色土 炭化ブロック多 2~10mm 多 オリーブ灰色土粒子中 粘性强 しまり中
- 9層 7.0322/1 黒色土 炭化ブロック多 2~10mm 多 オリーブ灰色土粒子中 粘性强 しまり中
- 10層 7.0322/1 黒褐色土 炭化ブロック多 2~10mm 多 オリーブ灰色土粒子多 粘性强 しまり中
- 11層 1075/1 オリーブ灰色土 炭化ブロック多 2~10mm 多 褐色土ブロック 粘性强 しまり中
- 12層 7.0322/1 赤色土 炭化ブロック・オリーブ灰色土粒子中 砂質 粘性强 しまり中



第74図 SX1出土遺物

木製品12

第47表 SX1出土遺物観察表

番号	日記	層位	器種	口径	外径	深径	重量	器形の特徴	器形のゆがみ	組成	色澤	割土	存在率	備考
1	2-11号	かわらけ	C層中皿	6.8	7.6	2.3	93.2	大きめの武器から60度角で、直線的に立ち上がる、浅い皿。	ロウカ型皿、右回転糸切り隠し痕、横ナガ割痕。	改良	全体 2.5V/2底 黄色	豆母曲線了 若干含む。 破損。	全体の 3/3	内全面に覆付着。足込み中央に小孔。横舌に使用か。
2	2-4号 型穴 No.2	木製品	蒜母蓋	外径 (11.0)	内径 (14.2)	(1.0)	—	平面円形、平蓋な天井部で、裏面に意下する樹液が窪かに残る。	外面にはほぼ正円の同心円文が引まれた。樹液にも同じ間隔の窪凸面が出るものとみられる。	—	酸化のため 2.5V/2黒 褐色を呈する。	—	1/2	分析より15分子の可能性がある。

(5)SK(土坑)

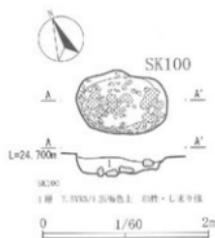
SK100 (第70図 第14図版)

①位置: E11-c に位置する。

②形状・規模・覆土: 108 cm × 78 cm の平面楕円形で深さ 21 cm を測る。覆土は黒褐色土上の単層からなり多量の糠を検出している。

③長軸方向: N-22° 一冊

④出土遺物: なし。



第75図 SK100

SK106 (第76図)

①位置: F11-a に位置する。

②形状・規模・覆土: 60 cm × 48 cm の平面円形で深さ 42 cm を測る。覆土は極暗褐色土上へオリーブ灰色土の3層からなる。

③長軸方向: N-60° 一冊

④出土遺物: なし。



第76図 SK106

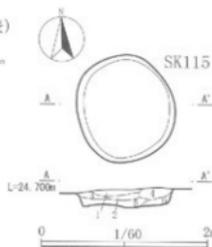
SK115 (第77・78図 第48表)

①位置: E10-e・dに位置する。

②形状・規模: 135 cm × 120 cmの平面円形で深さ35 cmを測る。

③長軸方向: N-14° — E

④出土遺物: かわらけ



第77図 SK115

SK115

- 1層 7.1312/1黒褐色土 黄土土・灰色土ブロック(φ2〜10cm)少 散在物あり
- 2層 7.1312/1赤褐色土 黄土土・灰色土ブロック(φ2〜10cm)多 散在物あり
- 3層 7.1312/1赤褐色土 黄土土ブロック(φ2〜10cm)多 散在物多 柱穴跡あり
- 4層 7.1312/1黒褐色土 黄土土ブロック(φ2〜10cm)多 散在物多 柱穴跡あり
- 5層 7.1313/4 暗褐色土 黄土土ブロック(φ2〜10cm)の破片に入る 柱穴跡あり
- 6層 7.1313/1 赤褐色土 黄土土ブロック(φ2〜10cm)の破片に入る 柱穴跡あり



第78図 SK115出土遺物

第48表 SK115出土遺物観察表

区分	柱記	層位	器種	口径	底径	深さ	重量	発掘の状況	発掘の数量	形状	色調	粘土	残存度	備考
1	2-SK115	かわらけ	A 中皿	(11.5)	(6.9)	3	35.9	小さな道徳から40度角で縦やうに立ち上がる。途中の2箇所に深い口はロ目あり。	ロタロ形。右面に浅く刻み残し後、細灰粒。	中や良	内外面 7.1312/1に gray 褐色	雲母散在物若干あり。褐色赤褐色	全体の1/8	口縁内外に漆付痕

SK116 (第79図)

①位置: E11-dに位置する。

②形状・規模・覆土: 78 cm × 66 cmの平面円形で深さは30 cmを測る。覆土は黒褐色土2層からなる。

③長軸方向: N-49° — E

④出土遺物: なし



第79図 SK116

SK116

- 1層 7.1313/1 赤褐色土 黄土土ブロック(φ2〜10cm)・粘土・散在物少 柱穴・しまり痕
- 2層 7.1313/1 赤褐色土 黄土土ブロック(φ2〜10cm)・粘土・散在物少 柱穴・しまり痕



第80図 SK139

SK139

- 1層 7.1313/1 黒褐色土 砂質シルト 黄土土ブロック
- 2層 7.1313/1 赤褐色土 黄土土ブロック(φ2〜10cm)・粘土・砂粒多 柱穴跡あり

SK139 (第80図)

①位置: E9-d、F9-bに位置する。

②形状・規模・覆土: 108 cm × 84 cmの平面楕円形で深さ37 cmを測る。黒褐色土の単層からなる。

③長軸方向: N-78° — E

④出土遺物: 掲載遺物はなし。

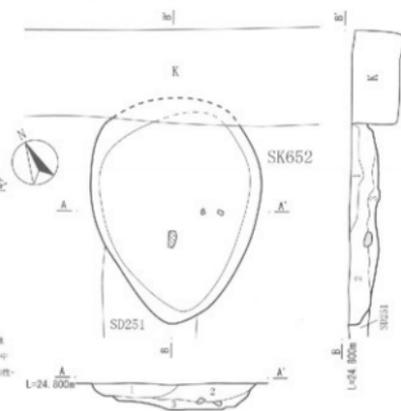
SK652 (第81・82図 第14図版 第49表)

①位置: D9-d、E9-bに位置し、SD251を切る。

②形状・規模: 276 cm × 210 cmの平面楕円形で深さ43 cmを測る。

③長軸方向: N-29° — E

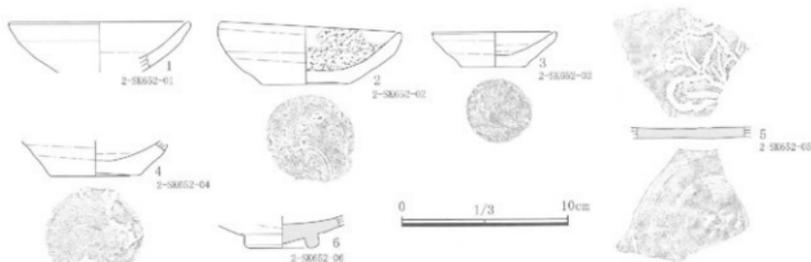
④出土遺物: かわらけ・土師質土器・陶器



第81図 SK652

SK652

- 1層 7.1314/3 褐色土 赤褐色土(φ2〜20cm) マーブA状に入る 柱穴・しまり痕
- 2層 7.1314/1 高褐色土 黄土土ブロック(φ2〜10cm)・粘土少 柱穴跡あり
- 3層 7.1316/2 灰褐色土 黄土土ブロック(φ2〜10cm) マーブA状に少量入る 柱穴・しまり痕



第82図 SK652 出土遺物

第49表 SK652 出土遺物観察表

番号	図記	種類	口径	底径	高さ	重量	器形の特徴	裝飾の特徴	地成	色調	胎土	保存度	備考	
1	2-SK652-01	かわらけ	A型大皿 (10.9)	—	4.0	34.1	36度ほどの奥度で、腹中が立ち上がる。	ロクロ製形。	やや不良	内外面、白灰色	黒色・黄褐色の粗粒子若干。胎肉7.5/37/31にふくまぬ。	口縁部の1/4	二次焼成による黒化	
2	2-SK652-02	かわらけ	A型中皿	10.7	5.2	3.9	172.5	突如異色の武器から30度角で鋭やかに立ち上がり、口縁で直置きとなる。	ロクロ製形。切り離し不明。底縁から体下半まで深い黒化へず削り剥ぎ。	良好	内外面、7.5/37/31にふくまぬ。	白色・雲母質粗粒子若干を含む。	完存	津波津塚に利用
3	2-SK652-03	かわらけ	B型小皿	7.4	3.9	3.1	64.2	平らな武器から35度角で草蓐的に立ち上がり、口縁部が分離し。	ロクロ製形。切り離し不明。ナズ削り。	不良	全体、7.5/37/31に黄褐色。	黒色・雲母質粗粒子若干を含む。	完存	
4	2-SK652-04	土師質土器	碗	—	5.4	42.1	92.4	突如異色の武器から30度角で草蓐的に立ち上がる。	コクロ製形。ヘラ削こし切り離し。	良好	全体、7.5/37/21に黄褐色。	白色質・雲母質粗粒子若干を含む。	底縁のみ	
5	2-SK652-05	瓦器	黄褐色大皿	—	—	40.6	43.2	平らな底面。	回転成形用。回転へず削り。	不良	内面8/19/3、オリーブ黄褐色の黄褐色粗粒子若干を含む。胎肉7.5/37/31にふくまぬ。	黒色・雲母質粗粒子若干を含む。底縁の一部	瓦器の一部	瓦詰みに西正文、黄褐色大皿の4枚
6	2-SK652-06	陶器	碗	—	3.7	41.93	21.6	分厚い口台からほぼ水平に開く。	ロクロ製形。削り出し製形。	不良	内外面、2.5/8/13に白色の長石粉が混入あり。	黒色粗粒子若干を含む。	底部の3/4	新井崎遺跡遺構17世紀

(6) 並ぶ石 (第83図 第9・10図版)

①位置：SB02の西側であるF11-a・bに位置し、そこから概ね南西方向に走向する。

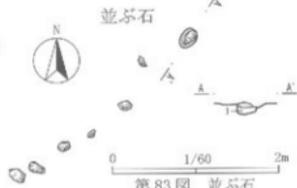
②形状・規模・覆土：径13～24cmの割石・自然石を使用している。各石間の距離は0.20～0.50m、全体で2.84mを測る。最も北側の石の下には、25cm×20cm、楕円形プランの掘り込みがあり、掘り込みの深さは12cm、覆土は暗褐色土の単層が存在する。

③方向E-57°—E

④出土遺物：なし

並ぶ石

1層 暗褐色土7.5/37/4粗粒・しりぞき
 2層 白色・褐色土ブロック (6.2×10) 粒
 十多くマール・表に混入



第83図 並ぶ石

(7) SD (溝)

SD001 (第84・85図 第14図版 第50表)

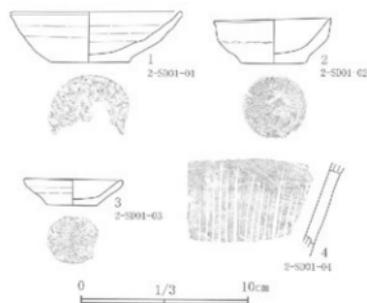
①位置・重複：E10-c・d、F10-aに位置する。SE06に切られる。

②形状・規模：幅1.12～1.39m、深さ0.27～0.33m、底部標高は北で24.31m、南で24.27mとなり概ね24.30m前後を測る。断面形状は鍋底形を呈している。

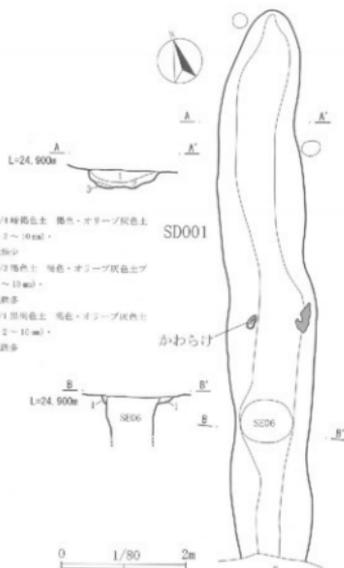
③走行方向：N-17°—E

④出土遺物：掲載遺物はなし

⑤備考：他の堀・溝との関係から整地面下の遺構の可能性も考えられるところだが、遺構上面及び調査区駅跡が攪乱を受けており、ここでは整地面上面扱いにすることにした。



第85図 SD001出土遺物



第84図 SD001

第50表 SD001出土遺物観察表

番号	注記	遺物	種別	口径	底径	高さ	重量	形状の特徴	形状の留意	輪径	色調	粘土	残存感	備考
1	2-S001	かわらけ	A型中皿	13.2	4.5	3.1	72.7	突出する底面から30度角で縁やかに丸みを持って立ち上がる。	ロクロ製形。	優良	全体 7.5YR6/9褐色	褐色・白色 粒子多い。 雲母層千枚含む。	全体の 3/4	
2	2-S001	かわらけ	A型小皿	7.1	3.9	2.7	69.5	突出する底面から30度角で縁やかに丸みを持って立ち上がる。	ロクロ製形。右面 船形張り強し版、 無調整。	優良	全体 7.5YR7/2黄 褐色	白粉粒子や 雲母層千枚、 雲母層千枚含む。	完全	
3	2-S001	かわらけ	B型中皿	(5.9)	3.0	2.1	15.3	わずかに突出無味の底面から30度角で縁的に立ち上がる。	ロクロ製形。	優良	全体 7.5YR6/9褐色	褐色・白色 ・雲母層千枚 千枚含む。	全体の 1/3	
4	2-S001	土曜質土器	楕円	—	—	(5.7)	72.2	ほぼ45度角で縁的に固く。	全面滑らず調整。 4本1単位の様目 が見込みに施される。	内外面 7.5YR3/1暗 褐色	緑色。端角 7.5YR2/2 褐色	ほぼ完全		

(8) ビット (第86図 第29図版 第51～54表)

検出されたビット群は掘立柱建物として組めたもの、標列と判断されるものなどは同一遺構として捉えた。その他のビットの平面図は全体図に掲載した。尚、断面図は割愛した。各ビットの計測値は以下に示した。

第51表 2区ビット計測一覧表(1)

地区	遺構名	検出グリッド	高さ・形値				備考
			長径 (cm)	短径 (cm)	高さ (cm)	平面形	
2区 第1区	P001	G4-b	59	49	44	楕円形	
	P002	G4-b	45	45	21	円形	
	P003	G4-a	43	35	38	楕円形	

地区	表層名	検出グリッド	高さ・形値				備考
			長径 (cm)	短径 (cm)	高さ (cm)	平面形	
2区 第1区	P004	G4-a	28	24	20	円形	
	P005	F4-c	32	38	50	円形	
	P006	G4-a	20	16	12	円形	

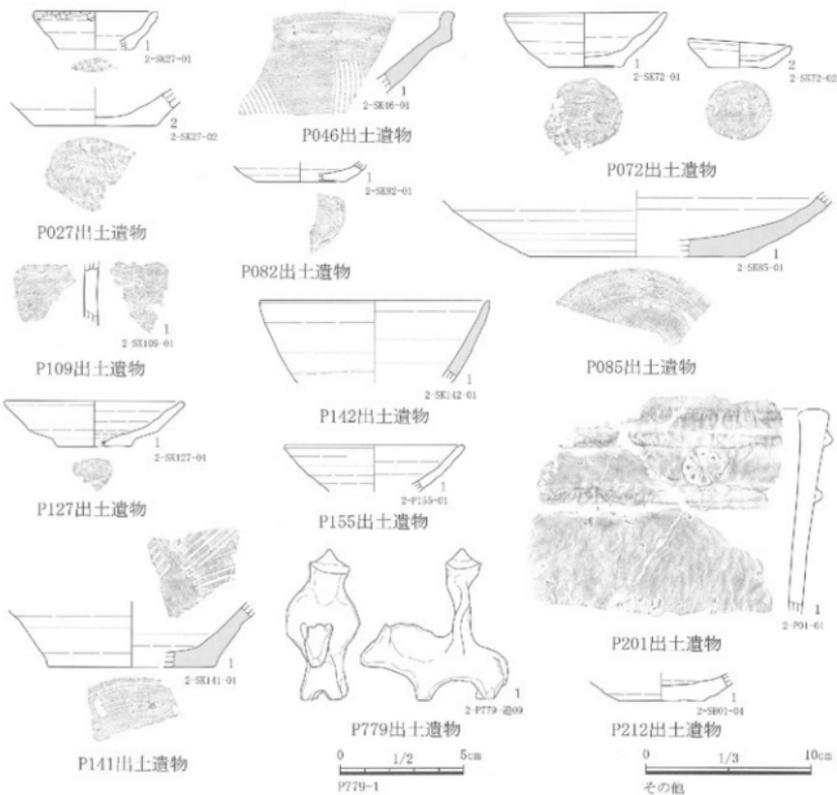
第52表 2×6ビット計測一覧表(2)

地区	編隊名	機・アグリッド	角幅・距離			備考
			方位 (°)	距離 (m)	手回角	
	P007	F13-d	28	25	70°	
	P008 a	G13-a	36	16	23°	P008-aを切る
	P008 b	G13-a	52	38	16°	P008-aに切られる
	P009 c	G13-a	26	20	36°	
	P011	G13-a	36	32	34°	F124を切る
	P012	G13-b	41	40	22°	
	P013	G14 a	25	24	12°	
	P014	G13 c	54	20	29°	
	P015	F13-c	28	28	18°	
	P016	F13-d	24	21	27°	銀石残存
	P017	F13-d	41	41	55°	水質残存
	P019	F13-c	15	36	58°	橋内形
	P020	G13-a	35	20	19°	橋内形
	P028	F13 c	35	24	18°	橋内形
	P032	G12-b	20	20	65°	橋
	P033	G12-b	36	36	27°	橋
	P034 a	G12-b	60	60	69°	P034-aを切る
	P034 b	G12-b	25	25	43°	橋
	P035 a	G12 b	36	32	25°	橋内形
	P035 b	G12-b	36	26	29°	橋
	P042	G12-a	60	22	63°	橋内形
	P043	G12-a	44	40	25°	橋
	P044	F12-c	22	24	14°	橋内形 銀石残存
	P045	F12-c	52	41	21°	橋内形
	P048	G12-a	36	36	28°	橋
	P054	F12-c	57	48	38°	橋
	P065	G11 b	32	32	19°	橋 銀石残存
	P066	G11 b	28	28	29°	橋
	P060	F12-a	110	90	32°	橋内形 SB02 P060に切られる
	P063	F11-b	48	20	32°	橋内形
	P065	F11-d	48	44	14°	橋
	P066	F11-d	32	24	31°	橋内形
	P073	F11-d	38	45	52°	橋内形 SB02 P066に切られる
	P076	F11-c	36	28	64°	橋内形
	P077	F11-c	36	32	41°	橋 P076を切る
	P078	F11 c	32	28	43°	橋内形 P077に切られる
	P085	F11-a	36	32	33°	橋
	P087	F11 c	40	40	48°	橋内形
	P091	F11 a	64	24	33°	橋内形
	P092	F10-b	48	40	23°	橋内形 P104を切る
	P093	F10-c	32	32	53°	橋内形
	P094	E11-c	28	24	27°	橋内形
	P095	E11-c	44	38	28°	橋内形
	P096	E11-c	28	20	22°	橋内形
	P097	F11-c	32	20	20°	橋内形
	P098	F11-a	32	28	36°	橋内形
	P099	F11-a	32	28	17°	橋内形
	P100	F11-c	112	60	21°	橋内形
	P104	F10-b	36	35	26°	橋内形 P092に切られる
	P107	F10 f	24	24	25°	橋内形

地区	編隊名	機出アグリッド	距離・形数			備考
			方位 (°)	距離 (m)	形数	
5区 橋上区	P108	F10-d	22	20	21°	橋内形
	P109	F10-d	38	24	17°	橋内形
	P116	E11 e	68	60	61°	橋内形
	P120	G13 a	24	24	41°	橋内形
	P124	G13-a	24	20	16°	P011に切られる
	P126	F13-d	36	24	29°	橋内形
	P127	F11-b	92	88	26°	橋内形
	P128	G12-c	40	40	34°	橋内形
	P129-a	F11-d	24	20	34°	橋内形
	P130	E11 c	24	20	20°	橋内形
	P132	F13 c	80	36	50°	橋内形 銀石残存
	P133	E10-c	20	20	23°	橋内形
	P136	E10-a	48	40	38°	橋内形
	P137	E09-b	40	36	43°	橋内形
	P138	F09-c	36	32	38°	橋内形
P140	F09 d	36	32	27°	橋内形	
P141	F09 d	48	40	42°	橋内形	
P143	F09 f	56	40	29°	橋内形	
P144	F09-c	36	20	36°	橋内形	
P145	F09-d	40	32	37°	橋内形	
P146	F09-d	60	62	27°	橋内形	
P147	F09-c	56	48	38°	橋内形	
P148	F10-c	28	20	23°	橋内形	
P153	G11-b	32	24	27°	橋内形	
P154	G13 a	48	44	21°	橋内形	
P161	F11 a	40	40	70°	橋内形	
P162	F12 a	40	36	38°	橋内形	
P201	F13-d	44	40	17°	橋内形 銀石残存	
P202	G12-b	44	32	30°	橋内形 銀石残存	
P206	G12-a	44	36	10°	橋内形 銀石残存	
P207	G12-c	24	20	43°	橋内形	
P209	G14-a	20	20	5°	橋内形	
P210	G14-a	32	28	3°	橋内形	
P211	G14-a	40	36	6°	橋内形 橋柱抽出	
2区 築2階	P703	E10-a	64	60	27°	橋内形
	P701	F09-c	32	28	41°	橋内形
	P705	E9-d	48	32	29°	橋内形
	P706	E9-c	36	32	32°	橋内形
	P708	E9 c	36	28	30°	橋内形
	P709	E9 c	48	36	28°	橋内形
	P710	E9-c	36	30	29°	橋内形
	P712	E9-c	40	32	29°	橋内形
	P713	E9-c	32	28	32°	橋内形
	P722	F9-c	62	48	46°	橋内形
	P733	F9-b	40	36	28°	橋内形
	P734	E9-b	50	32	50°	橋内形
	P735	F9-b	32	28	43°	橋内形
	P736	F9 b	32	28	40°	橋内形
	P737	F9-b	28	28	23°	橋内形
P759	F10 a	36	32	33°	橋内形	

第 53 表 2 区ビット計測一覧表 (3)

地区	遺構名	検出グラッド	形状・形迹			備考
			長さ (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	
3区 扇之浦	P278	29-a	36	32	27 円形	
	P279	29-a	46	26	28 楕円形	



第 86 図 2 区ビット出土遺物

第54表 2区ビット用土産物観察表

番号	日配	産種	産地	口徑	底径	高さ	重量	産物の形質	産物の形態	用途	色調	胎上	灰分率	備考
P002 1	2-3822	積糞	豊前 宮	口径 25.9mm		—	3.7		—		—	明	共存	大正11年明治
P027 1	2-3827	かわらけ	B加江 瓦	(7.3)	(4.6)	2.3	11.9	やや丸みのある産 物から60度角で、 底や口に立ち上 がる。	ロクロ製焼き成 形、切り敷し不 明。	良好	全体0986/6 褐色	白色・黄帯 胎上不明	全体の 1/2	大明山産に類 似、口縁部に 同心状。
P027 2	2-3827	かわらけ	B厚瓦		(7.4)	(2.3)	30.2	平らな産物から30 度角で多量的に立 ち上がる。	ロクロ製形、切り 敷し不明、一方内 へつ張り異状。	良好	外周0950/8 産物色内周 0950/11区 褐色	胎上、黄帯 若干含む。	胎上不明	
P046 1	2-3846	陶器	播磨	(28.0)	—	(5.0)	69.3	口径6cmの蓋形の口 縁部を持ち、口内 は胎上。	陶器台使用、8本 1単位の場合。	良好	内外面 7.383/11 帯褐色の胎 上白色	胎上胎上 若干含む。	1胎上 胎上	美濃西大藏 0950/10区 胎上
P072 1	2-3872	かわらけ	A釜中 皿	9.7	4.5	3.3	67.6	突出部のある産物 から55度角で丸み を持って立ち上 がる。	ロクロ製形、右回 転糸切り製し後、 一方内へつ張り。	良好	全体 7.5183/23 黄褐色	白色黄帯 若干含む。	全体の 3/4	
P072 2	2-3872	かわらけ	B釜中 皿	6.1	3.6	1.5	30.3	大きめの産物から 25度角で、量的 に立ち上がる。	ロクロ製形、胎 上糸切り製し後、 胎上とも平手切 り。	良好	全体 7.5187/42 白・褐色	白色・黄帯 胎上不明。	共存	
P082 1	2-3882	かわらけ	A釜中 皿		(5.1)	(1.2)	11.5	丸みのある産物 から25度角で胎 上に立ち上がる。	ロクロ製形、胎 上糸切り製し後、 胎上	良好	全体0986/6 内	胎上黄帯 若干含む。	胎上胎 上	胎上に胎上
P085 1	2-3885	陶器	豊前	—	(13.0)	(4.0)	192.5	大衆の産で、平ら な産物から25度角 で胎上に立ち上 がる。	ロクロ製形、切 り敷し不明、全 へつ張り。	良好	外周 2.0393/26 帯褐色内周 2.0393/26 褐色の胎 上	白色胎上 若干含む。 胎上 7.3187/6 内	胎上の 1/4	胎上、内周 胎上。
P109 2	3-1109	縄文土器	産地	—		(4.1)	11.1	縄文産物。	胎上に縄文を施 す。	良好	全体 7.3182/1 褐色	胎上胎上 多い。	胎上胎 上	胎上胎 上
P127 1	2-38127	かわらけ	A釜中 皿	11.7	5.3	2.75	17.2	突出した産物から 30度角で立ち上 がり、胎上で117 タ目がある。	ロクロ製形、胎 上不明。	良好	全体 7.5187/6 白・褐色	白色・黄帯 胎上若干 含む。	全体の 1/6	
P141 1	2-38141	陶器	播磨	—	(10.1)	(3.95)	51.3	平らな産物。	陶器台使用、胎 上糸切り。	良好	内外面 7.383/11 帯褐色の胎 上	白色大胎 上不明。胎 上胎上/11 白色	胎上胎 上	胎上、胎 上胎上
P142 1	2-38142	陶器	豊前	(17.0)	—	(5.3)	24.2	口縁部まで量的 に立ち上がる。	ロクロ製形。	良好	内外面 7.5173/3 黄褐色の胎 上白色	胎上胎上 若干含む。 胎上胎 上/6 白色	1胎上 胎上	胎上、胎 上胎上
P155 1	2-4155	かわらけ	A釜中 皿	(10.8)	—	(2.85)	22.5	口縁部まで量的 に立ち上がる。	ロクロ製形。	良好	全体 7.5186/6 内	白色・黄帯 胎上若干 含む。	1胎上 胎上	
P201 1	2-4201	瓦類土器	肥後文 太神	—	—	(12.5)	228.7	垂直に立つ口縁部 に胎上胎上を施 す。丸・胎上形。	陶器台使用。	良好	内外面 10186/1 胎上	白色胎上 や多い。胎 上胎上。	胎上胎 上	胎上胎 上
P212 1	2-5219	かわらけ	A釜中 皿	—	5.1	(1.7)	47.2	やや深んだ産物 から丸みを持って 立ち上がる。	ロクロ製形。	良好	内外面 10186/2 胎上 白色	白色胎上 や多い。胎 上胎上/1 胎上胎 上	胎上の み	
P779 1	2-2次 産P779	土製品	土人形	長6.3	幅3.0	6.1	28.2	串を渡った胎上 胎上。	手作り成形、胎 上胎上胎上胎 上の胎上胎上。	良好	全体 10187/3 白・黄褐色	胎上、胎 上胎上 若干含む。	胎上胎 上	胎上胎 上

第4節 2区 [第2面]

(1) SX (竪穴状遺構)

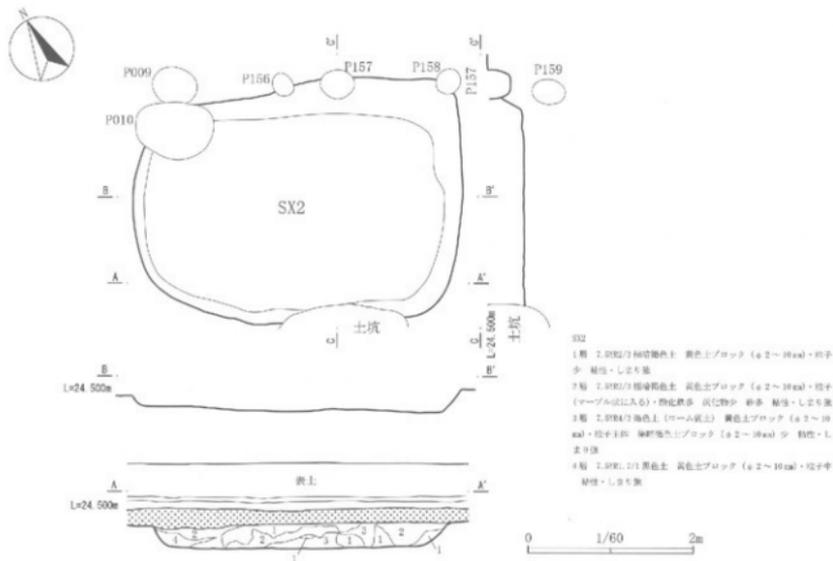
SX2 (第87図 第14・15図版)

①位置・重複: G13-c・dに位置し、調査区南壁際の断面図でみるように整地面の地山から掘り込まれている。また、第1面(整地面)上から、北壁ではSA13、P010に、南壁では現状で径150cm、深さ60cm以上の平面円形の土坑と考えられる遺構に切られている。

②形状・規模・覆土: 3.53m×2.80mの平面隅丸方形で、深さは0.30mを測る。覆土は極暗褐色土〜黒色土に至る人為堆積の様相を示す1〜4層が存在する。

③長軸方向: N-82° —E

④出土遺物: なし



第87図 SX2

(2) 堀

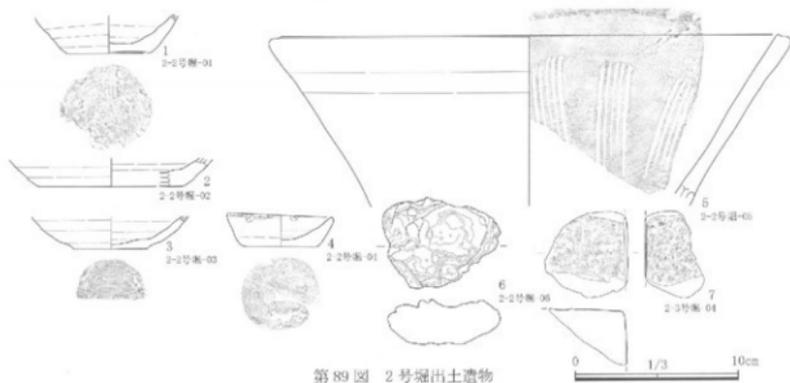
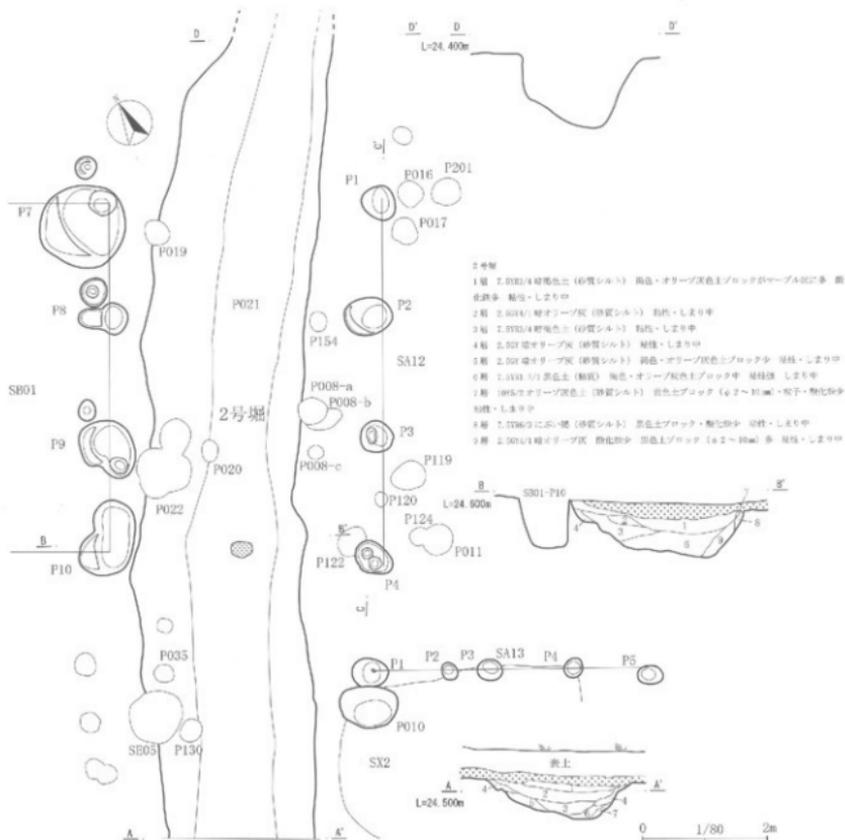
2号堀 (第88・89図 第15・35図版 第55表)

①位置・重複: F13-c・d, G12-b・d, G13-a・cに位置し整地面下から検出された。

②形状・規模・覆土: 幅1.60〜2.72m、深さ0.54〜0.95mの断面箱葉研形で、底部標高は北が23.76m、南が23.79mで概ね平坦となっている。覆土は暗褐色土〜にぶい褐色土に至る8層からなる堆積を示している。

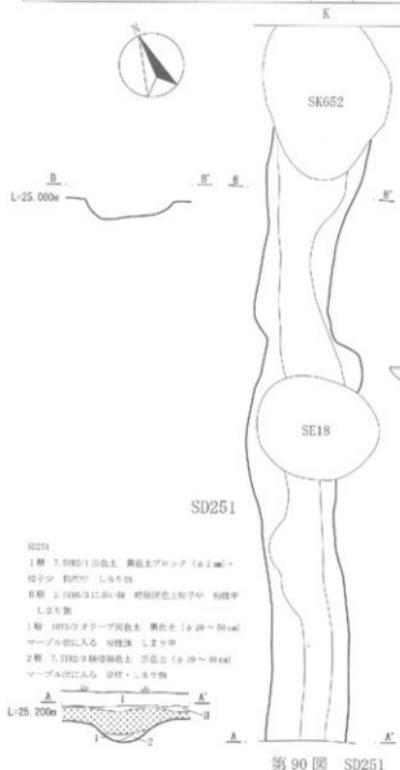
③長軸方向: N-32° —E

④出土遺物: 堀側面に打ち込まれ、立位で検出された杭(現地番号No.4)は面取りされた角材で、ほぞ穴があった。遺物は覆土中から出土している。その他の遺物はすべて覆土中から出土したものである。



第56表 2号出土土遺物観察表

番号	注記	種類	図号	口径	底径	高さ	重量	器形の特色	器形の和名	構成	胎土	胎土	紋付所	備考
1	2-2*9 81-18	かわらけ	A器の 皿	—	5.2	(2.4)	63.4	平らな底面から50 度角で中の丸みを 持つて立ち上がる。	コクロ型形、右四 輪高直り厚し、 無調整。	襷立	全体 7.0Y85/6淡 黄緑色	底面散粒土 若干含む。	全体 1/2	
2	2-2*9 81	かわらけ	中皿	—	9.40	(1.8)	27.2	底面角で立ち上 がる。	ワタコ型形。	襷立	全体3Y87/3 棕色	白色・藍色 散粒土若干 含む。	伴塚 1/2	図形不明
3	2-2*9 81	かわらけ	A器小 皿	—	(4.6)	(2.0)	18.1	やや傾斜状の底 面から30度角で壁 やかに立ち上 がる。	ワタコ型形。底部 一方を平持ちヘラ 状に調整。	襷立	全体 7.5Y85/3淡 黄緑色	白色大粒土 ・玉母若干 含む。	底面 1/2	
4	2-2*7 81-18	かわらけ	C器直 皿	8.4	4.7	1.95	48.8	平らな底面から70 度角で、2段壁に 立ち上がる。	ワタコ型形。底 面・壁下端一帯 ヘラ削り調整。	やや 良	内外面 7.5Y86/4に 近い白色	白色成子や 中多い。器 内7.0Y84/3 棕色	全体	灯明基壇に 用。灯心内 に調整。
5	2-2*1 No1	瓦質土器	指輪	(30.0)	—	(10.5)	223.3	ほぼ40度角でやや 反り気味に開く。	5本1組の環目 が4組ある。	瓦質	内外面3Y8 4淡灰色	底面散粒土 若干含む。 器内7.0Y8 4白色	口縁部 1/4	
6	2-2*9 81-18	土製品	軟骨	横6.5	横7.4	厚2.8	76.3	割けた断面が湾みに付着している。		—	表面6.0Y8 4白色 内面 5.0Y8/1灰 白色	—	破片	
7	2-2*9 81	土製品	練瓦の 破片	縦5.2	横3.1	厚3.4	64.7	板瓦状の角形の一 部。		良好	全体 7.0Y89/3淡 黄緑色	スチロの裏 入りあり。	—	



(3) SD (溝)

SD251 (第90・91図 第15・29図版 第56表)

①位置・重複：E9-b・c・d、F9-a・bの整地面下に位置

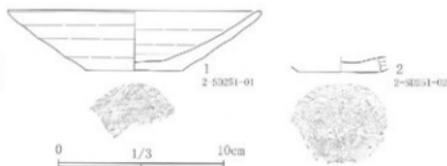
し南北に走向する。

②形状・規模：幅1.12～1.60m断面鍋底状となつて

いる。深さは0.54～0.95m、底部標高は北が23.44m、南が23.35mで南が低くなる。

③長軸方向：N-25°—E

④出土遺物：かわらけ



第91図 SD251出土遺物

SD251

1層 7.0Y82/1 灰色土、黄褐色ブロック (φ2cm)・
磁子片 数個中、しきり物

2層 7.0Y86/3 に近い緑 暗褐色土灰子中 粒中
しきり物

3層 10Y5/2 オリーブ灰色土、黄土土 (φ30～50cm)
マーブル状に入る 粘性土、しまり中

4層 7.0Y82/9 緑褐色土、灰土土 (φ30～50cm)
マーブル状に入る 粘り・しきり物

0 1/80 2m

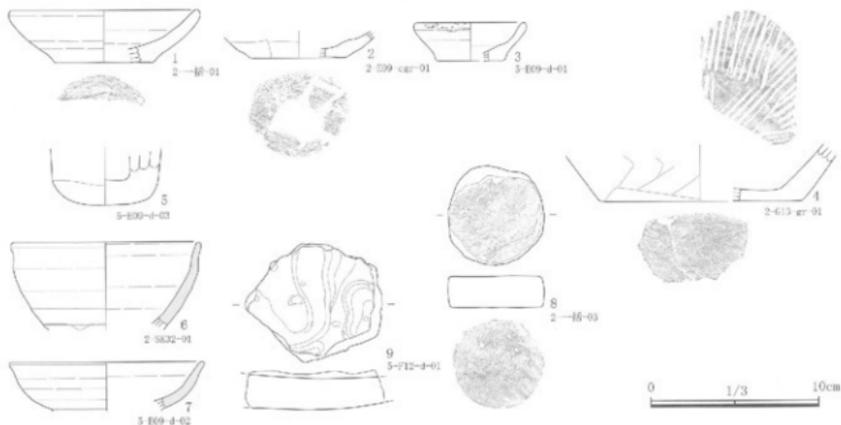
第90図 SD251

第56表 SD251 出土遺物観察表

番号	品記	種類	形状	口径	底径	高さ	重量	器形の特徴	器底の特徴	施装	色澤	胎土	保存度	備考
1	2-2次 遺物 SD15D	かわらけ	片断大皿	(16.2)	(3.0)	3.6	48.2	平らな底面から35度角で差線的に立ち上がる。	ロクロ整形。	瓦好	全体 2. 白灰/2割 黒褐色	白色・黒褐色 粘土質多量	全体の1/8	内面の剥離層
2	2-2次 遺物 SD15D	かわらけ	中皿	—	4.8	(8.9)	36.2	底部は平肌。	ロクロ整形。	優良	外面 7. 白灰/4割 黄褐色内面 5186/9褐色	白色・黒褐色 粘土質多量 多量。	底部のみ	

(4) 2区遺構外出土遺物 (第92図 第30図版 第57・58表)

本地区において検出された遺物のうち、遺構に伴わなかった遺物について以下に掲載する。



第92図 2区遺構外出土遺物

第57表 2区遺構外出土遺物観察表(1)

番号	品記	種類	形状	口径	底径	高さ	重量	器形の特徴	器底の特徴	施装	色澤	胎土	保存度	備考
1	2区一 遺物	かわらけ	A型中皿	(11.1)	(5.8)	3.8	32.1	やや浅く蓋部から30度角で差線的に削ぎ、途中から丸みを帯びてくる。	ロクロ整形。	良好	外面 7. 白灰/4割 赤褐色内面 7. 白灰/2割 に白い褐色	褐色赤粘土 やや多い。	全体の1/8	漆液容器として使用
2	2区一 遺物	かわらけ	A型中皿	—	5.8	(1.7)	38.7	やや突出気味の底部	ロクロ整形。切り離し不明。	良好	全面 7. 白灰/2割 白色	白色粘土 やや多い。	底部のみ	
3	2区一 遺物	かわらけ	A型中皿	(6.5)	(4.1)	(2.36)	11.4	突出する底部から60度角で差線的に立ち上がり、口縁部に縁を持つ。	ロクロ水掻き成形。切り離し不明。	優良	全体5186/8 褐色	白色粘土 やや多い。	全体の1/8	口縁部には転用、口縁部に口縁部。
4	2-613	土師質土器	鉢形	—	(12.9)	(2.3)	101.5	平らな底面から45度角で差線的に立ち上がる。		加飾台使用。体面下部平持ちへず削り面積。6.81口縁の縁が見込みに現像なく残される。	内外面 7. 白灰/2割 黒褐色	白色赤粘土 粘土質多量	底部のみ	
5	2区一 遺物	土師質土器	浅鉢形	—	(5.4)	(3.5)	96.3	平らな底面から60度角で差線的に立ち上がる。	手製成形。	良好	外面 7. 白灰/4割 黄褐色内面 2. 白灰/5割 褐色	白色大粒 やや多い。	底部のみ	
6	2-5832	赤銅	天目茶碗	(11.1)	—	(5.4)	58.7	60度ほどの角度で縁や口に立ち上がり、垂直な腹口となる。	ロクロ整形。	優良	内外面 5186/8に白 い赤褐色の 赤銅粉 15188/4反 白色	赤褐色赤銅 粉と混じり。	(1) 底部の1/4	瀬戸・赤銅産 17世紀前半

第58表 2区遺構外出土遺物観察表(2)

番号	土器	種類	形状	口径	底径	高さ	重量	取附の位置	取附の状態	焼成	色調	胎土	存在数	備考
7	99-41 一	陶器	丸皿	(11.5)	—	3.30	14.8	体部下端から20度角で向き、上半部は尖みを帯びて立ち上がる。	コタコ型形。	硬良	内外面 7.03%/灰 白色の長石 質	黒色粒子多 量。器内 黄白色	口縁部 の1/8	瀬戸・美濃系17 世紀前半
8	2区一 括	土製品	加土円 盤	径6.0	横5.8	厚 2.65	77.1		内面に加工。筒壁 の縁部断層。ある いは使用痕跡が。	良好	内外面32%/ 黄白色	黒色粒子多 い。器内 35%/灰色	完存	平仄破片を収 入
9	712-4	土製品	片土器 破片	径7.2	横6.3	厚2.3	127.2	内面にガラス状の 泡胞物付着。外面 は表面を呈する。			内面 7.502/1種 黒色光沢あり。外面 36.06%色	内面側は発 泡胞物。	一部分 のみ	ガラス製品種 型の可生あり。 300.4と 同一個体か。

第5節 3区

(1) SB (掘立柱建物跡)

SB05・SA16 (第93図 第18図版 第59・60表)

①位置・重複：I19-c、J19-a・bに位置する。SB06に隣接して検出された。

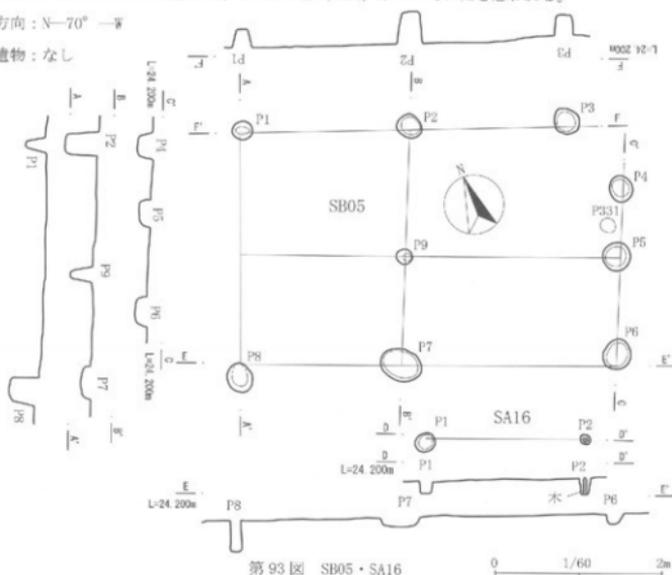
②形状・規模：2間1面と思われる建物跡である。概して東側を構成するP3～7は比較的大きな平面円形で浅いものに対して、西側ではP1・2・8が直径25～35cm、深さ30cm前後としっかりとした感がある。なお、建物の中央にP9があり、東柱と考えられる。

各柱間は、西側のP1・2間、P7・8間が2.0m前後、P1・8間が2.95mで、これはP2・9・7間と合致し、規格性がある。これに対し東側側はP4・5間が0.9m、P5・6間が1.2mと間隔が短く、桁行についてはP6・7間が2.5mと広く、逆にP2・3間は1.9mと狭いなど規格性に乏しい。全体として、北東隅を欠く長方形を呈し、東側部分には床が貼られていた可能性が高い。

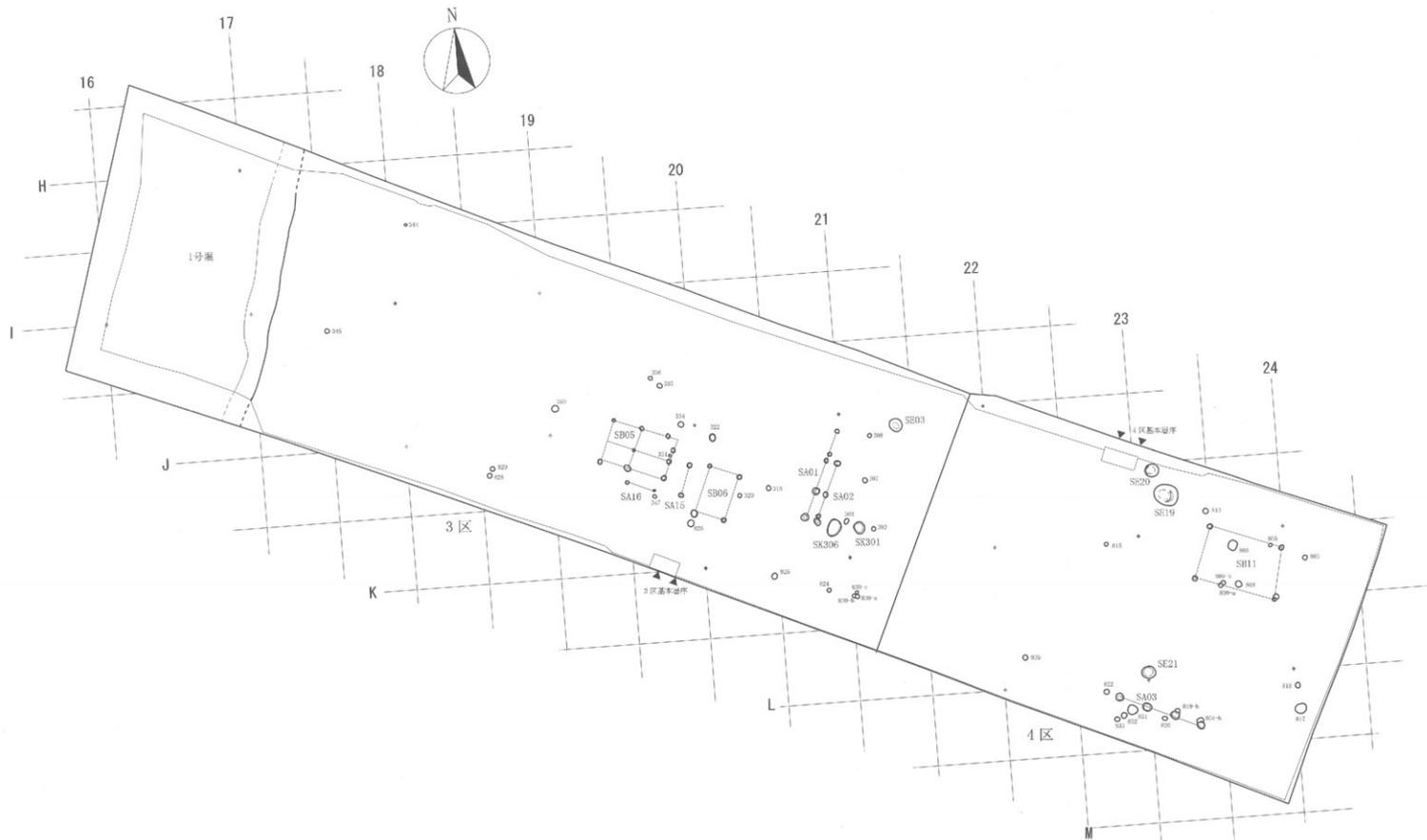
なお、南側の一部にのみ0.9m離れて、1.8mの塼(SA16)がついていたと思われる。

③長軸方向：N-70°-W

④出土遺物：なし



第93図 SB05・SA16



第 94 图 3 区·4 区全体图 (折图 2)



第59表 SB05 ビット計測表

P番号	旧番号	長さ (cm)	幅径 (cm)	深さ (cm)	底部標高 (m)
P01	SK341	23	22	22	23.86
P02	SK337	30	29	29	23.63
P03	SK333	43	36	36	23.67
P04	SK331	30	26	26	23.90
P05	SK330	36	33	32	23.93
P06	SK329	38	32	32	23.89
P07	SK328	49	38	38	23.85
P08	SK342	35	33	30	23.56
P09	SK340	20	20	20	23.76

第60表 SA16 ビット計測表

P番号	旧番号	長さ (cm)	幅径 (cm)	深さ (cm)	底部標高 (m)	備考
P1	P300	20	20	18	23.76	SB05に付属
P2	P346	20	16	12	23.82	本宮西方向 SB05に付属

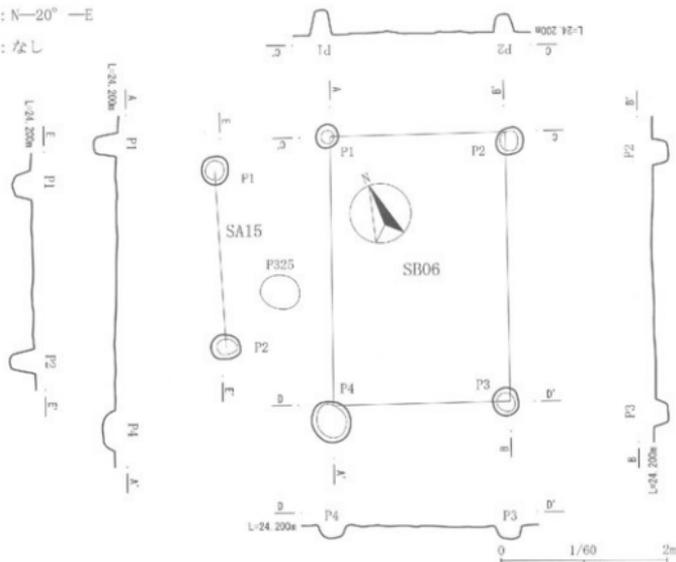
SB06・SA15 (第95図 第18図版 第61・62表)

①位置：J19-b・d、J20-a・cに位置し、SB05から東へ1.5m離れる。

②形状・規模：柱穴は概して、直径35cm前後、深さは17～30cmである。柱間はP1・2間、P3・4間はともに2.1mで、桁行のP1・4間、P2・3間が3.3mと考えられる。なお、西側には建物から1.35m隔たって、長さ2.1mの塀(SA15)が取付いていたらしい。

③長軸方向：N-20° -E

④出土遺物：なし



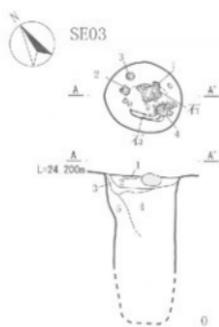
第95図 SB06・SA15

第61表 SB06 ビット計測表

P番号	旧番号	長さ (cm)	幅径 (cm)	深さ (cm)	底部標高 (m)
P1	SK323	28	28	30	23.90
P2	SK321	36	33	21	23.85
P3	SK319	33	33	17	23.87
P4	SK326	46	45	19	23.88

第62表 SA15 ビット計測表

P番号	旧番号	長さ (cm)	幅径 (cm)	深さ (cm)	底部標高 (m)	備考
P1	P328	28	24	29	23.79	SB06に付属
P2	P327	32	32	31	24.93	SB06に付属



第96図 SE03

(2) SE (井戸跡)

SE03 (第96・97図 第18・30図版 第63表)

①位置: J21-aに位置し、南西に3.5mでSA01のP1に達する。

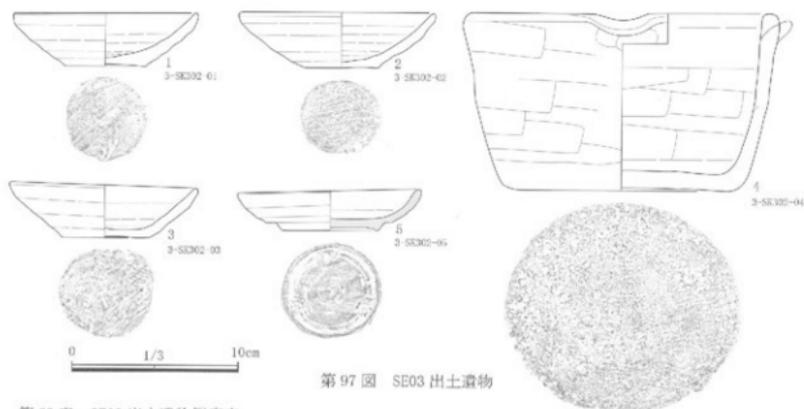
②形状・規模・覆土: 径0.9mの円形で、1.1mまで精査でき、重機による掘削で深さ1.8mまで確認した。覆土は黒色土が中心で、上面に炭化物がみられる。精査当初から礫石が検出された。

③長軸方位: N-56°-W

④出土遺物: 中層に至って、かわらけや瓦質土器、陶器皿など祭祀に関わると思われる遺物がほぼ完全な形で向上きにまとまって出土した。

SE03

- 1層 7.0002/7/1 黒色土 (精査) 1.5x1.0・粘付塊 炭化物多量
 2層 7.0002/1 黒色土 (精査) オリーブ灰色土ブロック (a 2~3mm) 少 1.5x1.0・粘付塊
 3層 7.0002/3 オリーブ灰色土 (精査) 黒灰色土ブロック (a 2~5mm) 少 1.5x1.0・粘付塊
 4層 7.0002/7/1 黒色土 (精査) オリーブ灰色土ブロック (a 2~5mm) 少 1.5x1.0・粘付塊
 5層 7.0002/1 黒色土 (精査) オリーブ灰色土ブロック (a 2~5mm) 少 1.5x1.0・粘付塊



第97図 SE03 出土遺物

第63表 SE03 出土遺物観察表

図号	注記	種類	意味	口径	高さ	底径	重量	埋蔵の状況	彫刻の特徴	組成	色澤	粘土	焼成度	備考
1	3N-SE0302-015	かわらけ	形類中皿	11.9	4.95	3.16	106.3	平らな底面から30度角で直線的に立ち上がる。	コケリ彫刻。左側から切り離し後、一方の手持ちへラ削り。	質良	全体 10YR6/2に灰い黄褐色	黒色微粒子やや多い。	ほぼ完全	存在
2	3N-SE0302-014	かわらけ	形類中皿	11.6	4.4	3.3	123.9	ほぼ平らな底面から30度角で直線的に立ち上がる。11層部の器内分厚い。	コケリ彫刻。切り離し不用。一方の手持ちへラ削り。	質良	全体 7.5YR7/4に灰い黄色	黒色微粒子やや多い。	ほぼ完全	存在
3	3N-SE0302-012	かわらけ	丸盤中皿	11.2	5.2	2.5	95.9	ほぼ平らな底面から35度角で緩やかに立ち上がる。	コケリ彫刻。右側から切り離し後、一方の手持ちへラ削り。	質良	全体 10YR7/4に灰い黄褐色	黒色微粒子多い。	全体の3/4	
4	3N-SE0302-013	瓦質土器	片口鉢	18.0	13.7	10.5	1106.4	底径と口径がほぼ同じ程度の深味で、一か所に小さな注ぎ口がつく。	粗製台形器。全面に横ミガキを、内面では縦にみぎきをつける。	質良	内外面 黄褐色	黒色微粒子若干含む。器内黄白色	完全	
5	3N-SE0302-3	陶器	丸盤	10.8	5.7	2.45	121.1	低い内径り蓋台から水平に突き、25度角・60度角で二段に立ち上がる。	コケリ彫刻。削り出し高台。裏面内面に打線ヒンズ、内面に目録33-9所。	質良	内外面 5YR7/1灰白色の黄白色	黒色微粒子若干含む。	完全	瀬戸・美濃系半筒式登壇器に2小片だけ比較結果

(3) SA (横列)

SA01 (第98図 第18図版 第64表)

①位置: J20-b・d, J21-aに位置し, SA02と並行する。

②形状・規模: 総延長6.3mである。柱穴は25~50cmの円形, 深さ25cm前後とばらつきがある。柱間はP1・3間が2.1m, P3・4間が2.2m, P4・5間が2.0mとなる。③走行方位: N-25°-E ④出土遺物: なし

第64表 SA01 ビット計測表

P番号	柱番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面径高 (cm)
P1	P309	21	24	33	23.78
P2	P311	24	20	23	23.90
P3	P312	24	29	14	24.00
P4	P314	48	40	32	-
P5	P317	44	48	37	23.69

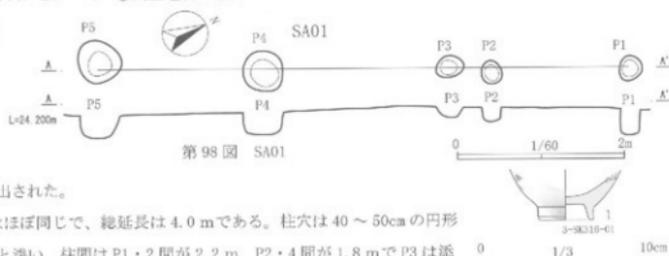
SA02 (第99・100図 第18・30図版 第65・66表)

①位置: J20-b・d,

J21-aに位置し, SA01

と0.8mの間をもって検出された。

②形状・規模: 主軸はほぼ同じで, 総延長は4.0mである。柱穴は40~50cmの円形で, 深さは最大で25cmと浅い。柱間はP1・2間が2.2m, P2・4間が1.8mでP3は添え柱のようである。③走行方位: N-23°-E ④出土遺物: 磁器



第100図 SA02 出土遺物

第65表 SA02 ビット計測表

P番号	柱番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底面径高 (cm)
P1	P313	40	28	26	23.49
P2	P313	36	32	19	24.00
P3	P315	32	28	35	23.76
P4	P316	52	32	24	23.84

第66表 SA02 出土遺物観察表

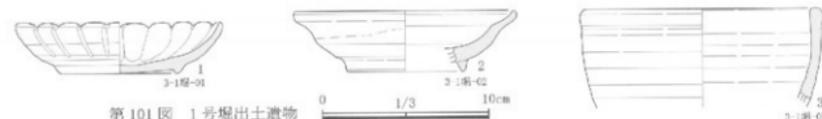
番号	注記	種類	形状	口径	底径	高さ	重量	器形の特徴	器底の特徴	産地	色調	粘土	残存度	備考
1	30-00310	磁器	染付小瓶	-	3.9	3.0	21.6	底の高台が半球状の細口である。	リクワ型彫, 雨り出し裏行。	奈良	内外面白色の染付手焼	磁器	底面に縦紋の付いた白化粧土	後に記載した行の出土品と同一の器類に属する

(4) 堀

1号堀 (第101・102図 第18・30図版 第67・68表)

①位置: 3区西端で検出された南北に走向する外縁で, G16-a~d, H15-d, H16-a~d, H17-a~c, I15-b, I16-a~d, I17-a~cに位置する。

②形状・規模・覆土: 幅は現状で13.44m, 北側で深さ1.36mを測る。底部の標高は, 北側で23.20m, 東側で22.70mを測る。断面は, 底部が平らで立ち上がり緩やかに開く形状をなし, 覆土は褐色土~黒色土の3層である。③走向方向: N-15°-E ④遺物: 覆土中から陶磁器及び獣骨(ウマまたはウシカ)が出土している。



第101図 1号堀出土遺物

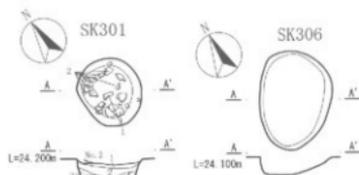
第67表 1号堀出土遺物観察表 (1)

番号	注記	種類	形状	口径	底径	高さ	重量	器形の特徴	器底の特徴	産地	色調	粘土	残存度	備考
1	30-001-板	陶器	志野割皿	(12.3)	(6.9)	3.9	59.1	内反り裏面から中央に丸みを帯びた口縁部が広く展開し, 口縁は鋭角となる。口縁には細かな凹凸をなす。	コクワ型彫, 雨り出し高台, 糸状の梅花の表見はヘラ、内面は磨滅した。	奈良	全体白/暗灰色の灰土層	白色陶子若干含む。器内褐色。	全体の1/2	二次被覆土層(第17層)に属する
2	30-001-板	陶器	志野割皿	(12.1)	(6.9)	3.6	55.7	内反り気味の高台から中央部まで狭く立ち上がり, 口縁部で反り返る。	コクワ型彫, 雨り出し高台, 皿下縁部はヘラ製り裏面。	奈良	全体白/暗灰色の灰土層	白色陶子若干含む。	全体の1/2	覆土・表層に属する

(5) SK (土坑)

SK301 (第103・104図 第18・30図版 第69表)

- ①位置: J21-c に位置する。
 ②形状・規模・覆土: 84 cm × 82 cm 平面円形で深さは 31 cm。
 覆土は極暗褐色土～黒色土に至る 1～4 層まで存在する。
 ③長軸方向: N-0°
 ④出土遺物: 遺物は 1 層上面にまとまって検出されており、
 以下に図及び観察表を示した。



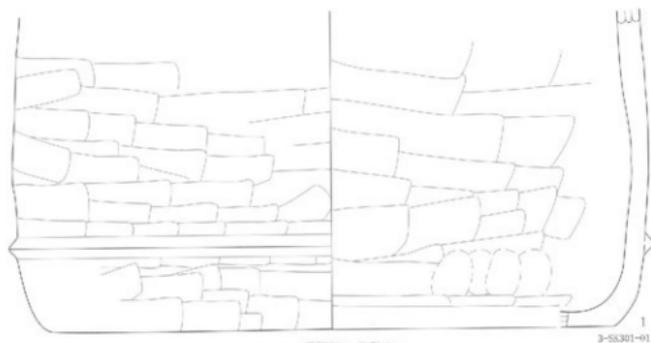
- SK301
 1層 7.0101.0/1 黒色土 粘土ブロック (φ 2～10 cm) 中 石灰物ブロック (φ 2～10 cm)
 中 石灰質 しまり中
 2層 7.0102.0 極暗褐色土 粘土ブロック (φ 2～10 cm) 少 石灰質 しまり中
 3層 7.0103.0 黒色土 灰オリーブ色土 (φ 2～10 cm) 中 石灰質 しまり中
 4層 7.0104.0 黒色土 灰オリーブ色土 (φ 2～10 cm) 少 石灰質 しまり中



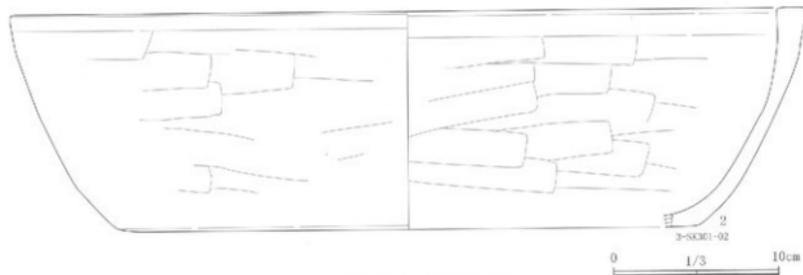
第103図 SK301・306

SK306 (第103図 第18図版)

- ①位置: J20-d, J21-c に位置する。
 ②形状・規模・覆土: 132 cm × 90 cm の平面楕円形で覆
 土は黒色土 1 層からなる。
 ③長軸方向: N-36° —E
 ④出土遺物: なし



1
3-SK301-01



2
3-SK301-02

第104図 SK301 出土遺物

第69表 SK301 出土遺物観察表

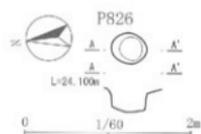
遺物番号	品名	種類	形状	口径	式目	器高	重量	製法の特徴	製法の検証	検出	色調	土質	残存度	備考
3-SK301 No4-9	土師質土器	火鉢	—	(34.0)	(19.2)	746.5		厚らな底壁。扉部下端でやや丸みを帯びて立ち上がり、上縁は直立する。下縁上部に凸縁が走る。	輪挽み成形。全面ナグ調整。	黒球	全体 7.5TB4(純色)	白色・雲消熟成子若しくは、骨角を含む。	新石器片	
3-SK301 No11-13 他	土師質土器	火鉢	(48.0)	(35.0)	(12.5)	872.1		厚らな底壁とされた口縁上。ほぼ半環状の脚部からなる。	輪挽み成形。全面ナグ調整。	やや不揃	全体 7.5TB3(黒褐色)	白赤粘土・雲消熟成子若しくは骨角を含む。厚さ 7.5TB3(純色)	口縁部破片	

第70表 3区ピット計測表

地区	遺構名	横山グランド	形状・形態				備考	地区	遺構名	横山グランド	形状・形態			備考
			長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	平面形					長径 (cm)	短径 (cm)	平面形	
3区	P203	J21-c	32	28	24	円形		P244	H18-a	16	15	39	円形	
	P204	J21-c	36	24	30	楕円形		P245	J17-b	32	30	14	円形	
	P207	J21-a	38	38	26	楕円形		P250	J19-c	41	44	28	円形	
	P208	J21-a	25	25	15	円形		P261	K20-b	32	38	36	円形	
	P218	J20-b	28	28	27	円形		P265	K20-a	38	38	22	円形	
	P220	J20-c	38	29	35	楕円形		P266	J19-d	52	48	40	円形	
	P222	J20-a	82	49	21	楕円形		P268	J18-b	36	32	16	円形	
	P231	J19-b	28	38	13	円形		P289	J18-b	28	24	34	円形	
	P234	J19-d	46	36	7	円形		P293-a	K21-a	28	24	27	円形	FK30-aを伴る
	P236	J19-d	21	20	28	円形		P293-b	K21-a	28	28	17	円形	FK30-aに添わされる
	P238	J19-d	29	18	29	円形		P293-c	K21-a	24	20	13	円形	

(6) ピット (第105図 第70表)

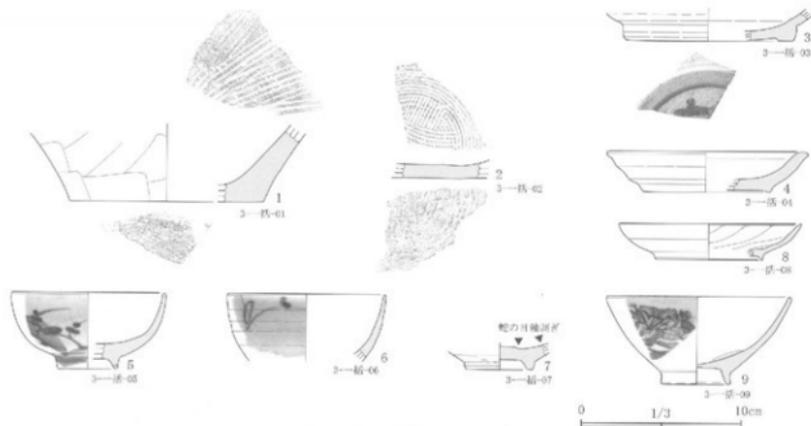
遺構が組みなかつたピットについて上記第70表にまとめた。



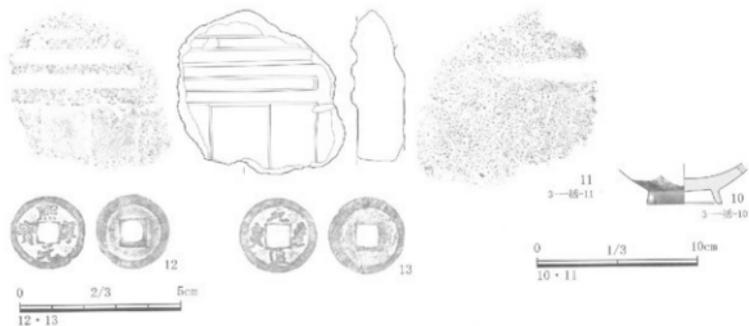
第105図 P826

(7) 3区遺構外出土遺物 (第106・107図 第30図版 第71表)

3区遺構外から出土した遺物について以下にまとめた。



第106図 3区遺構外出土遺物 (1)



第107図 3区遺構外出土遺物(2)

第71表 3区遺構外出土遺物観察表

番号	注記	種類	素材	口径	底径	高さ	重量	形状の特徴	裏面の特徴	焼成	釉色	胎土	瓦片産地	備考
1	3-Ⅱ	陶器	磁石	—	(12.9)	(4.8)	121.5	平らな底面から縁部まで反り返り翼状に立ち上る。	回転台使用。底面・底下部へラ割り痕跡。6cm以上厚みの胎土。	良好	内外面 2.585/2灰 褐色の鉄粒	白色粘土質 平含む。器 底2.578/1 褐色色	磁石破 片	瀬戸・美濃17 新見新築
2	3-Ⅰ	陶器	磁石	—	—	(1.13)	37.8	平らな底面。	回転台使用。底部 回転へラ割り調 痕。1.8cm以上厚 みの胎土。	優良	内外面 2.584/4灰 褐色の鉄粒	褐色粘土 質平含む。 器内 88/0灰白色	磁石破 片	瀬戸・美濃近 河式河瀬前小 塚以降18世紀中 葉以降
3	3-Ⅱ	陶器	片口土	—	(10.4)	(2.0)	25.7	幅状の高台。	回転台使用。削り 出し高台。	良好	内面 10/0/4に いり黄褐色 の写輪	褐色。器内 10/0/2灰 白色	磁石破 片	高台内黒土(文 字不明) 瀬戸・美濃19 世紀
4	3-Ⅰ	陶器	志野丸 土	(12.0)	(9.0)	2.5	37.9	底の高台から縁部 まで文火を結って 立ち上り、口 縁で反転する。	回転台使用。削り 出し高台。	優良	内外面 10/0/3長 石割に投入 あり。	白色粘土質 平含む。	磁石破 片 1/8	高台内黒土(文 字不明) 瀬戸・美濃17 世紀前半
5	3-Ⅱ	磁器	染付天 板	(9.5)	—	(4.7)	29.1	高めの高台を持 ち。半球状の器 形。	回転台使用。削り 出し高台。	優良	内外面 6/0/1灰白 色の釉	褐色染付 平含む。 器内 88/0灰白色	全体の 1/4	1092白青黒色 の具象で曹植華 花文 器内(器底長・ 平口) 18世紀 末葉～19世紀中 葉
6	3-Ⅱ	磁器	染付小 碗	(8.9)	—	(4.15)	21.7	半球状の器形。体 部中に回転台痕 あり。	回転台使用。	優良	内外面 6/0/1灰白 色の釉	褐色染付 平含む。 器内 88/0灰白色	全体の 1/4	1064/19青灰色 の具象で曹植華 花文 器内染付木文 肥前17世紀末
7	3-Ⅰ	陶器	染付磁 甕	—	4.1	(1.65)	54.5	内反り高台。腰部 は筒形を拡張可能 体あり。	回転台使用。削り 出し高台。底下部 回転へラ割り痕 跡。足込み地の具 物痕跡。体下部部 露筋。	優良	内外面88/0 灰白色の釉	褐色染付 平含む。	全体の 1/4	肥前(飯佐見・ 平口)系
8	3-Ⅱ	磁器	白磁皿	(11.2)	(6.6)	2.25	9.2	底平らな面で、足込 みに筒状の口沿が ある。	製作あり。	優良	白磁	磁石	口縁破 片	内面上縁直線 部。美濃19 世紀後半
9	3-Ⅰ	磁器	染付平 鉢	(11.3)	4.2	5.4	72.6	高めの高台を持 ち。半球状となる が。	押し成形。	優良	内外面88/0 灰白色の釉	褐色染付 平含む。	全体の 1/4	明青色の龍鳳給 付の染付文 瀬戸・美濃19 世紀末葉以降
10	3-Ⅱ	磁器	染付小 碗	—	(4.4)	(2.3)	21.9	高めの高台を持 ち。半球状の器 形。	回転台使用。削り 出し高台。	良好	内外面白色 の釉	褐色染付 平含む。	底部の 1/4	内外面明青色の 塗り給 瀬戸・美濃19 世紀末葉以降
11	3-Ⅱ	石製品	磁石	径10.1	幅 10.35	厚3.3	370.5	板石磨盤の破片で、幅1.7cmの溝跡がある。	—	—	全体 2.577/1灰 白色	—	磁石破 片	—
12	—	銭貨	北宋銭	外径 2.5mm	孔 0.7mm	—	3.2	—	—	—	—	—	銅	宋銭 (1068～1077)
13	—	銭貨	北宋銭	外径 2.4.3mm	孔 0.5mm	—	3.1	—	—	—	—	—	銅	宋銭 (元祐通寶)行 藏(1078～1086)

第6節 4区

(1) SB (掘立柱建物跡)

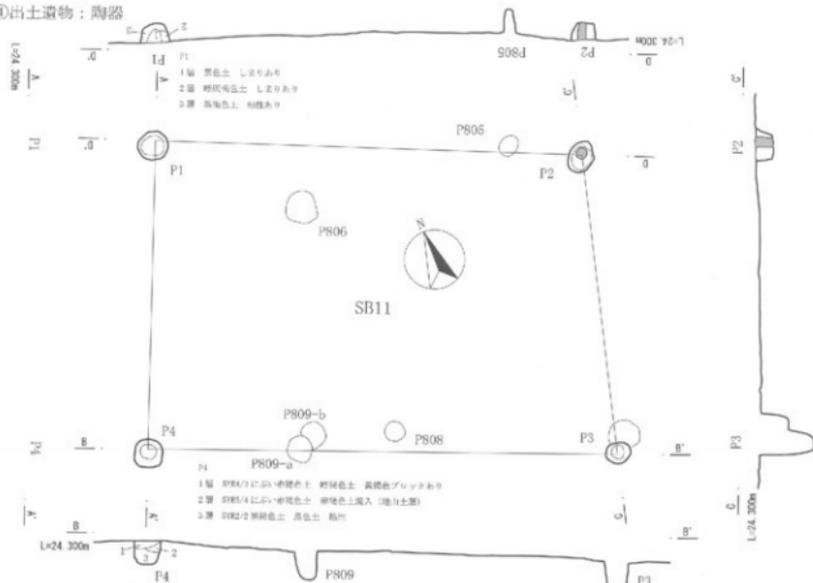
SB11 (第108・109図 第31図版 第72・73表)

①位置: J23-c、K23-a・b・dに位置する。

②形状・規模: 調査時では個々のピットとしていたが、木質の残るもの(P2)を中心に4穴からなる建物跡と考えた。各柱穴は別表のとおりであるが、重複しているP3についてはその内側の柱穴を探ると、直径35~40cm、深さ22~55cmの範囲内に収まる。柱穴の間隔は、北で5.2m、南で5.5m、東は3.65m、西は3.75m。建物内部に相当する部分にもピットがみられるが、いずれも浅く、規則性もないことから張り床などの上部構造が存在したとは思われない。

③長軸方向: E-23°-S

④出土遺物: 陶器



第72表 SB11 ピット計測表

F番号	目番号	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	底深 (cm)	備考
P1	P812	36	35	25	23.97	
P2	P802	37	33	22	24.39	木質残存
P3外	P807	28	28	55	23.48	
P3内	P807	40	40	35	23.70	
P4	P811	33	34	28	23.94	

第108図 SB11



第109図 SB11 出土遺物

第73表 SB11 出土遺物観察表

番号	片記	形状	産地	土質	色	用途	観察の特徴	製作の特徴	用途	色	粘土	残存度	備考	
1	4-P809	陶器	志野平 陶村	—	—	(2, 4)	R1.6	半輪足が2か所残存。体部は意匠に立ち上がり、平直な高方形を呈す。	口タロ碗形。型打ちにより方形に整形。底面凹削あり。	片打	内外全面 2.5%/(灰 白灰の赤野 粒	褐色黄砂子 の多量。 粘土粒。	底面 1/4	内田二次調査 時、西入。 外田に稲元文 鉄山(G. SIRA/6 赤地鉄)。 栗森成16世紀 末葉~17世紀 前期

(2) SE (井戸跡)

SE19 (第110図 第19図版)

①位置: J23-c, SB05の西約3mに位置する。

②形状・規模・覆土: 片側に漏斗状の膨らみを持つ、1.7m×1.4mの楕円形の井戸跡である。漏斗状の膨らみは0.6mにまで及び、その下は0.9mの円形となって、垂直に落ち込むが、1mの深さで、湧水のため精査を断念した。

覆土は、上層にこの調査区特有の暗褐色土に赤褐色土粒子が混じった土層で覆われ、下層は黒色系の互層が続く、一部に灰色粘土塊の崩落がみられるが、自然堆積の様相を示す。調査後、重機による掘削の結果、2.1mの深さがあることを確認した。 ③出土遺物: なし

SE20 (第110・111図 第19・31図版 第74表)

①位置: J23-c, SE19に近接して位置する。

②形状・規模・覆土: 径約0.9mの円形の井戸である。断面では筒状を呈し、0.9mまで精査できた。それによると上層に特有の土層が埋め込まれたような状態でみられ、下層は黒色系の土層となり、自然堆積が否か判断できなかった。これも重機の掘削結果により、約1.8mまで掘りこまれていた可能性がある。

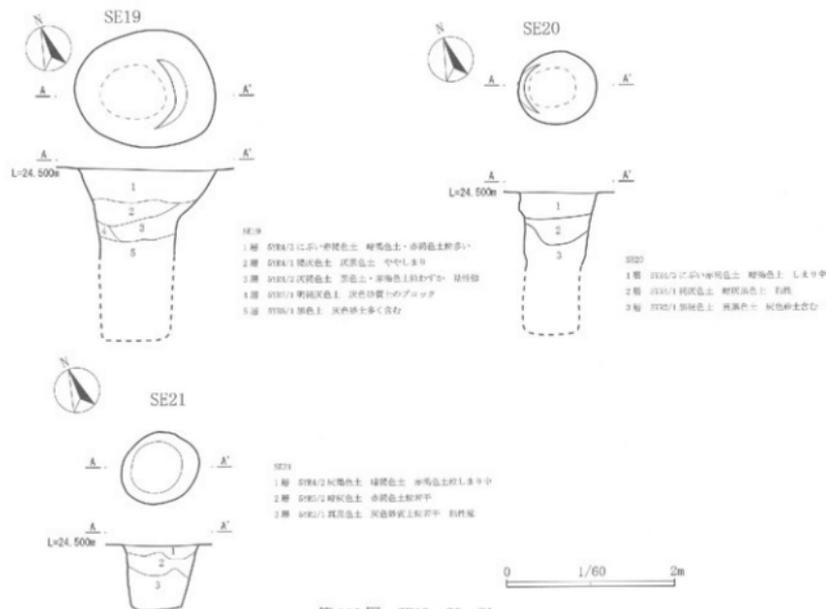
③出土遺物: 瓦質土器

SE21 (第110・112図 第19・31図版 第75表)

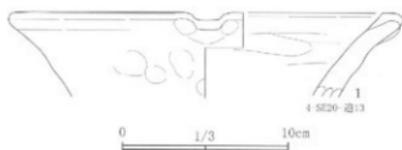
①位置: K22-d, K23-c, L22-b, L23-aに位置する。

②形状・規模・覆土: 径1m、深さ0.8mの円形の井戸である。断面は筒状で、先に行くに従って、やや細くなり、底面は0.6mの円形を呈す。覆土は特有の土層の下に暗灰色土と真黒色土が自然堆積を示す。

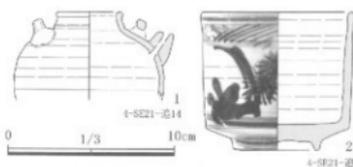
③出土遺物: 精査中から、特に上層から陶器・磁器が出土した。



第110図 SE19・20・21



第111図 SE20 出土遺物



第112図 SE21 出土遺物

第74表 SE20 出土遺物観察表

番号	片記	種類	形状	口径	高さ	底径	重量	断面の形状	断面の特徴	破片	色調	胎土	残存度	備考
1	4-20° 7SE- 1片	土質土器	片口鉢	(23.6)	—	(5.1)	100.4	80度角で立ち上がってき、口縁部でさらに開く。	阿波台使用。押型印による片口縁部。	良好	内外面 M1.5.0黒色	白色微粒子若干含む。断面も同色。	口縁部 破片	

第75表 SE21 出土遺物観察表

番号	片記	種類	形状	口径	高さ	底径	重量	断面の形状	断面の特徴	破片	色調	胎土	残存度	備考
1	4-21° 7SE- 1片	陶器	土瓶	(3.7)	—	(3.2)	22.7	全体に土みのある律面に注口がつく。母孔1孔。把手は濃軟緑釉付。	ロクコ型製。	良好	内外面 S1K.0暗赤褐色の緑釉	黒色微粒子多い。	全体の 1/4	
2	4-21° 7SE- 1片	陶器	染付圓形碗	(8.9)	8.2	8.2	187.8	低い高台から大きく開き下半から底状に立ち上がる。	ロクコ型製。削り出し高台。鼻付に彩り施。	優良	内外面 灰白色の透明釉	黒色微粒子若干含む。	全体の 3/4	外面に信濃(60/16曾灰色)の四方唐文・松文 墨色朱17世紀前半

(3) SA (権列)

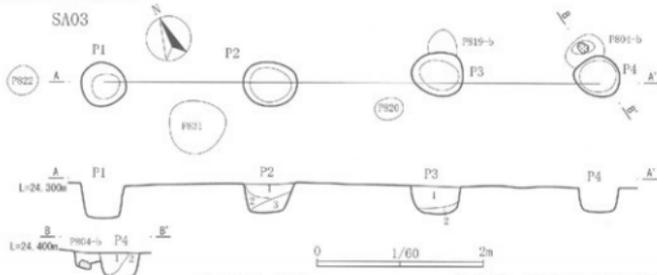
SA03 (第113図 第19図版 第76表)

①位置: L22-b、L23-aに位置する。S811とは10m離れて並行する。

②形状・規模: 総延長6.0mを測り、柱穴は径48～68cm、深さ30cmほどである。柱間はP1から順に1.9m、2.0m、1.9mとなる。

③走行方位: S-25° —E

④出土遺物: 掲載遺物なし



第113図 SA03

第76表 SA03ピット計測表

P番号	柱番号	口径 (cm)	底径 (cm)	深さ (cm)	地形標高 (m)	備考
F1	P834	56	56	40	23.77	
F2	P821	48	43	31	23.91	
F3	P819	68	48	36	23.87	P819-bを切る
F4	P804	48	48	29	23.92	P804-bを切る

P1

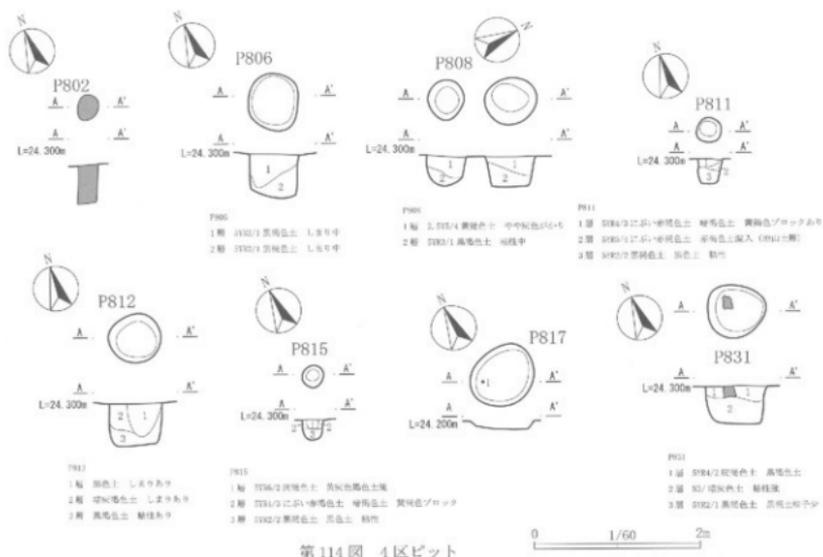
- 1層 P822に黒褐色土 黒色土 しより灰
2層 P847に濃い赤褐色土 暗褐色土
表層はフック
3層 P822に黒褐色土 黒色土 砂粒あり

P2

- 1層 P819/2に濃い赤褐色土 暗褐色土 黄褐色フック
2層 P819/2に濃い赤褐色土 赤褐色土 砂粒あり

P3

- 1層 P819/2に濃い赤褐色土 暗褐色土 黄褐色フックあり
2層 P819/4に濃い赤褐色土 赤褐色土 1段入 (60/16)



第114図 4区ピット

(4) ピット (第114・115図 第77・78表)

検出されたピット群は独立柱建物として組めたもの、柵列と判断されるものなどは同一遺構として扱えた。一部ピットについては第115図に示した。その他ピットの平面図は全体図に掲載し、断面図は割愛した。各ピットの計測値は以下第78表に示した。



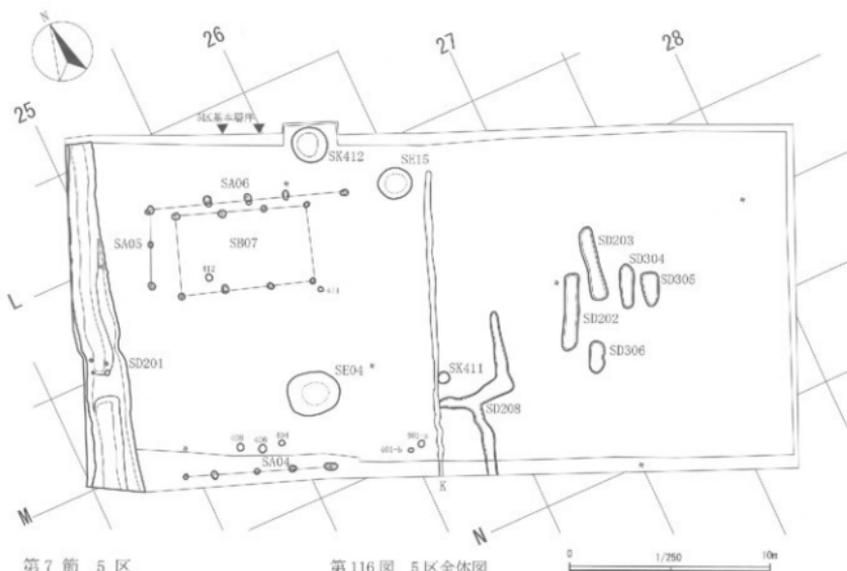
第115図 P817出土遺物

第77表 P817出土遺物観察表

番号	注記	種類	形状	口径	直径	断面	重量	形状の特征	断面の特徴	組成	色調	粘土	埋存度	備考
1	4-P817	金属製品	円形	φ3.0	0.85	61.1		鉄製同様の円形で、中央に0.45cmの穿孔あり。		—	全体約7.0cm	鉛	完存	被蝕、酸化

第78表 4区ピット計測表

地区	遺構名	検出グリッド	形状・形態				備考	地区	遺構名	検出グリッド	形状・形態				備考
			長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	平面形					長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	平面形	
4区	P800	K24-a	28	28	39	円形	灰石埋存 S800-P411に穿られる	P817	L24-a	56	48	19	楕円形		
	P804-b	L23-a	52	40	25	楕円形		P818	L24-a	32	28	18	円形		
	P805	K23-b	28	24	18	円形	P819-b	L24-a	36	34	27	円形			
	P806	K23-b	32	28	32	円形	P820	L23-a	40	34	40	楕円形			
	P808	K23-b	32	32	30	円形	P822	K22-d	36	32	32	円形			
	P809-a	K23-a	28	28	29	円形	P831	L22-b	52	52	41	円形			
	P809-b	K23-b	20	20	21	円形	P832	L22-b	32	28	14	円形			
	P813	J23-d	40	40	26	円形	P833	L22-b	52	48	36	円形			
	P815	K22-b	24	24	26	円形	P835	K22-c	34	34	28	円形			



第7節 5区

第116図 5区全体図

(1) SB (独立柱建物跡)

SB07・SA05・SA06 (第117・119・120図 第21・31図版 第79～81・83・84表)

①位置: K25-c・d, L25-a・b, L26-aに位置する。

②形状・規模・覆土: 3間1面の独立柱建物跡である。個々の柱穴については下表のとおりである。

柱穴は概して40cm×30cmの楕円形を呈するものが多く、深さは検出面から20～35cm(標高では23.85～24.00m)となる。柱の痕跡はP2・6・7などにわずかな木片がみられ、これらの裏込め土は、黒色土に灰色粘土の地山を含む土層である。

妻側の柱間は、西で4.0m、東で3.8mであり、その間に支柱などの痕跡はない。北桁行ではP1から順に、2.35m、2.1m、2.15m、南側のP5から順に2.1m、2.25m、2.25mを測り、全体としては6.60mとなる。

建物の内部には束柱穴らしきものは見られず、全体を土間として使用したものと考えられる。

③長軸方向: E-30° —S ④出土遺物: 焼締陶器

(2) SA (柵列)

SA04 (第118図 第21図版 第82表)

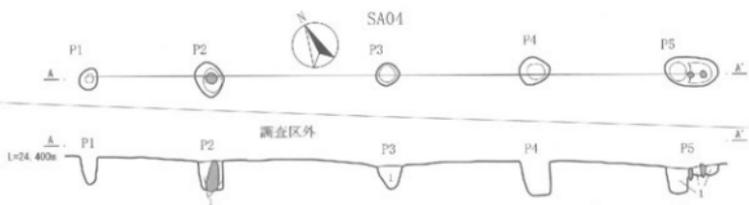
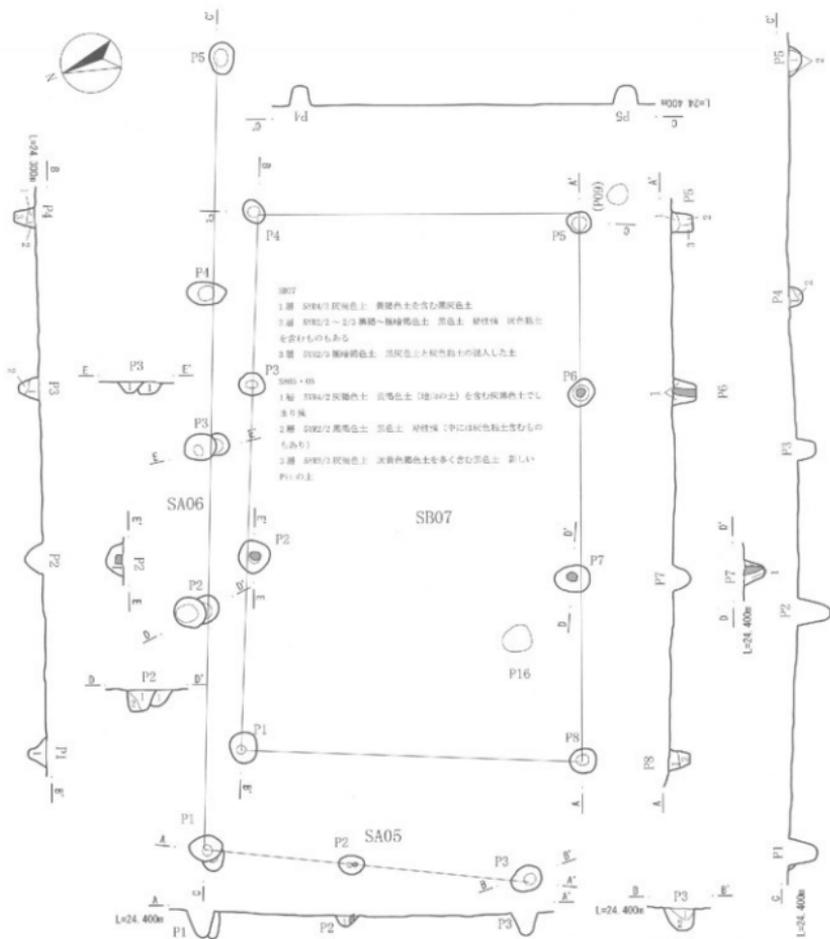
①位置: M24-b, M25-a・bに位置する。

②形状・規模: SB07から南へ9m隔たっているが建物跡にほぼ合致する。柱の規模は径40cm前後、深さ40cm前後で、P2・5には木質が残る。柱間はP1から順に1.5m、2.1m、1.8m、2.0mとなる。

③走行方位: E-27° —S

④出土遺物: なし

⑤施設: 本跡に付帯する施設と考えられるものに柵列がある。SA05は西側を囲む3本の柱穴からなる柵列で、柱間は1.7mと2.0mである。SA06は北側を巡る5本からなるもので、柱間は西から、2.9m、2.0m、1.9m、2.9mと、P3を中心として東西に対照的である。



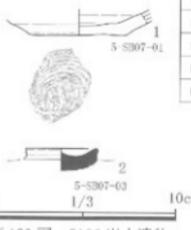
SA04
1層 T.94のT.71の黄褐色土、黄褐色土のブロック（長さ20cm）の残片、粘性・L.8.9.9.9

第79表 SB07 ビット計測表

F番号	計測番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底辺標高 (m)	備考
F1	F006	38	32	21	24.02	
F2	F006	36	32	20	24.01	木質残存
F3	F007	32	30	21	23.99	
F4	F008	36	23	23	23.99	
F5	F001	32	30	23	23.92	
F6	F002	37	31	28	23.88	木質残存
F7	F003	43	32	26	23.95	木質残存
F8	F004	39	32	28	23.97	



第119図 SB07 出土遺物



第120図 SA06 出土遺物

第80表 SA05 ビット計測表

F番号	計測番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底辺標高 (m)	備考
F1	F012#	20	25	25	23.68	
F2	F011	20	25	14	24.16	SB07に付随する可能性がある
F3	F010	24	30	30	23.96	

第81表 SA06 ビット計測表

F番号	計測番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底辺標高 (m)	備考
F1	F012内	40	24	33	24.00	
F2	F013	48	40	28	23.83	
F3	F014	40	33	20	23.88	SB07に付随する可能性がある
F4	F015	58	29	17	24.13	
F5	F017	43	39	16	24.12	

第82表 SA04 ビット計測表

F番号	計測番号	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	底辺標高 (m)	備考
F1	F110	20	15	43	23.99	
F2	F109	44	32	43	23.78	木質残存
F3	F107	49	36	33	23.90	
F4	F105	44	26	45	23.74	
F5	F102	61	32	26	23.70	木質残存

第83表 SB07 出土遺物観察表

番号	号記	種類	形状	口径	底径	長さ	重量	断面の特徴	形状の特徴	構成	色調	土質	残存度	備考
1	5N-73B-02	植物残骸	大葉	—	(14.0)	(5.5)	102.6	平らな底部から73度角で立ち上がる。	断面が使用。	良好	外周: 5YR3/4暗褐色内周: 5YR2/3暗褐色	白色粘土多量	底辺破片	骨質残存

第84表 SA06 出土遺物観察表

番号	号記	種類	形状	口径	底径	長さ	重量	断面の特徴	形状の特徴	構成	色調	土質	残存度	備考
1	5N-73B-01	赤いもの	A型中皿	—	(5.2)	(1.0)	16.6	平らな底部から29度角で湾曲。	ロケロ型器。右側縁が湾曲し縁は深凹部。	優良	全体: 5YR3/4灰褐色	白色粘土多量	底辺の1/3	
2	5N-73B-01	泥状物	片断	つまみ紐	—	(1.2)	19.1	低平な大型の陶片。	ロケロ型器。	良好	全体5N/6灰色	白色粘土多量	断面のみ	断面物断片

(3) SE (井戸跡)

SE04 (第121・122図 第22・31図版 第85・86表)

①位置: L25-d、M25-bに位置する。

②形状・規模・覆土: 2.6m×2.3mの平面楕円形を呈す井戸である。検出面から60cmほどは漏斗状にすぼまり、そこから下は直径1.2mの円形で垂直に落ち込む。ちょうどその変換点から、井戸枠の一部であろうか木片が出土した。調査は約1m掘り進んだところで湧水のため中止した。

断面観察によると、西側の上面に黒褐色粘性土の裏込め土(6・7層)が認められ、本来は全体に木枠に対する裏込めがなされていたであろう。井戸の本体は、上面においては黒褐色土主体の自然堆積を示す。

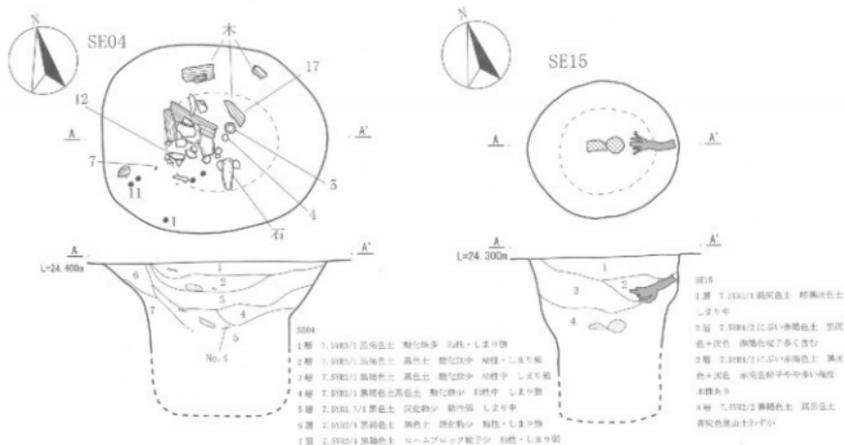
③出土遺物: 約1.8m下から木片多数を得、これらが井戸枠を構成していたものであることが推定される。その他、陶器・土器類も多量に出土している。

SE15 (第121・123図 第22・31図版 第87表)

①位置: L26-a・bに位置する。

②形状・規模・覆土: 直径1.6mの平面円形を呈する井戸である。精査の結果、約1m下で径1.1mの円筒状にすぼまることが確認できたが、湧水のためそれより下は調査できなかった。断面観察によると、上層に黒灰色土が、下層に黒色土と地山の灰色土の混じった層が水平に認められ、自然堆積の様相を示している。

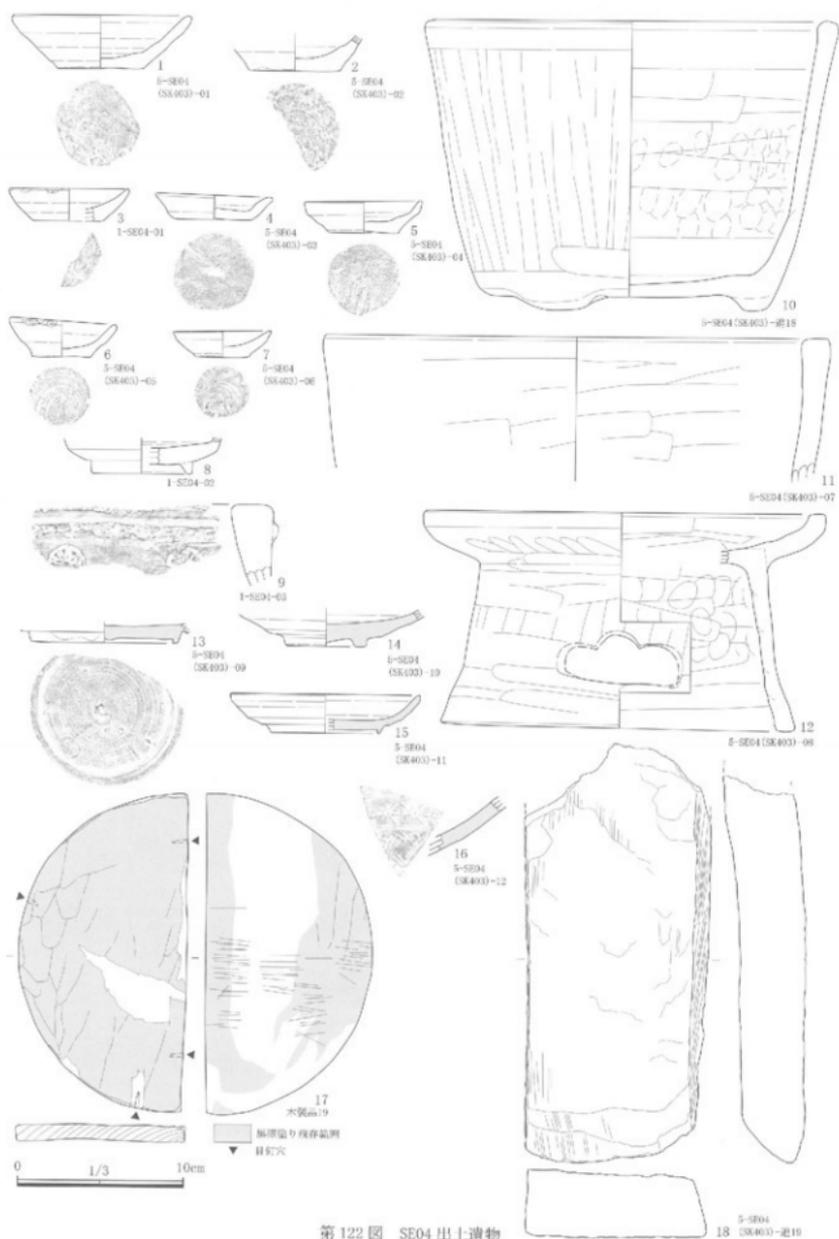
③出土遺物: 約1.8mの深さに達しており、瓦質土器・竈道具(匣鉢)が出土している。



第121図 SE04・SE15

第85表 SE04出土遺物観察表(1)

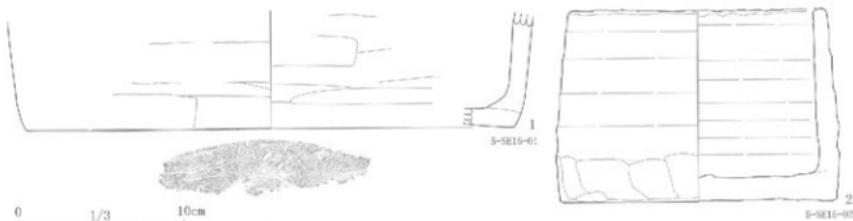
番号	注記	位置	層別	層別	深さ	直径	形状の特徴	形状の中心	地質	色相	粘土	残存度	備考	
1	5- SK03 No1	かわらけ	B層中 皿	(13.4)	5.1	3.2	62.8	平らな底部から55 度角で直線的に立 ち上がる。	ロクロ製。左回 転糸切り跡し、 手持ちヘラ削り製 成。	全体5YR5/6 褐色	白色・黄砂 散り付 下含む。	全体の 1/2		
2	5- SK03 No4	かわらけ	A層中 皿	—	5.4	(2.3)	37.8	平らな底部から40 度角で40°から丸 みを帯びて立ち上 がる。	ロクロ製。初期 糸切り跡し、一 方向削りヘラ削 り製成。	外周5YR5/6 赤褐色内 部7.5YR6/2 に5%灰褐色 色	黒褐色粘土 やや多い。	底部 1/2		
3	1E-4' 9E-1 下層一 塊	かわらけ	B層小 皿	(7.1)	(4.0)	(1.9)	22.7	くぼんだ底部から 60度角の角度で 縁が立ち上がる。 深い割れ。	ロクロ水受け成 形。左回転糸切 り跡し、片下無 割成。	全体 7.5YR6/4に 5%褐色	乳白色やや 多い。	全体の 1/2	右側面に転 写。右心油漬 3層前後部。	
4	1- SK03 No19	かわらけ	C層小 皿	7.0	4.6	1.4	42.5	平らな底部から55 度角でほぼ直線的 に立ち上がる。	ロクロ製。切り 跡し不明。一方 向削りヘラ削り 製成。	全体 5YR6/6 赤褐色	黒褐色粘土 若干含む。 骨片々。	劣存		
5	5- SK03 No2	かわらけ	C層小 皿	7.0	4.2	1.9	43.4	やや突出した底部 から60度角で深 さ。口縁部で直立 する。	ロクロ製。切り 跡し不明。多方向 手持ちヘラ削り 製成。	全体 10YR7/2に 5%黄褐色	白色・黄砂 散り付 下含む。	劣存		
6	1- SK03 No1	かわらけ	A層小 皿	6.2	3.5	2.2	42.1	突出する底部から 65度角でほぼ直 線的に立ち上がる。	ロクロ製。左回 転糸切り跡し、 手持ちヘラ削り 製成。	全体 10YR6/3に 5%黄褐色	白色・黄砂 散り付 下含む。	劣存	右側面に転 写。口縁部に 心油漬。	
7	5- SK03 No3	かわらけ	A層小 皿	6.7	2.2	1.6	26.1	突出する底部から 60度角でほぼ直 線的に立ち上がる。	ロクロ製。右回 転糸切り跡し、 割製。	全体 7.5YR6/6 褐色	白色・黄砂 散り付 下含む。	劣存		
8	1E-4' 9E-1 下層一 組	土師瓦土 器	茶碗	—	(6.3)	(2.1)	56.6	直線の肩から心 らに開き、体部は 直立するようである。	ロクロ製。製作 高台。	全体 10YR7/2に 5%黄褐色 色。陶片。	褐色粘土若 下含む。	表面の 1/2		
9	1E-4' 9E-1 下層一 塊	瓦質土器	鉢	—	—	(4.5)	177.2	分厚い口縁の直下 に尖角が認め、印 面支脚を構成する。 丸足。	回転台製。	良好	内外5YR6/9 黄褐色	白色粘土多 く含む。高 台部5YR6/4 赤褐色	2層部 粘土	口縁部に転 写。花文。 瓦質瓦質
10	5- SK03 下層一 組	瓦質土器	三日月 鏡	(24.8)	17.5	17.1		平らな底部に深い 三角凹み。ほぼ 90度角で直線的に 立ち上がる。	加圧台使用し、泥 土加圧上げ製 成。よく内凹 部・外縁部を加工 面露。	良好	内外5YR6/4 褐色	褐色粘土若 下含む。	全体の 2/2	



第122図 SE04出土遺物

第86表 SE04出土遺物観察表(2)

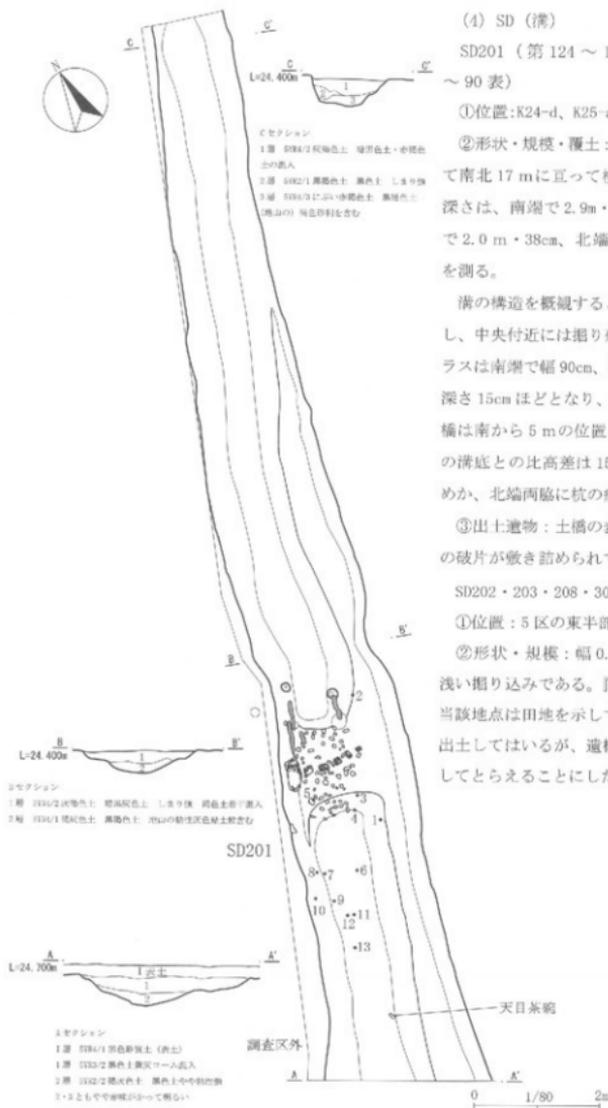
番号	日記	種類	品種	口径	底径	胴径	高さ	重量	形状の特徴	形状の寸法	焼成	色調	胎土	残存度	備考		
5-	SK403 No7	瓦質土器	大鉢	(30.3)	—	(6.8)	118.1		口縁直線に立ち上る。	口縁直線に立ち上る。	回転台使用。	やや不白	内外面 D1716/白濁 灰白色	白色がやや多い。骨が含む。胎土D1722/黒色	口縁破片		
5-	SK402 No16	瓦質土器	瓦灯台	(24.2)	(11.7)	(12.8)	118.2		高台部分は底で20cm程、長さ10cmの大きな凹部で、対面して浅く凹部がある。胎土は15cmを測り口縁部で幅1cmの凸部となる。	高台部分は底で20cm程、長さ10cmの大きな凹部で、対面して浅く凹部がある。胎土は15cmを測り口縁部で幅1cmの凸部となる。	回転台使用。輪轆み成形。全体的にナズ調整。	良好	内外面 N1.6/9黒色	白色・黒色が含む。骨が含む。胎土D1722/黒色 白色で芯はN6/9黒灰色	全体の3/5	高台部分の破損のためか、胎土が露んでいる。	
5-	SK403 一括	陶器	鉢	—	8.9	(1.1)	91.5		内反りする高台。	内反りする高台。	コクロ整形。削り出し高台。	優良	内外面 D186/2灰白色の灰濁	黒色顔料が若干含む。	底径の1/2	瀬戸・美濃系17世紀	
5-	SK402 No3	陶器	皿	—	4.9	(2.2)	118.3		幅次の高台から10度開く。	幅次の高台から10度開く。	コクロ整形。付け高台。	優良	内外面 D197/2やや不白 D198/1白色の透輝面	白色顔料が若干含む。	底径のみ	伊賀系	
5-	SK403 一括	陶器	丸皿	(11.3)	(6.3)	2.4	30.9		内反り高台から35度開く底やから立ち上がる。	内反り高台から35度開く底やから立ち上がる。	コクロ整形。削り出し高台。若干半知知へつ削り調整。内面に母材出し(柱壁?)。	良好	内外面 7.S137/6成 褐色色の灰濁	黒色顔料が若干含む。	全体の1/5	美濃系17世紀。中華	
5-	SK403 一括	陶器	三日月形瓦文様	—	—	(2.7)	25.6		比較的深い凹形。	比較的深い凹形。	回転台使用。内面平削。白土灰が取り易な種。	優良	内面S177/2 明褐色白濁 D184/5赤褐色 D185/2灰褐色	破損。胎土D184/5赤褐色	胎土破片	瀬戸系17世紀	
5-	SK403 No18	木製品	曲物短板	長さ19.1	幅16.1	厚さ0.9	88.6		幅約10cmの短板の半分で、もう一つの短板型で厚さが2割弱あり。また片取にも2割弱あり。わっか留めの痕。	幅約10cmの短板の半分で、もう一つの短板型で厚さが2割弱あり。また片取にも2割弱あり。わっか留めの痕。	塗り強化上げ。	—	—	—	—	底径	瀬戸系成。東加用
5-	SK403 美濃系 No2	石製品	石押形	長さ25.2	幅19.8	厚さ2.5	228.5		胎土は打割面。表面は研磨らしい。底には斜めに加工・装飾。	胎土は打割面。表面は研磨らしい。底には斜めに加工・装飾。	—	—	—	—	胎土破片	瀬戸系片貫貫	



第123図 SE15出土遺物

第87表 SE15出土遺物観察表

番号	日記	種類	品種	口径	底径	胴径	高さ	重量	形状の特徴	形状の寸法	焼成	色調	胎土	残存度	備考	
1	SN-155E下層	瓦質土器	大鉢	—	(29.2)	(6.8)	171.1		平らな底部からわずかのふくらみを残して立ち上がる。	平らな底部からわずかのふくらみを残して立ち上がる。	回転台使用。	内外面 D1937/2 白く黄褐色	白色大砂や骨が含む。胎土D1.6/9黒色	底径破片		
2	SN-155E中下層	陶道具	腰鉢	(15.2)	10.6	11.3	261.2		平らな底部からやや付足り気味に直線的に立ち上がる。	平らな底部からやや付足り気味に直線的に立ち上がる。	コクロ使用。削り出し調整。調整下層に手持ちへつ削り調整。	良好	全体D184/5 赤褐色	白色・黒色大砂多い。	全体の1/3	口縁部上端打ち欠き痕あり。底面透輝性。



第124図 SD201

(4) SD (溝)

SD201 (第124～128図 第22・32図版 第88～90表)

①位置:K24-d, K25-a・c, L21-b・c, M24-bに位置する。

②形状・規模・覆土:4区と5区の境(現赤道)に沿って南北17mに亘って検出された溝跡である。溝の幅と深さは、南端で2.9m・48cm(標高23.64m)、中央付近で2.0m・38cm、北端で1.1m・42cm(標高23.84m)を測る。

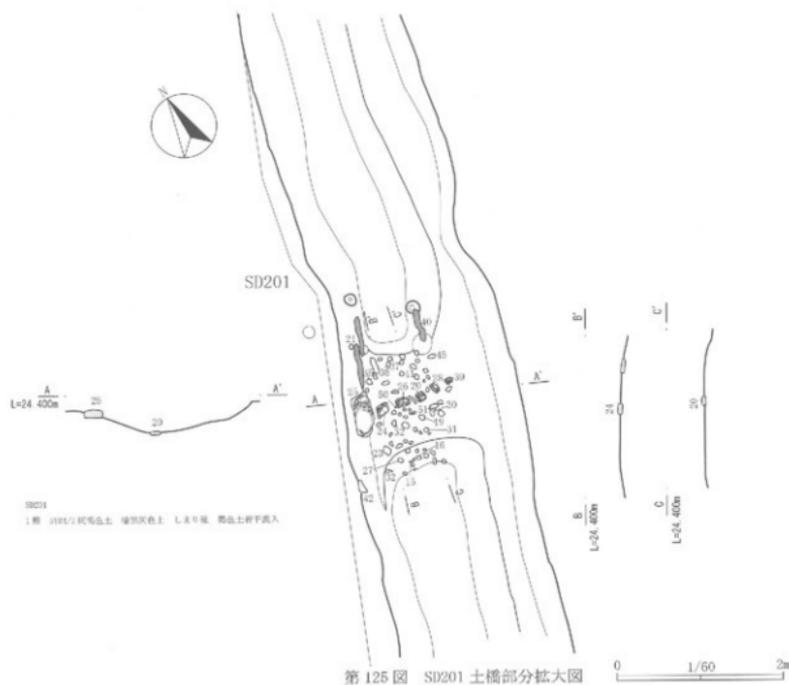
溝の構造を概観すると、途中までは東側にテラスを有し、中央付近には掘り残された土橋状の遺構がある。テラスは南端で幅90cm、深さ20cm、土橋付近では幅50cm、深さ15cmほどとなり、南から12mの地点まで続く。土橋は南から5mの位置にあり、上端での幅110cm、周辺の溝底との比高差は15cmほどである。土橋の補強のためか、北端両脇に杭の痕が数箇所みられる。

③出土遺物:土橋の表面には礫石のほか、土器や陶器の破片が敷き詰められていた。

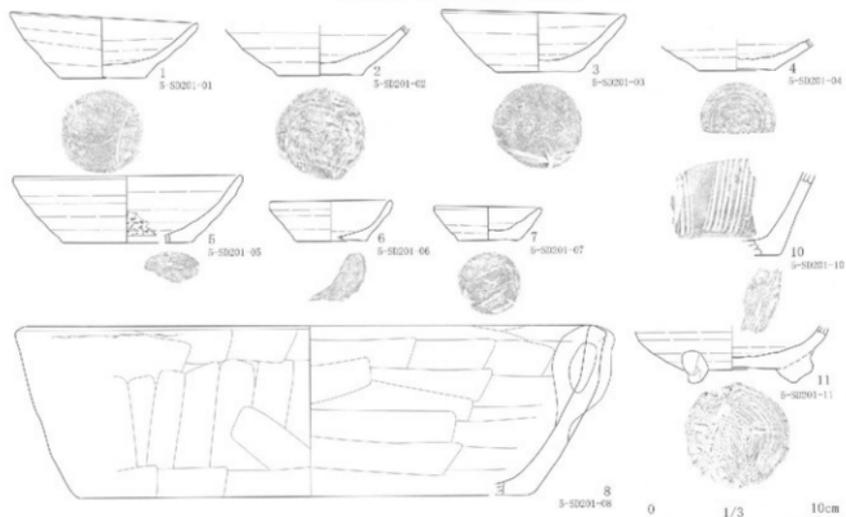
SD202・203・208・304～306(第117図 第20図版)

①位置:5区の東半部に位置する。

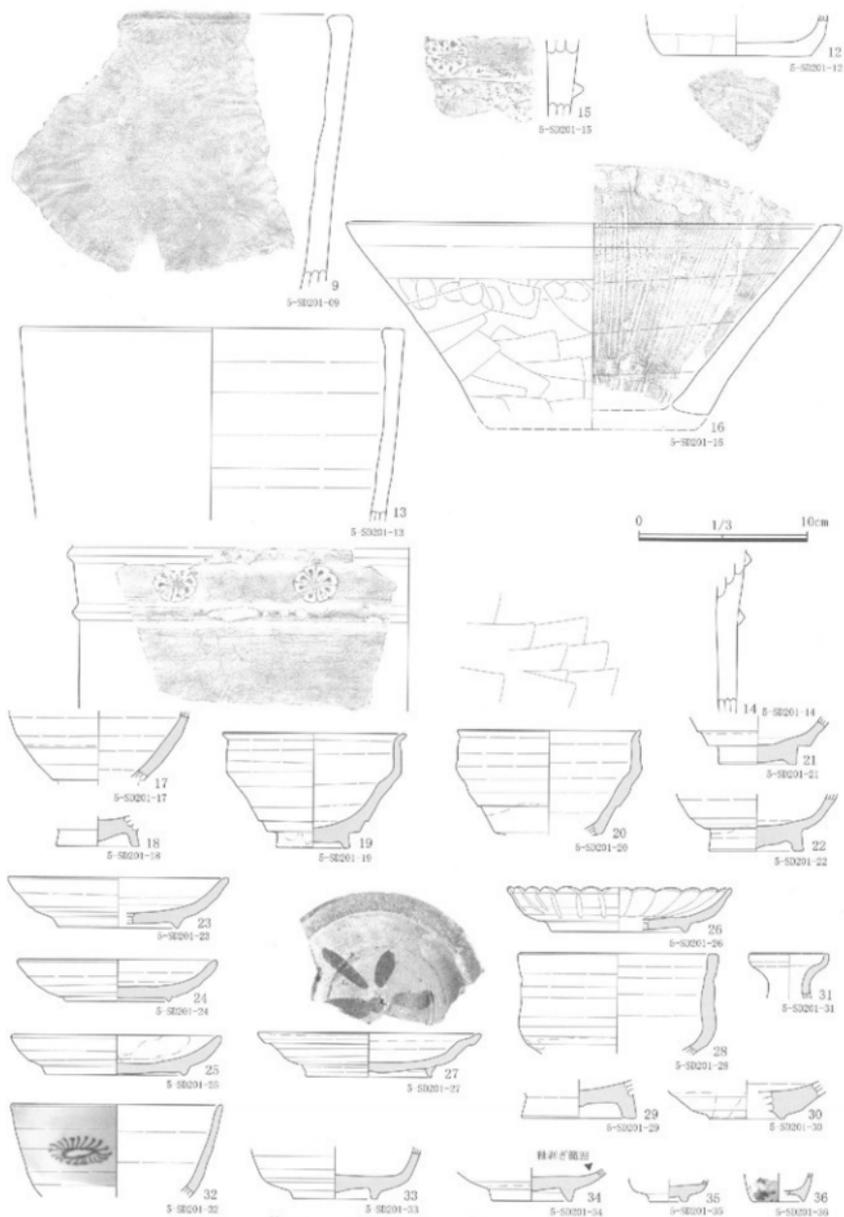
②形状・規模:幅0.50～0.80m、深さ10cm前後の浅い掘り込みである。『穴戸城絵図』(穴戸城下絵図)の当該地点は田地を示しており、土師質土器の破片を少量出土してはいるが、遺構というよりは耕作に伴う窪みとしてとらえることにした。



第 125 図 SD201 土橋部分拡大図



第 126 図 SD201 出土遺物 (1)



第 127 图 SD201 出土遺物 (2)



第128図 SD201出土遺物(3)

第88表 SD201出土遺物観察表(1)

番号	注記	種類	形制	口径	底径	高さ	重量	形制の特徴	裏面の形跡	表面	胎土	残存度	備考
1	S-SD201 No1	かわらけ	B輪中皿	11.2	2.6	5.2	108.1	平らな底部から40度角で直線的に立ち上がる。	コクロ型形、切り離し不明、一方半持ちへつ張り残断。	外面SD202/2 裏面内面SD201/4にぶい白色	白色大粒多量含む。焼付手付。	全体の3/4	
2	SN-2015D 中央一拵	かわらけ	B輪中皿	—	5.2	<3.0	88.1	わずかに突出する高台から30度角で直線的に立ち上がる。	コクロ型形、左側縁糸切り離し後、一方両手持ちへつ張り。	良好 金体SD207/6 白色	雲母非含まない。胎内SD100/4にぶい白色	底面のみ	二次焼成で外面一部SD106/1焼成色
3	SD201 No1	かわらけ	B輪中皿	13.9	4.9	3.6	150.6	わずかに突出する高台から40度角で直線的に立ち上がる。口縁部で分断となる。	コクロ型形、左側縁糸切り離し後、一方両手持ちへつ張り。	良好 金体SD100/6/7 黄白色	白色粒子や多い。雲母若干含む。	ほぼ完全	
4	S-2015D No19	かわらけ	B輪中皿	—	5.6	<1.85	39.1	深い凹縁の底面から20度角で直線的に立ち上がる。	コクロ型形、切り離し不明。底面は糸断へつ張りで残断。	良好 金体 7.5157/4白色	白色・雲母多数粒子を含む。発光性。	底面の1/2	
5	SN-2015D 中央一拵	かわらけ	B輪中皿	(13.5)	(7.6)	<1.6	29.3	平らな底面から30度角で直線的に立ち上がる。	コクロ型形、切り離し不明。底面は半持ちへつ張りである。	やや不良 内外面 7.5157/2 白色	白色・雲母多数粒子を含む。	全体の1/5	焼付手
6	SN-2015D S一拵	かわらけ	B輪小皿	(7.2)	(4.2)	<2.45	13.6	平らな底面から60度角で直線的に立ち上がる。	コクロ型形、糸断糸切り離し後、両側縁部が糸断り。	良好 金体 7.5156/2 白色	雲母多数粒子を含む。	全体の1/4	
7	SN-2015D S一拵	かわらけ	B輪中皿	6.3	3.7	2.9	36.7	やや傾り上がり凹縁の底面から46度角で直線的に立ち上がる。	コクロ型直線形、左側縁糸断り後、多方向へつ張り残断。	良好 裏面 金体SD107/7/7 白色	白色・雲母多数粒子を含む。	ほぼ完全	
8	SN-2015D S一拵	土師質土器	内耳輪	33.4	127.2	10.1	1013.5	皿で深い底面から65度角でみを含んで縁や口縁に立ち上がる。口唇は水平で分断。	回転台使用か。口縁部などが段差状に残断。	良好 内外面 7.5153/3 ぶい白色	白色・雲母多数粒子を含む。	全体の1/3	
9	S-SD201 No19	土師質土器	鉢鉢	—	—	<10.4	408.5	内側に分断となる口唇から下は、凹縁状となる。	輪縁み残断。全面ナゲ調整。	良好 内外面 10165/2 白色	白色粒子・雲母多数粒子を含む。胎内SD109/2にぶい白色	鉢縁部片	
10	SN-2015D S一拵	土師質土器	鉢鉢	—	—	<4.5	54.1	平らな底面から70度角で、やや傾り凹縁に立ち上がる。	凹縁台使用。縁の口縁位の線目。	やや不良 外面 10165/3 にぶい黄褐色内面 10164/1/1 緑褐色	黒色炭粒子を含む。胎内SD108/2にぶい白色	鉢縁部片	
11	S-SD201 No13	土師質土器	三足皿	—	5.4	<2.6	109.4	底面6mmの凹縁の縁に3個の足がつく。体部は半球状に突く。口縁部不明。	コクロ型形、左側縁糸断り後、輪縁部の歪みを含め残断り付。	外面 2.5156/2 緑褐色内面 2.5153/1 褐色	雲母多数粒子を含む。胎内面黄褐色	底面のみ	
12	SN-2015D S一拵	土師質土器	小皿	—	38.8	<2.0	43.5	わずかに深んだ底面から70度角で立ち上がり口唇から垂直となる。	コクロ型形、切り離し不明。	やや不良 内外面 白色	雲母多数粒子を含む。胎内SD105/1にぶい白色	底面の1/4	
13	SN-2015D S一拵	瓦質土器	筒鉢	(21.8)	—	<11.8	199.6	口縁は分断となり、その下は凹縁状の半筒型を呈す。	輪土壁寄せ上げ成形。	良好 内外面凹口/白色	白色粒子や多い。胎内面黄褐色	口縁部破片	
14	SN-SX201 No1	瓦質土器	大鉢	—	—	<9.7	294.5	ほぼ75度角に開く凹縁から口縁部にかかる部分に凸帯が多数あり。文脈帯を構成する。	輪縁み残断。全面ナゲ調整。縁の口縁位の線目。	良好 外面 2.5075/1 白一帯残断 2.5078/1 白色	白色粒子や多い。胎内面黒色	鉢縁部片	
15	S-SD201 一拵	瓦質土器	大鉢	—	—	<1.8	81.6	底面上方に凸帯が突出する。	成形不明。外面ナゲ調整。文脈帯内に八雲印花文あり。	良好 内外面 5013/1 緑褐色	白色粒子や多数含む。胎内面黄褐色	鉢縁部片	
16	S-2015D No29皿	瓦質土器	浅鉢	29.6	—	<16.8	1073.8	底面欠けが、ほぼ40度角で直線的に立ち上がる。	成形不明。内外面ナゲ調整。6mm幅位の線目が残断り全面に21に示す。	良好 内外面 5018/0 白色	白色粒子・雲母多数粒子を含む。胎内SD107/0 SD108/0 白色	全体の5/6	
17	SN-2015D N一拵	陶器	天目茶碗	—	—	<4.3	44.3	作部160度角でわずかにみを含んで立ち上がる。	外面体部下半部縁部が凹縁へつ張り残断。	良好 内外面 7.5152/3 褐色の釉料 残断SD86/0 白色	黒色炭粒子や多数含む。	体部の1/5	胎内・雲母多数粒子を含む。
18	SN-2015D N一拵	陶器	天目茶碗	—	—	<1.85	42.7	成立する高台。	傾り出し高台。外面磨削。	良好 内外面 7.5151/1 褐色	黒色炭粒子や多数含む。	底面のみ	胎内・雲母多数粒子を含む。

第89表 SD201出土遺物調査表(2)

番号	品名	種類	材質	口径	底径	高さ	重量	発掘の状況	形状の特徴	底径	口径	取手	取付位置	備考
19	5N 2015D No103	陶器	白灰土	(10.7)	4.3	(7.1)	126.9	直立する高台から平らになり、その下面に縦に筋を有しながらゆるやかに立ち上がる。口縁部は直上となり14度で反り起る。	口縁部整形、削り出し高台。下半部分割れへリ削り調整。底径のみ追加	内外面 2.5618/1度 白色の長石 粒径0.9/0 白色	黄色微粒子 若干含む。	全体 1/2	高瀬川遺跡17世紀 調査	
20	5Y- 2015D K-1番	陶器	白灰土	(11.0)	—	(6.4)	54.9	体部は途中で段を有しながら60度角で直線的に立ち上がり、口縁部は直上となり、口筒へ反り起る。	コテコ整形、作手調整へリ削り調整。	内外面 2.5623/1度 白色の長石 粒径0.9/0 白色	黄色微粒子 若干含む。	口縁部 の1/4	内庭 次郎 瀬川・美濃17世紀 調査	
21	5N 2015D- K-2番	陶器	白灰土	—	4.1	(2.9)	74.1	直立する高台から平らになり、その下面に縦に筋を有しながらゆるやかに立ち上がる。	口縁部整形、削り出し高台。下半部分割れへリ削り調整。	内外面 2.5617/1度 白色の長石 粒。若干含む。	黄色人粒 今多い。	底部 のみ	高瀬川遺跡17世紀 調査	
22	5G201 No6	陶器	丸土	—	3.4	(3.5)	69.5	高く立ち上がり筒状になり、口縁部は直上になり、口筒へ反り起る。	コテコ整形、削り出し高台。	内外面 2.518/2度 白色の長石 粒径0.9/0 白色	黄色微粒子 若干含む。	底部 のみ	内庭 次郎 瀬川・美濃17世紀 調査	
23	5G- 2015D- S-1番	陶器	赤野丸土	(13.1)	7.1	3.1	94.1	低い口縁部から30度ほどの角度で段々になり、口縁部は直上になり、口筒へ反り起る。	コテコ整形、削り出し高台。	内外面 5.128/2度 白色の長石 粒径0.9/0 白色	緑青、若干含む。	全体 の1/2	二次焼 瀬川・美濃17世紀 調査	
24	5G- 2015D- S-2番	陶器	赤野丸土	(11.8)	6.1	2.6	38.2	筒状に低い口縁部から立ち上がり、口縁部は直上になり、口筒へ反り起る。	コテコ整形、削り出し高台。	内外面 5.128/2度 白色の長石 粒径0.9/0 白色	黄色微粒子 若干含む。	全体 の1/2	二次焼 瀬川・美濃17世紀 調査	
25	5G201 1番	陶器	丸土	(12.3)	(8.1)	2.4	49.2	筒状に低い口縁部から立ち上がり、口縁部は直上になり、口筒へ反り起る。	コテコ整形、削り出し高台。内面に5G/1度傾斜の緑青を有する。	内外面 5.127/2度 白色の長石 粒径0.9/0 白色	黄色微粒子 若干含む。	全体 の1/4	二次焼 瀬川・美濃17世紀 調査	
26	5- SD201 No13	陶器	赤野丸土	(13.3)	(5.0)	2.7	30.7	直立する高台から30度角で立ち上がり、口縁部は直上になり、口筒へ反り起る。口縁部は花文を呈し、内面は元々で起っている。	コテコ整形、削り出し高台。	内外面 10.078/2度 白色の長石 粒径0.9/0 白色	黄色微粒子 若干含む。	全体 の1/6	二次焼 瀬川・美濃17世紀 調査	
27	5- SD201 No203	陶器	赤野丸土	(13.3)	7.1	2.25	79.5	直立する高台から30度角で立ち上がり、口縁部は直上になり、口筒へ反り起る。	コテコ整形、削り出し高台。下半部分割れへリ削り調整。内面高台を有する。	内外面 5.076/1度 白色の長石 粒径0.9/0 白色	黄色微粒子 若干含む。	全体 の1/2	二次焼 瀬川・美濃17世紀 調査	
28	5G201 No1	陶器	赤野丸土	(12.0)	—	(5.95)	47.9	筒状に低い口縁部から立ち上がり、口縁部は直上になり、口筒へ反り起る。	コテコ整形、下縁部へリ削り調整。	内外面 2.518/2度 白色の長石 粒径0.9/0 白色	黄色微粒子 若干含む。	全体 の1/5	高瀬川遺跡17世紀 調査	
29	5K- 2015D S-1番	陶器	丸土	—	5.9	(2.2)	92.6	直立する高台。	コテコ整形、全面整形。蓋付自然剥離。	内外面 3.077/2度 白色の長石 粒径0.9/0 白色	黄色微粒子 若干含む。	底部 のみ	高瀬川 調査	
30	5N 2015D- S-2番	陶器	内付	—	(4.1)	(2.3)	43.9	内面より筒状から30度角で傾く。	口縁部整形、下半部分割り付け。下半部分割れへリ削り調整。	内外面 7.5186/2度 白色の長石 粒径0.9/0 白色	黄色微粒子 若干含む。	底部 のみ	見込みに追加 10.078/3度の欠 け 調査	
31	5- 2015D No102	陶器	赤野丸土	4.3	—	(2.7)	21.6	受け口状の日縁部。	コテコ整形。	内外面 10.078/1度 白色の長石 粒径0.9/0 白色	黄色微粒子 若干含む。	底部 のみ	高瀬川遺跡17世紀 調査	
32	5- SD201 1番	磁器	染付 陶器	(12.3)	—	(5.5)	42.6	筒状の大きな口。	コテコ整形。	内外面 5.076/1度 白色の長石 粒径0.9/0 白色	黄色微粒子 若干含む。	口縁部 の1/3	外庭 次郎 瀬川・美濃17世紀 調査	
33	5- SD201 No095	磁器	染付 陶器	—	3.1	(3.1)	110.7	内面より筒状の高台から平らになり、口縁部は直上になり、口筒へ反り起る。	コテコ整形、染付。高台・砂付。	内外面 5.076/1度 白色の長石 粒径0.9/0 白色	黄色微粒子 若干含む。	底部 のみ	内庭 次郎 瀬川・美濃17世紀 調査	
34	5K- 2015D S-1番	磁器	染付 陶器	—	4.8	(1.95)	49.1	内面より筒状の高台から平らになり、口縁部は直上になり、口筒へ反り起る。	コテコ整形、削り出し高台。見込みに高台を有する。	内外面 5.076/1度 白色の長石 粒径0.9/0 白色	黄色微粒子 若干含む。	底部 のみ	内庭 次郎 瀬川・美濃17世紀 調査	
35	5- 2015D No49	磁器	染付 陶器	—	2.3	(1.8)	17.4	低い口縁部から30度角で立ち上がる。	彫削不明。	内外面 6.071/1度 白色の長石 粒径0.9/0 白色	黄色微粒子 若干含む。	底部 のみ	高瀬川遺跡17世紀 調査	
36	5- SD201 No2	磁器	染付 陶器	—	(3.0)	(1.75)	4.8	上り高台で、そのまゝ60度角で立ち上がる。	彫削不明。	内外面 真白	緑青。	底部 のみ	高瀬川遺跡17世紀 調査	

第90表 SD201 出土遺物観察表 (3)

番号	位置	種類	器種	口径	底径	深さ	重量	器形の寸法	器形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
37	S- SD201 No.09	磁質	茶碗鉢	外径 24.3mm	孔 8.7mm	—	1.9	—	—	—	—	陶	完存	「豊安実貨」茶 碗(1939~1940)
38	S- SD201 No.2	磁質	北米鉢	外径 23.5mm	孔 6.5mm	—	2.3	—	—	—	—	陶	一部欠 損	「昭和実貨」石 壺(1994~1995)
39	S- SD201 一括	磁質	西米鉢	外径 25.0mm	孔 6.0mm	—	2.4	—	—	—	—	陶	完存	「豊安実貨」青 磁(1995)
40	S- SD201 中層	磁質	明鉢	外径 22.2mm	孔 5.7mm	—	3.2	—	—	—	—	陶	完存	「赤式実貨」青 一輪(1998~ 1999)

(4) SK (土坑)

SK411 (第129・130図 第22・32図版 第91表)

①位置: M26-a に位置する。

②形状・規模・覆土: 62cm×58cmの平面円形で深さは6cmで覆土は黒色土である。

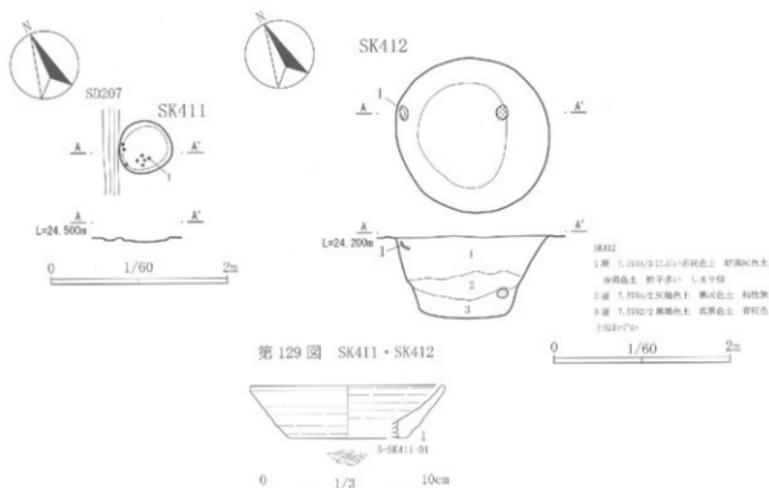
④出土遺物: 遺物は覆土~底部にかけて土器破片が検出されている。

SK412 (第129・131図 第22・32図版 第92表)

①位置: K26-c に位置する。

②形状・規模・覆土: 直径1.7mの円形を呈す土坑である。全体として漏斗状に落ち込むようである。断面観察によると、上面では暗黒灰色から黒色土の自然堆積と思われる。覆土内には礎石がいくつか認められる。

③出土遺物: かむらけ・陶器



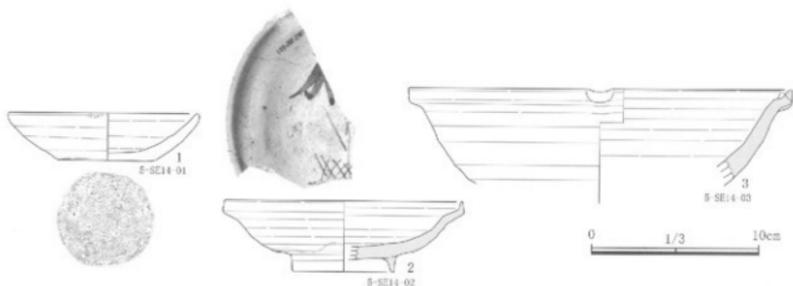
第129図 SK411・SK412



第130図 SK411 出土遺物

第91表 SK411 出土遺物観察表

番号	位置	種別	器種	口径	底径	厚さ	重量	器形の特徴	器形の特徴	焼成	色調	胎土	残存度	備考
5- 1	SK411 一括	かむらけ	中皿	(11.4)	(7.0)	3.2	20.9	底部から60度角で 扇形的に立ち上 がる。	ロタコ整形、切り 傷し不明。	良好	金茶 7.53/96/42に 近い褐色	白色熟胎子 ・黄褐色子 ・黄褐色 ・黄褐色	口縁部 の1/4	



第131図 SK412出土遺物

第92表 SK412出土遺物観察表

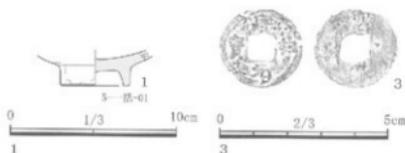
番号	注記	種類	素材	1径	2径	高さ	重量	器形の特徴	胎形の特徴	焼成	色澤	胎土	残存状況	備考
1	5N-145E上層1	かわらけ	A層中皿	11.2	5.9	2.8	118.0	やや深い皿部から15度角で縁やかに立ち上がる。	コクロ胎形。切り摩し不明。	良好	外面 7.5YR6/4微 白の白濁 7.5YR6/2に 近い褐色	白色粒子多い。黒線粒を含む。介粒含む。	ほぼ完全	焼付替
2	5N-145E上層	陶器	志野の 陸奥胎 皿	(13.2)	(6.3)	(4.2)	76.5	縁の裏面から30度角で開き、口縁部でさらに反り返る。口縁は編みあげられる。	ロタロ胎形。足付高さ。体下部回転ヘラ張り異状。	良好	内外面 2.5Y7/2灰 濁色の灰白 濁	黒色微粒子やや多い。	全体の1/4	見込みに鉄線(5YR3/2褐色)単文。炭素線17世紀前半
3	5N-145E上層一拵	陶器	新橋鉢	(22.8)	—	(3.7)	88.5	40度ほどの角度で刃のみを削って立ち上がり、口縁部で解決を呈す。	ロタロ胎形。胎形は経正正。	良好	内外面 2.5YR/1灰 白色の灰濁	白色粒子若干含む。	口縁部 破片	新橋鉢 瀬戸・高瀬窯 17世紀前半

(5) ビット (第93表)

遺構が組めなかったビットについて第93表にまとめた。

第93表 5区ビット計測表

地区	遺構名	検出グッド	規模・形番			
			長さ (cm)	幅径 (cm)	高さ (cm)	平面形
5区北	F411	L2E-d	28	24	40	円形
	F412	L2E-a	36	32	42	円形
5区南	F401-a	M2F-a	42	29	42	円形
	F401-b	M2F-a	26	26	18	楕円形
	F404	M2F-a	32	28	38	円形
	F406	M2F-a	16	26	47	円形
	F408	M2F-a	36	32	24	円形



第132図 5区遺構外出土遺物

第94表 5区遺構外出土遺物観察表

番号	注記	種類	素材	口径	底径	高さ	重量	胎形の特徴	胎形の特徴	焼成	色澤	胎土	残存状況	備考
1	5-区	磁器	染付碗	—	4.1	(2.15)	45.4	内反り気味の深い高台。	コクロ胎形。柄出し高台。高台部彫。	良好	内外面 2.5YR/1灰 白色の胎	黒色微粒子若干含む。褐色の胎。	底部のみ	肥前(飯塚見・平戸)高台または17世紀前半
2	321-a	金属製品	鉄造幣	径 12.6mm	—	—	11.9	形に実形認められない。未使用か。	楕円のかわり目と切り離しのノベリが確認できる。	—	青銅36/00 灰色	片	—	瀬戸320号参照
3	1N-11 2-001	磁質	北宋銭	外径 2.41mm	孔 8.6mm	—	1.8	—	—	—	—	黒	完全	「遺物実録」外巻(1056~1063)

第6章 自然科学分析

第1節 宍戸城跡出土木製品の樹種

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

宍戸城跡は、沼川左岸の沖積地に位置する。これまでの発掘調査により、17世紀代を中心とした遺構・遺物が検出されている。

本報告では、近世の木材利用を明らかにするため、出土した木製品の樹種同定を実施する。

1. 試料

試料は、角材を中心とした建築・土木材や木製容器（木製容器・底板・漆桶）、板材など20点（委託№1-20）である。

2. 分析方法

木製品の木取りを観察した後、破損部から木片を採取する。剃刀を用いて木片から木口（横断面）・年輪（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作成し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入してプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

3. 結果

樹種同定結果を表1に示す。木製品は、針葉樹2分類群（マツ属複維管束亜属・アスナロ）と広葉樹4分類群（コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・ケヤキ・モクセイ属）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属（*Pinussubgen. Diploxylo*） マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急〜やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エビセルウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-10細胞高。

・アスナロ（*Thujaopsidolabrata*Sieb. etZucc.） ヒノキ科アスナロ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、内壁には茶褐色の樹脂が顕著に認められる。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercussubgen. Quercusssect. Prinus*） ブナ科

環孔材で、孔部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと同複合放射組織とがある。

・クリ（*Castanocrenata*Sieb. etZucc.） ブナ科クリ属

環孔材で、孔部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

・ケヤキ（*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino） ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯

状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

・モクセイ属 (*Osmanthus*) モクセイ科

絞線孔材で、道管は多数が複合して斜方向に配列する。道管壁は薄く、横断面では多角形。道管は単穿孔を有する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高。

4. 考察

木製品は、丸太杭、丸太、角材、半角材、木製容器、板材、底板、漆桶であり、合計6分類群が認められた。各分類群の材質をみると、針葉樹の複雑管束亜属は、軽軟で加工は容易であるが、強度・保存性は比較的高い。アスナロは、木理が適度で割裂性・耐水性が高く、加工は容易である。広葉樹のクリとケヤキは、比較的重硬で強度・耐朽性が高く、加工はやや困難である。コナラ節は、重硬で強度が高く、加工はやや困難である。モクセイ属は、重硬・緻密で比較的高い。

器種別に見ると、丸太杭、丸太、角材、半角材では複雑管束亜属を中心としてクリやコナラ節が混じる組成となることから、強度や保存性の高い木材を選択したことが推定される。遺構別に見ると、SA07では、芯持丸木の丸太杭がコナラ節、芯除角材が2点とも複雑管束亜属であり、角材と丸太杭とで木材利用に違いが認められる。一方、SB02これらの結果から、遺構によって木材利用が異なる可能性がある。

第95表 樹種同定結果

No.	調査区	遺構	旧番号	部種名	木取り	樹種
1	1区	SA07-P2	P752	丸太杭	芯持丸木	コナラ属コナラ亜属コナラ節
2	1区	SA07-0P5	P660	角材	芯除角材	マツ属複雑管束亜属
3	1区	SR08-P3		角材	芯持角材	マツ属複雑管束亜属
4	1区	SK653		丸太	芯持丸木	マツ属複雑管束亜属
5	2区	SB01-P3		角材	芯除角材	クリ
6	2区	SH02-P2		角材	芯除角材	クリ
7	2区	2号遺-No. 4		角材	芯持角材	マツ属複雑管束亜属
8	2区	SB02-P11		角材	芯除角材	クリ
9	2区	SB03-P1		角材	芯除角材	マツ属複雑管束亜属
10	2区	SX01-No. 4		半角材	芯持分細材(1/4割材)	マツ属複雑管束亜属
11	2区	SX01-No. 5		丸太杭	芯持丸木	マツ属複雑管束亜属
12	2区	SX01-No. 2		木製容器	縦木地	モクセイ属
13	2区	SX01-No. 26		半角材	芯持材	マツ属複雑管束亜属
14	1区	SA07-P3	P753	角材	芯除角材	マツ属複雑管束亜属
15	2区	SH02-P9		角材	芯持角材	クリ
16	2区	SA13-P1	P158	角材	芯持材	マツ属複雑管束亜属
17	2区	SA14-P1	P161	角材	芯除角材	マツ属複雑管束亜属
18	5区	SE04-No. 9	SK403	板材	板目	マツ属複雑管束亜属
19	5区	SE04-No. 36	SK403	底板	砥目	アスナロ
20	1区	3号遺-No. 4		漆桶	横木地	ケヤキ

木製品のうち、底板は曲物の底板と考えられており、分割加工が容易で耐水性の高いアスナロが利用されている。一方、漆碗は、硬いケヤキが利用されており、曲物と掬物とで木材利用が異なる。木製容器は、形状から合子の蓋などと考えられ、硬く緻密なモクセイ属が利用されている。

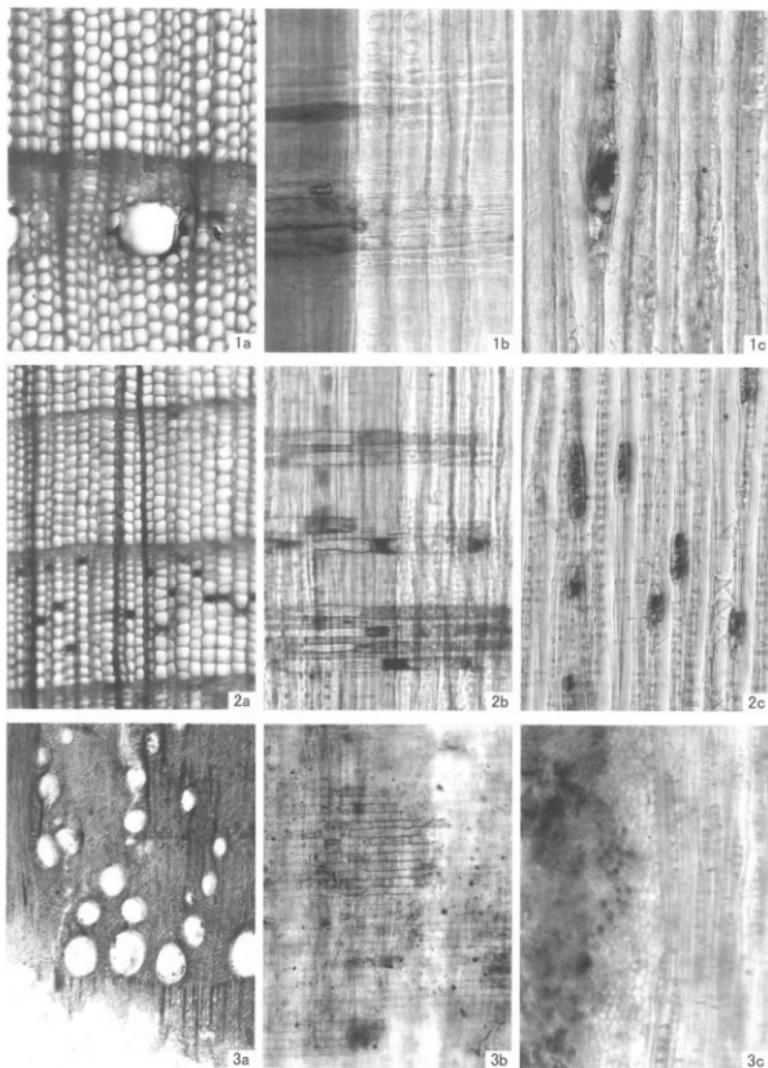
穴戸城跡では、これまでも出土した建築部材や木製品の樹種同定が実施されている(能塚, 2006; パリノ・サーヴェイ株式会社, 2006)。その結果をみると、柱材にクリやアカマツ(複雑管束血脈)が確認されており、今回の丸太、角材、半角材等の同定結果と木材利用が類似する。一方、曲物の底板や蓋?とされる資料にはヒノキが確認されており、今回の結果からアスナロも利用されていたことが推定される。また、漆器碗・蓋では、これまでの調査でケヤキ、ブナ属、トチノキの利用が明らかとなっており、今回の結果も調和的である。

合子については、茨城県内での調査事例が確認できないが、筑土八幡町遺跡(東京都新宿区)から出土した合子の蓋と身がいずれもモクセイ属のヒイラギに同定された例がある(パリノ・サーヴェイ株式会社, 2004)。今回の結果から、本地域でもモクセイ属(ヒイラギ)が利用されていたことが推定される。

第96表 科学分析対象遺物計測表

* < >内は現状での長さ ◊は直径

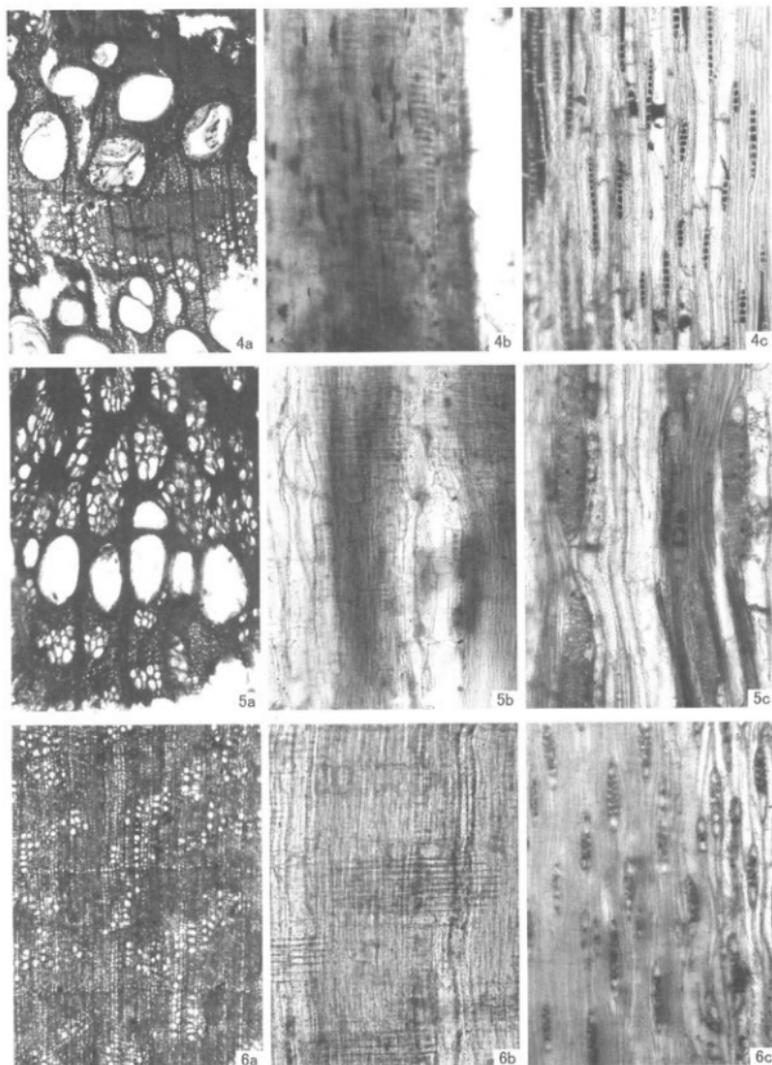
委託No.	調査区	出土遺構	旧番号	部類名	長	幅	厚mm	特徴
1	1K	SA07-P2	P762	丸太枕	<480>		◊128	先端 山鉾削り
2	1区	SA07-P5	P660	角材	<512>	133	130	
3	1区	SB08-P3		角材	<316>	129	117	
4	1区	SK663		丸太	<532>		◊144	荒げた痕跡
5	2区	SB01-P3		角材	<565>	124	119	
6	2K	SB02-P2		角材	<570>	120	113	合駒仕上げ
7	2K	2号堀-No.4		角材	<790>	134	123	表面は手斧で平らに仕上げている。2角を削り、横断面5角形となる。両面に8角形と長方形の異なるほぞ穴が穿たれ、下部にはシラカシをかませるためか、深く削り取られている。
8	2区	SB02-P11		角材	<835>	127	115	
9	2区	SB03-P1		角材	<293>	127	124	
10	2K	SX01-No.4		半角材	588	81	67	他に同一規格品2個体
11	2K	SX01-No.5		丸太枕	<1580>		◊82	片面 一部削り取られ、先端3面削り
12	2区	SX01-No.2		木製容器	◊150		5	口は口縁のみか。
13	2区	SX01-No.26		半角材	<340>	103	80	両面台座で平面に削る。
14	1区	SA07-P3	P753	角材	<422>	138	130	
15	2区	SB02-P9		角材	<305>	119	108	
16	2区	SA13-P4	P158	角材	<260>	160~	160~	
17	2区	SA14-P1	P161	角材	<520>	142	137	
18	5K	SE04-No.9	SK403	板材	344	210	20	楕円形を呈し、節穴がある。用途不明。
19	5K	SE04-No.36	SK403	底板	◊189		8	竹串痕からみて、曲物底であろう。
20	1区	3号堀-No.4		漆碗				



1. マツ属複維管束亜属(委託№10)
 2. アスナロ(委託№19)
 3. コナラ属コナラ亜属コナラ節(委託№1)
 a: 木口, b: 柎目, c: 板目

500 μ m: 3a
 200 μ m: 1-2a, 3b, c
 100 μ m: 1-2b, c

第133図 木材(1)



4. クリ(委註№8)
 5. ケヤキ(委註№20)
 6. モクセイ属(委註№12)

a: 木口, b: 年輪, c: 板目

300 μm a
 200 μm b, c

第134図 木材(2)

引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所。
- 伊東 隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181。
- 伊東 隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176。
- 伊東 隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201。
- 伊東 隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166。
- 伊東 隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ, 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216。
- 鹿城 修一, 2006, 穴戸城跡出土木製品の樹種, 『茨城県教育財団文化財調査報告第256集 新善光寺跡・穴戸城跡 主要地方遺跡発掘部 縄道路改良工事地内発掘文化財調査報告書』, 茨城県水戸土木事務所・財団法人茨城県教育財団, 159-160。
- パリオ・サーヴェイ株式会社, 2004, 木製品の樹種特定, 『東京都新宿区 筑上八幡町遺跡Ⅲ (仮称) 新宿区白旗町2丁目マンション建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』, 新宿区生涯学習財団新明歴史博物館, 119-121, 厚巻129-132。
- パリオ・サーヴェイ株式会社, 2006, 出土した木製品の樹種, 『穴戸城跡 一店構建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』, 株式会社コメリ・山武考古学研究所, 13-14。
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東 隆夫・藤井 智之・佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘(日本誌版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 謙・伊東 隆夫, 1982, 岡説木材組織, 地球社, 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本誌版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

第7章 総括

第1節 検出された遺構について

第1項 過去の調査

穴戸城跡における本格的な発掘調査は、今回の2010年度調査を含め、2004年度から5回に渡る調査が行われている。2004年度の茨城県教育財団（以下、「財団」と記す）による調査では、掘立柱建物跡17棟、塀跡5条、溝跡5条、井戸跡7基、ピット群1か所、土坑21か所、池跡3か所、柱穴列跡3条が検出され、土師質・瓦質土器・陶磁器類・金属製品・木製品・土製品が出土している。検出された遺構群は、城割の区画に沿って概ね南北方向（N-25°-W）もしくは東西方向（N-75°-E）であることが報告されている。

2006年度の南山武考古学研究所による調査では、掘立柱建物跡2棟、溝跡12条、井戸跡4基、池跡2基、土坑16基、ピット26基が検出され、土師質・瓦質土器・貿易陶磁・瀬戸灰染・志野・唐津・肥前・常滑が出土している。2008年度の福毛野考古学研究所による調査では、西側虎口の馬出しの堀跡1条、溝跡4条、井戸跡1基、土坑5基、不明遺構3基、ピット50基が検出されている。2009年度のテイケイトレード株式会社による調査では、本丸および南側腰郭の土塁2本と堀跡2条が検出され、土師質・瀬戸・美濃・笠間・常滑が出土している。2009年度の財団による調査では、井戸跡1基、池跡2基、土坑6基、堀跡2条、溝跡4条、杭列1条、ピット群4か所が検出された。

これらの中で今回の調査と関連する遺構に、掘立柱建物跡・井戸跡・池・堀・溝が挙げられる。

掘立柱建物跡

2004年度調査の成果から、6・7・9尺といった柱間距離が用いられていることが示され、覆土中に砂礫を充填させる側柱の第8号掘立柱建物跡を挙げて、土殿や門である可能性を、丸材を用いた総柱である第9号掘立柱建物跡を挙げて物置施設の可能性を、また柱間距離が妻側・桁行ともに2.1mを基調とする第14号掘立柱建物跡を挙げて秋田氏入封以前である16世紀の構築としている（稲田2006）。この調査を受けて行われた2006年度調査では、前回は補足し、穴戸城武家屋敷間尺に京尺のものが存在し、柱材が4寸=12cmの栗材を使用していることを指摘している（岡宮2006）。

井戸跡

井戸枠を石組で構築するタイプ、板材で構築するタイプ、素掘りタイプの3種があるようである。

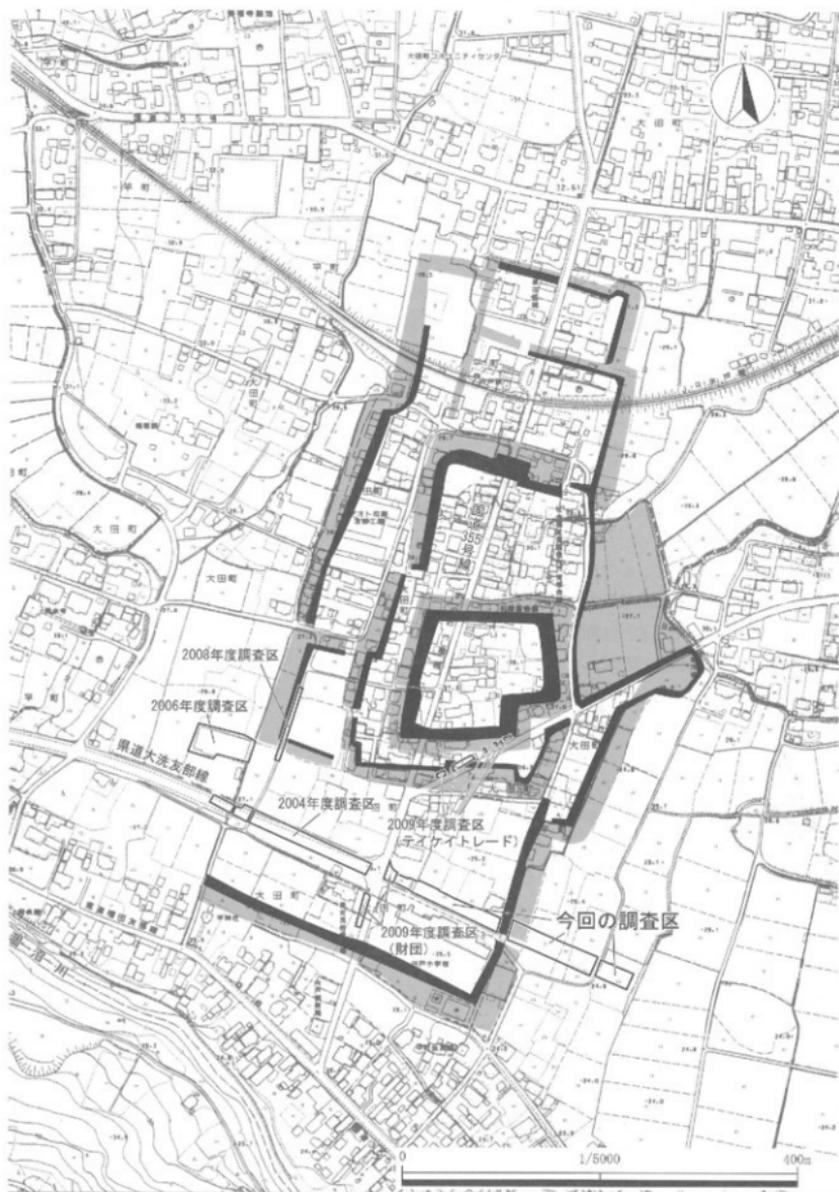
第1の石組井戸は、2006年度SE01が2.60m×2.58mの平面円形で、上部を粘土で閉塞している。第2の木枠井戸は、2004年度第7号井戸が1.60m×1.60mの平面円形に掘り込んで掘方とし、平面円形の枠（径0.70m）の外の裏込めは黄色土・青灰色粘土、黒色土を互層状に版築している。第3の素掘り井戸は直径1.00m前後の平面円形～楕円形をなしたもので、これまでに検出された井戸の大半がこのタイプである。

池

2004年度調査、2006年度調査、2009年度調査（財団）において、庭園施設である池が検出されている。平面形は不整形のものと同方形基調をしたL字形のものがある。

不整形（楕円形・長楕円形）タイプは、過去の調査事例の大半を占めている。各報告書では、楕円形・長楕円形としているが、不整形というべき形状である。2004年度調査では不整形の池は6基が検出され、そのうちの第1号池は、9.70m×4.0mの不整形楕円形で、南側には長径3.0mの楕円形の張り出し部分がある。長軸方向はN-56°-Eで、深さは45cmを測り、底部はやや凹凸がある。覆土は人為堆積。廃絶時に埋め戻されていた。

方形基調でL字形タイプの池は、2004年度調査第3号池である。南北8.0m×東西4.5mで深さは0.70mを測り、壁は外傾して立ち上がる。長軸方向はN-25°-Eである。竹や木材を杭にして、その間を竹や木材を交互に編み込んだ「しがらみ」による護岸対策をしている。自然に湧水する。調査社は廃棄後に埋め戻した人為堆積と判断している。



第135図 大戸城縄張り図 (稲田2006 第158図を引用)

2004・2009年度調査(財財)で検出された遺構が今回の調査と関連付けられる。2004年度調査において溝は5条が検出されている。いずれも『穴戸城絵図(穴戸城下絵図)』に描かれていない溝で、南北(N-25°-E)に走向する溝と東西(N-65°-W)に走向する溝とが検出されている。南北(N-25°-E)に走向する溝は第2~5号溝の4条で、幅0.60~2.4m、深さは0.20~0.60mを測るものである。これらのうち、第4号溝は上幅2.4m、深さ0.50mを測り、覆土は4層からなる人為堆積。整地面下から検出されている。第5号溝は上幅0.7m、深さ0.2mの人為堆積である。東西(N-65°-W)に走向する溝は第1号溝で、上幅0.6m、深さ0.30m。これに沿った北側に第3号堀が平行して走行するため、武家屋敷の南辺で『穴戸城絵図』に示された当該郭の東西を貫く通りの北縁ではないかと指摘している。

2009年度調査(財財)では、整地面下から『穴戸城絵図』にはない現状幅3.4m、現状深さ1.23mの堀跡が検出されている。II区から北(N-12°-E)に走向し(1号堀)、北側のI区で東西(N-75°-W)に走向する2号堀に合流しており、後述する今回調査のI区において東西に走向する3号堀と同一の遺構と考えられる。17世紀所産の土器・陶磁器・木製品が出土している。

このほかに武家屋敷の区画と考えられる溝が、第6・7・8・11号の4条が検出されている。南北(N-5°~20°-E)に走向する溝は2条ある。第6号溝跡は、第2次整地層下層、第2号堀跡を掘り込み、幅0.54m、深さ0.28mを測り、覆土は細礫を多量に含むことから、2層からなる人為堆積である。第7号溝は、第4号堀と第2号堀を掘り込み、幅0.58m、深さ0.38mを測る。単一層からなる人為堆積である。東西(N-56°~65°-E)に走向する溝は、第8・11号溝の2条である。第8号溝跡は0.38~0.93m。断面U字形。深さ8m。細礫を含む単一層で埋戻した痕跡がある。第11号溝は第1次整地面を掘り込んでおり、上幅0.91~1.14m、深さ0.25mで3層に分層される。

2006年度調査では溝跡12条が検出されている。このうち屋敷境の区画はSD02-06が該当するとしている。このうち、SD02は幅1.83~1.69m、深さ0.66mを測り、17世紀陶磁器が出土している。東西(N-70°-W)に走向する。SD06は、幅0.95m、深さ0.33mを測り、南北(N-20°-W)に走向する。

2008年度調査では、『穴戸城絵図』にも描かれている堀1条と4条の溝が検出されている。1号溝(堀)跡は、幅8.61m、深さ1.71m。東西(N-71°-W)に走向し、断面形は笈形を呈する。上位層と下位層とがあり、上位層は12層からなる人為堆積で、近世陶器など17世紀の遺物が出土している。上幅0.28~1.18m、深さ0.05m~0.49mで南北方向(N-16°~18°-E)の溝3条。上幅0.45m、深さ0.45m、東西方向(N-62°-W)の溝1条が検出されている。

方形周溝状遺構と方形堅穴遺構

前述の遺構のほかに、今回検出された遺構に関連するものとして方形周溝状遺構と方形堅穴遺構の存在がある。穴戸城から外れるが、2004年度の穴戸城跡調査に関連した主要地方道大洗友部千道路改良工事に伴う新普光寺跡発掘調査が行われている。この中で、方形周溝状遺構、方形堅穴遺構についての記載がある。

方形周溝状遺構は、溝幅40~65cm、深さ15cmの周溝を平面長方形に巡らし、覆土は自然堆積である。長軸は北西方向(N-42°-W)である。遺物は少なく縄文土器・土師器が混入している。

方形堅穴遺構は、2基が報告されている。第1号方形堅穴遺構は4.80m×2.50mの平面長方形をなし、深さ65cm、長軸が北方向(N-4°-E)となっている。第2号方形堅穴遺構は2.1m×1.9mの平面正方形をなし、深さ28cm。長軸は北方向(N-5°-E)である。主柱穴と考えられる40cmと56cmの平面円形ピット2基を配置する。遺物は土師質土器が出土している。

2基の方形堅穴遺構のうち第2号堅穴遺構は堅穴式住居跡の系譜をひく建物跡のことで、中世における堅穴建物跡、堅穴状遺構とも呼ばれるものである。

第2項 今回の調査

今回の調査では、掘立柱建物跡、井戸跡、池（SX1）、堀・溝、および「方形に巡らせた溝」、竅穴状遺構（SX2）が検出されている。

掘立柱建物跡

11軒が検出されている。これらの柱間距離を、下記に示す江戸尺基調、京尺基調、両者以外という①～③の観点でまとめてみると、①は皆無で②が少数、③が主体をなすという結果になった。③の規格で比較的多いのは7尺=2.1mで、2004年度調査（稲田2006）において、1間=2.1mの規格は前述したように中世とされていた分類である。

これら掘立柱建物跡には角材と丸材が用いられており、武家屋敷数地帯における掘立柱建物跡で検出されたSB1・2・3・8では角材が検出されている（第107・108表・木製品観察表）。幅が11.5～13.8cmを測り、概ね4寸を示し材質は松と栗を用いている。2006年度調査同様に角材は4寸幅を基準とし、中世以来の東国の間尺と京尺が採用され、江戸尺は採用されていない。SA（塀・櫓列）においても同様の傾向を示している。

〔掘立柱建物跡の柱間距離〕

- ①江戸尺（1間=6尺=1.80m）を基調：該当なし
- ②京尺（1間=6.5尺=1.90m）を基調：（1区）SB08（2区）SB02
- ③両者以外：（1区）SB09・10（2区）SB01・03・04（3区）SB05・06（4区）SB11（5区）SB07

〔SA（櫓列・塀）の柱間距離〕

- ①江戸尺（1間=6尺=1.80m）を基調：該当なし
- ②京尺（1間=6.5尺=1.90m）を基調：（1区）SA07（2区）SA12
- ③両者以外：（1区）SA08（2区）SA09・10・13・14（5区）SA04・05・06

井戸跡

18基の井戸が検出され、このうち石組井戸2基、木枠井戸1基、素掘り井戸14基が検出されており、下記のようにまとめられる。

①石組井戸

- （1区）SE09：2.30m×2.20mの平面楕円形、深さ2.00mで底部砂礫層に至る。
- （2区）SE01：2.33m×2.05mの平面円形、深さは2.25mで底部砂礫層に至る。
- （5区）SE15：直径1.60mの平面円形で自然堆積の様相。井戸枠組み石が底部に存在。深さ1.80mで底部砂礫層に至る。

②木枠井戸

- （5区）SE04：2.6m×2.3mの楕円形、深さ1.80mで底部の砂礫層に至った。廃絶に伴う祭祀の様相と木枠の痕跡をなす板材が立位で出土している状況が特筆される。

③素掘り井戸

直径0.79～1.93mで概ね0.80m前後の平面円形～楕円形、深さ1.48～2.12mで砂礫層に亘り底部となる。

- （1区）SE07・08・10・11
- （2区）SE05・06・16～18
- （3区）SE03：直径0.9mの平面円形、廃絶に伴う祭祀の様相を示す遺物出土状況は特筆される。
- （4区）SE19～21

池

不整形タイプはなく、方形基調の平面L字形タイプのSX1（2区）を検出したのみである。平面形状や護岸対策、

自然に湧水する点などは2004年度調査の第3号池に類似しているが、規模はこれよりやや小さく、南北4.78m×東西4.60m、深さ0.86mを測る。長軸方向はN-23°-E。かわらけ・瓦質土器・瀬戸美濃織鉢・木製容器蓋などが出土している。

堀・溝

今回の調査では、堀4条、溝5条を検出した。堀・溝には、整地面及び対応する3～5区確認面（第1面。以下、「整地面」と略す）上の遺構と整地面下の遺構とが存在する。整地面上の堀は1条で溝は5条となり、整地面下の堀は3条で溝は1条となっている。これらの堀や溝は概ね直線的で、東西（N-62°～65°-W）と、南北（N-17°～25°-W）に走向している。

1・2区において検出された整地面上の溝は、武家屋敷の建物に関連した遺構で、このうちSD250・252は建物に関連した遺構と考えられる。3区で検出された1号堀は『穴戸城絵図（穴戸城下絵図）』に示されたものであり、絵図によれば現在の道路が土塁となり、その東側面下が外濠となる様相を示す。町屋側からではあるが、1.35mの残存深度であることは意外である。また5区において土橋が検出されたSD201は、城絵図に存在しないものであるが市場的な性格をもった4・5区に至る「町屋」内を、遺跡の南側を東流する潤沼川から北上するもので、井戸や当該溝出土遺物の様相から、区画や排水以外にも、例えば運河のような機能も想起させられるところである。

整地面下の遺構は、前述したように武家屋敷比定地である1・2区にのみ存在する。2～4号堀及びSD251が存在する。このうち東西に走向する3号堀は、前述したとおり、2009年度調査（財団）における、南北方向から東西方向に屈曲する第1・2号堀と一連の遺構と考えられる。以下に検出された遺構の概略をまとめてみた。

〔整地面上〕

①東西（N-62°～65°-W）に走向する溝

（1区）SD101～103・252：幅0.12～0.65m、深さ0.12～0.20mで、いずれも水の流れた形跡はない。

②南北（N-17°～25°-W）に走向する溝

（1区）SD250：幅0.46mで深さ0.37mを測り、単一層となっている。

SD252：幅は0.22～0.87m、深さは0.24mを測る。

（2区）SD001：幅1.12～1.39m、深さ0.27～0.33mを測り、自然堆積の様相をなしている。調査区境の断面が攪乱されていたので整地面上の遺構として扱うことにした。

（3区）1号堀：3区西端で検出された南北に走向する外濠で、『穴戸城絵図』にも描かれている。幅は現状で6.90m、深さ1.36mを測る。断面は、底部が平らで立ち上がり緩やかに開く形状をなし、覆土は褐色土～黒色土の3層からなる。覆土中から17～19世紀の陶磁器及び動物遺体が出土している。

（5区）SD201：幅は2.00mで深さ0.38mを測り、人為堆積の様相をなす。検出された溝の中央付近には土橋が存在する。17～19世紀の上器・陶磁器類・銭貨などが出土している。町屋のあった地区で整地面はないが、施錠期まで存続していたものと判断し、整地面上として扱うことにした。

〔整地面下〕

①南北方向（N-25°～32°-E）に走向する溝

（1区）4号堀：幅2.16m、深さ0.50mを測る。

（2区）2号堀：幅2.72m、深さ0.95mを測る。

（2区）SD251：幅1.60m、深さ0.50mを測る。1・2層で半ば自然堆積した後、整地層で完全に埋められる。

②東西方向（N-62°-W）に走向する溝

（1区）3号堀：断面形は現形状から箱葉研であると推定される。現状での最大幅は現状で5.76m、深さは2.30mを測るが、北岸と底部に達するには至らなかった。

「方形に巡らせた溝」と竅穴状遺構

1区から検出された「方形に巡らせた溝」は、南北7.80m×東西6.15m、溝幅12～24cm、深さ2～7cmで概ね5cm前後。平面方形に巡りつつ、東辺で途切れる。覆土は褐灰色砂礫単層をなしている。長軸方向は北西方向（N-35°-E）である。新善光寺遺跡における方形周溝状遺構に類似している。

SX2は、2区の整地面下で検出され、地山から掘り込まれていることが断面図からも判る。3.53m×2.80mの平面隅丸方形で、深さは0.30mを測り、覆土は整地面構築の際、埋め戻された様相を示す。長軸方向はN-82°-Eである。土師質土器を検出した新善光寺遺跡の第2号方形竅穴遺構に類似するが、新善光寺のものは中世とされている。

以上のことから今回の調査で検出された遺構群は、1602年の秋田氏入封により築城、1645年に廃絶した穴戸城の存続期間である17世紀に限定され、各遺構は概ね、堀・溝に東西（N-62°～65°-E）と、南北（N-17°～25°-E）に準拠した主軸をなしている。

第3項 発掘調査で得られた成果と『穴戸城絵図（穴戸城下絵図）』

第135図に示す現況地形図では、水田となっている調査区のある郭周囲に存在していた濠及び土塁は存在せず、南北に伸びた形状をなした連郭式の穴戸城中央部を縦断して、国道355号線が走向しおり、郭南東隅部は穴戸小学校造成において大きく旧状が変化している。

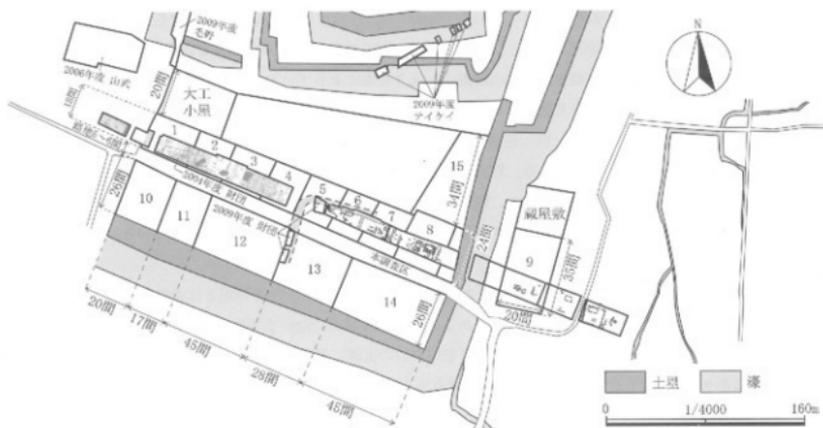
郭の西辺に相当する2006年度調査区（現コメリ）に面した小道、2004・2009年度調査区及び今回の調査区が占地する大洗女部線に平行して南側を走向する小道は、後述する明治初期に作られた地籍図にも存在が示されている。郭の東辺は南北に走向する道路となっており、東縁は約1m下がる段差をなし、そこから調査区を東へ向かうと、南側を併走する小道が4・5区境日付付近で屈曲し北に向きを変え、100mほど北でクランクして延びる。

巻頭写真2に示す地籍図では、東西を貫く小道が現在の穴戸小学校敷地を縦断し、先述した4・5区のクランクする小道に連結している。

第136・137図に示す想定図及び『穴戸城絵図』では、郭西辺を南北に走向する小道、中央部を東西に貫く小道西部、及び東の郭外にある町景比定地をクランクして北に縦断する小道は表現されている。また郭東辺にある南北に走向する現在の舗装道路は、絵図に示される土塁に相当すると考えられ、外郭を併走する濠は、道路から一段下がった水田にある畦に痕跡を示している。なお現在、郭内平場の大半を占める水田の畦の区画は、前述した地籍図から判断して武家屋敷区画の名残を示すものである。

今回も、2004・2009年度に引き続き、通りの北側に軒を連ねる武家屋敷が調査された。第136図に示すように、2009年度に調査された郡司五左衛門邸(5)の東縁、倉(蔵)田又兵衛(6)、加藤口左衛門(7)、分内名左衛門(8)、外濠を渡って町屋に隣接するところが脇田金兵衛(9)の各邸宅までの武家屋敷及び町屋を調査している。調査区の西から東に向かって、1区が郡司・倉(蔵)田邸、2区が加藤・分内邸、3区が脇田邸にほぼ該当する。4・5区は町景となる。各武家屋敷の開口と奥行きは、郡司邸から加藤邸までは東西17間×南北18間、分内邸は東西21間×南北24間、脇田邸は東西20間×南北35間である。

各武家屋敷に示された人名を「秋田俊季公分限帳」（女部町1971）及び「万治二年家中求人知行高扶切切高覚」（松原1973）に照合させてみる。以下、前者を「分限帳」、後者を「万治覚書」と略すことにする。郡司五左衛門は「分限帳」によると150石、「万治覚書」によると250石である。倉田又兵衛は、「分限帳」によると100石、「万治覚書」によると200石である。また両者には「倉」ではなく「蔵」と示されている。加藤口左衛門は、「万治覚書」にある加藤弥五左衛門200石であろうか。「分限帳」への記載はない。外濠の外側に邸宅を構える脇田金兵衛は「分限帳」及び「万治覚書」に200石と記されている。



第136図 穴戸城武家屋敷想定図

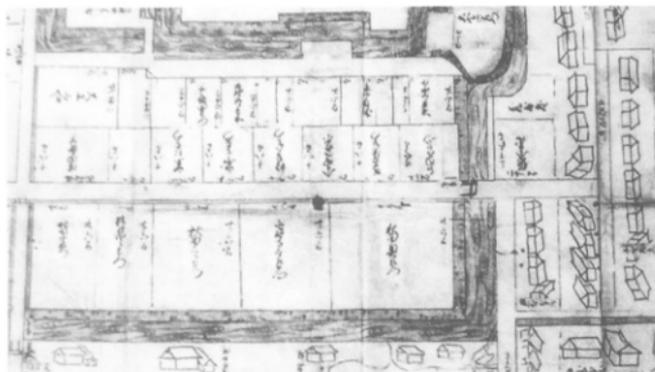
- | | | | |
|-----------|----------------|-------------|-----------------|
| 1 津田氏部 | (東西24間、南北18間) | 9 藤田金兵衛 | (東西20間、南北35間) |
| 2 (空) | (東西17間カ、南北18間) | 10 秋田宇右衛門 | (東西20間カ、26間) |
| 3 山東仁衛門 | (東西17間カ、南北18間) | 11 秋田四郎右衛門 | (東17間カ、26間) |
| 4 永井与左衛門 | (東西17間カ、南北18間) | 12 秋田三郎右衛門 | (東西45間カ、南北36間) |
| 5 郡司五左衛門 | (東西17間カ、南北18間) | 13 小野寺三郎左衛門 | (東西38間カ、南北36間) |
| 6 倉田又兵衛 | (東西17間カ、南北18間) | 14 秋田奥左衛門 | (東西45間カ、南北26間カ) |
| 7 加藤弥五左衛門 | (東西17間カ、南北18間) | 15 小山三郎兵衛 | (南北34間) |
| 8 分内名左衛門 | (東西21間、南北24間) | | |

※10～14の東西間口は地籍図をもとにした推定である。

※明治初期の地籍図『平町村』『橋爪村』（堂岡市立友部図書館蔵）を合成した。

※各調査の年度で発行された報告書および機要は巻末に示す。また、2004年および2009年度財団調査区における全体区は、調査報告書からの引用である。

2004年度 財団（堀田 2006） 2006年度 山武（岡宮 2006） 2009年度 毛野（宮田 2009） 2009年度 タイケイ（森本・大角 2009）
2009年度 財団（前島 2011）



第137図 『穴戸城絵図（穴戸城下絵図）』拡大図

前述した2004・2009年度の財団調査同様に、今回の調査における武家屋敷比定地1・2区でも屋敷区面付近は極端に遺構が少なく土塁等があった可能性がある。また前述した2009年度調査における第Ⅱ区第1号堀は北進した後、第1区で屈曲し第2号堀となって東進し、今回の調査区1区3号堀に至っている。屋敷割でいえば、小野寺三郎左衛門邸の西辺から、通りをまたいだ郡司五左衛門邸中央付近で向きを東に転じ、倉（蔵）田又兵衛、加藤弥五左衛門邸の屋敷中央部を貫く様相となっている。同一遺構と考えられるこの堀の上層は人為堆積の様相を示し、上層に17世紀の遺物を混入していることがわかっている。形状と規模は対岸と底部が各調査区の外側に位置しており、今回の調査においても全容は未解明のままである。また、整地而下から検出された堀・溝で南北に走向するものは、今回の調査における2～4号堀、SD251が存在し、2004年度調査における第4号溝も同様の傾向を示している。これらの底部標高は南が低くなる。

3号堀は、秋田氏の穴戸城築城にあたって埋め戻された遺構である。土層から4号堀とは新旧関係は認められず同一期に機能し、時を同じくして埋め戻された様相がある。また重複関係にない2号堀・SD251についても同様の状況である。2号堀は分内名左衛門邸に少しずれるが同邸宅の東辺の区画に近い位置にある。SD251は加藤弥五左衛門邸と分内邸の境にあり、4号堀も倉田又兵衛邸側に少しずれるのではあるが、概ね屋敷割を意識して穿たれたものと判断される。

以上より、南端にある武家屋敷の郭内の整地面下に存在する17世紀初頭の溝は、位置的に多少のずれはあるものの、1645年（正保2年）の秋田氏三奉転封直前の区画と同方向に指向していることが判る。このことから整地面下の遺構は、「湿地である当該地を乾燥させる必要から堀・溝を穿ち、乾燥を終えた後、上盛りして整地面を構築し、武家屋敷を構築した可能性がある」旨、調査の指導に当たられた川崎純徳氏が現地においてご助言くださり、大いに納得するところがあった。

ただ、3号堀に至っては、南北に走向する部分が小野寺三郎左衛門邸と秋田三郎右衛門邸の境をなしているつつも、屈曲して東進するに及んで、郡司五左衛門・倉田又兵衛・加藤弥五左衛門邸宅の中央を巡っており、武家屋敷の町割りとは整合していないことから、中世城館の一部である可能性も捨てきれない。

今回の調査から、文献資料とも連動して武家屋敷の町割りの一端を解明するに至ることができたと信ずるところである。一方、整地面下の3号堀といった未解明の問題を残すところもあり、今後の調査成果を待ちたい。

なお、引用した『穴戸城絵図』は現在所蔵している東北大学附属図書館の呼称で、『友部町史』では『穴戸城下絵図』の呼称であるため、本書では両者を併記することにした。

第2節 検出された土器・陶磁器類について

今回の発掘調査による出土遺物には、近世穴戸城下武家屋敷（武家地）と町屋（町人地）に伴うものと、前代のものがあった。後者は遺構上あるいは包含層（遺構外）から採取された縄文土器（前期中葉）1点と、弥生土器（後期）3点、須恵器（9世紀）1点がある。縄文・弥生・平安時代の遺構・包含層は確認されなかったため、当時の状況を窺い知ることはできないが、周辺に生活域が存在していたことが推察される（注1）。

城下武家地・町人地からは土器・陶磁器類のほか、屋根瓦、土製品、石製品（石臼・投針・砥石など）、金属製品・鍛冶関連遺物、竈道具（餌鉢）、銭貨（北宋銭・南宋銭・明銭）、木製品（漆器・容器・建築材・杭など）、種実遺体（モモ核・ヒメグルミ核）が検出された。個別の資料については、前章までの事実記載、あるいは巻末の出土遺物集計表・木製品観察表を参照されたい。

第1項 土器・陶磁器類の組成

さて、出土遺物の主体となる土器（上師質・瓦質）・陶器・磁器・焼締陶器は、総数1,223点・総重量47,454.4gに及ぶ（第97表）。帰属時期については、近世穴戸城の存立期間に相当する16世紀末葉～17世紀中葉以外に、院城後の17世紀後葉～19世紀がある。両者は帰属する遺跡（遺構）の性格が異なってくるので、それぞれに伴う遺物も分別して検討すべきであるが、土器類の時期別分類が不明であることと、後者の陶磁器類の比率が低く見積もられること等から、一括して集計した。

第97表 地区ごとの土器・陶磁器類組成

出土位置	土器				陶器	磁器		焼締陶器	合計								
	かわらけ	そのほか	瓦質土器	土器		17世紀	18・19世紀										
11区	250	45.0	130	39.7	25	25.2	100	44.7	10	35.7	9	25.7	14	42.4	691		
12区	153	32.2	103	30.0	18	17.6	41	17.3	0	0.0	5	14.3	1	12.1	314		
3区	12	2.7	11	3.2	1	1.0	50	8.4	0	32.1	14	40.0	3	9.1	70		
4区	9	2.0	9	2.6	4	3.9	11	6.0	3	10.7	1	2.9	2	6.1	39		
5区	80	18.1	83	24.4	44	44.0	53	21.9	6	6.0	0	0.0	10	29.4	294		
ex SD201	44	9.9	43	13.1	27	26.2	21	8.9	4	14.3	0	0.0	6	18.2	147		
SD201	26	8.1	35	11.1	17	16.5	34	14.3	2	7.1	6	17.1	4	12.1	137		
不明	0	0	1	0.3	10	10.0	4	1.6	0	0.0	0	0.0	0	0.0	15		
合計	444	36.3	313	28.0	103	8.4	237	19.4	28	2.3	33	2.9	33	8.7	1223		
1区	2909	1	42	0.4	37.6	3690	9	27.8	3737	47.5	75.9	13.4	127.1	20.2	1069.3	45.2	10285.4
2区	2140.3	38.4	2355.0	16.2	1672.4	12.2	1125.2	114.3	0.0	0.0	36.7	8.8	133.2	5.8	7505.5		
3区	351.0	2.6	2314.0	15.4	1106.4	8.3	656.4	3.3	87.3	11.8	329.4	52.6	86.5	3.7	2971.8		
4区	85.3	1.2	271.6	1.7	324.1	2.4	375.4	4.8	210.9	35.7	20.8	2.2	352.2	14.9	1639.7		
5区	1468.3	0	6101.3	0	5352.3	1890.0	0	212.1	115.0	0	0	0	224.4	0	12842.6		
ex SD201	705.0	10.1	1222.9	8.4	2330.9	17.7	646.4	3.2	59.8	10.0	0.0	0.0	321.0	13.6	3402.0		
SD201	743.5	10.6	4779.4	30.4	3001.4	22.6	1243.0	15.9	185.3	25.0	14.0	16.1	493.4	17.1	10432.0		
不明	0	0	45.8	0	1176.5	0	367.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1208.1		
合計	2094.2	14.8	15723.7	33.1	12357.9	129.0	2762.0	16.6	308.6	1.7	620.2	51.4	2305.6	5.0	47454.4		

*数量：基本的に接合後破片数、重量：単位g、右側1%。

種別ごとの組成は、かわらけ以外の土師質土器や瓦質土器、焼締陶器の比率のように、1個体の重量が著しく大きいものがあるので、数量比で見えていくことにする。かわらけ36.3%、その他土師質土器28.0%、瓦質土器8.4%、陶器19.4%、磁器5.2%、焼締陶器2.7%となる。土器類だけで7割以上を占めている。

ところで、今回の調査区はひと括りに「穴戸城下」と言うものの、前節で検討したように、西側（1～3区）は武家地、東側（4・5区）は町人地、と「場」の性格を異にしている。また、5区（町人地）の西端を南北に走る溝：SD201出土遺物については、瀬戸・美濃産の茶陶（喫茶具）・織物製品や唐津産の向付などの陶器類が、いわゆる町人地の遺物相として異彩を放っているように感じる（巻頭写真4）。これらのことを踏まえて、武家地と町人地、SD201に分けて、それぞれの種別組成と相互の比較をしてみよう（第98表）。

武家地（1～3区）ではかわらけが40.1%と他を圧倒しており、次いで、その他土師質土器・陶器・瓦質土器となる。町人地（4・5区）においても組成順位はほぼ同じと見てよいだろうが、かわらけは28.5%と低くなり、瓦質土器は16.7%と高くなる。SD201は前記したとおり、茶陶・織物製品が目立つ。種別組成も町人地に比べ、土器類の割合が低くなる。ただ、SD201以外でも、4区SB11の志野向付や、5区SK412の志野折縁鉄絵皿のように志野織物製品が出土しているので、SD201出土遺物がことさらに特異であるとは言えないようだ。

第98表 武家地・町人地・SD201 ごとの上器・陶磁器類組成

出土位置	上器十器				A類十器	陶器	磁器			合計						
	54+57	57	57	57			7分組	19・19組	焼成時期							
1-3区	351	89	250	36.2	45	3.1	167	18.9	191	2.1	29	3.2	21	2.4	805	
1-3区 (ex. S0001)	35	35.5	51	29.0	31	16.7	32	17.2	7	3.8	1	0.5	8	4.3	289	
2区	36	26.3	381	47.7	17	16.4	34	24.8	2	1.9	6	4.4	4	2.0	137	
合計	444	26.2	342	29.3	93	7.7	223	19.3	25	2.3	35	2.9	33	2.7	1236	
1-3区	3473	19.1	833.0	32.5	6414	7	23.4	320	3	19.3	156	2	35.6	48	1	1286.0
4-5区 (ex. S001)	290	11.2	284.5	22.6	7925.0	38	0	102	4	14.5	269	1	3.5	20	0.3	472.2
合計	743	7.7	4728.4	45.8	3901.4	38.8	1243.0	11.9	163	1.5	114	1.1	403.4	5.9	1042.6	
合計	7004.2	13.2	14692.9	24.0	112001.1	28.2	7786.7	16.9	389	0.2	628.2	1.4	2366.6	5.1	46146.3	

*数値：基本的に接合後取片数、重量：単位g、右側は%。

第2項 かわらけについて

形態による分類

・A類(坯形) この分類の基本はロクロの上に置いた粘土塊であり、回転させて絞って円柱状にし、その上に粘土紐を巻き上げて整形したものがA類で、休全体に丸みがある。また口縁部に近づくに従って器肉が薄くなり、口唇が反り返るものが多い。一般的に高速回転糸切り離しのまま、底部も体下端も無調整であるため底部が突き出たような感じとなる。口径：底径：器高の比率は、口径1に対しその最小から最大までと()内に平均値を入れた。その比率はA類では1:0.43~(0.52)~0.64:0.26~(0.31)~0.38である。

・B類(皿形) A類と同じようにして整形したのち体中間で粘土紐を縫い足したものと想像、体部は直線的に開き、往々にして口縁部が分厚くなる傾向がある。切り離しの技法は同じだが、開いた器形を維持するためか、回転速度がやや遅い。対口径比率は1:0.32~(0.43)~0.50:0.25~(0.28)~0.35とやや幅がある。

・C類(盤状) 粘土円柱の上に粘土板を載せロクロ整形したもので、体部は浅く、垂直に近く立ち上がる。低速回転の状態でも糸切り離すため、糸抜き痕は底部のなかに残る。対口径比率は1:0.56~(0.64)~0.73:0.20~(0.26)~0.35である。

大きさによる分類

1寸=3.03cmを基準として、口径を基に以下のとおり分類した。

- ・大皿(4寸以上) 12.3cmを超えるグループで、ほとんどが復元実測である。
- ・中皿(4寸以下3寸以上) 11.7cm~9.2cm内に入るグループで、平均すると10.0cm(3.3寸)となる。復元・完形品半ばである。
- ・小皿(3寸以下) 7.8cm~5.7cm内のグループで、平均すると6.7cm(2.2寸)になる。比較的完形品が多い。また、6cm前後のものは粘土塊から直接引き出す、所謂水挽き技法で作られたと考えられる。

第99表 かわらけ分類

	A類(坯形)	B類(皿形)	C類(盤状)	合計	%
大型(4寸以上)	1	2	0	3	4.9
中型(4寸以下)	17	16	1	34	55.7
小型(3寸以下)	10	4	10	24	39.4
合計	28	22	11	61	100
%	45.9	36.1	18.0	100	

*実測図で口径のわかる資料のみ抽出した。

胎土からみた分類

図示した86点のかわらけのうち、雲母の混入しているものが70点(全体の81%)もあり、そのほとんどが、微量の粉末であることが特徴的である。つぎに白色針状物質と呼ばれる海綿骨針についても観察してみたが、これが確認できたのは7点(8%)だけである。そのうち雲母の混入が認められるものが6点、認められないのはわずか1点である。

このように胎土の成分をもとに分類すると4大別が可能である。一番多いのは雲母粒のみ混入するもので全体の

75%を占め、ついで雲母も骨針もみられないものが17%である。古代より筑波山麓で生産された須恵器などに雲母が見られる例が知られており、かわらけの産地としても、この一帯が有力であることの証明ともいえる。

第100表 胎十組成表

	かわらけ			十師質土器			瓦質土器		
	あり	なし	計	あり	なし	計	あり	なし	計
骨針	6	64	70	3	11	14	3	6	9
雲母あり	1	16	16	3	8	11	6	8	14
雲母なし									
計	7	79	86	6	19	25	9	14	23

*遺物観察表を基に作成した。

他の分類との比較

浅野晴樹氏は、第VI期（16世紀2/4～4/1期）の土師質土器皿を埼玉の事例を用いて2類に分けている（浅野1986）。

1類は「底径が小さく、やや深めで、体部が直線的に外反する。…加えて薄づくりなもの、…水挽き成形で器壁の厚いもの」、2類は「底径が広く、厚めのつくりで、器高の低いもの」としている。各類例に挙げたなかから、その特徴と、今回の形態分類の特徴を当てはめるなら、1類の薄づくりのものなかにB類に似た要素を、器壁の厚いもの（成形に関しては検討を要すが）で体部にやや丸みのある例がA類に、「各県とも極めて類似性が認められる。」とした2類がC類と直接的に結び付けることができよう。

『穴戸城2』のまとめで、前島直人氏は土師質土器の皿の寸法を大・小2種類に分けている。口径だけ捉えると5.1～7.1cmが小に、7.9～12.0cmを大としている。今回の分類では小皿が小の、中皿が大の範疇に相当すると思われる。

本遺跡のかわらけの特性

土師質土器のなかでも「かわらけ」は使い捨てのうつわとも形容され、大量に生産され、宴や儀式において大量に消費されたのち、一括廃棄される例が多くみられ、中世期を代表する遺物である。ついで江戸時代の供膳具を材質別にみると陶磁器と木製品がほとんどを占める。ことに磁器が一般に普及するようになったことは、かわらけなど素焼き土器の食卓における比率を激減させる大きな要因となった。

そんななかにあつて今回の調査では、一括して投棄された例はないものの、遺物の総量の約35%までをかわらけが占めることは、中世的な「ハレ」の用具としての意味とは別に、「ケ（日常）」の食器として使用されていたことを窺わせる。ここに磁器の普及以前、「中世的な様相を残す」江戸時代初期の「東国武士の生活」（問宮2006）の一端をみる事ができる。

第3項 土師質土器と瓦質土器

ここで取り上げる土師質土器は前項のかわらけ以外の酸化焼成の土器類であり、還元焼成である瓦質土器と対峙して語られることが一般的である。第101表は実測されたものの器種ごとの数量を示したが、両者が相半ばすることが分かる。

そのなかからいくつかの特徴を記してまとめたい。

碗・皿類は、かわらけの画一的な形状からは遠く、焼きぶれが著しい点で、とても大量生産されたものとは思われない一群である。焼塩蓋は、内面に内子の芯とした粗布の痕跡の残る手挽ね品である。おそらく堺産の初期のものであろう。鍋や焙烙には内耳がみられ、焙烙の中には瓦質の優品もある。SE03出土の片口鉢は完形品で、その形状から秤量用と思われる。

印花文のついた火鉢は4点あるが、うち1点は雲母の多量に入った土師質土器である。おそらくは「奈良火鉢」を模倣して地元（桜川市真壁町あ

第101表 器種別総量表

器種	土師質	瓦質	計
碗・皿類	5	1	6
焼塩蓋	2		2
鍋	4		4
焙烙	3	3	6
摺鉢類	4	3	7
片口鉢		2	2
陶形鉢	1	2	3
火鉢	3	8	11
角火鉢	1	2	3
火筒蓋カ		1	1
十能	2		2
瓦灯カ		1	1
計	25	23	48

たりの可能性もある)で作られたものと思われる。十能は2つとも運元が不完全なため土師質に含めた。このように本報告では本来瓦質土器をめざしたもので、断面の観察から器内が茶色のままなので、土師質土器と判断したものもあることをご承知おきいただきたい。

第4項 陶磁器類について 組成

陶磁器類の7・8割は陶器である(第102表)。集計に当たっては、18・19世紀の磁器は除いてある。陶器については、本書非掲載資料の分類に不明な部分を残すため、掲載資料を基にすると、その8割以上を瀬戸・美濃産が占めている。唐津産は約1割である。少数の磁器は肥前系(平戸・波佐見含む)で、中国・景德鎮系の青花は碗1点(1区4号棚-10)を見出したのみである。また、焼締陶器には産地同定が不十分なものを残すが、常滑産の壺・壺や丹波産と思われる播鉢、図示していないが、堺・明石系播鉢を確認することができた。

16世紀末葉～17世紀前半における他の調査事例と比べても、瀬戸・美濃産陶磁器が主体を占めることは同調している。2004年度調査では中国青花が一定量検出されているが、今回は僅少で、肥前系磁器が目立つのは、17世紀半ば近くの遺物相が重複してくること、何よりも出土遺構・状態に恵まれなかったことも要因の一つと考えてよいのではないだろうか(注2)。

第102表 陶磁器・土器内訳(掲載分)

種別	主要産地	点数		重量		点数	重量
		点数	%	重量	%		
陶器	瀬戸・美濃	64	83.1	4760.7	94.8	12	1369.5
	唐津	8	10.4	516.4	9.9	52	3391.2
	平戸	5	6.5	337.7	6.0		
磁器	肥前	0	0.0	425.0	97.2		
	中国・景德鎮	1	1.3	12.7	2.8		
	肥前	2	2.6	751.0	94.5		
焼締陶器	丹波	1	1.3	43.3	5.5		
	堺・明石	0	0.0	4379.3	43.9		
土師質土器	その他	25	22.5	5626.3	96.2		

年代

最も資料の多い瀬戸・美濃産陶器から言えば、大部分は入窯第1段階・16世紀末葉から連房式登窯第1段階・17世紀中葉に比定され、正しく、秋田氏の在城期間と一致してくる。ただ、2区P142の

灰軸碗(平碗か)は入窯第3段階・16世紀後葉以前に廻る可能性がある。2004年度調査でも同様に出高台の鉄軸丸碗が検出されており(第30号土坑、稲田2006)、出土遺構や出土状況から、これらは近世矢野城の前身(中世穴戸城)に由来するものと考えられるよりも、穴戸入封に伴って持ち込まれたものと思われる。

一方、17世紀後葉以降のものとして、5区遺構外の播鉢(17世紀後葉)、3区1号堀の片口(17世紀末葉)、3区遺構外の播鉢(18世紀中葉以降)、1区SB02の膠結茶碗(19世紀前半)、3区遺構外の片口(同)、5区SD201の甕類(同)などの瀬戸・美濃産陶器や唐津産銅緑釉蛇の目碗(1区遺構外)・三島手大鉢(5区SE04)、肥前系、瀬戸・美濃産磁器(5区SD201等)があり、廃城後の遺物を見ることができる。

武家地と町人地の陶磁器類

次に、16世紀末葉～17世紀中葉の陶磁器類の内容を確認する。武家地内の陶器には、供膳具として美濃産丸皿・黄瀬戸折縁皿・鉄絵皿・黄瀬戸大皿、瀬戸・美濃産丸碗・志野丸皿・志野煎皿・黄瀬戸鉢・徳利、喫茶具として美濃産志野茶碗(織部)・総織部折縁鉢・美濃伊賀花生の織部製品、瀬戸・美濃産大目茶碗・茶入、唐津産向付・茶壺、調理具として瀬戸・美濃産播鉢がある。磁器には供膳具あるいは喫茶具としての中国青花碗、肥前系染付筒形碗があり、焼締陶器には調理具の丹波産?播鉢、貯蔵具(あるいは喫茶具?)の常滑産壺がある。

町人地内では、陶器に供膳具として美濃産丸皿・志野菊皿・片織部折縁鉄絵皿・青織部徳利、瀬戸・美濃産丸碗・志野丸皿・折縁皿・鉄絵鉢、喫茶具として美濃産各形碗・志野向付、瀬戸・美濃産大目茶碗・白大目、唐津産向付、調理具の瀬戸・美濃産播鉢、神仏具の瀬戸・美濃産香炉がある。磁器には供膳具の肥前系染付筒形碗・小碗、焼締陶器には貯蔵具の常滑産?大壺がある。

ともに、出土量の差と、中国青花や一部、武家地で卓越する織部製品を除けば、町人地においても一定量の喫茶具が見られ、器種・用途的にはほとんど違いがないと言ってもよいだろう。

陶磁器類以外の什器

では、陶磁器類以外に視点を移してみよう。武家地では、上器に供膳具の皿・焼塩壺、調理具の播鉢・鍋・焙烙、住用具の十能・火鉢が、木製品に供膳具の漆器碗、貯蔵具の合子？、石製品に調理具の捏鉢・石臼が見られる。町人地では、土器に供膳具の皿、調理具の播鉢・焙烙・片口・片口鉢、住用具の火鉢・深鉢、神仏具の香炉、灯火具の瓦灯？、木製品に貯蔵具の曲物・桶？がある。武家地における焼塩壺や漆器碗の存在を指摘したとしても、これらも陶磁器同様、相互に大きな差を見出せる状況ではない。

また、陶磁器類とそれ以外の什器の用途を比較してみる。陶磁器類は碗・皿・鉢類の供膳具と喫茶具を中心として調理具の播鉢、貯蔵具の蓋が加わる。土器は供膳具の皿と調理鉢・鍋類の調理具、十能・火鉢の住用具、木製品は供膳具の漆器碗と貯蔵具の曲物・桶、石製品は調理具の捏鉢・石臼となる。つまり、用途別に什器の材質が選択されていることが理解できる。供膳具は土器・陶磁器と漆器、喫茶具は陶磁器、調理具は陶器播鉢と土器・石製品、貯蔵具は焼締陶器と木製桶、住用具は土器、と言った具合であろうか。

以上、今回の調査成果から、穴戸城下の武家地と町人地の陶磁器類を見てきたが、その他の土器や木製・石製の什器も合わせて、用途別に見られる種別・器種の構成はほとんど同じであった。江戸初期という時代性を表しているであろう。厳密には、遺構種別や埋没事情ごとの分析や単位面積当たりの量比等を考慮すべきであろうが、今回の出土状況はそれを行うほど恵まれていない。また、本節第1項で見たように、かわらけは町人地に比べて武家地において高率であったり、町人地では瓦質土器の比率が高くなるといった種別組成の違いがあった。ただ、材質（種別）と用途が相関していることからすると、廃棄の事情の違いが反映しているのか、検出されなかった材質のもの（例えば金属製品など）で補充されているのか、ということが想像される。

あくまでも、こうした分析の対象は、当時の人々が何らかの事情で廃棄・遺棄していたものを対象としているのであり、おのずと限界はある。穴戸の地を去った秋田家臣団が移った先、陸奥・三春城下では今回見られたものと同種的美濃桃山陶が出土しているという（平田 2003）。引越しに際して荷造りされた、日常使い慣れたものやお気に入り什器類も多かったのではないだろうか。

注

- 1 これまでの本遺跡の調査において、古墳時代前期の土器と古代の須恵器が報告されており（宮田 2009）、西方に所在する新善光寺跡における縄文時代中期、古墳時代前期の集落・壘域（稲田 2006）との関連が考慮される。
- 2 2004年度調査（稲田 2006）における中国青花の出土は、廃棄土坑とされる第29号土坑に集中している（32点）。山上遺物も瀬戸・美濃産陶器では大濠第4段階木・17世紀初頭を中心として、播鉢と鉄袖耳付水注の登窯第1小期・17世紀前葉を新相とするようである。

第104表 出土遺物集計表(2)

地区	遺構名	土師瓦土師		瓦器・土師	磁器	銅器		鏡	石	土製品	石製器	金属製造	その他	主要遺物	
		かわらけ	その他			17世紀以前	18世紀以後								
IX	F793	3													
		12.6													
	F796		1											瓦製磁器	
			24.2	38.7										土師大鉢・鉢、瓦製磁器・火鉢、瀬戸美濃家様鉢・写置、折鉢皿、土師瓦急須、土師?燗鉢、瀬戸美濃赤土師	
	3号墓	21	10	7	10	1			3	5					
		824.1	600.8	1080.7	170.4	2.9			67.2	183.7					
	4号墓	33	16	0	6	1			4	2				土師片断、火鉢・皿、瓦製火鉢、瀬戸美濃磁器、火鉢、志野丸茶・急須皿、火盆、焼酎所産、赤花紙、厚竹器、焼練瓦鉢	
		610.9	411.1	125.0	519.1	12.1			329.9	251.6				13.4	
	墓	61	59	9	38	5	7	2	7					1000	
		899.9	1821.0	1386.6	1032.6	81.6	110.2	31.9	265.5			39.7	27.3	19.5	
IX	S201	32	27	1	2					3	1	新埴	結束遺物1	土師大鉢・鉢、火盆、瀬戸美濃大鉢・皿、折上皿、磁石、ヒメダルミ碗	
		402.6	267.0	7.9	124.9					83.0	100.4	8.7	1.8		
	S192	2													
		42.7													
	S203	1			11									磁土かわらけ、瀬戸美濃志野丸茶	
		2.1			4.7										
	S204								1						須山製茶碗
									26.1						
	S110	2	1												
		6.3	7.3												
	S111				1										土師磁器
			29.7		9.5										
	S112	8			2										瀬戸伊賀瓦釜、磁土かわらけ、土師磁器、瀬戸美濃赤土師、焼練瓦鉢
		135.9	64.4		131.0										
	S113	2			1										瀬戸美濃磁器、火打石
		8.6			9.1				43.3			50.1			
	S114	1			1										
		21.9			3.4										
	S161	1	1	2											土師火鉢、瓦製鉢、石臼
		34.1	585.2	617.3								1147.5			
	S166														土師鉢・磁器、瀬戸美濃志野丸
		31.3			1										
S176														瓦製火鉢	
		166.1		26.8											
S17	11			2											
	8.7			129.1											
S181	1			2										新生土師	
	93.8			165.4	16.3										
S115	1													瀬戸美濃磁器	
	25.9	62.9		1											
S119														瀬戸美濃磁器	
				25.1											
S129															
				11.2											
S113															
				11.1											
S162	3	4		4		1								土師鉢、瀬戸美濃瀬戸大鉢・志野小鉢・急須鉢	
	360.8	123.3		90.0		5.2									
2号墓	9	2		4	2									新埴	
	189.9	71.6	366.4	20.3				28.3	192.4		78.3				
S1001	13	3		1										土師磁器、瓦製火鉢、石臼	
	200.2	198.9	39.3						14.5						
S1002	1														
	3.6														
S1003															
				2											
				31.6											

第107表 出土遺物集計表(5)

地区	遺物を かつら け	土製土器			磁器				土製品	石製品	金属 加工	その他	主要遺物
		上製 土器	瓦 土器	陶器	17 注記	18 注記	備用 陶器	瓦					
5区	一室	8	15	8	9	4		1	2				土器大鉢、八雲片(1枚)、瀬戸 尖底天目・大鉢・碗、肥後型 付鐘、漆器付漆塗鉢、鉄鋤 等、七宝銭
	大明	61.4	393.1	279.5	127.9	38.8		69.4	187.1				土器大鉢、瀬戸式漆塗鉢
				10	4						11.9	1.8	
				1176.8	90.5								

○1段・数量、下段・重量、「数量」基本的に検出枚数、「重量」単位:g

第108表 木製品観察表(1)

地区	遺物名	付属遺 物・取上 り	口縁構成 分析 No.	種別	形態	長さ	幅	厚さ	材質	特徴	
1区	S608	P3	P604	3	枅材	角材	<345>	129	117	マツ	
1区	S407	P2	P652	1	枅材	丸入材	<480>	φ128		ヒナナ	下縁一面のみ丸切り
1区	S407	P3	P752	14	枅材	角材	<422>	138	130	マツ	
1区	S407	P3	P660	2	枅材	角材	<515>	133	130	マツ	
1区	SF08	No.2	-		枅		<407>	φ53			下縁丸切り
1区	S663	-	-	4	部材	丸太	<532>	φ144		マツ	二次製法・削げ
1区	P604	-	S604		部材	丸入材	<240>	φ100			五角形(56×38×18mm)の削欠
1区	P602	-	-		丸太		<254>	φ74			素材か
1区	P662	No.1	-		丸太		<252>	φ92			
1区	P652	No.2	-		枅		<228>	φ49			削材か心か不明
1区	P663	-	-		枅材	角材	<210>	132	118		丸太角材に転用
1区	P666	-	-		枅材		<127>	φ102			
1区	P668	-	-		枅材	丸材	<280>	φ155			下縁段で2面削り
1区	P666	-	-		丸太		<162>	φ69			
1区	P729	-	-		枅		<667>	φ110			下縁のみ二次製法・削げ
1区	P731	-	-		枅						削削不潔
1区	P751	No.1	-		枅		<218>	φ37		マツ	使用感なし
1区	P751	No.2	-		枅		<265>	φ105			下縁段で丸切り
1区	P756	No.1	-		枅材	丸材	<510>	φ205			下縁段で丸切り
1区	P756	No.2	-		部材	素材	<272>	φ76			一面に五角形(70×43mm)の穿孔、さらに斜めに丸釘(2寸)が打ち込まれる
1区	P796	-	-		枅		<460>	φ60			使用感なし
1区	3号壺	No.4	-	20	漆器	椀	口径(16.0)	高さ(3.75)		ケヤキ	美濃国3号壺-17
1区	3号壺	-	-		部材	丸入材	<430>	φ132			途中に厚130mmの段による切り込みあり、先端段で丸切り
1区	4号壺	-	-		木膚		<100>	φ28?			
1区	遺構外	No.1	-		枅		<700>	φ114		マツ	下縁丸切り、二次製法・削げ
2区	SB01	P2	-		枅材	角材	<322>	118	110		下縁は斜めに削られる
2区	SB01	P3	-	8	枅材	角材	<565>	124	119	ケヤ	
2区	SB01	P6	-		部材	丸太	<345>	φ48			下縁段で丸切り
2区	SB02	P1	-		枅材	角材	<400>	125	122		

第109表 木製品観察表(2)

地区	遺構名	付属遺構・取上げ	山遺構名	分析No.	種別	形態	長さ	幅	厚さ	材質	特徴
2区	SR02	P2	-	6	柱材	角材	<570>	120	115	クリ	台座仕上げ
2区	SR02	P9	-	18	柱材	角材	<303>	110	108	クリ	
2区	SR02	P11	-	8	柱材	角材	<855>	127	115	クリ	
2区	SR05	P1	-	9	柱材	角材	<293>	127	124	マツ	
2区	SR03	P4	SR74		部材	丸太板	<360>	φ145			下流端で大きく4面切り
2区	SR03	P6	SR03 P4		柱材	角材	<113>	130	?		
2区	SR04	P2	-		柱材	平割	<215>				計測不能
2区	SA12	P2	SK117		柱材	丸材	<396>	φ150			
2区	EA13	P4	P168	16	柱材	角材	<260>	160~	160~	マツ	
2区	SA13	P6	P169		柱材	丸材	<185>	φ118			根元のみ
2区	SA14	P1	P161	17	柱材	角材	<529>	142	137	マツ	
2区	SE06	No.1	SR36		丸太		<238>				計測不能
2区	SE16	-	-		部材	貫板	<215>	44	26		他に壁・裏材など
2区	SX1	No.1	-		丸太		<160>	φ100			
2区	SX1	No.2	-	12	巻掛	巻	外径115.0 内径(1.0)	内径(4.2)		モクセイ	合子蓋か。裏側区画1.2
2区	SX1	No.2.2	-		部材	半角材	<1340>	φ93	68		丸太の片面のみ面取り。裏か?
2区	SX1	No.3.1	-		丸太		1220	φ72		マツ	
2区	SX1	No.3.2	-		部材	半角材	<518>	φ70	44		丸太の片面のみ面取り。裏か?
2区	SX1	No.4	-	10	部材	半角材	388	81	67	マツ	両端切断、丸太を1分割し面取り、並か?。他に同一規格品3個生
2区	SX1	No.5	-	11	部材	丸太板	1380	φ82		マツ	片面一部端で面取り、丸端3面切り
2区	SX1	No.6	-		部材	丸太板	<802>	φ58			下流端で丸切り
2区	SX1	No.7	-		丸太		<756>	φ70			
2区	SX1	No.8	-		部材	丸太板	1670	φ102			マツ 片面一部端で面取り、下流端で4面切り
2区	SX1	No.9	-		柱か		<1370>	φ60		サタラ	片面一部端で面取り
2区	SX1	No.10	-		丸太		<1110>	φ105			
2区	SX1	No.11	-		丸太		<470>	?			計測不能
2区	SX1	No.12	-		部材	丸太板	<1660>	φ50			下流端で2面切り
2区	SX1	No.13	-		部材	丸太板	<1270>	φ55			下流端で面切り
2区	SX1	No.14	-		部材	貫板	<890>	48	30		全面面がけ
2区	SX1	No.15	-		部材	丸太板	<1940>	φ76			先端端で面切り
2区	SX1	No.16	-		柱か		<753>	φ80			片面一部端で面取り
2区	SX1	No.17	-		部材	丸太板	<215>	φ58			下流端で3面切り
2区	SX1	No.19	-		部材	丸太板	<1180>	φ90			片面一部端で面取り、先端端で1面切り
2区	SX1	No.21	-		部材	丸太板	<745>	φ78			先端端で2面切り
2区	SX1	No.22	-		柱か		<700>	φ78			加工面なし
2区	SX1	No.23	-		部材	丸太板	<1120>	φ92			下流端で2面切り
2区	SX1	No.24	-		部材	丸太板	<640>	φ110			先端端で面切り
2区	SX1	No.26	-		部材	半角材	252	98	65		片生、丸太の片面のみ面取り

第110表 木製品観察表 (3)

地区	遊具名	付属機 構・取上 げ	旧遊具名	分 類 No.	種類	形態	長さ	幅	厚さ	材質	特徴
2区	SK1	No. 26	-	13	部材	半角材	<340>	103	80	マツ	丸人の両面を白漆で面取り
2区	SK1	No. 26-2	-		部材	丸太枕	<355>	φ75			先端部で2面取り
2区	SK1	No. 27	-		部材	板	<832>	100	43		全面磨き上げ
2区	P017	-	SK17		丸太		<175>	φ138		マツ	
2区	P022	-	SK22		丸太		<147>	φ130			
2区	P034	-	SK34		丸太		<115>	φ45			
2区	P037	-	SK37		柱材	角材	<308>	121	110		
2区	P042	-	SK42		丸太		<170>	φ78			下端部で乱切り
2区	P091	-	SK91		柱材	丸材	<310>	φ98			
2区	P095	-	SK94		部材	丸太枕	<273>	φ85			下端部で大きく3面切り
2区	P127	-	SK127		枕		<289>				2面不揃
2区	2号場	No. 1			枕		<311>	φ82			
2区	2号場	No. 2			部材	角材	<556>	φ118			全面磨き上げて、9面体を造す
2区	2号場	No. 3			部材	丸太枕	<255>	φ170			先端部で乱切り
2区	2号場	No. 4	-	7	部材	角材	<709>	131	123	マツ	表面は半厚仕上げ、2面を面取り。横断面が角形となる。両面に八角形と長方形の幾何穿孔。下端に斜り込みあり
3区	P029	-					<705>	φ90			丸太を分割し、磨き上げ
5区	SK04	-	SK103	18	部材	板	244	219	20	マツ	横断面を磨き、節がある 用途不明
5区	SK04	No. 13	SK103		板						計装不能
5区	SK04	No. 18	SK103		橋	底板	<273>	<95>	12		両側を磨き仕上げ
5区	SK04	No. 36	SK103	19	乗物	底板	19.1	10.1	0.9	アスナロ	同図同注04-17
5区	SK04	No. 9 2	SK103		部材	板材	<600>	50	7		両側の板が 並に 2層あり
5区	SK04	乗具21	SK103		部材	板材	<335>	153	90		同一部体多数
5区	SK04	中層	SK103		部材	障子の板	<248>	16	11		4面とも丁寧な面取り
5区	SK001	No. 40	-		部材	丸太柱	<177>	φ60			下端部で5面切り
5区	SK001	No. 43	-		板		<320>	φ47			
5区	SK001	No. 45	-		部材	丸太柱	<310>	φ38			下端部で乱切り
5区	P402	-	SK402		柱材	丸材	<377>	φ117			下端平直
5区	P409	-	SK409		丸太		<482>	φ160			

引用・参考文献

六戸城跡発掘調査報告書

新山義弘 2006『新善光寺跡 六戸城跡』主要地方道大洗友部線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 茨城県教育財団文化財調査報告書 第256集 (財)茨城県教育財団

町宮正光 2006『六戸城跡』- 店説建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - (株)エヌエフ・山武考古学研究所

宮山忠洋 2009『六戸城跡』- 市道(友)2026号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - (有)毛野考古学研究所・笠間市教育委員会

森本 崇・大角謙一 2009『六戸城跡』- 市道(友)1級13号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - 笠間市教育委員会・アイケイトレード(株)

前島直人 2011『六戸城跡2』主要地方道大洗友部線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書II 茨城県教育財団文化財調査報告書第342集 (財)茨城県教育財団

友部町商工会・友部町百年史編集委員会編 1971『友部町百年史』友部町役場・友部町商工会

松原 武 1973『万治二年家申人知行渡扶持切高覧』『三春町史』第8巻近世史料編 二春町(268頁)

平井 豊 1979『日本城郭大系第4巻-茨城・栃木・群馬』新人物往來社

浅野増樹 1986『北関東における中世土器探検』『神奈川考古』第21号-古代末期~中世における在地系土器の諸問題- 神奈川考古同人会

柴賀茂男 1990『鎌倉時代の友部地方』友部町史編さん委員会編『友部町史』友部町

小谷清治・関 周一・今井雅晴 1990『友部地方の中世の諸相』友部町史編さん委員会編『友部町史』友部町

小谷清治 1990『秋田氏の入封と移封』『六戸陣屋の設置と六戸物語』友部町史編さん委員会編『友部町史』友部町

須藤久男 1990『友部町の位置・地勢』友部町史編さん委員会編『友部町史』友部町

西連地保男 1990『友部町の地質・地形』友部町史編さん委員会編『友部町史』友部町

大橋康二 1994『古伊万里の文様』雄志学社

藤澤良祐・金子健一 1998『近世瀬戸産の生産と流通』瀬戸市史編纂委員会編『瀬戸市史』商賈史篇6 愛知県瀬戸市

藤澤良祐 1998『近世瀬戸産磁器年の再検討- 磁器端取物を中心に -』『植物学- 先生古希記念論文集』真陽社

崎崎祐輔 1999『常陸地域の近世陶磁器と土器 中世びとのくらしとうつわ』比毛君男編『遊き場みる中世の世界- 県内出土の土器・陶磁器を中心にして -』第4回特別展展示図録 上高津貝塚ふるさと歴史の広場

九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会10周年記念-

江戸道跡研究会編 2001『図説 江戸考古学研究辞典』柏書房

小野正敏編 2001『図解-日本の中世遺跡』(財)東京大学出版会

青木 修・藤澤良祐編 2001『瀬戸大窯とその時代』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター設立10周年記念特別展展示解説図録 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター-

藤澤良祐 2002『瀬戸・美濃大窯年の再検討』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要 第10巻 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター

竹内 敏彦 2002『ビジュアル・ワイド 江戸時代館』小学館

加藤真司編 2002『元皇敷高麗窯跡発掘調査報告書』土岐市教育委員会・(財)土岐市埋蔵文化財センター

西田愛子編 2002『知られざる唐津- 二彩・単色釉・二鳥子』特別展図録 唐津美術館

土岐市美術館編 2002『図説と銅版-近代の美濃焼-』全図展リーフレット

青木 修・金子健一ほか編 2003『江戸時代の美濃焼』平成15年度(財)瀬戸市埋蔵文化財センター企画展図録 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター

加藤真司・高橋健太郎編 2003『織部の流通圏を探る 東日本』第15回土岐市織部の日特別展 土岐市美術館編 歴史館

高橋真備門 2003『中世の織物跡』『戦国時代の考古学』高志学院

平田博文 2003『三春城下町出土の織物』加藤・高橋編 2003『織部の流通圏を探る 東日本』第15回土岐市織部の日特別展 土岐市美術館編 歴史館

中野晴久 2006『産地別による生産技術の展開からの編年-常滑・瀬美』『中世窯業の諸相~生産技術の展開と編年~』発表要旨集 全国シンポジウム実行委員会

稲川義弘 2007『六戸城跡出土の近世陶磁器』『英気流』-川井正一・齋藤弘道・佐藤正好先生追悼記念論集- 同記念事業実行委員会

写真図版



1 1区空撮全景

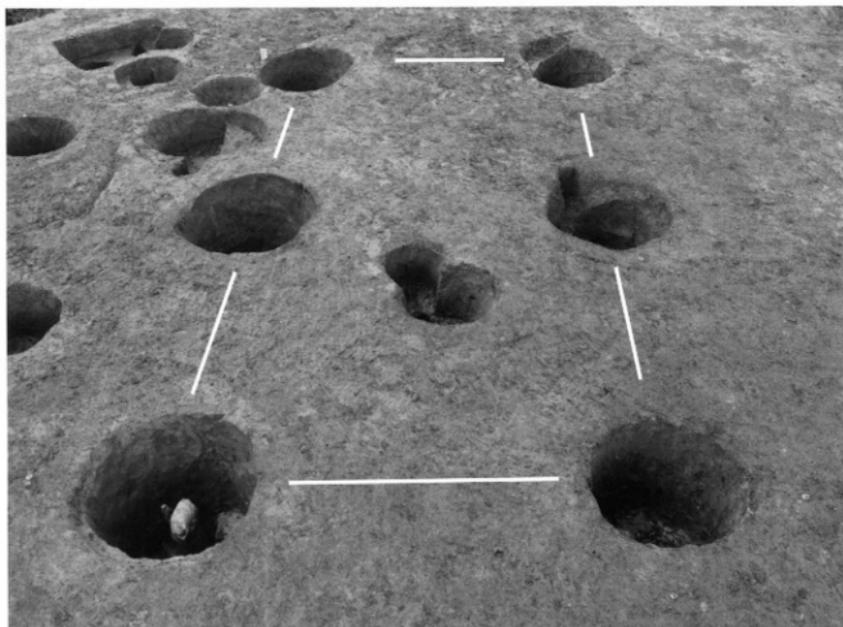
1区



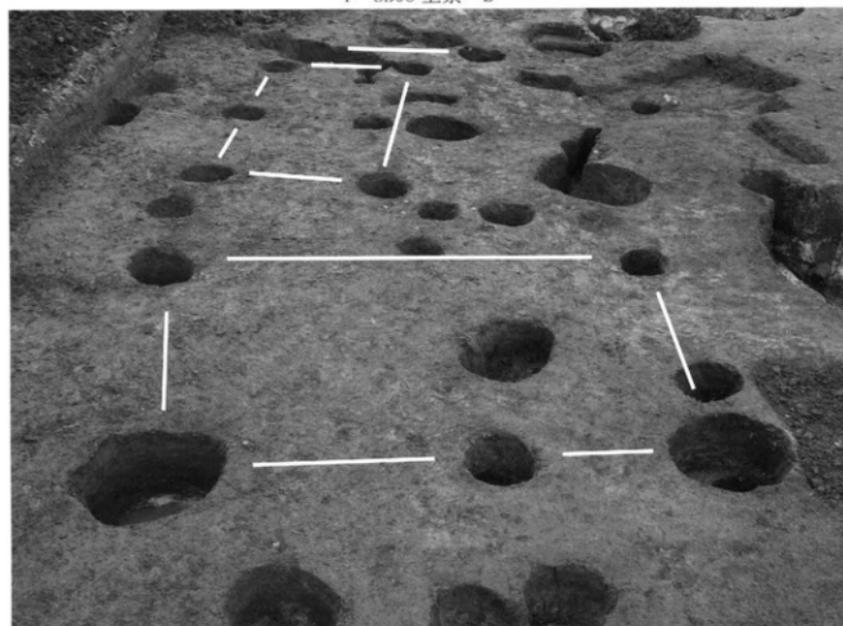
1 1区西側第1面全景 E→



2 方形に巡らせた溝全景 S→



1 SB08 全景 E→



2 (上から)SA09・SB09・SB10 全景 E→

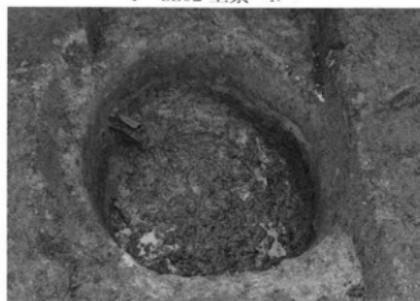
1区



1 SE02 全景 N→



2 SE02 セクション W→



3 SE07 全景 N→



4 SE08 全景 N→



5 SE09・SK654・SK655 検出状況 N→



6 SE09・SK654・SK655 全景 W→



7 SE10 全景 E→

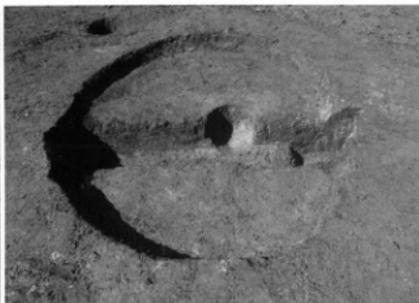


8 SE11 全景 N→

1区



1 SK653 全景 E→



2 SK650 全景 E→



3 1区西側第2面全景 E→



4 3号堀西端セクション W→

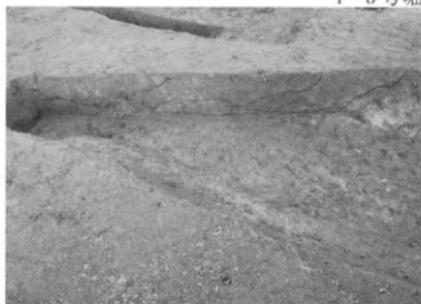


5 3号堀中央セクション E→

1区



1 3号堀全景 W→



2 3・4号堀セクション SW→



3 3号堀東セクション E→



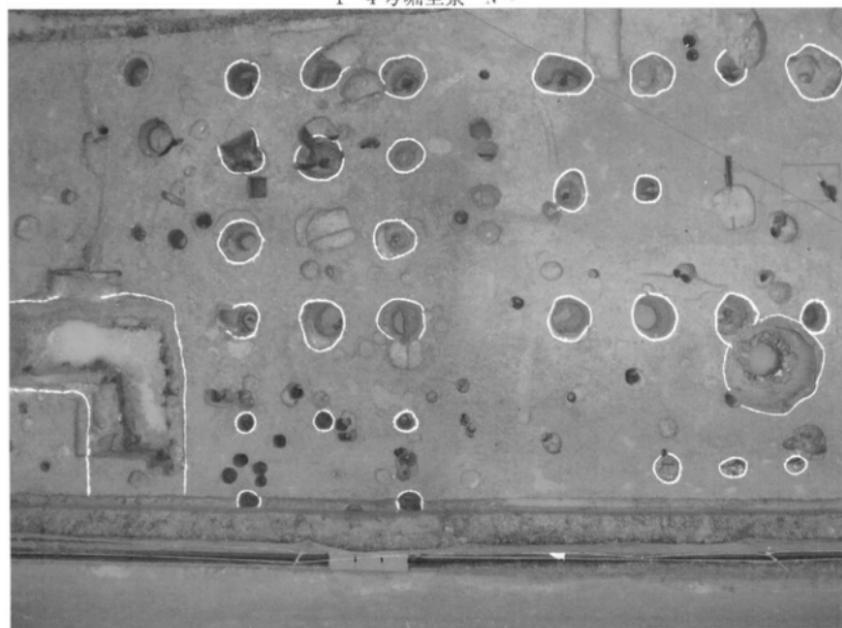
4 4号堀南端セクション N→



5 4号堀中央セクション N→



1 4号堀全景 N→



2 2区中央空撮状況



1 SB01 全景 E→



2 SB01 掘方全景 E→



1 SB01 P02 セクション N→



2 SB01 P03 セクション W→



3 SB01 掘方西側セクション S→



4 SB01 掘方東側セクション S→



5 SB02 全景 S→

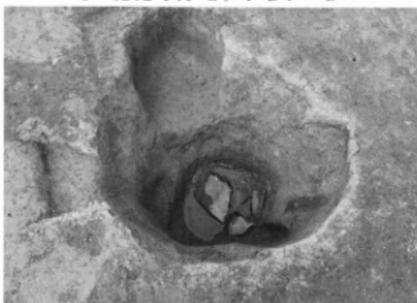
2区



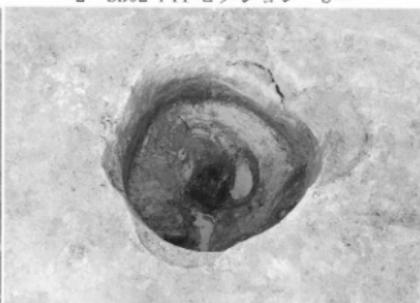
1 SB02 P09 セクション S→



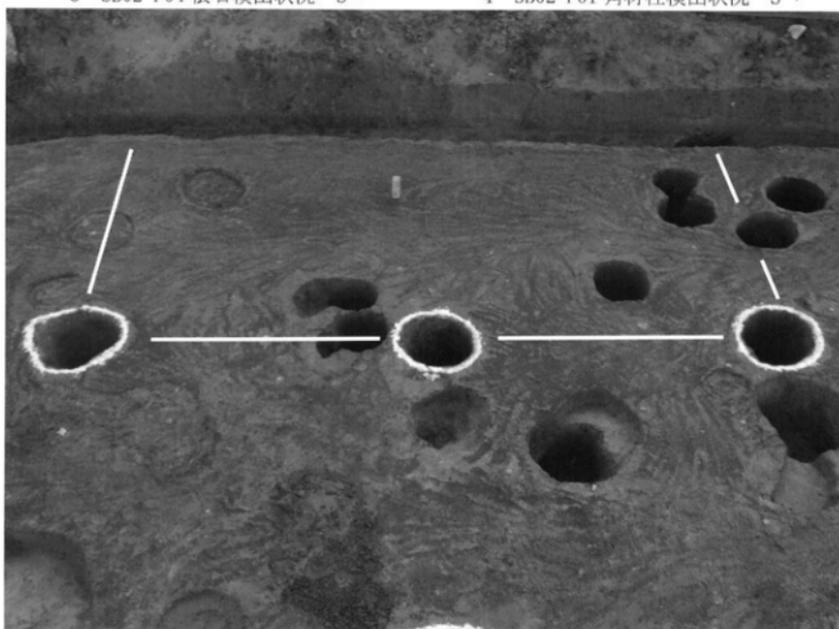
2 SB02 P11 セクション S→



3 SB02 P04 根石検出状況 S→



4 SB02 P01 角材柱検出状況 S→



5 SB03 全景 N→



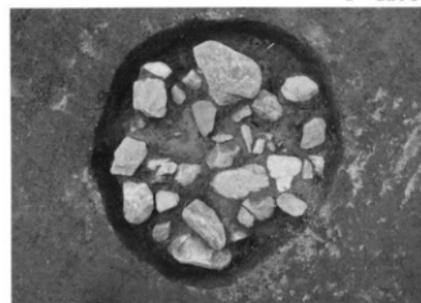
1 SB03 P1 セクション S→



2 SB03 P5 セクション N→



3 SB04 全景 N→



4 SB04 P1 検出状況 S→



5 SB04 P2 セクション N→

2区



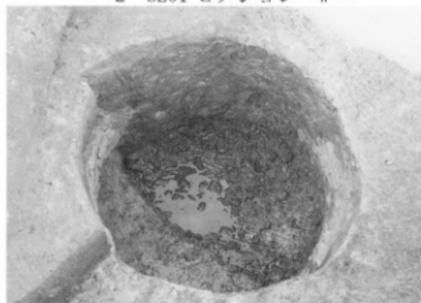
1 SE01 全景 W→



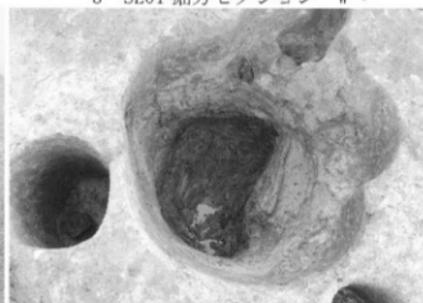
2 SE01 セクション W→



3 SE01 掘方セクション W→



4 SE06 全景 S→



5 SE05 全景 E→



1 SX1 全景 W→



2 SX1 セクション E→



3 SX1 柵検出状況 W→



4 SX1 遺物出土状況 N→



5 SX1 完掘全景 N→

2区



1 SK100 検出状況 W→



2 SK652 全景 N→



3 SD001 全景 N→



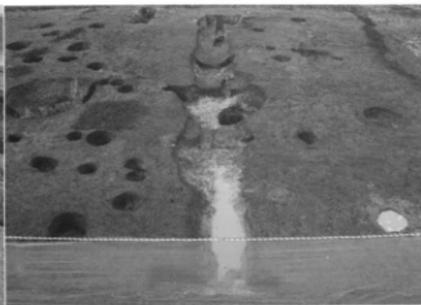
4 SD001 セクション S→



5 SX2・SA13 全景 N→



1 SX2 セクション N→



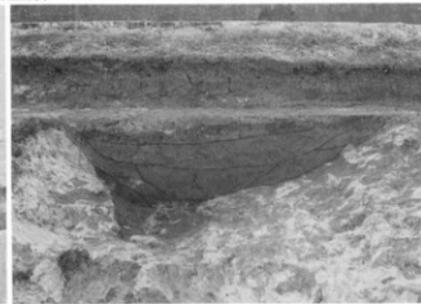
2 SD251 全景 S→



3 2号堀全景 S→



4 2号堀中央セクション S→



5 2号堀南端セクション N→



1 SE16 全景 S→



2 SE16 セクション S→



3 SE17 全景 S→



4 SE18 全景 N→



5 SE17 セクション SW→

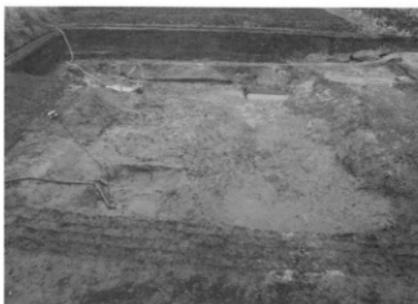


1 3区空撮全景



2 3区南侧全景 E→

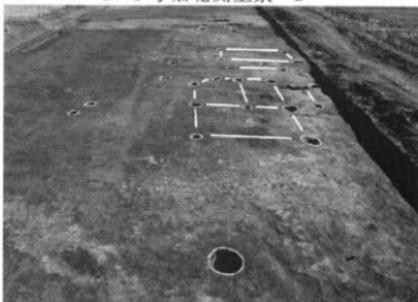
3区



1 1号堀北側全景 S→



2 1号堀南側全景 S→



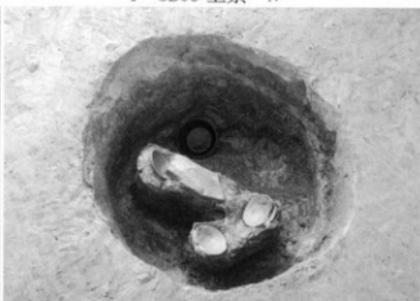
3 (上から)SB06・05全景 W→



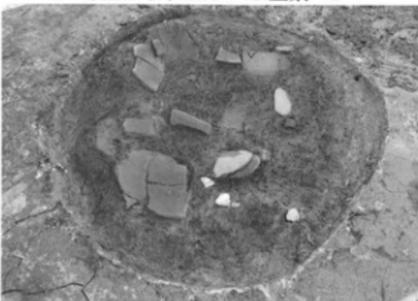
4 SB05全景 N→



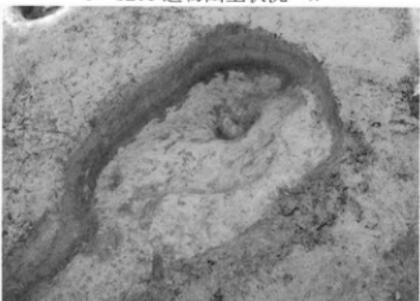
5 (上から)SA01・02全景 E→



6 SE03遺物出土状況 N→



7 SK301遺物出土状況 S→



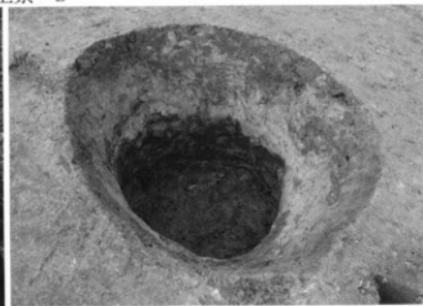
8 SK306全景 S→



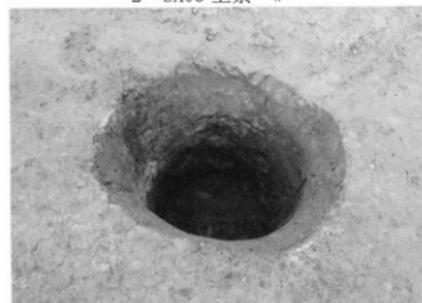
1 4区全景 E→



2 SA03 全景 W→



3 SE19 全景 S→



4 SE20 全景 S→



5 SE21 全景 S→

5区



1 5区北侧全景 E→



2 5区南侧全景 E→

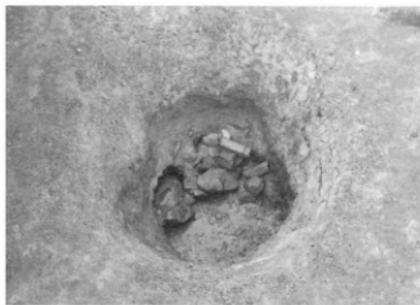


1 SB07・SA05・SA06 全景 W→

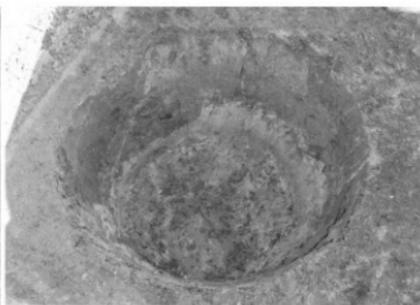


2 SA04 全景 E→

5区



1 SE04 遺物出土状況 W→



2 SE14 全景 W→



3 SE15 全景 W→



4 SK411 全景 S→



5 SD201 全景 S→



6 SD201 渡場近景 S→



7 SD201 全景 N→



8 SD201 遺物出土状況 N→

1～5区



1 調査区現況 (2区) W→



2 安全対策



3 重機掘削状況



4 遺構確認作業



5 作業風景



6 遺構掘り下げ状況



7 水中ポンプ使用状況



8 現地説明会

1～5区



1 実測状況



2 空撮状況



3 終了確認状況



4 埋め戻し完了状況



5 発掘調査参加者

SA08 出土遺物



SE02 出土遺物



SE07 出土遺物



SE08 出土遺物



SE10 出土遺物



SE09 出土遺物



SE11 出土遺物



SD101 出土遺物



SD102 出土遺物



SD250 出土遺物



SD252 出土遺物



SK650 出土遺物



1区

P512 出土遗物



1



2

P513 出土遗物



1

P669 出土遗物



1

P692 出土遗物



1

P672 出土遗物



1

P796 出土遗物



1

3号窟出土遗物



1



2



3



4



5



6



8



7



9



10



11



13



15



12



14



16



17



18

4号掘出土遗物



I区遗物外出土遗物



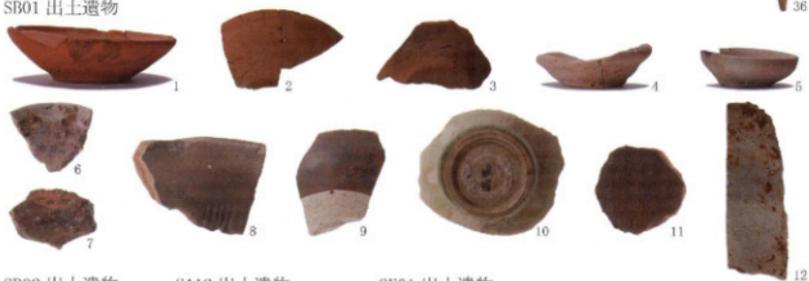
1区·2区

1区遺構外出土遺物



2区

SB01 出土遺物



SB02 出土遺物



SA12 出土遺物



SE01 出土遺物



SB03 出土遺物



SA13 出土遺物



SA14 出土遺物



SE06 出土遺物



SE16 出土遺物



SX1 出土遺物



SK652 出土遺物



2号堀出土遺物



SK115 出土遺物



SD001 出土遺物



P022 出土遺物



P027 出土遺物



P046 出土遺物



P072 出土遺物



P082 出土遺物



P085 出土遺物



P109 出土遺物



P127 出土遺物



P141 出土遺物



P142 出土遺物



P155 出土遺物



P779 出土遺物



SD251 出土遺物



P212 出土遺物



P201 出土遺物



2区·3区

2区遺構外出土遺物



3区

SA02 出土遺物



SE03 出土遺物



SK301 出土遺物



1号堀出土遺物



3区遺構外出土遺物



4区

SB11 出土遗物



SE20 出土遗物



SE21 出土遗物



P817 出土遗物



5区

SB07 出土遗物



SA06 出土遗物



SE04 出土遗物



5区

SE15 出土遗物



SK412 出土遗物



SK411 出土遗物



SD201 出土遗物



SD201 出土遺物



遺構外出土遺物



1区·2区

1区出土木製品



SB08 P3 柱根
(分析 3)



SA07 P2 柱根
(分析 1)



SA07 P3 柱根
(分析 14)



SA07 P5 柱根
(分析 2)



SK653 丸太
(分析 4)

2区出土木製品



SB01 P3 柱根
(分析 5)



SB02 P2 柱根
(分析 6)



SB02 P9 柱根
(分析 15)



SB02 P11 柱根
(分析 8)



SB03 P1 柱根
(分析 9)

2区·5区

2区出土木製品

SA13 P4 柱根
(分析 16)SA14 P1 柱根
(分析 17)SX01 No. 4 部材
(分析 10)SX01 No. 26 部材
(分析 13)2号堀 No. 4 部材
(分析 7)

5区出土木製品

SE04 部材
(分析 18)SX01 No. 5 杭
(分析 11)

抄録

ふりがな 書名	ししどじょうめと 宍戸城跡							
副書名	市道改良工事に伴う発掘調査報告書							
編者署名	大越貞樹 塩澤佑介 谷 匂 鈴六 徹							
編集機関	有限会社勾玉工房Mogi							
所在地	〒286-0211 千葉県富里市久能238-100 Tel.0476 92 0658							
発行年月日	函廣2011年（平成23年）6月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	道跡番号					
ししどじょうめと 宍戸城跡	いばらきけんかきまし 茨城県笠間市 はしづめ71ばんら2ばら 橋爪71番地2他	08321	042	36° 20' 23"	140° 17' 19"	2010.10.18 ? 2011.03.15	4,657㎡	笠間市橋爪・ 平町地内における市道 改良工事
所収道跡名 宍戸城跡	種別 城跡跡	主な時代 中・近世		主な遺構 掘立柱建物跡 井戸跡 土坑 ピット 池 堀 溝		主な遺物 中世末～近世初期 陶磁器 瓦質土器 かわらけ 漆棺 木製品（木材） 近世以降 陶磁器 一銭銅貨		特記事項 武家墓塚跡 においては 整地面が存 在。角材を 用い、規格 性のある柱 穴を穿った 掘立柱建物 跡が存在す る。整地面 下からは築 城期と考え られる場が 検出されて いる。

宍戸城跡

平成23年6月15日

発行 笠間市教育委員会

〒309 1698 茨城県笠間市石井717

Tel.0296(72)1111

編集 有限会社勾玉工房Mogi

〒286-0203 千葉県富里市久能238-100

Tel.0476(92)0658

印刷 株式会社エイティー

〒289-1115 千葉県八街市八街ほ211

Tel.043(44)2024

